

人口問題資料

第 59 号

新生活運動の理念と実際

昭和 35 年 2 月

財団法人 人口問題研究会

新生活運動の理念と実際

昭和35年2月

財団法人 人口問題研究会

は し が き

財団法人人口問題研究会は昭和8年10月の創立にかかり人口問題の調査研究並に啓発宣伝に努めて業績大に挙げたが、終戦後一時事業休止の運命に陥つたため、昭和28年陣容を改め計画を新にし、一方人口対策委員会を常設して人口対策の審議検討に当り、他方新生活指導委員会を設置して公私企業体における従業員及び家族を対象とし、家族計画及び生活設計を中心とする新生活運動指導の任に当り、既に本会指導の下に実施中のもの約50社、その世帯数約120万に及び、目下ますます普及発展の途上にある。幸に昭和30年以来財団法人新生活運動協会の委託により企業体新生活指導幹部講習会を開催して回を重ねること5回に及んでいる。

本書は特に昭和34年11月その第5回講習会の講義を貯蓄増強中央委員会の好意と援助により速記、印刷及び刊行の運びとなつたものである。関係会社及び団体の新生活運動発展のため大いに参考になるものと信ずる。

昭和35年2月

財団法人人口問題研究会
理事長

永 井 亨

も く じ

新生活運動の指導理念	人口問題研究会理事長 経済学博士	永井 亨	1
生活合理化と貯蓄	貯蓄増強中央委員会*長	岡崎 嘉平太	17
生産性と新生活	日本生産性本部専務理事	郷 司 浩 平	35
家庭経済と国民経済	朝日新聞社論説委員	土 屋 清	51
家庭道徳と公衆道徳	東京教育大学教授文学博士	原 富 男	69
人口問題と新生活	国民経済研究協会理事長	稲 葉 秀 三	89
労働運動と新生活運動	慶応義塾大学教授経済学博士	藤 林 敬 三	103
家 族 計 画	東京大学教授医学博士	森 山 豊	123
母子衛生と育児	愛育研究所長医学博士	内 藤 寿 七 郎	131
人口問題からみた生活設計	人口問題研究所長	館 稔	147
生 活 設 計	日本女子大学教授	氏 家 寿 子	153
生活相談と青少年問題	東京都広報 渉外局 公聴部家庭相談担当	山 室 民 子	170
新生活運動の実践要領	人口問題研究所技官	篠 崎 信 男	185
わが社の新生活運動	日本鋼管株式会社厚生課長	武 田 潔	206
わが社の新生活運動	東京芝浦電気株式会社厚生課長代理	深 川 吉 郎	213
わが社の新生活運動	石川島重工業株式会社厚生課長	浅 川 邦 雄	219

新生活運動の指導理念

人口問題研究会理事長 永井 亨
経済学博士

本論に入ります前に、よく申し上げることでございますが、ものの見方、ものの考え方につきまして、2、3自分の今まで感じたことを申し上げます。その事を一通り頭の中に入れていただきますと、私の話もよくおわかりになるでしょうし、各講師の講義もよく御判断がつころかと思うのであります。

第一には、明治初期の大思索家であった福沢諭吉の言葉をかりて申しませう。彼はものの本末軽重をわきまえる力、すなわち思慮分別の力、それを叡智と言った。人間の叡智——これは大智といってもよろしい。物事を工夫する力、これは小智である。叡智はものの本末軽量をわきまえる思慮分別である。なるほど樹木にたとえまして、木の根の方はよく見えない。枝葉の方はよく見える。ですから、つい根本を忘れて枝葉の末のことだけを考えやすい。人間の目はそういう傾きを持っておるものであります。重いものは水に浮かせば沈んでしまう。軽いものは浮きますから目につく。重いものはなかなか見当たらない、そういうものであります。ですからよく本末軽重をわきまえまないと誤るのであります。

もう一つ、同じ福沢諭吉がこういうことを言っております。難きを先にして、やすきを後にする。安易なことをすぐ人はやる。むずかしいことはあと廻しにする。結局むずかしいことは出来ない。形の文明はやさしい。ところが心の文明の方はなかなかむずかしい。そこで心の文明をあと廻しにして、結局形の文明だけになる。現に明治以来西洋から日本に輸入したものは、皆形のものであります。心の文明は入れない。これではほんとうのことはわからない。こういうことを言っております。なるほどそうではありませんか。

それから第二には、かつて後藤新平という人が東京市長の時代に、あの大地震災にあって復興しようとするときに、アメリカのピアードという博士を招聘した。その人の著わした書物の中にこういうことが書いてある。どんな問題でも、その真の知識は問題の中心にはない。爾余のもろもろの問題と接触し、錯綜し、重複している、問題の周囲、外圍、外郭、そこに真の知識が得られるのであると。これもその通りであります。譬えば地球の何たるかを知ろうとするとき、その中心だけを見ても実体はわからない。やはり周囲には海があり、山がある、それを取り巻く空気がある。風が起る、台風が起る、そういうことを知らなければな

らない。また地球は太陽をめぐる始動いておる。月もまた動いておる。そう
そういう宇宙のことを知らないでは、地球というものの本体はわからないでしょ
う。どうも一つの問題なり運動なりをつかまえますとき、その中心だけを見て
も、本体がどこにあるかということはわからない。それがほかの問題と触れ合う
点をよく知らないとわからないのであります。

第三には第二と似たことですが、兎角人の眼は一局部を見て、全体を見ないも
のです。それが専門家に多いのであります。イギリスの経済学者スチュアート・
ミルという人はこういうことを書いております。「独学者はだれも知らないこと
をよく知っておる、そのかわりだれでも知っておることをちっとも知らない」と
これは独学者には限りません。専門家の通弊であります。いつぞやお医者様の
大会に臨んだときに、ある医者がこう告白をしておりました。「われわれ医者は人
の知らないことをよく知っておる。ところがどんな人でも知っておることを私ど
もは知らない」と。これが専門家の弊であります。自分の専門のことはわかる。
ところが自分の専門外になると、とんと知識がない。それは視野が狭いのであり
ますから、ほんとうに問題をつかまえることができないのであります。なおこう
いうたぐいのことは幾らもあるであります。

一切の事物には必ず両面があります。両端があります。何も相対性原理をかり
ないでも、必ずものには両面がある、両端がある、両極がある。人間性というも
のがそうでしょう。われわれには自他の両極がある。自分を愛し、また他人を受
するという両極を持っておる。自分を愛することを悪とすれば、他人を愛するこ
とは善ですね。善悪の両面両端がある。これは昔から支那の哲人が、たとえば孟
子と荀子が論争をした、性善なりとか性悪なりとか、幾ら論争しても結末がつか
ない。そうでありましょう。人間は善悪、自他の両極を持っておるのです。だか
らお釈迦様も言っております、人間には仏性と獣性がある。仏の心もあれば、
けだもののような野蠻の性質もある。ギリシヤ古代のアストテレスも同じことを
言っている。人間とういものは神様とけだものの中間である。もしも神様になれ
ば、もう人間ではない。けだものに墮すれば、これまた人間ではない。この中間
にある。その通りではありませんか。きわめて人間は不徹底なものであります。
何から何まで善である。他人のこと、社会のことだけを考えて、自分のことは一
切考えない。そんな事はなかなかできないものであります。そういうことを口
にする人は、多くの場合は偽善家であります。口先でそれを自慢気に唱える人はほ
とんど例外なく偽善者であります。そういうことをわきまえておりませんと、社
会は一切の事物はわからないのであります。ですから、ここに私の利益がある、
それが必ず公の利益につながっております。公私というのは分離することができ

ないのであります。私は凡人でありますから、常に私の一身の利益を考えております。私の望むところに従おうとする。確かに自分の利益を考えている。むしろ主として自分の利益を考えておる。ただそれが他人に迷惑をかけやしないか、社会の利益に合致するであろうかどうか、ということ自分で反省するのであります。世の中の利益に合わず、他人の利益に反するようなことは、どんなにしくても、反省をしてしないように心がけておる。そう努力しております。自分の私心を世の中のために、他人のためにならないようなことはしないようにと努力しておりますのであります。私はそう考えてこの世に処して参ったのであります。

かように、物事には両極、両端がありますから、そこでわれわれはよく錯覚をする。最左翼にいる人は、みんなほかの人が右に見える。自分が左の端におりますから、みんなが右に見える。社会党の左派の人々、あるいは総評の人々、これらの人々は自民党を評して、彼らはみな保守反動である、昔のような夢をたどって、昔を復活しようとしておるのだ。ほんとうにそう思っているのです。それは自分が左の端にいるからです。右の端にいる人も同じことです。自分以外のものはみんな左に見える。でありますから、自民党の右派ともいうべき人々は、今にも社会党や総評が革命を起こしはしないか、日本を混乱させてしまう。ほんとうにそう思っているのです。それは自分が最右翼にいるからです。ですから物事はまん中の中道を踏んでいれば誤りない。正道を歩んでおれば決して誤りはない。まん中にいれば右左はよくわかる。駅のホームの階段をあがりおりするときに、右の端を通るとみんな左に見える、左の端を通るとみんな右に見える。まん中を通っていれば右左がよくわかる。それがすなわち中道であります。正道であります。昔シセロというローマの政治家がおりましたが、この人が晩年書いたものの中に次のような文句があります。それは、われわれが大きな仕事をなし遂げようとするならば、ただ血気にはやって仕事をしてもそれだけではできない。そこに識見を持ち、経験を持ち、さらにおのずから備わる一つの人間の貫録と申しますか、それがなければ大きなことは成し遂げられない。その貫録というものは、しらができたり、しわができて、それででき上がるものではない。つまり中道を踏んで誤らず、正道を歩んで動じない。そうすればおのずから備わる。こうしないと、どんな大きな仕事もなし遂げられない。こう書いてある。それはなぜでしょうか。中道を踏まないに誤りやすい。右左の判断を誤る、目の錯覚をするからであります。例を一つ申し上げます。私が若い頃子供の雑誌を見たのですが、一つは円線が描いてある、その上に正方形が書いてある。ところが、それが正方形に見えない。もう一つは弧線が描かれている、その上に正方形が書いてある。これも正方形には見えない。一つは内へ、他は外へゆがんで見える。幾ら見

でも正方形に見えない。あまり不思議ですから、何かこれは目の錯覚じゃないか
と思い、そこでその雑誌を横にして、側面から見てみた。どちらも真四角なん
です。正方形なんです。成る程基盤の置き方でもって、あるいは外側へゆが
んで、あるいは内側へゆがんで見える。おためしになってごらん下さい。

でありますから、年若き社会主義者の人々は、今や日本の資本主義は爛熟し、
没落せんとしている、今にも共産主義の社会が生まれてくる、こう錯覚する。
これに反して、封建主義の伝統に囚われた年寄りの人々は、日本の社会組織は家族
主義の上に出来上っている、日本は独自の国柄である、社会主義の社会などは生ま
れべくもない、こう言うのであります。あなたがどちらも間違っ
てやしないので
す。日本の農業をごらんになっても、資本主義的経営をしているところはほとん
どありません。農場組織というものはきわめてまれであります。みんな自作、小
作の農民が封建主義的、家族主義的の経営をしておる。都市でもそうでしょう。
中小企業の人々は封建主義的、家族主義的、恩情主義的の経営をしてい
るでしょう。日本の資本主義自体がそうでしょう。簡単にアメリカに例をとって
みましょう。アメリカでは始終労働者がターン・オーバー（転換）する。入要の
ときはどう
どし採用する。要らなくなれば、三週間の予告で遠慮なく解雇してしま
う。経営者も労働者もそういうものだと思っていますから、何でもない。ところ
が日本は
そうは参らない。資本主義的な経営だといっても、実は家族主義的の温情主義
的の経営がまざっておる。ですからなかなか首を切らない。いよいよ会社の
経営が
いきまってくると、はじめて人員の整理をする。今の炭労のストライキだ
って
そうでしょう。こういう工合で、はたして日本の経済はどうなっているか、
どう
なつてゆくか、これはなかなかむづかしい。その見方次第で姿が違ってくる。
こ
ういうことは、よく目の錯覚から起こるものであります。つまり問題の基盤が
違
っておると、その実体までがいろいろに見えるのであります。

こういうようなものの見方、考え方、まだ幾らもありますが、こ
こ
らでやめて置きましょう。ただこの機会に、自分のことを申し上げて申しわけ
あり
ませんが、私には専門の学問がないのです。経済学の学位はもらっておりま
す
けれども経済学にちっとも精通しておらぬ。他の学問にも精通していません。
40
才の年を過ぎてから始めて本式に書物を読んだ。それは大学を出ましてから
20
年間役人をしてきた。実際の問題にぶつかってきた。実際の仕事をしたが書
物
を読まなかった。40を越してから本を読み出した。自然私の知識には専門
が
ない。しかし、政治も法律も経済も社会も倫理も哲学も、みんな一通り読
ん
だ。そこで自分の視野は、ある局部に偏しない。これは私の体験から、自然
に
そうなのであります。でありますから、私の視野は、おそらく専門のどの
方
面の学者より

も広いのではないかと、こう考えて自負しておるわけでありませう。

今回の講習会でも、さだめし諸君は頭が混乱されるでせう。御自分に視野をひろげる心がけが養われておりませんと、さて一体どこに問題があるのだからかと迷うであります。各講師はあるいは人口問題、あるいは衛生問題、あるいは道德の問題、あるいは文化の問題、経済問題はもとより、あらゆる方面からこの問題を扱っておるでせう。そうしなければ新生活運動というものがわからないのです。一局部を見てわかったと思うのはみな専門の弊で、自分の専門のことだからわかる、あとのことはよくわからない、そういうものだと思ひます。

さて、いよいよ本論に入ってみませう。

まず第一に新生活運動というものはどういふ運動であるか。財界の中にも新生活運動の会というものがある、政府の作った新生活運動協会よりも前にできておった。時間を励行しよう、葬式の花環を廃しよう、贈答品をやらないにしようという風に、いろいろのことをやった。しかしそれは枝葉末節のことでありませう。いわゆる新生活運動は終戦直後から起こっておった。しかし、どれも本末軽重をわきまえたものではない。しかも主として農村、農民を対象としたものであります。そこで昭和28、9年のころ、まだ政府の協会ができない前、どうかして企業体、労働者を対象とした新生活運動を勃興させたいものだ、こう考えたのが人口問題研究会であります。今まで行なわれておる新生活運動というものは、その実生活改善運動であつて、新生活運動ではないのではないかと、そこに疑いを持ったのであります。ちょうど昭和30年の夏、政府がいよいよ新生活運動を喚び起こして、これを国民運動にしようというやさきである。その所管大臣が文部大臣であつた、今中共を歩いておられる松村謙三さんであります。ある人が大臣に進言をした。企業体における新生活運動を、もう2、3年前から永井という人が率先してやっておる、着々効果をおさめつつある、一つ話を聞いたらどうかと。そこで松村さんがぜひ会いたいというので、文部大臣をたずねて1時間ばかり話をした。そのときに申したことは次の如くであります。政府がこの運動にほんとうに力をお入れになる気ならば、従来の生活改善運動をもっと普及させるという、そんなお考えはいけません。新生活運動なんだから、新しい日本を建設する運動でなければならぬ。終戦後10年をたつても真の自主独立が達成されない。国土は減り、資源は乏しく、人心はゆるんでおる。これではいけない。国民の実生活に則して、その上に新しい日本を作り上げよう、こういう国民運動でなければ、政府は力をおかしくなつて、多額の予算を使う必要はないではないかと申したのです。ところが松村という人は私より若いのですが、相当高齢であるにも拘わらず

新知識を受け入れる伸縮自在の頭を持っておられる。よくわかった、おれも同感である、どうかこの運動を援けてもらいたいと再三言われましたから、それでは側面から、裏面から御助けしようと御返事をしました。そういう訳で、今でもこの協会の仕事に関係をしておる。現に30年の8月に、時の総理大臣が各界の代表者を150人ばかり官邸に呼ばれました、そのときに言った言葉が、私が松村文部大臣に言った通りの言葉であったのです。ところが実際にいよいよ協会を作ろうという段になると、私の考えが自然に影が薄くなってきた。新生活運動というのは個々人の創意と工夫によって行なわれるべきである、各人自発の自由意思に基いた創意工夫の結晶でなければならぬ、個人任意な運動である、こういう考えが強いのです。ですから多くの人々は摩擦や反対の起らないすぐやり易いもの、そういう運動から始めるのがよろしいというのです。そこであるとき理事会を開きまして、どんな仕事が新生活運動の項目であるかと並べ立てたのですが、実に多種多様でありまして、ここに一々申し上げる時間がないくらいであります。でありますから、多くの人々の頭には新生活なんということはない、今までの生活を改善しよう、従来行なわれたようなことを普及させればよいというのです。あるいはかまどを改築する、台所を改造する、食生活を改善する、あるいは簡易水道を布設する、カとハエを撲滅する、あるいは時間を励行する、虚礼を廃止する、無駄を省く、冠婚葬祭を簡素化するという類いです、みんなけっこうなことですが、しかしそれだけで日本を建て直すことができるでしょうか。ところが新生活運動協会は個人及び団体の任意な自発的運動を助成してやればよい、民間運動のじゆんかつ油の役割を演ずればよい。協会みずからは音頭をとる必要はない、こういう方針で初めの間は来た。ところが最近になるとそうはいかない。何とか協会自体が指導理念を持ってもらいたいという声がだんだん起こってきたわけあります。すでに私が常任理事の一人として関係をいたしたときに、理事会を開いて、次のような決議をしてもらった。それは、単なる消費生活の改善、それだけでは新生活とは言えない。単なる生活様式の改善、それだけでは新生活とは言えない。生産、分配、消費にわたって生活態度を一新する運動でなければならない。物心両面にわたって生活体制を刷新する運動でなければならない。それが真の新生活運動であるというのです。しかしなかなかこれが行なわれない、今でも行なわれないのです。

さらに私がしばらく会長の職務を代行しておりました1年半の間に、企業体の方面、職域の方面に力を入れる必要がある、従来は農村その他の地域の方面に限られていた、農民を主たる対象とした。将来は労働者を主たる対象とする運動にも力を用いなければならぬと力説したのです。やっこのごろ実を結んで、専門委

員会などを作って、その決議も出たのですが、やっぱり同じことです。種々さまざまの項目を掲げて各企業体の選択にまかせようというのです。私とは見解が違ふ。私の考えでは、国民大衆が、なかならず労働者農民が、自分たちの日常生活の今までの態度を刷新してゆく運動でなければならない。これがなかなか世間にはわからないのです。しかしそういう方向には、今向かっておるのです。私が先程申した通り事物の本末輕重をわきまえる叡智というのはそれです。私どもの人口問題研究会は当初から目標を立てて、あとで申しますが、家族計画と生活設計を出発点としてやっておる。なぜであるか。私の考えでは、民主的な、福祉的な、文化的な新しい日本を建設できない最大の病根は、われわれが無計画、無設計の生活を営んでおるところにあります。計画を定めず、設計を立てない生活をしては、いつまでたっても新しくならない。それでは日本の再建ができない。もう今日は政府の財政でも計画を立てておるでしょう。いわんや経済においては各産業企業みな計画を立ててやっておるでしょう。ところがわれわれの生活は無計画、無設計であります。それでは困るので、そこへ運動を集中して、初めからその推進をはかったのであります。初め人口問題研究会が新生活運動を提げて、その指導の任に当ろうとしたとき、うまくいくはずがないと思われた。ところがだんだん実績を上げてきた。それはある目標を定めて、集中してやったからでしょう。昭和28、9年以来今日まで、もう6、7年になっております。歩みはおそい。おそいわけです。政府からは一切助成金をもらっていない。戦前にはもらってあって、かなりはなばなしい行事をやっていくことができた。戦後には、私がこの研究会をお引き受けした頃から、政府からは今日でも助成金を一切出さない。委託費も出さない。やむを得ずこの7、8年にわたりまして、幹事諸君の手助けをねがい、私自ら老軀を提げて財界の各方面に説いて歩いた。何しろ日常の経費を支弁する財源がないから寄付をしてくれろと言うのですからなかなか出さない。ある新規の設備をする、事業をするから出せ、これは出すのです。經常費の財源がないから寄付をしてくれといってもなかなか出さない。それでもこの間に1千万円以上は集まりました。それでどうかやってきたのであります。もっとも講習会を開くとかいう場合には、今回のこの幹部講習会は新生活運動協会が委託費を支弁してくれた。先頃いたしました生活設計の講習会は、日本銀行の貯蓄増強中央委員会、そこが援助をしてくれた。今回は特に各講師の講義を速記いたしまして、これを印刷にして配布しよう。これをその貯蓄増強中央委員会——岡崎嘉平太さんによって代表されておるいわば日本銀行の外郭団体、そこにおたのみしたところが、何とか一つ援助をしようから、そういうものを作ってもらいたい、こういうわけであります。だからそれは容易の事ではないのです。そんなわけです

から、専属の職員はおりません。今お世話をしておる女子が一人おるだけです。あとはみな厚生省人口問題研究所の所長以下の公務員が本会の役職員となってくれている。私は純然たる民間人ですが、そういう人々の力をかりてやっておるのですから、なかなかむずかしい。研究所という政府の調査機関、そこで手助けをしてもらう。そこに容易ならぬ苦心があります。そんな訳ですから世間の人々は人口問題研究会と研究所を混同しておる。たいてい私のことを研究所の会長であるとか、理事長であるとか、こう言っておる。研究所というのは、これは純然たる政府の調査研究機関であります。人口の基本的調査研究をする機関であります。研究会はそうじゃない。宣伝啓発の任にも当たりますが、主として人口対策を審議、立案する機関であります。しかしそれだけでは困る。実際運動を指導しなければ、人口問題の解決に資するわけにはいかぬ。そこで企業体、なかんずく大企業体における新生活運動——家族計画と生活設計を中心とするその推進をはかっているのです。これが御承知の通り相当の成績をおさめておる。おそらくもう3、5年たちますれば、国民運動として徹底して参るでましよう。

第二には、先ほど来申し上げた通り、この運動には地域、職域の二つの方面があります。従来生活改善運動という名によって知られた運動は、おもに地域の運動であります。農村、山村、漁村の農民を対象とした運動です。彼らはみな生産者です。例えば自分で野らへ行って耕作をしておる。ですから彼らの生活運動はそのまま生産につながっている。そうしてある部落を作って、そこにおのずから共同社会という一つの考えが結ばれておるわけです。だからその点はやりいい。そこで思い思いの創意や工夫でやっていく。なるべくやりやすいものからやっておる。が、それではこの運動が国民運動として容易に発展しない。これに反して企業体の方面は、先ほども申した通り、初めから目標を立てておる。どうかして無計画、無設計の生活を一新しようではないかと、それから出発している。こういう一つの筋金の入った運動を始めておる。もとより農村でも家族計画が行なわれております。家計簿の記人も行なわれております。ただ計画的に、組織的にやっていない。私どもは各個人の創意工夫——それはいわゆる小智である、それだけでは国民運動として発展しないであらう。どうしても計画と組織がなければいけない。従って指導を必要とする。どうも世間では、指導を受けることは民主主義に反すると、おそろしい錯覚をしておる。デモクラシーにはリーダーシップが絶対不可欠の条件であります。指導の伴わないデモクラシーは、これは群衆の一つの働きにすぎない。どうしてもみんなが信頼できる、みんなの心持をよくくんでくれる指導者が、ある一つの指導理念のもとに働いてくれませんか、決して運

動は伸びないのです。それがデモクラシーである。指導なくしてデモクラシーというものはあり得ないのであります。

一つ例を出してみましょう。新憲法によってわれわれは主権者になった。われも彼も皆主権者である、こう考える。おそろしい錯覚ですね。だれも主権者じゃありませんよ。天皇陛下も主権者ではありません。総理大臣も主権者ではありません。何人も主権者ではありません。国民という、社会という、その一体の、一団の団体が主権者である。だれも皆主権者ではないのです。ところが個人主義がはびこりまして、民主主義は皆個人主義である、個人の自由が土台であるという風に、その方面にばかり着眼している。ですから新憲法にはわれわれは基本的人権を——そんなものはありやしない。今どきそんな権利思想を持つ法律家はありません。天賦自然の人権なんというものはあり得ない。社会あつての権利なんです。社会が保障するから権利というものが生まれてくるのです。権利が生まれるときは、必ず他人に対する義務が伴っておる。義務がない権利というものはあり得ない。社会が保障してくれるから、個人が自由を持っておる。社会に対して責任を負わない自由なんというものはあり得ない。ところがどうです、今世間では、何か生まれながらに基本的人権を持っておるように思っておる。義務や責任のことは忘れておる。社会のことを考えない。これじゃだめでしょう。第一国民に主権があるというが、国民というものがわからないのです。一つの団体です。一つの社会です。これがわからないで、各人が皆主権者であるという、とんでもない間違いであります。政治上民主主義というのは、国家の支配権が一体としての国民、全体としての社会に帰属する政治形式です、もし或る特殊の階級や党派に専属しておれば独裁主義というのです。一例をあげればそういうわけがあります。

結局社会がよくわからない。どうかして社会を認識させよう、という一心で私は本を読み本を書いてきた。そのためあらゆる社会問題を扱ってきた。政治問題、経済問題、法律問題、道德問題、すべてその社会という見地から扱ってきたのです。ですから日頃原富男博士が、どうも永井とは道德についての意見が違ふと言う。意見が違ふのじゃない。道德というものの根源は同君の言う通りなんです。ただ同君は社会という集団にあまり重きを置かない。個人間の関係だけを考える。もとより道德はそこから発するのです。少しも意見は違わない。だから同君に言わせれば、家庭道德も公衆道德もないじゃないか、道德は一つである。その一つというのは人間関係である、こう説いている。つまり道德がまだよく社会化されていない、社会学と倫理学がよく結びつかないためではないかと思うのであります。あとでそれは申し上げます。

さて、地域、職域の両方面にこの運動が発展してきたのですが、ここにどうにも手がつけられない分野がある。それは都市、なかんずく大都市における市民を対象とした運動です。これが戦時中のあの隣組でもあったときはまだよろしい。今はなかなか組織がむずかしい。しかもその中には大部分の中小企業者、零細企業者が含まれておる。そこには魚屋もあり、紙屋もあり、何屋もある。小さい商店や小さい工場を持っている小企業者、零細企業者がみんなその中に散在している。これはなかなかむずかしいのであります。政府も中小企業者に対して家族計画の運動をやらせようとしている。そうして昨年から指導者に補助金を与えておる。ところがうまくいかないのです。いくはずはないのです。これは将来大企業体のこの運動がもっと発展したならば、その下請をしておる中小企業者とよく連絡をつけてやればうまくいくかも知れません。なかなか今のところでは、この小企業者を含んでおる小市民を対象とする運動は非常にむずかしいのであります。

第三には新生活運動と人口問題との関係であります。私どもは人口問題研究会という名前のもとにこの運動をはじめたのであります。人口問題に関係のないことはいたしません。ところがこの運動は人口問題と切っても切れない密接の関係を持っております。世間では一口に人口問題と言いますが、一体何が人口問題かというよくわからない。が、これはきわめて簡単です。人口とそれを支えるものとの間にバランスを失うから人口問題が起こるのです。一方には人口がある。他方にはそれを支持し収容する一国の生産力がある、経済力がある。その間のバランスを失うと問題が起こる。そればかりじゃない。生産力には必ず分配の比率が伴っておる。どんなに生産を高めて所得をふやそうとしても、その分配の割合が非常に不公平であり、不公正であり、たとえば賃金にはわずかの部分しか回らない、地代や利潤にうんと取られてしまう。それではせっかくの生産力もかたわらになってしまう。分配が公平に公正にいかなければ、生産力がどんなに発展しても、それだけ人口が収容できない。仮りに国民一人当りの所得がどんなに増しても、分配よろしきを得なければ、多くの人々の生活水準は向上しない。ですから人口の方も必ずや生活の水準に伴われている。生活の水準といえ、おそらく今までの中国やソビエトのように低めていけば、人口は幾らも収容できましよう。結局生活の水準に伴われた人口と、分配の比率に伴われた生産力又は経済力との間にバランスを失えば人口問題、すなわち過剰人口か過少人口の問題が起こってくる。もしも人口がどんどんふえていく、その割合に生産力が高まらず、分配も公正にいかないとすれば過剰人口になる。これに反して人口のふえ方が極めて少ない。そのために人手が足りないで、生産力がそれだけ伸びない。そうすると過少人口の問題が起こる。ですから、帰するところ、過剰、過少の人口が起こって

いるかどうかという、それを見定める一つの目安、それが生活水準です。生活水準が高まりつつあれば、そういう問題は起こらない。この水準が下がるか或は高まらなければ、過剰もしくは過少の問題が発生してくる。結局人口問題は生活問題であります。

生活水準をいかにすべきかという問題に帰するのであります。それが新生活運動と直接連絡がない問題だと誰れがいえるところでしょう。元来人口問題は、嘗てマルサスという人が言ったように、これは食糧の問題である、貧乏の問題だという。後にマルクスという人が出て、いやそうじゃない、これは職業の問題である、失業の問題だという。どちらも間違っていない、しかしどちらも間違っているのです。日本ではその失業問題の姿が先進国とは違うのです。先ほども申しした通り、経済の仕組みが違っておる。私も協調会という財団法人に在職している間に、政府の委託を受けて中央職業紹介局長というものをやっておりました。その関係から初めて日本の失業状態を調べてみました。大正11年の頃、大体労働者、給料生活者全部をあわせて40万、多くも50万、4、50万の間と推計した。2年後にその中央機関の仕事を政府にお返ししてから、政府は10年、15年の間毎月失業者を調べて発表したところによると、依然として4、50万の数は変わらない。始終40万から50万の間を上下している。第二次大戦の恐慌後に初めて5、60万人になった。今でも日本の失業者は平均すれば毎年5、60万です。多くとも6、70万。特に学校卒業生の就職時のときには百万になったこともあります。80万を越した月もあります。しかし1年を通ずれば5、60万であります。この50万前後の失業者が数十年間ちっとも変わらない。そんな国が世界にありますか。イギリスでは第一次大戦後2百万、3百万の失業者があったが、今ではほとんどない。ドイツでもその通り。アメリカでも3百万、5百万の失業者が出たが今はごく少ない、最近ではまた3百万を超過しているといひます。フランスは初めから労働力が足りない。従って失業者はない。ところが外国人の出稼ぎ人を毎年多数入れておりますから、それがフランス人の労働者の職場を占領してしまう。そこでどうかすると百万くらいの失業者がときどき出る。日本のような国はない。どういふわけでしょう。これは資本主義と封建主義乃至家族主義の両方の基盤の上に経済の機構ができておるからであります。ですから企業体で首を切られますと、数年前までは皆農村へ帰った。そして兄貴やおやじの手伝いをして、失業にはならない。今は農村に余力がない、年々40万以上の農村人口が都市へ、商工業へと流れ込んでおる。ですから農村には帰れない。そこで都市の中小零細企業の方へ向ってくる。そこにいわゆる潜在失業が起こってくる。即ち職業はあるが、所得が低い。全国平均賃金の半分以下の所得しかない人々がまず7百万人くらいはおる。少くと

も失業者の十倍が潜在失業者となって潜在しておる。これが今日の日本の人口問題の中心である。というのは日本の人口が多産多死から少産少死へと、わずか十数年の間にすっかり転換してしまったからです。もっともこの間に、終戦後しばらくの間は多産少死の時代があったのです。どこの国でも死亡率は先に下り、あとから出生率が下がってくる。それには例外がない。そこで一時は多産少死の形をとった。終戦時から終戦後しばらくの間は盛んに子供が生まれた。これがことしあたり14、5才。そこで中学校あたりの入学試験は非常にむずかしい。そのかわり幼稚園はあいている。園児を集めるのになかなか骨が折れる。この15才から60才までの生産年令人口——働きざかりの人口、労働力人口、女で申せば産み盛りの人口であります。それが急にふえてきた。年令の構造が一変した。ですから今でも総人口のふえる数よりも、働き盛りの人口の方が余計ふえる。もう百万を超過しておる。

今に120万、130万という工合にふえるでしょう。総人口の方は百万から8、90万へと少しずつ下がるでしょう。働き盛りの人口が非常にふえる、産み盛りの人口が非常にふえる、これが今のような潜在失業を起こした最大の原因であります。そのために各家庭にその過剰人口の重圧が及んでおる。それは何でしょうか。墮胎じゃないでしょうか。人工妊娠中絶であります。戦後しばらくの間はやみの墮胎がさかに行なわれた。そこで優生保護法を作って公然妊娠中絶を認めた。改正に改正を重ねていよいよ楽になった。経済上の理由でもって、ほとんどそれだけでもって、医者が公然中絶の手術ができるようになった。それですからこの3、4年間毎年110万件、それは届け出をしている数がそうです。届け出をしない数を加えれば百6、70万になるでしょう。その数はちょうど日本の人口が生まれる数と同じです。生まれ得べくして生まれ得ない、胎児の間に手術によって殺されてしまう人口がそれだけあるのです。それが一体文明国でしょうか。この非人道的な人工妊娠中絶——法律でこれを認めなければ墮胎というのです、同じことです。それが生まれる数と同じものが殺されておる。それじゃ封建時代の間引きの遺風をちっとも脱却しないじゃないですか。人命を重んずるこの民主主義の法則に反するじゃないですか。いかにも人命を軽んじている。これが今われわれの目前に横たわっておる大問題です。どうしてもこの人工妊娠中絶を防止しなければならぬ。これほどまでに密接の関係を持っておる人口問題が、新生活運動ないしは家族計画の運動と直接の交渉がないなどどうして言えますか。少しく視野を広めればわかることであります。序ながら、私共の人口問題研究会は全国企業体の実地指導員に対して4、5年の間隔を置いて二児又は三児を産むように指導しろと言っておるのですが、それは夫婦間に平均二人半の児を産まな

ければ日本の人口の絶対数が減るばかりでなく、世論調査によれば各家庭の要望もそこにあるからであります。かように家族計画の運動は人口を抑制し減少する運動ではないのであります。ですから、生児の科学的保育とか、妊産婦の疾病を予防すべく会社経営の病院治療所とよく連絡するように申し聞かせておるのであります。

さていよいよ第四に家族計画と生活設計を出発点とする新生活運動、新生活運動の一環としての家族計画及び生活設計の問題に移って見ましょう。目標を定めた、重点主義の無計画、無設計の生活を一新しようという運動。それが新生活運動のすべての基本でありましょう。本末輕重をわきまえる本であり、重いものでありましょう。しかしこれはなかなかやりにくい。そうたやすく飛び込んではいけません。個人の創意や工夫だけでできることじゃないのです。これには組織の力指導の力が伴わなければできないのです。私どもは家族計画の運動をそういう場合に指導しておるのです。その運動は一つの出発点なんです。まず子供の数を調整して、計画的に子を産んでもらいますと、どんなに日常生活に設計を立てても、子供はたくさんできる、その生まれた子供を育てることもよくできない、教育もよくできない、それでは困る。まずもって家族計画をやる、こういう意味です。家族計画をやればこの新生活運動の任務が終わってしまうと、こうお思いであれば非常な誤解であります。家族計画というものは何のためにやるのですか。結局主婦を解放し、主婦に文化生活を送らせながら、家庭の経済を少しでも豊かにし、生活水準を高める運動じゃないですか。もとより母体の保護、母子の保護のためであることは言うまでもありません。しかし家族計画だけして、あとは野となれ山となれ、何にも生活の設計を立てない、そういう家族計画では実を結ばないじゃないですか。それを家族計画の運動だから家族計画だけを考えるというのでは困るではありませんか。なるほど家族計画ということは今までのように無計画に子供を生むことではない。計画を立てて、合理的に子供の数を調整しよう、こういうことが家族計画であります。結局帰するところは主として生活水準の問題じゃありませんか。ですからこの6月に人口問題審議会が発表した人口白書の中にこういうことがうたっています。「国民各自の自主的な生活設計を背景にした正しい家族計画の普及は今後一段と強く推進されねばならない国民的課題の一つであるが、それには国民生活水準の不断の上昇と、それに対応した国民各自の積極的な生活向上意欲の強化が必要であろう」と。だから人口問題というのは政府が勝手にあるときは生めよふやせよ、あるときは人口を制限しようという——そんなものには追従できないと説く人がありますが、それは時の政府の政策です。政府の政策はどうあろうと人口問題そのものは事実存在している。日本

の今日のように過剰人口に脅かされている時代においては、家族計画の必要はきわめて大事であります。しかしヨーロッパ諸国、就中北欧諸国のように、むしろ人口は少な過ぎる、もっとほしい、そういうところでも家族計画が行なわれている。それは生活水準を低めないために行なわれているのであります。

家族計画についてはすでに詳しく御話ししましたから、ここでは主として生活設計の事を申し述べましょう。広い意味で申せば家族計画も生活設計の一部なんです。この生活設計によってわれわれの日常生活が営まれない間は、家族計画の効がないでしょう。できれば一しよにやってもらいたい。現にある企業体では生活設計の方面から着手しているところもあります。いずれにしてもこの二つは不可分のものであります。生活設計というのは、これは助産婦や家族計画の指導員では指導できない。しかしわきまえてもらわなければならない。これにはおのずからその方面の専門家、生活の指導のできる、生活の設計を立て得るだけの知識と能力がないと困るのであります。この仕事はまず家計簿の記入から始まる。しかしどう記入するか、どう利用するかということの一つの手段にすぎない。それを土台にして、たとえ子供の数は調整されておるにしても、その教育はどうしたらいいか、娘の結婚はどうしたらいいか、老後の安定に備えるためにはどうしたらいいか。ことに企業体においては定年制がきめてありますから、定年までにはこういう設計を立てて生活をしよう。また鉱山などでは職務の転換があります。それに備えておきませんと、急に地下の鉱夫が地上の労働者に変わることがある、そうすると実入りが少なくなる、その備えをどうしたらいいか、こういう備えをしておきませんと、どんなに家族計画をやってもむだであります。そこでこの家族計画と生活設計が結局生活水準の向上を目ざすものでありますから、そこに当然出てくるのが貯蓄である。これは他の講師からくわしくお話がありましようが、貯蓄というのは、ただむだづかいをしないで金をためるということじゃない。生産のためにやる。これは一家の経済が国民経済につながる不可分のものだからであります。この貯蓄によらなければ国の生産は高まらない。しかも生活設計、家族計画を通じて生活水準を高めるといふことは、結局貯蓄の増強につながる。貯蓄しなければ一切の備えができない。これは一つのものであります。だからそのために冗費を省き虚礼を廃すべきは当然でしょう。そこに衣食住の生活合理化の問題が当然起ってくる。いわゆる生活改善運動はそこから起ってくる。たとえば冠婚葬祭を簡素化するとか、台所を改造し簡易水道を布設するとか、あるいはまた、料理の講習をやる、衣服の講習をやる、染ものの講習をやる、それらのことは皆この生活の設計を立て、家族計画をして家庭の安定をはかる副産物として起ってくるのであります。その副産物だけを目ざして起す

運動では筋金通っておられない。本末軽重を誤っているのであります。末梢のことだけに力を入れても、結局は末つづきしない。どうしても筋金の通った、基本から目標を定めて一貫してやらなければならないのであります。

最後に精神方面のお話をしたいのですがもう時間が超過しましたから詳しいことはやめまして、一言要点だけを申述べておきます。

それは家庭の秩序を再建しなくちゃいけないということです。どんなに生活の設計を立て、家族計画を行なっても、それだけでは家庭の安定が期せられない、家庭の和合ができない、いいかえれば家庭の新道徳を打ち立てようということですから。家庭から職場へ職場から公衆へ一般社会へと進み、職場の道徳、公衆の道徳、一般社会の道徳を打ち立てることが新生活運動のねらいではありますまいか。そこまでいかなければ、真の新生活運動とはいえないでしょう。物心両面にわたって生活の体制を一新するとは言えないでしょう。そうしてやれば、その結果は次のようになるでしょう。まず労働者、従業員の生産性はおのずから高まってくる。産業安全も期せられる。災害率は減ってくる。また労働意欲を盛んにして欠勤率が減ってくる。というのも家庭が和合しなければ夫婦げんかがたえない、子供が泣き叫んで寝られない、だから欠勤する、けがをする、能率があがらない。こういうことのないようにするのが経営者側の利益となるのであります。家族計画を行えば家族手当が軽額される、それだけ会社がもうかるなどと、そんなさもないことは考えてはいけません。あまった家族手当は厚生福祉施設にまわせばよい。更に生活の設計を指導すれば彼らの家庭が安定して、経済が多少なり楽になる。そのためどうかすると、賃金の値上げを押えるのではないかと危慮する。とんでもない間違いだ。労働者の生活が高まることは経営者にとっても喜ばしいことではないですか。そのために賃金を減らす理由はないでしょう。賃金は経営状態によって公平に分配すればいいのであります。家庭が安定したから賃金をふやさないなんということは考えられないのであります。ところが、家族計画から生活設計へと切りかえるときのふんざりが容易につかない。それにはいろいろの原因がありましようが、労組が反対するからとも聞いている。それは家庭の内部のことにくちばしを入れられて、それが漏れたりすると困る。家庭はおれたちのお城であるという。それなら家族計画の指導はなおさらでしょう。夫婦の間の閨房のできごと、それさえ賛成しておれば、労働組合は生活設計の指導に反対する理由はないでしょう。更に進んで家庭秩序を再建し、家庭の和合をはかることに誰れが反対出来ましよう。主人も主婦も家族も家庭人としての自覚を高め男女平等、人格尊重の基礎の上に責任協力の態勢をつくれれば、おのずから家庭道徳が打ち立てられるのであります。職場についても同じ事がいえるでしょう。元

来階級が二つに分かれるということは、共通の場面がなければ分かれる筈が大きい。縁もゆかりもない二つの集団が対立して階級ができるものじゃないのです。階級ができる場合には必ず共通の場面がある、共同の目的がある、共通の利益がある。そうでなければ階級というものは分かれぬ。それさえ認識すれば、つまり経営者も労働者も同じ職場人であるという自覚が起これば、闘争は必ず合理化してくる。それを見ないで、両者の利益は相容れない、利害が相反する、共通のものは何ももないというふうを考える。だからいつまでたっても闘争が合理化してこないであります。経営者側は従来の経営方法、労務管理を一新して、職場と家庭とを直結し新生活運動を促進して福祉経営の実を挙げ、労働組合はその運動の経営に参加して労働者の生活向上をはかるようにすれば労資共通の場がおのずから開かれるであります。そればかりではない、現に経営者も労働者も同じ職場で協働しているのである。協働のための闘争でなければならぬ。その事は公衆の場でも同じ道理であります。交通機関でも集会の場所でも公衆が社会人としての自覚をおこせばおのずからそこに社会道徳が打ち立てられるでしょう。

最後に労組及び健保との関係を一言して置きましょう。労組との関係についてはすでに前段で申述べた通りでありますからここには繰返すまい。健保との関係については家族計画を行なった結果健保の赤字が黒字になった事例があるばかりでなく、健保がある程度この運動の手助けをすれば非常に好都合にはこび、現に健保みずからが経営している実例もあるのであります。民間企業体の健康保険組合は公企業体で申せば共済組合に当るのです。共済組合がこの運動に力を入れてくればいいのですが、まだそこまでいっておりません。ただ生活設計の方面は健保では出来ませんから、結局会社自から経営の主体とならなければ新生活運動の成績は挙がりません。兎も角も、健保と労組が会社側と協力して、同じ運動の経営に参加してやりますれば、円滑にこの運動が進むのではないかと思います。

生活合理化と貯蓄

貯蓄増強中央委員会会長 岡崎嘉平太

新生活運動といいますが、新生活という問題は私どもも非常な関心を持っております。といいますのは、日本の民族をどうかして世界的民族として発展させていくのには何が基本かを考えますときに、私どもはやはり富の蓄積といいますが、そういうものができなければいけない、その富の蓄積をやる基本というのは新生活であり、あるいは生活の合理化だという気がいたすのであります。私はちょうどこの八月末から十月の初めまで、アメリカを旅行いたしました。そのときに、シカゴの少し南に有名なイリノイ大学のあるシャンペーンという町がございますが、そこにハリスという60がらみの人が住んでおります。この人は有名なベンジャミン・フランクリンの曾孫に当たっていて、アメリカ一番の合金を作っている会社の社長さんであります。それでシャンペーンの町の名家で、実力者であり、また、この人は大変な日本好きなのであります。この人は、今、ロスアンゼルススの近くに、日本の金で1億円くらいかけて別荘を作っているのですが、自分で行ってトラックを運転して、それを手伝っているくらい非常に元気な人です。その人と一緒にスイカをたべたときのことですが日本人だとスイカを食べるときに赤いところをだいぶ残しますが、その人はそれを残さずに全部ほじくって食べてしまいます。日本人はそこまで食べると貧乏くさいとか、しみったれだとか思われるせいか、ほしそうでも残すようです。私は若いころドイツにおりましたので、ドイツ人のそういうことはいやというほど知っております。しかしアメリカ人がそういうことをするとは思わなかったのです。しかもこういう金持の名家の息子が——息子といってもじいさんですが、そういうことをやるというこの態度こそ、アメリカの繁栄があると思ったのです。日本人がこれを反省してみますと、日本人は貧乏なくせにそういうところに見栄を張るといいますが、惜げないことをやっていると思うのです。私どもを案内してくれた二世の若い人がおりましたが、いつでも残すのです。私が食べてやろうかと思うほどたくさん残します。しかも、割合高いメロンを注文して残すのです。こういった基本的なものをわれわれが養わなければ、世界の進んだ民族に劣らない民族として残ることは不可能だと私は思うのです。

明治維新以来これだけ日本人が発展したので日本人は偉い、利口だ、智慧があると言われますが、もし明治の初めから四つの島に限られておったとしたら、私は

日本人はこんなにならなかつたと思うのです。これはほかの方法で、いわゆる領土の拡張をやることによって人口もふえ、また資源も得、働く場所を得て発展したのであります。ところが今のようにこの四つの島に閉じこめられてしまいますと私どもはもう一ぺん考え直さなければなりません。これが、実は生活の合理化であり、新生活運動ではないかと思うのであります。そういう意味で、永井先生がこういうことにお大変ご苦労なさっておりますが、しかし世間は永井先生のご努力をそれほど買っていないと私は思うのです。永井先生のご努力を買おうが買うまいが、みんながそうしなければならない大切な運動と私どもは考えております。

今日本はどうも物が足りない、貧乏で資源が足りないから、何とかしてこれをふやして民族を永遠に栄えさそうというには、生活の合理化、新生活運動、つまり富の蓄積、力の蓄積をやるのだというように考えておりますが、蓄積の面から生活というものを取り上げて、皆さんのご参考にしたいと思ひます。朝日新聞の論説委員の土屋清さんが、動物と人間の違いの一つは、貯蓄するかしないかだと言っております。私も貯蓄運動はやっておりますので、そういう点を気づいたことがあるのであります。動物でも貯蓄するものがあるのです。アリ、蜜バチ、リス、というのが、それであり。それに、ウナギ、カラス、ネズミなども非常に強い貯蓄本能を持っているということでもあります。しかしどうして人間が万物の靈長になったかということについて河上肇先生の「貧乏物語」では、人間は二つの足で立って、手を使うようになったからだということを書いておりましたが、しかし後足で立って手を使えるリスにしても、またカンガールでもそうですが、こういう動物は発展していないのであります。これは、単に足が立って手が使えてもだめで、その上に貯蓄本能が必要なのです。けれども貯蓄本能で貯蓄しているだけでは、本能には限界がありますから、貯蓄を上手に利用する、あるいは3年も5年もためるといふ考え方、それが私は人間の人間たるゆえんではないかと思ひます。

二宮尊徳の教えに勤・儉・譲というのがありますが、とくに譲ということについて私は二宮尊徳を研究すれば非常におもしろいと思ひます。二宮尊徳はたとえば「今日得たもののうち一部を明日に譲る、今年得た作物の一部を明年に譲る、これが富国の大計だ」とこう言っているわけであり。譲るといふのは貯蓄なんです。昔は貨幣経済ではないから、作物を作って蔵に入れておくというのであります。従つて二宮尊徳は人道も突き詰めていけば貯蓄があるだけだ、貯蓄の一方の意味、つまりこれは富国の大計、富国の根源なりということを書いておられます。こう申しますと、二宮尊徳の言つたことなんていかにも古くさいような感じがいたしますけれども、われわれの周囲を見回し、世界を見回しましても、同

じことが言われます。

それに皆さん方が使っていらっしやる机、鉛筆、それから家の中には電気がついている。これは全部貯蓄でつくられています。今日働いたものを全部その日に使ったり、今年働いたものを全部その年に使っていては、家が建たない、机もない、鉛筆もないという状態になってしまいます。いやそれに工場だとかダムだとか道路などもできないのであります。このことは非常に重大なことで、大きな工場の設備だって、皆さんが10円とか1円とかいうものの貯蓄が重なり合ったもので、だれもがあとに残す、譲るということを考えなかったら、どんなものもできないのであります。従って、あの大きなダムや、スプートニクあるいはジェット機というようなものも、貯蓄の重なりなんです。自分が作ったものを全部そのまま使わないで次へ譲るということから起こってくる、その譲ることが多くなればなるほど大きな力になる、こういうことを私は考えるのです。そうすると、二宮尊徳の勤・儉・譲というものは非常な原理に通ずる、彼ほどの人が言うのですから間違いないだろうと思っております。

従って、私どもは貯蓄を勧めておりますけれども、お金をためて使わずにおくとは申してはおりません。昔、浄土真宗の信者が乞食になって野たれ死にしたときに、そのふところをあけてみたら百両持っていたそうです。これは死んでから極楽に行くためにそういう金を持っている人が多いという話でありますけれどもしかし私はそういうために金をためなさいと言ったことは一度もないのであります。私はお使いなさい、お使いなさいと言っております。使わなければ金の値打がない。使ったらそれで貯蓄がなくなったかという、そうではないのです。私はお百姓さんに向けても、鉄筋コンクリートの家を建てなさいと言うのです。そうすれば200年、300年あとまで家が焼けずに、こわれずに済みます。今東京あたりで建てているバラック建の家は30年でこわれる、田舎に行っても100年もつ家はありません。しかし外国に行きますと、そんなものは幾らもあります。住宅でもあるいは道具にしても、安いものを作って5年か10年すればあきがきて、それでまた新しく作るというよりも、作るときに良いものを作って、子々孫々に残すというような道具を揃へた方がよいと思います。これも貯蓄の形態が変わっただけであります。だから使って貯蓄の形を別にするだけなのです。

ただお酒を飲んだりタバコを吸ったりパチンコをやったり、これでは残りません。これは貯蓄とはいえないのです。しかしタバコを吸うとか酒を飲むとか、こういうことの中に別な形態、プラスがあるならば、それも認めなければなりません、おおむねむただであります。しかし人間の生活にむだが全然なくなるということは、非常にさびしいものです。私は、よく朝、飛行機で大阪に行って午後の

飛行機で、その日のうちに東京へ帰って来るのですが、この間何時間ほんとうの仕事をしたかという、一番大事な話は、2、3分あとはむだ話をよくしております。しかしそのむだ話をしないと、ほんとうの話に入れない、あるいはほんとうの話はそのあとでないと聞いてくれないというので、むだ話もこれまた大事なエッセンスなのです。しかしあまりむだの方が多くても、それが主になってしまって、ほんとうの方がおろそかになってしまっただけではいけないと思います。しかしいわゆるむだのない生活というものも寂寞たるものですから、全部むだを省きなさいとは申しませんが、目に見えるむだはやめるべきだと思っております。

こういう話をいたしますと大きなことには通じないのではないかという感じを持たれる方もあるかと思いますが、貯蓄が全くないと日本銀行が行う金融政策というのは、できないのであります。日本銀行が金融を調節するには3つの手段があります。一つは去る9月に実施しました準備預金制度であります。つまり銀行から日本銀行に一定額を預けさせるという方法です。次にマーケット・オペレーションがあります。それはこのごろのように米代金が出て、農林中金に金がうんと集まると、日本銀行が手形を売って金を吸い上げることです。もう一つは、公定歩合を上げるとか下げるとかあります。日本銀行がこういう三つの仕事をしておれば最も大切だと思う通貨の値打、お札の値打を安定し得るかという、そうではなくも日本に貯蓄、これはお金の貯蓄ですが、お金の貯蓄が一つもなかったとしたならば、公定歩合を変更しても問題にはならないし、マーケット・オペレーションをやろうといっても、日本銀行の手形を買おうにも金がない、支払準備金を銀行から日本銀行へ預けるといっても、銀行に貯蓄がなかったらこれはできないのであります。それよりも貯蓄がなかったら銀行は成り立たないわけです。貯蓄があるという前提でこれを行っているのですが、貯蓄が多くなれば多いほど、こういうマーケット・オペレーションの手段というものはやりやすい、だから現金の貯蓄が減っていったような場合には、どんな人でも手も足も出ない、貯蓄があるという前提でやっているだけのことなのです。ですから日本よりも、イギリスとかアメリカとかいったような、資金の豊富な国はこういうマーケット・オペレーションがやりやすいわけです。三つの手段があるから大丈夫だと思っても、貧乏国にはなかなかできないのです。そこで日本銀行からお札を出さなければなりません、出せば物価が上がるというので出さない、出さないと今度は生産が上がらないこととなります。

そういう意味で貯蓄が当然あるという前提でわれわれは考えています。その貯蓄をばかにする傾向があります。私どもがよく地方を回ってお話をすると、“貯蓄なんてばからしくてできませんよ”とおっしゃる、貯蓄がなかったらどうなる

か、あなたの家は貯蓄がなくてどうして建てた、いや先祖が建てた、先祖はどうして建てた、結局家を建てるのには何かしかの貯蓄をしなければならぬ、山に木を植えて木を多くする、そのうち自分の山を切って、金のない時代は金を使わないようにして建てる、これも山で木を貯蓄したからこそです。

このように貯蓄を考えると、私どもは、貯蓄と言わないで、資本蓄積という言葉で表現しております。そして「若いとき流した汗は老後の安楽の貯蓄だ」と私は思っています。若いときに流す汗がなくて老後に安楽になるという人は千人中十人もいないのです。若いときに汗を流してお金をため、これで家を建て、田地を買ひ、あるいは必要な道具を買って晩年自分の働きで買えなくなるときに、それを使うというのが若いときの汗でありますから、若いときの汗は老後安楽の貯蓄だ、こう申しております。

また、早い汽車に乗る、これも私は時間の節約だと思います。私どもが昔旅行いたしましたときには、アメリカに行って向こうで何もしないで帰ってくるだけで1月がかかった、それが今日では時間にして2日もあれば行ってこられ、それだけ向こうに行って用が足りるので、余った時間で、ほかの仕事ができるわけです。従つて時間が短くなるほど乗りものは高くなるわけです。つまり汽車でいけば10時間かかるものを、飛行機でいけば1時間だから、運賃も10分の1というわけにはいかない、むしろ10分の1になったために高くしているわけであります。これもつまりは時間の貯蓄だからこそ、われわれにとって貯蓄になった分だけ相手がある程度とるのはやむを得ないのです。

本を読むのだって貯蓄だと私は思います。10年、100年、1000年もかかった知識をその本によって一ぺんにもらって、それをまた次に使うのですから、従つてぼんやり本を読んでおったのでは貯蓄にならない、気をつけて読んでおれば貯蓄になるわけです。

今申しましたように、家も道具も道路もみなこれは貯蓄だと考えております。私どものお勧めする貯蓄は金だけの貯蓄ですが、今の世界の経済の仕組からいいますと、まずわれわれの労働の対価というものは金でくるのでありますから、その金をためておいて、それで自分ではできないものを買ひ、そしてそれを長く使うというのがほんとうの貯蓄で、これが人類の発展の基本だと、こう思うのであります。

去る9月の初めに西欧で投資及び貯蓄の国際会議というものをやりましたがそこでアメリカからの報告書に次のようなことが述べてあります。「アメリカのような、あんなに、たくさんの金を持ち、組織を持ち、設備を持っておるところでも、農業を営みながら工業化をはかって来ました。そこで金融機関ができ、その

金融機関が農業移民の零細な金を集めて大きな富をきづいて来たのであります。決して初めからあんなにたくさんあったわけではない」こういうことをいっております。また、後進国がいますぐに自分たちが最高級の生活をするというようなことを希望しているけれども、それはだめだ、やはりわれわれが歩んだと同じように、零細な金を積み上げてゆかなければならぬということも述べております。日本全国にも10兆円の預金ができたといいますと、非常にたくさん金ができるように思いますけれども、その10兆円なども、もともとわずかな金を積み重ねた結果であって、このようになるのには、明治の初めからなのであります。従って貯蓄というものも、ずっと掘り下げていってみますと、皆さんの1円からということになってしまう、それを忘れて、このように沢山の金があるからといって、それで貯蓄というのは多額な金を貯蓄するのだと考えたら絶対に進歩はないし、また絶対に預金できないわけでありまして。あのアメリカの行き過ぎたと思われるほどの資本主義経済、あるいは豊富な資源を持っているアメリカの銀行家でさえもそういうことを言っているというのは、私どもに非常に参考になるのではないかと考えております。そういうことから、私どもの貯蓄のすすめも10円貯金から始めなさいと言っているのであります。

先程申しました10兆円の預金のなかに、ある人は5万円、他の人は10万円しか持っていないのだから、その10兆円というお金の大部分は会社が預けているのだとお考えになる方があろうと思います。たしかに10兆円を法人・個人に分けますと、法人の預金が35%、個人が65%と推定されます。しかし会社というものは個人が働いたものを会社という形で残しているだけなんです。会社というものがもうけているのではなく、やはり個人が働いて金を作っておりますから、二宮尊徳流に突き詰めていけば、また個人に帰るのです。また日本銀行が、昭和32年度の日本の金の流れという、マネー・フローというものを調査しておりますが、これによりますと、貯蓄といいますか、資本蓄積という大きな意味での資金の動きを見ますと、なかなか個人というものは大きな力をもっているのであります。丁度32年度の資本の流れは、それが家になったり、道具になったり、あるいは工場になったようなもの、全部入れますと、3兆4千億円という金が動くといえますか資本蓄積になっております。その3兆4千億円の中で、1兆6千億円近いものが個人であります。それから法人が9千4百億円くらいです、それくらいしか法人というものは金の動きの中における力はないわけでありまして。(政府が7千3百億円国際収支の赤字が2千億円)これはただ貯蓄する、資本蓄積する方ですが、今度使った方を見ますと、法人がたくさん使っている、2兆円も使っているのですが、個人としては6千7百億円、政府7千8百億円というのであります。使う

方は、大きな設備をするとか工場を作るというので法人が多いのでありますが、個人の貯蓄がなかったら法人の力というものは出てこないであります。

従って、私どもは、貯蓄というものは個人の方を対象にしなければいかぬ、また会社なんかに行つて、あなたのところも金を預金しなさいと勧めたつて、何百万円持っているか知りませんが、1億円、2億円という金を会社の金庫に入れておくというようなことはしません、ほうっておいても貯蓄はいたしますが、個人の方はなかなかそうはいきません。いわゆるタンス預金が相当ありますし、それにあつたら使おうと待ちかまえているので、貯蓄をしない方がりっぱだと心得ている人がおりますから、私どもの貯蓄の方向というものはもっぱら個人、しかもたゆまずうまず、とくに私どもがお願いしているのは家庭の主婦の方であります。

貯蓄をやっている金額は男の方が相当多いのでございますけれども、貯蓄をする意欲というものは婦人の方に多いと思ひます。ことに日本の婦人というものは長い間主人に従属といつては失礼であります、これに従つております。これもいいのであります。私は、男女同権だといつて、家の中に二つの柱があつたのでは絶対にいけない。そうすると、総理大臣が1人いるところに、もう1人総理大臣を置くことになる、また会社に社長を2人置いたらこれは絶対うまくいかない。あることについてはたれかが決定する、だから奥さんのところにも決定権があるということもよろしいのであります。それでうまくいかなければ旦那さんの方に決定権、だれかが最後にきめなければうまくいきませんので、男女同権ということで、ただ主張すればいいのだという考えでは家庭というものはうまくいかないと思ひます。しかし過去の日本では非常に主婦の力が弱かつた、だから日本の家の中がうまくいかない、合理化ができない、ですから家の中だけは奥さんがまとめなければいけない、従つて私どもの貯蓄運動でも、家の中のことは奥さんにおまかせ願ひたい。つまりたとえばお百姓さんの営農資金で、肥料を買う資金、あるいはあそこの田地を買おうとか、トラクターを買おう、こういうことは旦那さんがまずきめてもよろしい、しかし家の中で飯をたくかまをどうする、畳がえをどうするといったようなこと、ことに日常の生活については奥さんに頼んで、その力を發揮してもらいたいものだということをお願いいたします。

このように奥さんに権限をまかせますと、奥さんは必ず貯蓄なさる、これは実にはつきりしている。なかには奥さんがタバコを吸うとか酒を飲むというのは、1万人に1人くらいありますけれども、奥さんにまかされたころでは、必ず家庭の合理化をやっている、そしてその合理化のもとには貯蓄なんであります。それは10円という金をためて3年後にはかまどを改良しようと努めます。従来のかまど

でありますと、たき口が大きく、かまをかけておいても、火が外へ出てくる、だからたき木をどんどん入れなければならぬ、それになま木ですと家中にくすぶる、それに学校から帰っておなかをすかして早く食べたいと思っている子供もあるのに、お父さん、お母さんの帰りがおそいから食事を待っているのが大へんなんです。それにもかかわらずかまどがうまくたけない、みんながいやになってしまふ、そこで改良かまどというものが全国にひろがって来たわけですが、一番いいかまどで1万円、1日10円貯蓄しますと、3年でかまどの改良ができ燃料が節約できますから、御飯をたいたあとに牛や馬に使うお湯もわかせる、そしてたき木が半分くらいになって、手間が少ないから、その次に今度山に入って切ってくる御主人の時間も少なく助かる、その短くなった時間をほかのことに使える、そして外からたき木を買っている人も少なくて済むのであります。そうしますと、今まで1年に5千円かかったのが3千円で済む、それで2千円は貯蓄します。その2千円を10年も貯蓄しますと、今度何をやるかという、簡易水道、これは今まで水をくむために主婦が苦勞をした、旦那さんが水をくむ家庭というものはほとんどありません。日本中どこへ行きますとも、必ず主婦なんです。かぜを引いて熱があろうとも変わらない、腰が痛くても水をくまなければなりません。そのために時間がかかる、そして労働が激しい、のら仕事から帰ってきてから水をくむ、ことに農繁期にはおふろをわかさなければならぬ、そのお風呂の水と炊事の水というものは大へんなものです。それを簡易水道をやってみますと、それに使った労働力も体力も要らなくなる、それで今度時間が余るから養鶏をやる5羽やっていたのをふやして10羽にする、そこでまた収入がふえてくる。だんだん家の中がよくなってくる、やはり家の中では女房にかなわぬという旦那さんが出てくる、つまり男女同権を女の方から主張するなら、そういう実績をあげて、かちとってもらいたいと思います。日本の民主主義もマッカーサーからもらったものですが、こういったほんとうの実績をあげて男女同権になることが望ましいと思います。私は男女同権を論じたのではございませんが、そういう貯蓄をなさる本能みたいなものを御婦人は持っておられる、そういうことがいつの間にか日本全体の大きな貯蓄の基礎になるのであります。

先程申しましたように、個人の預金の力が断然大きくそのもとは、主婦の方たちの10円貯金とか5円貯金とか、中には1円貯金というものをやっている、そういうことがいつとはなしに日本全体の預金の基礎になって、りっぱな工場が、道路が、港湾設備ができるということになるのではないかと思うのであります。とにかくそういう力というものを作るのは特に御婦人が多いということ、これは私日本全国を歩き回った上での体験であります。

10兆円ということは、かなり大きな数字であります。この預金のうちで営業性と貯蓄性の預金があり、なかでも貯蓄性の預金が非常にふえております。これは私どもの運動の効果も中に入れていただきたいと思うのでありますが、終戦後のやれ食い物が無い、着る物が無い、家がないという状態から、だんだんよくなりまして、そのよくなったところで、特に主婦の方が生活の改善をすすめたことも大きな力と思います。さっき申しましたかまどの改良とか簡易水道だとか、あるいはふろ場の改良、草屋根を瓦でふくというようなこと、その上に電化が進んでおりますから、そういったところから、それをやるのには金が要る、金が要るからまず貯蓄をしよう。個人でなくて部落単位あるいは村単位で共同して進めております。そういうことが貯蓄性預金を増やしていると思っておりますが、この傾向をもっともっと助長して、早く先進諸国並みに持っていききたいというのがわれわれの念願であります。

世界並みと云って、10兆円もやってまだ足りないのかというお話があらうかと思うのでありますが、かなり足りないのであります。現金の貯蓄の形態というのは銀行の預金とか貯便貯金とか保険だとか、あるいはイギリスのように貯金債券を出す、それを買わせるとか、いろいろな形がありますので、それと比較するにはかなり問題もありますが、かりに1人当りの銀行預金だけをとって先進国と比較しますと日本では1人当たり7万円ですが、アメリカは51万円、スイスが38万円、イギリスが17万円、日本と同じように戦争に負けた西ドイツが16万円、それからイタリアが約9万円です。日本の10兆円というものは、日本の9千万人に割り当てますと、11万円ばかりになります。しかしそういう方法で今度アメリカなんかの保険というようなものを入れますと、これは膨大なものになりますし、ちょっと比較ができませんので、銀行にある預金だけでやってみただけであります。また、戦前(昭和9年—11年)を標準にいろいろな指数がとられておりますが、これらの指数と預金のそれを比較しても劣っております。つまり鉱工業生産は戦前にくらべて2.8倍になっておりますが、そのふえた割合に金もふえていなければならぬといたしますと、今の10兆円というものは、20兆円にならなければならぬのであります。国民所得では大体戦前の1.7倍になっておりますが、これでやったといたしますと、12兆5千億円くらいになっていなければならぬ計算になります。また貸出でみますと預金は14兆7千億円くらいになっていなければなりません。どこから見ましても、ほかの指数の状況に比べてまだ預金が少ない、預金が少ないから、非常に銀行にあたまをさげなければならぬということになります。

とにかく銀行にずいぶんおじぎをしなければ、どうも自分の経営も、家も建た

ないという状態になるわけでありまして、アメリカあたりでは資金が多いために、それが全く逆でありまして、お前のところの何々には銀行の金を使ってくれと広告しております。それが世界で一番大きいといわれているナショナル・シティバンクでそうなのであります。日本では銀行に行っても、個人が借りに行くというのはとてもできない状態であります。

そのほか私どもが外国を回ってみまして、私どものいう資本蓄積からいえば、道路とか工場とか家だとか港湾設備とか、こういうものに蓄積されますが、日本の道路に至ってはお話にならないのであります。家も日本では御承知のようにバラック、たとえば戦争で負けたときに、西ドイツのこわされた家というものは、半壊を半分に計算いたしましても600万戸くらいじゃないかと思うのです。その後東ドイツから逃げてきている者を収容いたしますと、それにまた相当のものを加えなければならぬのであります。それでも現在では全部家が建ってしまってその家もバラックではない、全部鉄筋コンクリートかブロック、あるいは、瓦造りなのです。日本でもずいぶんやっておりますけれども、まだ180万戸ばかり足りない、それに建った家屋の中には、バラックで、10年たてばだめになるようなものも1軒に勘定しても足りないのであります。特に道路については私ども関心を持っておりますが、日本は土地が狭いし、いろいろの条件がありまして、やむを得ない点はありますが、とにかく道路が悪いために、私ども自動車で旅行いたしましても、大体1時間30キロ平均しか出せません。ところがドイツに行きまして郊外を走りますと、平均50キロから60キロですね。アメリカに行きますと、それが70キロから80キロくらいになると思うのです。日本の30キロに対して60キロで走るとすれば、倍早いわけでありまして、従って時間が倍、節約できる、あるいは仕事が倍早くでき、泊まらなくて済むというわけでありまして。

日本では自動車が250万台くらいあります。ドイツは日本より狭い土地の中で400万台になっておりますが、郊外を走りましても、町を走りましても、東京のような混雑さはない、これは道もたくさんあるからでしょうが、要するに道路がよいから速く走れるのであという混雑さを来たさないものであります。皆さん御承知のように雨の降った日は自動車が非常に混み合います。それは速力がおそくなるから混み合う。日本でもちよっと良くなれば200万台や300万台でこんな混み合うということはない。その道路も舗装されているのが全体の8%くらいしかない、国道でも34%くらい、そういったように非常に少ない。ドイツあたりは100パーセント舗装されています。アメリカでもわれわれの走るところは全部舗装されておりますが、土地が広いですから、全部は舗装されない、60%か70%、しかし産業道路とか交通道路などは全部舗装されております。これなんかほんとう

の意味の資本蓄積であります。そういったことからいうと、日本の蓄積というものは、金の蓄積でなしに物の蓄積が非常に劣っている、こういった劣った状態で、はたして世界の民族に対抗していけるかと考えますと、私は対抗していけないと思います。こういう意味で私は貯蓄を基本的にやっていかなければならない、こう考えるのであります。

それからもう一つ、今の日本では企業、経営の自己資本が足りないのです。戦前は日本でも世界並みに自己資本が 65~70% くらい、他人資本は 35~30% くらいであったのが、現在はちょうど逆になっております。従って何か仕事をしようとする、銀行に行って金を借りなければ仕事ができない状況であります。そうすると銀行は貸したものが倒れはせぬかという心配がありますから、どうしても警戒心が強いのですが、事業の方は裸になっても、そこから立ち上がるという事業が相当あります。ことに新しい製品を作っていくというときにはそうあります。銀行から借入をしていると銀行の顔色を思い浮かべながら事業を行うのでほんとうの仕事ができないのであります。そこで日本でもいい意味において企業家が、自分の責任においてやれる、他人のものを借りずにやれるような状態を作らなければいけないと思うのであります。これは私が銀行の悪口を言うのではありません。また企業家が、実は何かおもしろいことをやっているから幾らでも貸してくれといって、もしそれが返せなかったら預金者に迷惑をかけるのですから、銀行が心配するのはやむを得ないのであります。私が今、銀行屋だったら、やはり心配屋になるのです。しかしそういたしますと、どういうことがありましても、他人の金でやっている、思う存分には仕事ができない、やはり自分の金を蓄積して、そして自分の責任においてやるというので、大きな仕事もできるわけであります。そういう意味で、日本の企業自体が蓄積をしなくてはならぬし、自分の金でもって思い切った仕事をやるという状態を作らなければならぬと思います。

われわれの家庭においても、よそから借りて家を建て直すときに、うんとよく建て直すにはたくさんかかるし、貸す方もそんなに貸せない、まあ2、3年過ごせるように直してつまり安もの買いの銭失いになってしまう。そうでなく100年たってもこわれないようにする、そうすると、長い間には自分たちの財産になる、蓄積もふえるわけです。そういう点を考えましても、会社でも自己資本をためなければならぬと感じているわけであります。

今申し上げたことでおわかりになると思いますが、個人といたしましても、会社といたしましても、日本全体といたしましても、貯蓄をして、その貯蓄を使って、日本民族の力を強めていかなければならないのです。私どもは、日本に100

兆円できようと千兆円できようと、それが銀行の金庫の中で眠っているような貯蓄をやってほしいとは思いません。勿論、金融機関が集めた金を利子をつけながら眠らしておくようなことはいたしません、個人にいたしましても、眠っているような貯蓄をしてもらいたいとは思いません。ほんとうに日本経済あるいは日本民族の力をふやすために、使う方の貯蓄をすることです。

現在は技術革新ということが非常に盛んになって来て、電子工学、化学工業の進歩はめざましいものですが、これには非常に多くの金がいります。ソ連がスペースシャトルを最初に打ち上げた、あの部分を作るのに、最初のことで、日本の金にいたしますと、1兆5千億円もかかったといわれております。あれ自体それほど役に立つかどうかは別問題といたしまして、それほど金をかけないと、できない技術革新が毎日進められているわけです。もし技術革新に負けたら、ちょうど日本の先住民族が鉄の武器を持った現在の和民族に負けてしまったと比べようことになります。ですから現在の鉄の力というのは、その当時の技術革新なんです。現在日本にも技術革新の芽ばえがあります。仁科博士があの原子力に取り組み、湯川博士がノーベル賞を受けられるほどの発見はされたのですが、それを具体化して実用化したのは、これは外国なのであります。日本では実験しようにも金がないし、物もないのでしようが、金があれば物を外国から買えることとなります。ましてこういうものが全部日本ででき上がったとしたら、日本は土地が狭く資源がなくても、頭を売って日本人の生活をどんどん上げることができるわけなのです。残念ながら金がないためにこういうりっぱな頭を持っておいても、それを日本で実用化できない、従って特許を売ってしまう。自分のところで実用化できない特許を売るときには安く買われるわけです。

日本で発明発見をやらうとしてみても金がない、日本の政府としても、プラスになるかマイナスになるかわからないのに、そう補助金も出してくれない、だから自力でやらうとするが金が足りないのです。それではほんとうに世界の技術革新に追いつけないので、和民族を滅ぼしたのと同じような結果になると思います。そこでいろいろな意味での蓄積がなければならない、こう考えるのであります。

これは永井先生の御専門であります、最近日本の人口の増加はだんだん減って参りましたが、今後10年ぐらいは労働力人口はふえるのだそうです。昭和45年のころには毎年180万人ぐらふえる、つまり人口増加は80万ぐらになるけれども、労働力人口の方はふえる。このふえる労働人口をもし職業に吸収し得なかったらばどうということが起るか、これも私どもの心配の種であります。現在でも全部が就業していないし、就業していても非常に不満足な状態にあります。こ

の間もどこかで10人ぐらい大学卒業生を募集したら、すでに職業を持っている人が千人ぐらい応募したそうですね。ということは、いかに不満足な就職をしているかということです。その上に新しくふえてくる労働力人口を吸収し得なかったら、世の中というものはとても騒がしくなってきます。このためにわれわれは経済の拡大を考えなければならない。経済の拡大と申しましても外国の特許を買って、日本の国内だけで事業をして儲けておいたのでは必ず行き詰まります。それにはたびたび繰り返しますが、つまりわれわれの生活を合理化して貯蓄し、例えば10万円たまったら簡易水道を作る、あるいは電気洗濯機を買う、そういうことによって自分のところの生活が合理化されて、主婦の時間が助かる、こういうことになって自分の生活が上がれば、日本全体の生活が上がる、そして次の貯蓄をすることができる。そうすると、一人一人が1日10円よけい貯蓄したということになると、日本では9億円の貯蓄ができる、1年では相当膨大なものになるわけです。そういった一人一人の貯蓄心ができあがることによって、非常な資金ができます。そういうことで、自分の貯めた金をつまらぬことに使うというのでは困りますが、何かの次の蓄積に変わるようなことに使っていただければ、何もおそれることも、心配することもないのであります。

先ほど申し上げましたが、預金残高が10兆円になっておりますが、生産は2.8倍になって、これもふえた、あれもふえたといいますが、日本の蓄積自体としては、やはり戦前よりは劣っております。おそらく戦前の8割ぐらいにしかいっていないのじゃないかと思えます。ところが戦前といいますと、もう20年ばかりたっている、かりに金を銀行へ5分で預けておいて、それを20年置いておけば倍以上になる、ですから戦争ということがあってやむを得ないといいますがけれども、よその国がどんどん進んでいるときには、日本は戦争というもので消耗したから戦前の倍にならないでも仕方がない、それでいいと諦めていいものではない。やはり世界の競争であります。そして私どもは現在の貯蓄が、いろいろな意味を含めて蓄積が十分でないということを、われわれがしっかり腹におさめ、そして会社を経営いたしておりますも、そういうことについて考えるべきであります。

私もよく言うのですが、私は日本銀行で相当長くやってきたのですけれども、私が課長クラスになったとき、そのときに経済的に一番豊かな時代でありました。給料は幾らももらわないのですけれども、当時のはやりで女中も2人雇っていた、それは子供が1人しかおりませんけれども、ほんどうののきな生活をしておりました。現在は小さな会社の社長をしております、金額じゃ会社の中で一番もらっておりますけれども、子供もふえましたせいもありますけれども、女中も置けない。昔はよく子供や家族をレクリエーションに連れていくのに、大型

の自動車を雇って1日ぐるぐる乗り回しても15円、今そんなことをやるわけにはいきません。やろうとすれば、会社の自動車を借りて、ちよっとごまかしていかなければなりません。そんなことをしたら労働者も乗せてやらなければならぬからやれませんけれども、そういうことで非常に下がっております。中には戦後がいいという人もあるかもしれませんが、それはあぶく銭をもうけたり、やみをやっていた人ぐらいで、多くは戦後の方が生活がよくなっているということはまずないと思います。そういうことを一つわれわれは頭に置いて、今のうちからみんなが合理化をして、その余った金で、それで高い生活をみずからやるという決心でなければならぬと考えるのであります。

それからもう一つ、私は昔から技術革新が必要だと考えておりますので、是非理工科系の学生をふやさなければいけないと申しております。30年度の統計によりますと、わが国では大学、短期大学を入れまして、理科の学生というのが21%文科の学生が79%、これがソ連だとか中共はもちろんですが、アメリカもほとんど逆な状態です。それでも足りない、足りないといっております。それで電子工業関係では、アメリカでも4万人も技術者が足りないといっております。日本では今これを逆にするというはなかなか困難ですが、半々にするのでもよほどの決心でやっていかなければならないと思います。

私が先だってアメリカに行ったときにそういう点を聞きますと、どこでも技術者というものは非常に優遇されております。日本の大学の先生でも向こうに行きっきりになった人もいるし、技術者ならどこの国の国籍をとわず採用しております。また中国人も相当エンジニアとして各会社に入っております。

このように技術者が優遇されておりますが、よそのことをうらやむ必要はありません。日本も日本自身の問題として技術者をふやすことを考えませんと、軍隊に頼んで領土をふやし、それでわれわれの生活を向上したことは過去の夢でありますから、やはりわれわれの生活権を広めるには、頭脳領域を拡大する以外にないと思います。そこで理工科の学生をふやさねばならないと私は心配しているのであります。こうゆうことを直しておかないと先がだんだん細くなって、いかにいい頭を持っておっても、それを実験することがなければ、自分たちの経済圏の拡大にはならないのであります。

私は、個人の問題で、先ほどかまどの改良だとか簡易水道だというようなことを申し上げましたが、私は個人についての生活の合理化にこういうことを取り入れてもらいたいと思うことがありますので、この機会にお話を申し上げたいと思うのであります。それはむだの排除であります。そのむだはどんなところにあるかというところと最初にお話をしましたように、食べ物もちろんであります、私ども

男はビールをよく飲みますが、料理屋でビールを飲んでいるのを気をつけて見ていると、コップの中にビールが残っていないこと、またビンの中にビールが残っていないことがあるのでしょうか。はなはだしいときには20のコップがあると10のコップにはビールが残っている、10本あれば3本はビールが残っている、こういう状態なんです。私は若いころ酒が好きで——酒を飲むのはむだだといわれると困るのですが、そのころベルリンに長いことおりました、ドイツ人がビールをつぐのを見ますと、ビールが残っていると絶対につがない、ビールがちょっと残ってもその上にはつがない、またつぎに行っても、その人が飲めなくて、手をこらやると、絶対につがないのあります。日本ではビールのきれいな人でも黙ってついてしまう、つがれた人もいやなのだけれども、仕方がないから、ちょっと口をつけて飲む、だからビールのきれいな人は、最後には残してしまうことになります。そうすると、ビールは酒屋で買ってもコップ一ぱい20円、料理屋で飲んだら10円とか50円、銀座あたりのカフェで飲んだら、私はよく知りませんが、おそらく百円ぐらいにつくのではないかと思います、金を払って捨てるのですからこんなぜいたくをやっているところは世界中にありません。こんなぜいたくは王侯のぜいたくよりももっとぜいたくです。手をつけないものを捨てるのですから王侯が長夜の宴を張ったところで何かの楽しみを持っている、しかしきれいな人にビールをついでこれを捨てるというこんなぜいたくは世界中にないのです。それからもう一つ、これもドイツでたびたび経験しておりますが、もうけっこうですと言ったら絶対につぎません、それでもまあまあということはいわない、これはドイツに限りませんが、ドイツ人は特にそういう点は合理的なのだと思います。

それで私はこういったぜいたくはやめてもらいたいので、福沢諭吉先生にちなんで、「ビールの上にビールをつがず」という標語を作って皆さんにおすすめているわけでありまして。ほんとうのむだをしているような国では、その民族は永續性がありません。そういう点で私はこのビールが気になるわけでありまして。

それからこれもよくいうのですが、国電に乗りみかけることはプラットホームの水道の水が開放しになっております。あの水はダムにつくって、金をかけた水なのです。この間小河内ダムを見に行きましたが、あれを作るのにずいぶんの犠牲を払ったそうです。あるいは湖底に沈んだ家、先祖代々の墓を捨てた人もあります相当の金をかけてあれだけ大へんな犠牲を払った水が、こういうようにむだに流されてそのまま東京湾に流れている、これはまた非常なむだだと思います。これがドイツ人だったら自分でとめる、しかし日本人は人の見ているところでは気がついてもしない、私は見て気がついたら必ずとめるのです。

それからまた昼に街灯がついている、太陽が出ているのに街灯がついているなんということ、これはまた愚の骨頂であります。私自身は私の家からバスに乗るまで10分くらい歩きますが、そのときについていれば消してやるのですが、実際私のような年をとったものでも恥かしい、それで子供たちにも見つけたら消しておけと言ったら、いやだと言って一ぺんにけ飛ばされましたが、私は自分で言っていますから、自分で消します。それで私の家でもこのごろは全部消すようになりました。だからだれかがそういうことをやってむだを省く、しかし電気というのは流れているから、そこ一つを消してもだめだと言う人がおりますが、しかしそれで電気がもし余るといことがあったら、電気の値段を下げるか、あるいはまたそれでもう一つ工業をおこせる、それにもし全国の家庭が百ワットの電灯を夕方1分間おそく電灯をともし習慣をつけると、1年間の電力で、特急「こだま」が東京—大阪間を1,100回も走れる、全国の人が1分電気を節約するならばそれだけの電力が余るといお話であります。

そういうくらいのことですから、みんなが気をつけてむだをしないという、つまり「だれも得をしないでみんなが損をする」といようなことをやめる習慣をお互いにつけますと、知らず知らずのうちに日本の中に資本が蓄積される、資本が蓄積されるということは日本が豊かになる。それがためにはみんなが、先ほどお話をしましたような、ぜいたくだと思われるようなむだをしない。やらなければならぬことはやらなければなりません、しかしむだなことはやらないようになります。

国鉄の総裁の十河さんが「私の履歴書」といものを書いていらっしやったのを新聞で読んだのでありますが、あの人がニューヨークで下宿しておったとき、くつを外でみがけば金がかかるといので、古くつ下でみがいた、そのうち下宿をかわったときに、くつみがきに使っていたくつ下をごみ箱にほうり込んでいったそうすると、前の下宿の奥さんからまだ使えると云って小包で洗たくをしたくつ下を送ってくれたといのです。これがほんとうの節約だと思ひます。

たとえば汽車に乗ろうとする、時間が余れば一番安い乗り物に乗る、ところが時間が足りなければ、どんなことをしてでも時間に間に合わせるような金は持っている、しかしむだなことには使わない。日本人はそれに比べてみると非常にむだが多い、要らないぜいたくをしている。このごろは若い人がバスの1駅にも乗っている、つまりバスの時間にして1分くらいのところに乗っている。私はバスと電車でかよっていますから、よくわかりますが、こんな近いところにバスをとめなくてもいいと思うところにもとめる、ああいうことはアメリカ人はやらない、ドイツ人もやらない、でありますから、同じように戦争に負けて、日本よりも

っとひどい被害を受けていながら、現在日本の倍も倍も繁栄しているわけです。預金にしても倍であります、道路なんか、こわされた道路が一番に回復して、生産は日本の3倍から4倍、賃金は2倍であります。そういうふうに回復しているのは、つまらないむだをしていないからであります。つまらないむだを省く習慣をわれわれの習慣として持つようになれば、おのずから国が富んでいく、家で富んでいくということになるだろうと思います。家が富まないのに国が富むということはありません。家が富んで国が富まないというのが昔の中国であります。それと反対に、国が富んで家が富まないのが今の共産主義、やはり家が富み、国が富むというような組織、政治形態をとるということが、私は人類の名において要求されるべきではないかと思えます。

しかしそうかといって、今の資本主義がいいと申すわけではありません。それは私は心がけのできることでと思います。制度を作るわけではない。今申しましたように、資本をためて、それが同時にわれわれの富になるような心がけを持っておれば、おのずからそういうような社会状態が生まれるのではないかと思えます。その逆に、昼間から電灯がついているのをほうっておくような、そういう感情の国民では、いつの間にか貧乏をしていくという感じがいたします。

それから最後に“経営と福祉”ということに触れておきたいと思えますが、私はこの“経営と福祉”という問題は株主が幾らでも配当がとれる、あるいは社長が幾らでももうかった中から自分で家を作ったり、いろいろなことができた時代とは変わっております。やはり一定の規則のものしか受けられませんから、みんなサラリーマン重役です。そういう場合に経営というものは何を考えなければならぬかというようなことが問題になりますが、それはその企業を長く伝え進歩させていかなければならないことです。こういうことから長くこの企業を繁栄させようというためには、従業員の利益を考えないと絶対できない状態になっております。終戦後会社を経営する上においては、資本、借入金に対しては利息をそしてあとは社長を含めた全従業員が気持ちよく働く、そして長く働く、その働くためには福祉施設もしなければなりません。といって、会社の将来のための金までもそっちにつき込んで長く続かないから、目先の福祉だけにかけてはいけません。経営者、資本家たちも福祉ばかりをやったのでは長続きしないし、また従業員も、福祉施設さえあればいいのだ、こういう考え方で福祉施設を要求したのでは、長く続かないような状態になるでしょう。つまり結局は失業するということになるので、私は真剣にこの福祉問題を考えております。われわれも若干のことはやりますけれども、私どものような貧乏会社ではあまりそういうことはできませんが、とにかくそういったような考え方を持って経営に当たることが必要な

ではないかと思えます。皆さんはあるいは会社の幹部であられたり、あるいはこれから方々に宣伝される方も多いと思いますが、この新しい時代の経営者こういうことをまずやらせなければならぬと思えます。

先だってアメリカへ行きまして、なるほど飛行機会社というのは1カ月に5%ずつ従業員がかわる、それは常時雇い入れ、常時解雇をしている、だからどこでも好きなところに行く、そうすると、1年たつて60%ぐらいの人が入れかわる、マネージメントの人はかわらないが、その下の方の人たちは、技師を含め、全部しょっちゅう人がかわる、そういうところはボーナスもなければ、恩給もなく、退職金もない、だから何か経営者と従業員、労働者の間に隔たりが多いように思えます。それは日本の社会主義者にも、あしななければいけないということを見習わしたい、つまり向こうがいやなら売らぬ、こっちがいやなら買かぬでもいい、そこまで徹底しろという人がありますけれども、またいずれはそうなっていくと思えますけれども、現在の日本は温情主義ではありませんが、経営者と従業員がやはり一体になるという考え、これがその経営を長く続け、繁栄させるという考え方にならないと、つまり福祉施設とかいう問題、その改善の問題は解決することにならないと思うのであります。この考え方に対しましては、いろいろ批判があると思えますし、私もこれは永久的なものとは思っておりませんが、少なくとも日本の現在ではそうしていかなければなりません。だから15や16の若い者でも、ちゃんと仕事ができるのだったらどんどん上げるというわけには参りません。そうすると、古い方をどんどんやめさせていかなければならない、それは今の日本ではできない状態です。もしそういうことがいいとするならば、私はもっともっと資本を蓄積して、どこへいっても仕事ができる、そして給料をもらった中から十分老後の蓄積ができるような状態にならなければ——それは幾ら理想を掲げても、今の日本の状態ではできませんから、やはり経営の中における経営者と労働者が一体になって企業を守っていく、そのうちに蓄積をして、それを福祉施設に充てる、それが将来の発展にもなる、こういう考え方を、今後、10年や20年はそういう方向でいかなければならぬと思えます。

いろいろなことをしやべりまして、何ともお恥かしいのでありますが、しかしだれが説いても間違いないのは、ほんとうにむだを排除して貯蓄をする、「だれも得をしないでみんなが損をする」というようなことのないように、こういうことを子供のときからの習慣に仕上げておけば、将来の日本民族というものは発展する、それができなかつたら、発展はありませんのでお互いが民族を民族としていかすようにありたいものだと思っております。

大へん長い間ありがとうございました。

生産性と新生活

日本生産性本部専務理事 郷 司 浩 平

「生産性と新生活」というごく一般的な題目で主として会社、企業、こういう組織の中における新生活という観点から、私が平常感じておることを少し申し上げてみたいと思います。

今から10年ぐらい前ですか、これは現在もやっておりますが、新生活運動というのが経済界で提唱されました。これには経団連、日経連、経済同友会、商工会議所、これに工業倶楽部が入りまして、この経済五団体の共同主催のもとに「新生活運動の会」というものが開かれたわけです。

終戦後間もなくのことです。社会のあらゆる面が非常に乱れておった。御多分にもれず企業の中もやはり乱れておりました、このままでは日本の再建はむずかしい。そこで、まず会社、企業の新生活運動を始めようじゃないかという趣旨でこの会が開かれたわけでありました。

ところが今までやってきたことをふり返ってみますと、それほど大した効果は上げておらない。いろいろやりましたが、その大半は会社のごく些末な表面に出たことを是正するというふうないき方でありました。

たとえば、最初にやったのは、葬儀の花輪の廃止ということでありましたが、これは当時非常に目にあまるものがあつたわけでありました。ある大会社の社長の葬儀のときなどは、築地本願寺に花輪が4列、5列に並んでいっぱい立てられ、それを見積らせると4千万円くらいあるだろうというようなこともあつた。こういう無駄なことは一つやめようじゃないか。葬儀という厳粛な場において、人造の大きな花輪を、しかもまん中に大きな字で会社の名前が書いてある。甲意を表しているのか、宣伝をやっているのかわからないようなもので非常に不謹慎であるから、花輪はやめようじゃないかという運動、これはある程度に成功したのでありますが、そのほか時間厳守の問題。これなどは最も卑近な問題であります。会社に限らずあらゆる会合の時間を守るといふこと、時間におくれるといふことは、逆にいうと、人の時間をどろぼうすることなんだ。手持ち不沙汰で待たしておいて、出そろわなければ始めないといふのは、これは自分の都合じやなしに、人の時間を奪うものだという觀念から時間励行といふ問題も取り上げて、これもある程度に成功していると思います。

そのほか夏は開襟シャツでやる。上役のところに行くにも上着なしに開襟シャ

ツのままで行って差しつかえないじやないか、こんなこともやっております。

また最近ではウィーク・デーのゴルフをやめようじやないか、これはいろいろ営業的な理由もありますけれども、しかし人が勤務しているウィーク・デーに会社の自動車などを使ってゴルフをやるということはいかにもだらしがない、不謹慎であるということで、ウィーク・デー・ゴルフ廃止の運動をやっております。

そのほか宴会の簡素化、仲間が楽しんでやる宴会は差しつかえないが、しかし一ぱい飲ませて、そこで商売の話をつけるというような一つの目的を持った宴会は、これは不純であるからやめようじやないか、またやる場合もぜいたくにならぬように簡素にやろうじやないかと、そういうようなこともやって参りましたがどの程度成功していますか。今日でも宴会は一向に衰えない、料理屋はいよいよ繁昌するところを見ますと、あまり成功していないように思われます。

とにかくこういうふうな問題を取り上げてやってきたわけでありまして。私が説明するまでもなくこれらは必要な問題ではあります、しかしごく表面的な、末梢的な新生活運動であったということは皆さんにも印象されると思うのであります。そこで、私もその役員の一員として従来やっておるわけでありまして、こういう過去の経験を顧みましても、小さいことでもこれを実行することはなかなか容易でない。一体どこにそういう原因があるのだろうか。むろん長い間の悪い習慣というものは一朝一夕に改まるものではないのであります、しかしさかのぼって考えてみますと、ただ表面の現象だけとらえてもなかなか解決はつかない。なぜそういうことになったか、その源をつかまなければほんとうに効果を上げることにならないということをつくづく感じるわけでありまして。

そういう点から見ますと、結局今日の会社、銀行その他、まあ役所も政党もそうでありまして、そのあり方に問題がある。今日の会社は、宴会をやったりウィーク・デー・ゴルフをやったりすることは外部から見れば非常に乱れておるという感じを受けますけれども、そういう乱れが当然に起るような仕組みになっておるので、やはりこの源を正さなければ流れの末は清くならないということを感じるのであります。自分の会社の経営を合理化しりっぱなものにして、ほかと競争してだんだんの上がっていくということよりも、むしろ顔をきかして役所なり銀行なり、そういう人たちを説く、あるいは御馳走してうまくやる方が便利である。便利だけでなしにそうした方が経営は繁昌するというふうなそういう社会条件が一つここにある。だからして、いわゆるまじめな企業努力をするよりも、むしろ宴会でもってやった方が手っ取り早い。これは後進国につきものの一つの経済の性格であります。

日本は後進国とはいえない。現在は中進国という言葉を使っております、先

進国と後進国の中間にあるわけであり、欧米の先進国においては、そういう気風が全くないとはいいませんけれども非常に薄くなっており、今日ではやはり企業努力によって競争するという考えになってきている。ところが日本はまだそういう後進性が多分に残っている。明治以来政商というものが日本にありましたが、今日の巨大財閥はほとんど政商といっても差しつかえない。国と結んで利権を獲得するとか、そんなことで太ってきたような伝統があるわけであり、そういう時代にはまじめな企業努力よりも政治的に働くということ、政界なり官界なりにとりいるということの方が重大な問題になってきた。今日ではそういうことはいくぶん薄くはなりましたとはいえ、未だにそういう弊風が残っている。

これは企業と外部との関係だけでなく、企業内部でもそういうことはあるわけであり、あまり実力のない者がトップを占めており、実力でもってトップに上った者ならば、部下を懐柔するのに特別な手段を弄する必要はないのでありますが、実力がないから部下を懐柔するためにいっぱい飲ませる、そこでむだな出費が起ってくる。宴会が繁昌する。下の者が上に習うということは自然でありますので、下もまたそういう宴会政策によって盛んに部下を懐柔したり、あるいは仲間にとりいたり、上役にとりいるというような結果に自然になるわけであり、

従って、どうしてもこの源を正すことが必要なのであります。これは一口に言いますと、要するに会社の経営を近代化するという一言に尽きると思えます。近代化するということは、要するに今日のいろいろな条件に応じた合理的な仕組みに直すということであり、これが私ども生産性運動をやっている一つの目標であり、われわれの生産性向上運動も、広くいえば新生活運動の一つの分野を担当して、こういうふうに見られて差しつかえないと思うのであります。

しからば、近代的な経営というものは一体どういうものか。こういうことをお話しすると、皆様の中には、そんなことはもうとっくにわかっていることだと言われる方もあると思えますが、近代的な経営については暗中模索と申しますか、研究中という方もあると思えますので、こういうことについて御参考のために若干述べてみたいと思えます。

近代的な経営というのは沿革的に、歴史的に見ますと、技術の発達に伴って、その技術をマネージする技法として発展してきているものでありますが、これは日本は非常におくれており、そのために私どもは経営の近代化ということに今非常に力を入れております。技術の方は今日の世界経済においてはパテントで買えるわけですから、技術提携をして、金さえ出せば、最も近代的な外国の技術を買え

る。その技術を金で買って工場に据えつければ、その会社の技術水準はもうその翌日から先進国の会社並みになってくるわけです。だから飛躍ができる。下から一べんに三階に飛び上るということもできないことではないわけであります。ですから、ある程度の技術的な素養がその国民にあれば、つまり、そういう新しい技術をこなすだけの能力さえあれば技術は決しておくれぬ。ただ金が必要というだけであります。

しかし経営の方はそうはいかない。これはいかに外国の経営技術を学んでも、それをすぐにその場で、機械を据えつけるようにこなすわけにいかない。経営ということは、人と人との関係であります。が相手は機械ではなしに、人と人との関係ということになると、そこに非常に複雑な要素ができてくる。人間的な要素、社会的な要素、感情的な要素、そういうむずかしい問題が起きてくる。これを近代化するという事は容易なことではない。

私どもがざっと見ますと、日本の技術は、むしろ中小企業のようなものは別でありますけれども、大企業における技術は大体ヨーロッパ並みにいっておる。先般ゲーテンベルグというドイツの非常に有名な経営学者が日本に参りましてゼミナールを開いたのでありますが、そのときに私が、ドイツに比べて一体日本の技術水準はどうだということを彼に聞きますと、彼はそのゼミナールの間に日本の工場をだいたい見ているわけですが、「いや驚いた、これほど日本の技術が進んでおるとは思わなかった。ドイツあるいはヨーロッパの水準に比べて少しも遜色はない」と彼は言うておりましたが、おせじでなしに実際にそういうことが言えると思います。しかし経営の面では、私どもが見るところでは非常におくれている。まだまだ近代化されておらないということが言えると思うのであります。

ジャン・フラスティエというフランス人の経済学者がございますが、彼がおもしろい分析をしております。それはフランスにヴェルサイユという宮殿があります。ルイ十四世のときでしたかとにかく、2、3百年前に作られたりっぱな宮殿であります。そこにはガラスをたくさん使っている。当時ガラスを使うということは、非常に金のかかる、ぜいたくな建築とされていた。それで、そのヴェルサイユ宮殿の4メートル平方のガラスを作るのに、当時の技術では4万時間の労働時間を必要とした。つまり労働者が4万時間かけなければ一枚のガラスはできない。ところが今日ではそれがわずか2百時間ということになっておる。それから18世紀の終りごろには自転車を1台作るのに4千時間を必要とした。これはあらゆる部品を含めて、それができ上がるまでに要した労働力を計算したのでありますが、それが今日では2百時間に短縮された。アメリカのようにマス・プロダクションをやる国では、これがわずかに80時間というふうに縮っておる。これを

別の言葉でいうと、自転車1台買うのに、60年前には4千時間働かなければならなかった。つまり、1人が1年以上飲まず食わず働らかなければ自転車1台買えなかった。今日ではそれが2百時間、おそらく2カ月も働けば買えるということになったわけであります。これはもちろん技術の進歩がその根本をなしておるわけであります。

それからまた彼が計算しているには、人間が道具を使うようになる以前、つまり産業革命以前においては、ある国の人口を養うためには10人のうち7人までが農耕に従事しなきやならなかった。田を耕し、種をまいて収穫をあげるという労働に従事しなければならなかった。つまり人口の7割が農耕人口であった。ところが今日では、工業国と呼ばれる国では10人に対して大体3人ないし3人半が農耕に従事すればその国の人たちを食べさせることができる。こういうふうに農業が進歩してきた。日本では総人口のうち農耕人口の占める割合は4割4分で、工業国と呼ばれるにはやや寸不足という地位にあるわけでありますが、イギリスなんかはずっと少ないですけれども、ヨーロッパはたいてい3割程度であります。アメリカは今日では1割3分が農耕に従事すれば、あの1億8千万の人口を食べさせていける。のみならず、農業の近代化によって、1割3分の農耕人口ですら農産物を生産し過ぎる。過剰生産で悩んでおる。小麦でもトウモロコシでも綿花でもほとんど全面にわたってアメリカの農産物が過剰であることは御承知の通りであります。それだけ生産力が発達してきておる。

日本の場合の4割4分というのは、必ずしも農業の生産性を代表するものではない。つまり人口過剰という問題があるわけです。よけい人口、労働力をかかえておる。農家の次、三男の問題があるわけです。もっと少くてもできるのに不当に大勢かかえておるので農業人口が非常に多いように見受ける。実際の農業の生産性からいえばそれよりもよほど少いでありましょう。従って、やはり日本も工業国の仲間入りはできると思うのでありますが、人口の上ではそういうふうなことになっておるわけであります。

生産性が非常に変化したのはいうまでもなく第一次産業革命である。アークライトが紡織機を發明し、スティーヴンソンが蒸気機関を發明した。それによって生産的な産業社会というものができ上がったわけでありますが、しかしこれもある技術者の推計によりますと、18世紀に産業革命が行なわれて百年間には、發明が事業化されたのは10年に1回しかなかった。それが19世紀になるとそのテンポが10倍に伸びまして、1年に1回という割合になった。ところが今日ではそれが1日1回という割合になった。むろんこういう推計というのは非常にむずかしいですから、ごくラフな推計であろうと思いますが、大体の趨勢はそんなとこ

るではなかるうかとわれわれにも思われます。今日ではそれほど急速にねずみ算的に、日進月歩という調子で革命の需要化、事業化が行なわれておる。これはわれわれが身近に見受けるごとくであります。それほど今日科学技術は進歩しておる。それぞれの事業化、企業化というものは進んでおる。われわれがこうやって24時間起きたり眠ったりしておる間にも、すでに一つの技術が事業になっておるという勢いがあります。むしろこれは大きな技術の事業化だけをいっているのですが、それほど急速に伸びておる。

ところが、この技術をマネイジする技術、あるいはコントロールする技術というものははなはだおくれしておるわけでありまして。日本はもちろんおくれしておりますが、欧米のようにもっと進んでいる国ですら非常におくれている。今日近代的経営とか、いろいろな複雑な経営技術が紹介されておりますけれども、これですらその最もトップを切っているアメリカでやっとこの数年間激しく変って、そして近代化されておるといふような情勢で、科学技術に比べるとずっとテンポが遅いわけでありまして。

そこで、近代的な経済技術というのは一体どういう発達をしてきているか。昔の事業というものは大体農業中心であります。どの国でも家族労働が中心であった。夜が明けると主人をはじめ妻君、子供みんな野良に出て戸外労働をやる。そして日が暮れるとみんな帰ってきて、家族と一緒に食事をとってだんらんするきわめて素朴な生活であります。むしろその時分の方が今日の複雑な社会よりも幸福であったかもしれませんが、そういう価値の問題は別として、産業発展の段階から必然的にそういう生活様式をとったということでありまして。そういうふうなきわめて素朴な、単純な労働をやっておった。

また工業におきましても、御承知のようにギルド、職人が中心になってやっておった。その時分の経営はきわめて簡単なもので、ヤスリ工ならヤスリ工が徒弟からだんだん親方になって、そして小金をためて今度は自分が経営をやる場合には、何人かの徒弟を雇って自分が親方であり資本家であり経営者となるわけです。そういうふうにして経営をやってきた。たいてい5人か10人ぐらいの工場がありますが、経営管理といったって少しもむずかしいことはない。自分が昔親方にやられた通りをやっていけば大過なくやれたという時代であったわけでありまして。今日ではそれが非常に変わっておる。10万、20万というふうな従業員を擁するマンモス的な企業がだんだん発達してきておるからです。

近代的な経営として第一に現われたのは、いわゆる科学的管理法というものでこれはフレデリック・テイラーというアメリカの人が発見した一つの近代的手法であります。これは今日でも行なわれておりますが、彼はまず煉瓦を積む動作か

ら始めた。今まではめいめいが勝手に煉瓦を積んでおっただけけれども、人によっていろいろな積み方があるし、能率も違う。そこで彼はまずタイム・スタディをした。時間研究であります。こういう姿勢でもって煉瓦を積んだら一体1時間に何個積めるか、姿勢を変えた場合には1時間に何個になるかという時間研究をやった。それとともに作業研究をやった。どういう姿勢で積めば一番能率が上がるか。そういう実験によって、それを発展させてできたのが、いわゆる科学的管理法という近代的手法であります。これは今日でも依然として有名な近代技法になっているわけでありまして。

ところが、これは1900年、つまり20世紀の初頭から1920年代にかけては、これ以外に経営はないというぐらいに世界的にこの経営手法が利用されたのであります。20年もたったところからこの近代的管理法について反省が起ってきた。この反省のきっかけをなしたのがハーバート大学のメイヨーという教授であります。この教授がウエスタン・エレクトリックという有力な電気機械の会社、日本でいえば日立・東芝に相当しますが、その会社のシカゴにあるコーソンという工場での実験をやったのであります。

この実験の動機というのは、フレデリック・テイラーによる科学的管理法は人間を機械の一部にする。機械の歯車に合わせて人間が作業し、働くというのが根本の技法の立て方でありまして、極端に言えば、科学的管理法による労働力というのは人間ではなく手なんです。手だけあれば機械に合わせてやれる、あとは余分なものであるというような思想で裏づけられておった。ところがこれやってみても、労働力として必要な手だけ買うわけにはいかない。その背後には何の何某という1個の人格が控えている。その人格ぐるみ労働力を買わなければ手は買えないという、あたりまえなことではあります。そこに一つの大きな反省が起きた。人間を機械にしぼりつけて単調な流れ作業である狭い部分だけやらせる、きわめて仕事は退屈であります。しかも流れ作業で休む暇もない。労働以外の要素を捨て去らなければ機械にとりついて能率を上げることはできない。ここに矛盾があるのではないか、労働力というのは1個の人間であるという反省が生まれたわけでありまして。

その反省を実験でもって証明しようとしたのが今申し上げましたメイヨー教授でありまして、彼は1923年から24年まで11年間にわたってコーソン工場での実験を始めたのであります。彼は特別の作業場を作って、そこにコーソン工場から女工さんを何名か入れ、一般の作業場とは隔離して実験をやったのであります。

いろいろなことをやっておりますが、たとえば作業時間を短縮してみたい。8時間働いているのを6時間にしてみたところ能率が上がったわけです。それを前の

8時間にもどしてみても、それでも能率は変わらない。今度は10時間にしてみたらそれでも変化がないという一つの結論が出てきた。それから光線をいろいろに変えてみた。非常に明るくしてみると、作業場にいたときよりも能率が上がってきた。今度はようやくこまかい物が見えるくらいの暗さにしてみたが、それでも能率は変わらないという一つの実験の結果が出てきた。そのほか、3時にやるおやつを2時にしてみた、あるいは4時にしてみた。おやつにコーヒーだけ出してもあるいはコーヒーにおかしを添えて出したり、いろいろなこまかい実験をやったわけですが、その実験の結果、さして変化がないという結論に達したのであります。そこでメイヨー教授はあらかじめいろいろな質問の要旨を準備してその女工さん一人一人に詳細に個別面接をやって聞いてみたわけでありまして。そこで彼は、女工さんたちが今まで作業場にいたときよりも実験場に入ったら能率を上げたという一番大きな原因は、この女工さんたち一人一人が、自分たちは大勢の中から選ばれて重要な実験にたずさわっておるという意識、この意識が能率を上げた最大の原因であるという結論に達したわけでありまして。

これと似たような実験がその後もあちこちにありますが、最近私が読んだ本にも、これはイギリスの例で、イギリスの経営者協会がサラリーマンを男女に分けて、あなた方は一体何を希望しているかということをも8項目ぐらいに整理してアンケートをとった答えが紹介されているのであります。これで見ますと、男子の職員で第一に重要視されておるのはやっぱり上役を持つということ、第二が能力に応じて昇進するということが、第三に給料の問題が出ている。われわれは労働者なり職員なりに、とにかく高い給料さえやっておけばそれで満足するというふうな考えがちであります。決してそうじゃない。このアンケートの男子職員の場合、給料が最も重要なことでないことがこれで裏づけられたわけでありまして。さらに女子職員の場合、これは男子とは違って生活にあまり責任がない立場にあるという点もありましようけれども、愉快的な同僚、いい仲間を持つということが第一で、それから順次序列がありまして、給料は第八番目になっているわけなんです。つまり、給料を上げてもらいたいという欲望が一番終りになっている、こういう結果が現われているのであります。

これはやはり今のメイヨーの実験に関連する、一つの示唆を与えているわけでありまして。つまり、人間というもの機械のよには働かないのだ。給料だけで満足するものではないのだ。簡単にいえば、もっと人間的なものがほしいということです。そこからヒューマン・リレーションという新しい経営技術が発生してきたわけでありまして。労働力として扱わないで人間として扱うという、科学的管理法に対する一つの反省であります。経営の秩序としては重役と従業員という上下

の関係があるけれども、人間としては上下の関係はない、5分と5分だ、対等の人格であるという基本観念に立ってやるわけでありまして、ここから新しい技法が生まれてくる。

こういうことを詳しく説明する時間はございませんが、今日ではヒューマン・リレーションということが世界的な経営近代化の大問題になっております。日本でも最近では盛んに研究をされておりました、欧米でも同じであります。彼らは会社の事情を従業員によく知らせる。そして従業員の家庭の事情、彼の属する社会の事情、そういうところまでつまびらかにして人事関係を円滑にしていく。たとえば工員が遅刻してきたときに、家庭の事情を知らないでいきなりどなりつける。「お前はまたおくれた、首だ」というふうなおどしをかける。そうすると彼は一日中不愉快になる、仕事の能率が上がらない。ところが家庭の事情を平素からよく調べて、この工員の妻君が今病気だということがわかる。その病気のためにおくれたということが聞かなくてもわかるから、どなりつけるかわりに、「奥さんの病気はどうだ。少しはいいか」というふうに慰めてやると、この工員はその日一日能率が上がる。簡単な例ですが、そういう一つの手法が生まれてきた。

それから相手を対等の人格として認める。そこにいわゆる権限委譲という問題が起きてきます。今までは社長ワン・マンで、何でもかんでも社長が命令しなければ会社は動かない。工場に便所を設置することまで一々社長の許可を得る。10人や15人の小規模な経営ではそういうことができますけれども、だんだん大きくなるとそういうことは事実上不可能であるから、そこで権限を委譲する。

それから職員の意見を尊重するということがあります。これもある保険会社の実験でありますけれども、従来保険の外交員が外に出るときには部長が一々命令を発して、「お前はどこへ行け、相手とこういふふう折衝してこい」そういうしきたりでやってきた。これに新しい経営手法を入れて、実験的に同じ外交員を二つのグループに分けて、Aのグループは従来通り上司の命令によって動く、命令がなければ動かないというやり方。片方のBグループは、毎朝一定の時間に出勤すると会議を開く。そうするといろいろな意見が出てくる。みんなの意見を聞いた結果、上司が「これが多数の意見だからこれでいこうじゃないか」ということでみんなの同意を得て、そしてみんなが四方に散らばっていく。こういう実験をやったのでありますが、最初のころはBの方が成績が悪かった。つまり、命令によって動く方が成績を上げたわけでありまして。ところが、だんだん時間がたつてくるとBの方の成績がぐんとよくなって、Aの命令によって動く方の成績をはるかに上回った。こういう実験例も調べられております。

そういうふう個人が自分の工夫と創意と、それから自分が上から命令される

のでなしに会社の重要な仕事に参画しているんだという意識が勤労意欲を助長する、そういう結論がそこに現われてきております。今日アメリカなどで最も近代的な経営としていわれておることに、「社長は命令せず」という言葉がある。命令という言葉がだんだんと字引からなくなってきた。そのかわりモチベーション、つまり動機づけるということ、社長は方針を指示して、その実行に当る部下が自発的にその方針に協力するという空気を作ることが一番重要な仕事だ。これをモチベーションというのですが、これもやはりヒューマン・リレーションから発展してきた一つの近代的な技法であります。問題は要するに人間を労働力として見ない。機械として見ない、あくまで人間として見る。こういうところから新しい工夫が営まれつつあるわけでありまして。

それからもう一つの例を申し上げますと、これも最近読んだ例であります、先年日比谷の東宝劇場が火災になったことは御承知の通りであります。ところがその隣りは、今はビルが建っておりますけれども当時は建築中だった。あれはたしか鹿島組でしたかね。それであの東宝の火災のときに、その建築に従事している人夫がその職場を離れて、東宝の火事場に乗り込んでいって人命の救助に当たったわけでありまして。そのときにその建築場の監督がマイクで呼びかけて、お前たちは早く職場に帰れ、よけいな仕事をするなという命令を出したのですが、その命令は聞かれずに人命の救助に当たったという事件があるのであります。一体どっちが正しいのか。人の命が危いというそういう火急の際に職場を離れてそっちへ向うのがいいのか、あるいはあくまで職場を死守するのがいいのか、という一つの問題にぶつかるわけでありまして。こういう場合昔の職制観念では、あくまで自分の職場を守るのがいいのだ。仕事のためには親の死目にも合わないというのがりっぱな経営者であり、あるいは職場の人たちの教訓としていわれておるわけでありまして。自分は一定の報酬で雇われておる。従って与えられた時間だけはその職場を死守しなきゃならぬという掟がある。経営者からいわせると、労働力を一定の賃金で買っておるんだ。従ってその買っておる間だけは命令に服さなきゃならぬ。職場を離れるということは職場の規律をみだすものだという結論であるが、これは非常に狭い。職務という観念からいくと筋が通るのですが、しかし、目の前に人が死にかかっているという場合に、職場を離れて救助するのは当然じゃないか。広い社会的な見地からいえばどうしてもその方に軍配が上がる。しかし昔の経営の観念でいうと、勤務時間中は職場を離れないというのはやっぱり筋が通る。ところがそういう狭い観念ではもはや通用しなくなった。これを近代的な経営技法として、そういう職場だけの規律をフォーマル・オルガニゼーション(形式的組織)、職場を離れた方をインフォーマル・オルガニゼーション

(非形式的組織)という言葉で現わし、いずれも大事だということなんです。

ということは、今の例のように隣りで火事が起こって阿鼻叫喚の声が聞こえるという場合に、かりに職場にいたところで仕事が手につくものじゃない。注意はみんな向こうに向いてしまう。それならいっそ向こうに行った方がいいじゃないかというきわめて社会的な観点からの議論であります。

これは単にそういう非常時の場合だけではない。家に重病人がいる場合に会社を休むということ、あるいはその他いろいろな社会的な約束にしばられます。今日の社会で家庭だけで生活しているなんということはありません。必ず町会とかその他いろいろなものに足をつっ込んでおるし、奥さんですらPTAとか婦人会とか同窓会とかいろいろな社会的な生活をやっておる。そういういろいろな組織に関係しておるということは、やはりそれだけの責任が生ずるということなんです。そういうふうなものが全部総合されて1個の人間が起き上がるので、給料をもらう職場だけの問題ではない。だからそういうソーシャル・ライフ(社会生活)でいろいろな用件があるときにはむしろそっちを先にやれ、そういう場合には会社のことはあと回しでもいい。そのかわり会社でもって最もシリアスな事件が起こったならば会社を優先にしなさいかぬという観念になってきておる。それが行き過ぎてしまって、会社はどうでもいいんだ、ソーシャル・ライフを勝手に楽しめばいいということについては異論があるが、昔のような、自分は会社を買われておるのだという狭い観念から一步出てきておる。

今日のわれわれの社会生活というのは非常に広がりがあるわけでありまして。いろいろな用務も起きてくるし、いろいろ外部の刺激によって心理的動揺もある。そういう場合に会社の勤務オンリーということは、これは人間が感情を持っておる動物である以上は、言うべくしてできないのであります。理屈からいえば、なるほど一定の給料をもらって、いわばその時間は会社に提供しているのでありますから、ほかのことはやれないというのがあたりまえであります。しかし人間の社会が広がったために、機械的に会社にしばりつけてもかえって能率が上がらない。むしろ身の生活の暮らしよくした方が会社の能率も上がるというふうに、だんだんと観念が変ってきているわけでありまして。

そういうところから、最近では社会心理学とか産業心理学が非常に強調されております。人間の存在を分析して、そこから経営の合理化をはかっていく。こういういき方がだんだんと導入されております。日本では心理学者などというものは、大體学校の教授か研究所へでも残るといのが普通であったのであります。アメリカなどでは心理学者は会社にひっぱりだこである。技術家も不足してはいますけれども、優秀な心理学者はなお不足しておりまして、そういう者は高級

をもって会社に雇われている。そして、心理学的な観点から新しい経営技法を研究しておりますが、日本でも最近ではようやく心理学というもの、あるいは精神衛生、メンタル・フェイスというものがだんだんと企業に取り入れられてきておりますけれども、まだまだ幼稚な段階である。これからはだんだん活用されるということになっていくと思います。

最も原始的な人の使い方は鞭と報償の二つであるが、奴隷社会から19世紀ごろに至るまでの長い間は、そういう方式で人を使うということが一つの鉄則であったわけであります。これは一面においては非常にインセント（刺激的）な報酬を出して働かせる。一面においては怠慢を鞭でおどかして働かせるということで、これを近世において最も巧妙に利用したのはソビエトであります。御承知のようにノルマというのがあります。一定の定められた仕事をやらないと給料を減らされる。食事も減らされるというわけで、これは鞭であります。その反面にスタハノフ運動というものがある。あるいは社会主義競争、うんと能率を上げた者には勲章をやる、その上に名誉がある。たとえば勲章を3個もらすと、自分の付属している工場に胸像を建てることになっておる。そのくらいに労働報償は、いわゆるインセントということを極度にやっておる。すべて請負制で、労働の能率においてやっておるということがずっと長い間続いてきた。これは動物を訓練するのと同じやり方なんです。馬やアザラシに芸を仕込むのと同じことをやっておるわけです。えさによって芸を覚えさせる、失敗すると鞭でたたく、あるいは食事をやらないというようなことで彼らに芸を仕込むわけでありますが、それと同じような動物的な手法で長い間人間は使役されてきた。今日ではそういうことは全く笑い話のようになりましたが、事實は、そういうやり方というものは複雑な形でまだまだ広く行なわれておりまして、きわめて旧式な経営であります。近代経営、近代的な人の使い方というのは、さっき申し上げましたように、あくまで相手を人格として尊重する、その自発的な意欲を創意によって働かせる。これが近代的なヒューマン・リレーションというものであります。

さらに最近では労働組合というものが発達してきた。そうすると今度は組合対策が必要になる。これは従業員とはまた違う別個の人格であります。つまり、一人一人の従業員と、一つの利害をもって結びつけられた集団の人格とは性格が違うわけであります。これはいろいろ説明できますけれども、今日の労働運動を見ればきわめて明瞭であります。一人一人はああいふ争議はやらない。集団の力を借りて初めてそれがやれる。ここに一つのヒューマン・リレーションの発展としての技法がある。現在インダストリアル・リレーションという言葉を使っておりますが、そういう技法がある。

これは会社の名前を言っても差しつかえはないと思うのですけれども、十条製紙という製紙会社は皆さん御存じと思いますが、あれは王子製紙から分かれた会社の一つで、非常にりっぱな経営をやっており、株価もすぐれて高い。ここでは終戦以来のことですが一回も争議がない。彼らの組合は総評傘下の紙パルプ労連に参加しておるのですが、にもかかわらずまだ一度も争議をやっていない。お隣りの王子製紙では、御承知のように最近非常に激しい争議をやった。十条製紙は終戦後いち早く近代的な経営管理ということに非常に金も使い、勉強もしたのでありますが、この会社の重役が最も苦心をしたのはやはり労務対策であります。その最初の出発点は、労働組合と従業員とは別だという考え方、従業員対策をもって労働対策とすることはできない、これは全く別個のものであると考える。そこで重役諸公は、従業員対策は従業員対策でがっちりとやる、たとえば職務給その他いろいろな点できわめて合理的な新しい方式をやっておりますが、一方組合対策を別個にやる。そのために、そのためばかりというのは言い過ぎかもしれませんが、お隣りの火災の影響を受けずに今日までやってきた。たいいていの会社は従業員対策と組合対策とをごっちゃにしておる。従業員は、高い給料をもらって愉快に働いておればそれでいいじゃないかというきわめてイージーな考え方がある。ところがあにはからんや、そういうところには非常に深刻な争議が起こっておるのでありまして、それは組合対策を忘れておる、こういうところからインダストリアル・リレーションという新しい技法が発展してきておるわけであります。

こういう例をあげれば幾らでもございますが、近代的経営技法の1、2の例として申し上げたわけであります。要するに、最も能率のいい、しかも清潔な、合理的な職場を確立するということが近代的技法の真髓であります。

経営というのは、一面において利潤追求という一つの約束を持っておるから、利益を上げなければ企業を営む資格はない。利益を上げるということが最も重要な、至上命令であるわけであります。利潤追求という何か資本家の搾取の手段のように考えますけれども、利潤というのはそういうものじゃない。利潤があって初めて分配ができる、りっぱな商品が消費者に分配されるわけであります。もう一つは、従業員の幸福の追求という使命があるわけであります。従業員はその生活を職場に託しているのであるから、できるだけ従業員を幸福にする、愉快に働かせる、後顧の憂いなくやらせるという義務もあるわけであります。昔の経営の考え方は利潤追求オンリーで、従業員は単に利潤追求の手段であるに過ぎなかったのでありますが、今日ではそうじゃない。利潤追求はもちろん大事であるけれども、それと同時に、職場に働いておる共同者である従業員の幸福を実現するのが企業の義務であるという観念に変わってきております。また、そういう愉快

な職場でなければ利潤追求は十分に達成せられない。何も、そういうヒューマンリレーションというものは、人道主義的な立場、あるいは宗教上の問題として起きたわけではない。むしろそういう要素もないとはいえませんが、しかし最大の動機は、社会の変化によって、そういうりっぱな職場を形成しなければ利潤追求もできない、別な言葉でいうと、金もうけのためにはそういう刷新が必要なんだというところからきている。これが一番大きな原因であります。これはとりもなおさず社会の進歩を意味するものである。今日、社会主義か資本主義かなんという論争が依然として行なわれておりますけれども、われわれから見ると、実に愚劣な抽象論であると思います。

せんだってアメリカから4人の学者が参りました。カリフォルニア大学のカー教授とかあるいはダンロップ教授、その他いずれも労使関係の世界的な権威であります。この冬日本に参りまして、労働組合、経営者、学者の諸君とディスカッションをやったことがございます。そのときにこの教授団が出した問題の出し方が非常におもしろい。インダストリアル・リレーション、工業化ということ、これが20世紀の最大の問題である。だから労使問題もこの工業化の観点から取り上げなければ解決はつかない、というのが彼らのアプローチ、問題の提起の仕方です。なるほど、工業化という観点から見ると、アメリカもソビエトもみんな同じ方向を向いているわけです。先進国も後進国もみんなこの工業化の点には非常に大きな関心をもっている。その目標を達成するために先進国は先進国の立場で、後進国は後進国並みに背伸びをしてでもそれを早く実現しようとしておる。こういう問題の取り上げ方をしますと、資本主義か社会主義かという問題は飛んでしまうわけです。資本主義か社会主義かという問題の出し方をしますと、ソ連とアメリカ、あるいは中共と日本というような全くイデオロギーの異なる国は、どちらかが屈服するまでは永遠にまじわらない平行線をたどるわけです。しかし、もし工業化という問題の提起をすれば、ソ連とアメリカとはそんなに変わらないと私は思う。少くとも8分通りは重なり合うんじゃないか。日本と中共だってそうであります。それが問題を不当に観念的に公式的あるいは政治的に取り上げ過ぎているために今日の冷たい世界の問題というものがあるわけです。こういう観点から近代の経営というものはもう一べん再検討しなければならぬと私は思うのであります。

新しい経営ということは、そういうふうに最も近代的な社会に応じた一つの技法、単に企業だけが一個の独立した存在として見ない、社会の一環としての企業として社会的な影響と制約を受けるものとして取り上げていくという技法であります。

日本の雇用は終身雇用とよくいわれます。一度会社に入ると一生涯飼いきれなくなる。会社に忠勤を励むという非常に封建的な観念がありますが、会社はまた忠実に忠勤を励んでいる者はたとい無能であろうと、一生何とかトコロテン式に昇進していく。そこで、必ずしも実力のない者が上に立っていく、実力のある者がいつも冷飯を食って、その会社に不満々である。そこに冒頭に申し上げましたような、いろいろな会社の内部の不愉快な、不潔なことが生まれてくる。これが実力本位の企業に塗りがえられ、職場のいろんな不平不満というものがすべて総合されて経営の管理の中に入ってゆき、その是正が行なわれるということになると、これが近代的な経営であります。最近のオペレーション・リサーチ、リニア・プログラミング、こういう高度の技術的な考え方を導入することが近代的な経営ではない。近代的な経営というのは、たとえば計算機のかわりにソロバンを用いてしようが、要するに、そういうような一つの新しい職場を作るといふ、むしろその精神的な問題に重点があるわけでありませう。

私は今まで財界の新生活運動を手がけた経験からいって、技葉末節をいろいろ是正しようとしてもなかなかこれはむずかしい。やらないよりはましてありますけれども、実効はなかなか出てこない。やはりさかのぼってその源をなす経営自体をもっと近代化し、合理化するのだから、経営の新生活運動というのは十分に実現されないという感を深くするわけでございませう。

× × × ×

問 新生活運動の問題を考える場合に、各会社において問題があるだろうと思うのです。特に中小企業なんか問題があるだろうと思うのですが、非常に労働時間が長い。だから、そういうふうな問題において家庭におよぼす影響だとか、子供におよぼす影響だとか、そういうふうな問題があるだろうと思います。働いておることは非常に束縛を感じておる、そういうような状態が日本の現状じゃないかと思うのです。——18歳未満の人に対しては基準法によって時間の制限がありますが、それ以上の年齢の人でも、少くとも1週間は1回休ませなきやならない。そのためにはこれ以上働かせたら家庭に非常に悪影響をおよぼす。子供が親の顔を見ないとか、そういうふうな問題について、生産性本部の方で何か研究されておるのかどうか、お聞きしたいと思います。

答 中小企業の問題は、根本は大企業に比べて生産性が低いということ、たとえば50人以下のものと1,000人以上の企業を比べますと、50人以下は生産性が半分以下なんです。したがって賃金も約半分です。大企業と競争するには、そういう労働条件でなければ競争できないという一つの仕組みがある。従って根本は中小企業の生産性を上げていくよりしようがない。大企業の生産性を下げると

いうことは無理です。しかし今のそういう実情の中でも改善の余地は多々あると思う。たとえばあるクリーニングの工場ですけれども、労働時間を10時間から8時間に短縮したら能率がかえって2、3割上がったという例がある。とにかくああいう中小企業の親方というのは工員が始終働いてないと御気嫌が悪い。動いていさえすれば御気嫌がいい。仕事があってもなくても忙しそうな顔をしていればよくやっているということになる。ところが実際に調査をしてみると、仕事もないのにボイラーに石炭をくべてやっている。そのために燃料代のロスが非常に多いわけです。ところが8時間にするとみんなつめて一生懸命にやるし、燃料代も安くつく、のみならず生産が上がる実験例が出るわけです。そのほかにも、時間を短縮したためにかえってよくなったという例はいろいろ出ております。名古屋地域においても、名古屋の生産性本部が指導しまして、11時間働いていたのを8時間にした例がある。また割増賃金を本給に繰り入れて、かえって能率が上がったという例もある。だから今のままの条件下でももっともっと改善の余地はあると思います。それというのも、結局労働者というのは家庭もあれば社会もあるという、そういう観点から考えて、さっき言ったようにインフォーマル・オルガニゼーション、フォーマル・オルガニゼーションという関係が是正されてくる余地がある。これは最低賃金もそういうことが言えます。

問 先生のお話を承りますと、結局企業の中の新生活運動というのは、これはやっぱり近代的な経営のやり方だというふうに結論として聞こえたわけなんです。現在私たちが企業等でやる場合には、家庭を中心にやっているわけなんですけれども、私は新生活運動というのはやはり消費規制のような消極的な活動から脱却して、精神的な生活に結びついたところの運動に発展しないといけないというふうに考えてるわけです。そういう場合にやはり企業体ももっと新生活運動を、ただ家庭のいわゆる厚生管理の一環だというのでなしに、実際に職場の中においてそういう新生活運動を伸ばしていく、それが結論としていけば近代的な経営管理ということになると思うのです。そういう点を日本生産性本部なりあるいは財界の人がもっと新生活運動を取り上げていくということ、こういう方向を打ち出してもらえないものだろうかと思うわけです。いかがでしょうか。

答 それは全く同感ですがね。私どもはあまり有力じゃないですけども、一応側面からも新生活運動はしているわけです。これは新生活協会じやなしに財界がやっている新生活運動の会ですが、しかしそれと同時に新生活という立場を離れて、職場を合理化していくという面からわれわれ生産性本部はこの運動をやっているわけです。だから両方相待ってよくなるということを期待しているわけです。

家庭経済と国民経済

朝日新聞社論説委員 土 屋 清

終戦以来、早くも14、5年たちまして、その間に日本経済は、非常な復興、発展ぶりを示して参りました。戦後の日本経済の発展ぶりは、世界の驚異とも言われております。一体、経済の復興あるいは発展というのは、何を尺度にして計るかと申しますと、最近「経済の成長」という言葉が使われておまして、1年間における国民総生産のふえ方をもって、成長の尺度としております。このごろ新聞によく、ことしの成長率は6%である、あるいは7%であるというような言葉が使われますが、その成長率というのは、経済の発展あるいは伸びを示すパーセントでありまして、一年間にどれくらい総生産がふえたか、それをもって尺度としておるのであります。それでは総生産というのは何かと申しますと、これは文字通り一國の全産業が一年間に生み出す物資並びにサービスの合計であります。産業は三つの部門に分かれておまして、まず第一次産業と言われるのが、農林、水産などの原始産業であります。お百姓が米を作る、あるいは漁師が魚をとる、それが第一次産業の生産物になります。第二次産業といわれますのは敏工業でありまして、つまり石炭を掘るとか、あるいは綿布を生産するとか、これが第二次産業の仕事であります。第三次産業と言われるものが、いわゆる広い意味のサービス部門でありまして、銀行業であるとか、あるいは鉄道業であるとか、あるいは料理屋、飲食店、あるいはバー、キャバレーというような純然たる接客業務であるとか、こういうものが第三次産業に属するのであります。この全産業が一年間にどれだけ物資並びにサービスを生み出しているかと申しますと33年度におきまして、大体10兆3千億円というのが、その金額であります。この国民総生産がどの程度伸びているかというのが成長率であります。わが国の場合はこの成長率が非常に高いということが特色でありまして、昭和27年から32年に至る6ヶ年間におきまして、8%見当の平均成長率になっております。平均して毎年8%見当ふえている国というのは、世界にそうございません。たとえば英米はどうかと申しますと、これは生産力は日本よりはるかに大きいのであります。その成長率は3%か4%くらいであります。それからドイツは、大体日本と同じように8%見当でありまして、いわゆる西ドイツの奇跡というような発展を遂げております。共産国家はどうかと申しますと、ソ連が大体10%くらいの成長を目標にして、計画経済を行なっております。しかしこの通りいったかどうかは、必

ずしも明らかではないので、ことしから7カ年計画——従来の5カ年計画を7カ年計画に切りかえました。その7カ年計画の目標は7.7%見当になっておりますが、従来の実績も大体これに近かったのではないかと、そうすると日本の伸びと、あまり変わらないのではないかと、思われます。中共はどうかと申しますと、これもよくわかりませんが、今実施しております5カ年計画の目標が、7.1%ぐらいでありますから、まあこれ以上ということは考えられない。実績はこれ以下ではないかと思われます。そうしますと、世界において、日本はソ連並びに西ドイツと大して変わらない、一流の高い水準の成長を保持していると言えるのであります。その限りにおいて、戦後の日本経済の復興、発展というものば、まことに目ざましいものがあると思うのであります。しかし成長の率はすみやかであります。現在到達しておる水準はどうかと言いますと、これは必ずしもそれほど高いものではないと思えます。伸び方は著しいが、しかしその到達しておる現在の水準を諸外国に比べてみると、決して満足すべき程度ではない。それを比較いたします場合に、平均国民所得というものを使います。この場合の国民所得とは何かと申しますと、先ほど申しました国民総生産から、その生産を維持するのに必要な資本の減耗を差し引いたもの、それが国民所得であります。つまり生産を行なっていくためには、毎年機械その他の資本が減耗いたします。それを補っていかねば、その能力というものが保持できない。ですから減価償却と考えていいのであります。この国民総生産から減価償却分を引いたものが国民所得でありまして、これが全国民に分配されるわけでありまして、その分配が必ずしも平均的には、もちろんいい通りではありません。金持ちは多く受けますし、貧しい人が少ないのはあたりまえであります。一国の到達しておる水準を比較するためには、その全体の国民所得を一人当たりの平均で表わすということが行なわれております。そういたしますと、昨年度におけるわが国の国民所得が大体8兆3千億円、それを9,100万の人口数で割りますと、大ざっぱに申しまして、わが国の平均国民所得は大体9万円だということができます。つまりこれはおじいさんから赤ちゃんまで、全部突っ込んで平均で考えますと、一人1年間に9万円の国民所得がある、こういうことになって参ります。その場合、一体アメリカはどのくらいかと申しますと、大体日本の10倍、約80万円、イギリスが日本の5倍、50万円、ドイツが日本の3倍、30万円というくらいの高さでありまして、ごく大ざっぱに言っても、日本はアメリカの10分の1、イギリスの5分の1、ドイツの3分の1の平均国民所得だというわけでありまして、ですから経済は年々大きな速度で成長はしておるけれども、その到達しておる水準はアメリカに比べれば、まだまだはるかに及ばない、こういう状態でありまして、現状をもって満足すべきものとは、まだ言え

ないのであります。

この平均国民所得が、日本がアメリカの約10分の1だということは、直ちに日本の生活水準がアメリカの10分の1だということにはなりません。それはなぜかと申しますと、生活様式が違うからであります。わが国では、たとえば朝飯をどういふふうに食べるか——まあごく簡単な形で言えば、味噌汁とたくわんという程度の朝飯ですが、それがアメリカであれば、パンとコーヒーと牛乳、それに卵くらいは一つつけるということになると、同じ朝飯をとるにしても、その生活様式から言って、アメリカの方がかなり支出がかさむわけであります。ですからアメリカは所得が多いけれども、その支出がよけい出るということから考えて、その所得の違いほど、生活水準というものは開いていない。あるいはアメリカの国民生活においては自動車が必要品であって、1軒に1台の自動車がある。自動車がなければ普通の国民生活というものは営めない。わが国の場合は、1軒に1台どころか、大体600人に1台しか自動車を持っていない。その1台というのも、自家用ではなくて、大体会社の車、役所の車というのが多いのでございますから日本の普通の国民生活を営んでいく場合には、アメリカほど金がかからない、こういうことになって参ります。ですから所得水準が開いているほど、生活水準は開いていないのであります。しかし、ともかく日本とアメリカ、あるいはイギリス、ドイツとの間には、まだ相当の開きがあるということは明らかでありまして、今後この開きを埋めるように、つまり国民所得を高めていくという努力がどうしても必要になってくるわけであります。

しかし、このようにまだ外国に比べれば、日本の所得水準が低いといいたしましても、ともかく戦前に比べれば、かなりよくなっておるということは、大体明らかになりました。所得水準が次第に向上した結果として、国民の消費水準はどうなっているかといえますと、都市の場合は、戦前、つまり昭和9年から11年に比べまして、昨年は26.4%ぐらい高くなっております。これは物価指数の変動を除きました比較であります。都会の消費水準はすでに戦前に対して約3割近く高くなっておる。農村はどうかと申しますと、これよりもっと消費水準が高くなって、戦前に対して39.1%、約4割の消費生活の向上になっているのであります。ですから外国に比べれば、まだまだ日本の所得は少いけれども、すでに戦前に比べると、私たちの生活はかなり上ってきておる。特に消費生活に見る限りにおいては、戦前をはるかに上回るところまで回復している。これは結局国民総生産の成長が年々大幅であったということの結果であります。ところが戦前に比べて、今日私たちの生活水準あるいは消費水準が上回っているということを申しますと、どうも自分はそうは思わない、戦前の方がよかった、まだ自分たちの生活は

何か戦前に及ばないのだ、こういふふうに抗議される方が、必ず出て参ります。戦前はもっと楽だった、今の方が戦前よりいいということは、どうも自分の実感としては考えられない、こういふ人が必ず出て参ります。あなた方の中にもいらっしやると思います。しかし統計的に見れば、明らかに都市も農村もよくなっている。それにもかかわらず、私たちの実感としては、そうは思えない。これはどこに原因があるのかと申しますと、第一に今の数字から明らかなように、都会の方はそれほどよくなるが、農村の方は非常によくなった、これが一つ、大きな理由であります。今のべたようなことをおっしやる方は、大体都会の人が多いのです。都会の人は、確かによくなったけれども、それほど大きくはない。ところが農村の方は、はるかによくなっている。つまり全体として見れば、農村の人口は多いのですから、農村が非常によくなっただけ、平均的にはよくなっているわけですが、都会の人については、それほどよくなり方が大きくない。それは一つ実感として、そんなに暮しが楽になったとは思えないという声が出てくる理由であります。第二に、今の生活がそれほど戦前に比べて豊かでないというのは、生活上のストックが非常に乏しくなっている、つまり薄手の生活になっているということであり、戦前であれば、自分の住宅を持っている人も多かった。そしてうちの中のたんすをあけてみれば、奥さんの嫁入りのときに持参した晴れ着が、10枚か20枚か入っておる。洋服だんすには、御主人の洋服の着がえが5、6着はあったという形で、そういうストックが相当保有されておった。ところが戦後はどうかと申しますと、住宅事情が悪くなって、自分のうちに住むということは、なかなかできない。それから奥さんの晴れ着も、終戦直後のあの闇生活をやった時代に、大体お米に化けてしまって、乏しくなっておる。御主人の洋服も着たきりすずめて、着がえの2、3着はあるけれども、戦前のようにたっぷりストックがあるというわけにはいかない。年々の所得は戦前よりふえてきて消費生活そのものは上っているが、その生活の基礎になるストックそのものが貧しい。だから毎日日々暮しても、何だか戦前に比べて豊かでない、こういふ感じになっておる。これが戦前よりはどうも実感としては、まだよくなっているようには思われぬ第二の理由だと思います。まあいろいろな理由はございますけれども、ともかく戦後の経済の成長によりまして、私たちの生活が年々よくなって、今日の水準というものが戦前より数字的には確かに向上しておるということは、認めなければならないところではないかと思います。

ところで、今国民の消費水準ということをお話しいたしましたが、消費というものが経済生活の中で占める位置というのは、非常に重要であります。経済活動というものはいろいろな形でなわれまますけれども、最終的には国民の消費生活

を豊かにするというのが、その最大の目的であります。経済の目的というのはたとえば大砲を作って軍備を充実するとか、あるいは政府が金を出して道路を直すとか、あるいは工場が機械を作って建設を行なうとか、いろいろな形でもって行われるのでありますけれども、突き詰めていくと、それは結局、国民の消費生活を充実させるということに関係してくるのであります。道路を作るのは、道路を作ることによって国民が安心して往来できるようにする、つまり最後は国民の生活に結びつくわけです。軍需会社が砲を作るのは、国民の生活に何も関係がないように考えられがちであります、それによって外敵の侵入を防いで、国民の消費生活を安全にするということで、結局最後はやはり国民の生活に結びつくのであります。また生産会社が工場を建てたり機械を注文したりする、これも国民の生活には直接関係がないようではありますけれども、その会社が工場を建てたり機械を作ったりするということは、それによって物資を作り、その物資が最終的には国民の消費に役立つ、こういうことがねらいであります。従って国民の消費というものが、経済において占める地位というものは、非常に大きいのであります。直接国民の消費にどれだけの金が投ぜられておるかと申しますと、先ほど申しました10兆3千億の国民総生産のうち、消費に向けられておりますのが、大体6兆2千億くらいであります。ですから総生産の6割は、直接消費に使われておる。残りの4割も、何らかの形において——先ほど申しましたように、道路を作ったり大砲を作ったり、いろいろな形をとっておりますが、間接的に消費生活に関連があるのです。そして国民総生産の6割というものは、直接消費に向けられておる。いかに消費というものが経済の中で大きな地位を占めるかということが、これでうかがわれるわけでありまして。消費は一人々々について見ると、必ずしも多くはありません。ところが人口は何しろ9千万でありますから、その9千万の一人々々が消費をするということになると、金額としては非常に大きくなって、6兆という巨額な金になっておる。従って消費が盛んになれば、それだけ需要がふえますから、経済活動は活発になる。これがまた消費が盛んになり過ぎると、またそこに問題が起こる可能性がございますけれども、しかし消費が盛んであるということは、一応それだけをとってみると、国民の生活が豊かになる。そうしてそれだけ経済が活発になるということで、決して悪いことではございません。経済の目的というものが、国民の生活を豊かにするということにあるとするならば、消費生活が充実してくるということは、決して悪いことではないように思うのであります。

ところが、消費が盛んになるのはけっこうだといたしまして、問題はその消費が合理的に行なわれ、そうしてより大きな生活上の効果をあげるということにあ

るように思います。消費はけっこうだからといって、どの消費も同じ重要性をもって認められるのではないのであって、6兆という消費が行なわれるならば、その消費がそれぞれ生活に大きな寄与をするような形において使われるということが、一番望ましいのであります。その意味においては、消費生活のバランスということが、私は重要である、消費の大きいことがけっこうなばかりではないので、消費の内容においてバランスがとれておることが大事だと思います。ところが、この点が一番むずかしいところでありまして、私どもの消費生活を見てみると、必ずしも私は、そのバランスがとれているようには思えない面が多いと思います。たとえば、今日国民消費の中心は何かと申しますと、いわゆる家庭電化を中心にした消費物資であります。電気冷蔵庫、テレビ、あるいは電気洗濯機、三種の神器と称せられるものが、国民消費の中心になってきておる。現在の消費生活の中心というものは、もうすでに食糧や繊維ではございません。終戦直後であれば、私どもの消費生活の中心は食糧でありました。終戦直後から昭和23、4年ごろまでは、金が入れば国民はせっせと食糧を買った。つまり米を一俵買い入れるとか、あるいは農村に行っておいもをかついでくるというようなことをやった。何しろ腹が一ぱいにならないものですから、消費の中心は食糧に置かれていたのです。その時代は昭和23、4年ごろまでで、それから次の段階は繊維が中心であります。戦争中に繊維をなくしてしまっただけで、ダンスもからっぽになった。洋服ダンスもさびしくなった。そこで金が入ったら、食糧は満たされたのだから繊維を充実しようということで、昭和27、8年ごろまでは、消費の中心が繊維に向かいました。そこに繊維ブームが生じまして、紡績会社、あるいは羊毛会社は非常な利潤を上げたのであります。しかし繊維も一通り間に合うようになれば、あまり消費の対象として大きなふえ方はしなくなりました。昭和28年ごろから今日にかけて、国民消費の中心になっているのが、今申しました家庭電化といわれるものであります。家庭電化ということは、これは家庭の消費生活にとって、非常に重要な意味が私はあると思います。それ自体は大へんけっこうなことだと思います。家庭が電化されて、たとえば電気洗濯機が普及する。今日では都会ばかりではなく、農村にも電気洗濯機が非常に使われるようになりました。洗濯というのは、私は婦人の労働のうちで、かなり重労働だと思うのです。日本の婦人が洗濯をするときには、どうも中腰になりやすい。すわってやるわけにいかない。突っ立ったままやれない。中腰でやるので、それがかなり肉体的な負担になっていたと思うし、時間も非常に費した。何しろ毎日々々やらなければなりませんから、これは相当家庭労働としては重い仕事であったと思います。ところが電気洗濯機が普及するようになると、その負担が軽減される。つまり汚れたものを洗濯

機に入れてスイッチを入れれば、10分か20分鼻歌を歌って、テレビでも見ていれば、その間に洗濯ができてしまう。ごしごしと洗濯板をこすようなことを中腰でやらなくてもいいのですから、その意味では婦人の家庭労働の大きな軽減になるわけであります。家庭生活の一種の革命が、そこから生ずる。それがさらにテレビということになると、今度は家庭の娯楽生活の大革命であります。どこの家庭でも、テレビがあると子どもさんが勉強しなくなる。そういう悩みが聞かされる。それは私どもでも、夜おそく帰ってテレビがあると、やはりテレビを見てしまう。テレビがない時代には本でもひもといて読んだのが、どうもテレビがあると、テレビに関心が吸いつけられてしまう。そういう娯楽生活の大きな変化が起こった。そういうふうな、家庭電化の進展ということは、私どもの生活にとっては非常に重要な意味を持つもので、これが普及するということは、それ自体は決して悪いことではない。ただしかし、それがバランスがとれて行なわれているかどうか。ほかの消費と比べて、もっとほかの消費で充実すべきものがありはしないかということが問題であります。

たとえば農村について申しますと、農村でもこのごろは電気洗濯機が非常にやって参りました。どこの家庭でも、ちょっとした農家になると、電気洗濯機を使っている。確かに農村で電気洗濯機を使えばけっこうに違いないが、しかし農家の消費生活を考えると、電気洗濯機の前に、もっとやらなければならぬ、金を投じなければならぬ部面があるのではないか。まず考えられることは、かまどの改良です。農家の炊事というのは、非常に燃料をよけい費す。このかまどをもっと合理的なものにするということは、洗濯も大事だけれども、もっと取り上げてみなければならない。あるいは農家の炊事場、流し場なんというのを見ますと大体北側の日の当たらない、じめじめしたところに台所があって、そこで一日の食糧が調理される。電気洗濯機も必要だけれども、もっともっと私たちの日常の食べものを作る場所は、明るい清潔なあたたかい場所にしなければいけない。そういう台所の改良とか、あるいはかまどの改良ということは忘れられて、電気洗濯機がまずはやる。さらに農家の便所になりますと、依然として今日きわめて原始的な、太古そのままのような便所が農村には多い。それはちっともかまわないうで、テレビの方をどんどん入れるということになりますと、同じ金をかけるにしても、その使い方にバランスがとれていない、こういうような感じがするわけがあります。都会の消費生活にしても、この点は変わりません。このごろでは都会でテレビが非常に普及しておる。それはそれだけの生活上のプラスがあると私は思う。ところが同じ何万という金をかけるならば、まだやらなければならぬことがありはしないか。たとえば都会の便所の問題、テレビを見てみんな喜んでいるの

はいけれども、便所のおいをぶんぶんさしておる。非常に非衛生だ。もっと便所のようなものを改良することに、まず金を使うことが大事じゃないか。しかしそういうことよりは、新しいテレビを買うというふうな消費が盛んになってきておる。そういう矛盾と申しますか、バランスのとれないことが、問題であります。そういう新しい消費に飛びつくというのは、デモンストレーション効果ということの現われであります。

何と申しますか、誇示する、つまりテレビや電気洗濯機を持っておるぞというデモンストレーションの心理的な効果で、お隣のうちがテレビを置いたら、何かうちにないかと恥ずかしい、こういう心理的な影響があって、ほんとうに消費生活の合理性を貫くということではなしに、そういうものが普及し、発展していく、こういう傾向がある。たとえば農村などでは、洗濯機をめいめいのうちがでんと据えつける必要があるのか、私はないと思います。これこそ10軒くらいで1台の洗濯機でも間に合う。家が離れていますから、なかなかそういう工合にはいかないでしょうけれども、やり方によっては洗濯機をめいめいのうちが持たないで、5軒か10軒のうちが共同して1台の電気洗濯機を買って使って、初めてほんとうの合理性が貫かれると思うのですけれども、そうではなくて、あそこうちが買ったから、うちも買わなければ恥ずかしい、それはデモンストレーションなのですね。これを助長するのが、マスコミの威力であります。新聞社も責任があるのですけれども、毎日の新聞を見てみると、これ見よがしに電気洗濯機やテレビの広告が出ている。何か買わなければ悪いような、追い立てられるような気持で、ない金を都合してテレビを買ったりする、これがマスコミの一つの威力であります。そういう形で、消費者の心理として、デモンストレーションの効果があり、他方においてマスコミという売り手の方の武器がありますから、ともすれば私たちの消費生活というものがバランスを失って合理性を貫き得ないということが問題であります。消費がふえるということは、国民生活の向上であります、その消費というものは、おのおのの収入と生活状態に即応した、合理的なものでなければならぬということが、最近の消費状況から見た一つの教訓であります。

このように消費というものは経済の発展に非常に重要なものであり、また生活の充実ということに直接関係してくるものであります、しかし消費の裏側が貯蓄であります。私どもの所得は、一方においては消費という形で支出され、一方においては貯蓄という形で保有され、この二つの部分に分割されます。従って消費がふえることは望ましいが、消費があまりふえ過ぎると貯蓄は伸びない結果になります。なお、こまかく申しますと、その所得のうちで税金が先に差し引かれる。ですから消費と貯蓄に分割されるのは、所得のうちから税金を引いたあとの

所得、いわゆる可処分所得であります。いずれにいたしましても消費がふえれば貯蓄が減る。貯蓄がふえれば消費が減る、こういう関係になっている。私どもは消費がふえることが私たちの生活が豊かになるということで、とかく消費に走りやすい。しかし、消費があまり行き過ぎますと貯蓄はどうしても減ってくる。そこに今度は消費の中でバランスをとることが大事であるのと同様に、消費と貯蓄の間のバランスをとることが一つの重大な問題になってくるのであります。

どうして貯蓄が重大か、それは消費は直接日々の生活を豊かにするものでありますけれども、私どもの社会生活を営んでいく上においては、前途に対して備える準備がなければならない。それはたとえば病気になるという場合もありましょうし、あるいは災害が来て家がふっ飛ばされるというようなことでもありましょう。そういう不時の予想される事態に対して備えるということが生活上の心がけでなければいけない。そのための準備が、つまり貯蓄であります。

しかもそういう個人生活において貯蓄が重要であるばかりではなく、この貯蓄が直ちに国民経済の成長のための重要な条件であります。貯蓄された金はどうなるか、これは郵便局とか銀行とかに持っていかれたまま、そのまま眠っているわけではございません。郵便局に集まった金も銀行に集まった金も、結局産業に投資されまして、そこで産業の拡大に使われる。つまり工場を建てる、機械を新しくする、その金はどうするか、これは会社がみずから貯めるということもございしますが、しかし、多くの金は銀行から借りてくる、あるいは政府から借りてくる。その金の元はどうかというと、結局郵便局あるいは銀行に国民が預けた金が流れていくわけでありまして。経済が成長していくためには、設備が投資されなければだめであります。投資が行なわれて設備がふえてこなければ経済は成長しない。経済が成長してくるというのは生産能力がふえなければいけない。その生産能力がふえるためには工場が建てられ、機械がどんどんふえるという形になっていかなければならない。それに必要な金はどうして得るか、結局それは銀行なり郵便局なりにわれわれが貯蓄した金が投資される。そういたしますと、貯蓄ということは一面において個人生活の備えであるとともに、国民経済的には経済の成長を可能にする投資の前提である。この二重の意味において、貯蓄ということは非常に重要であります。

従って消費はけっこうだ。消費がふえることが生活を豊かにし、経済を盛んにすることだと申しましたが、消費があまり行き過ぎてしまって貯蓄が行なわれないということになりますと、個人生活にとっても、あるいは国民経済にとってもそれはマイナスにならざるを得ない。そこで消費と貯蓄とのバランスをどうとっていくかということが経済上の大問題になってくるわけでありまして。私たちが自

分の消費の欲望を満足させるのはいい。テレビも買い、電気洗濯機も買う。だからといって全部収入を使ってしまったのでは、その人の生活の安全が保障されないばかりでなく、一国の経済の成長も阻害される、こういう形になってくる。

ところが、幸いなことには日本人の貯蓄というのは非常に率が高いのであります。大体税金を払ったあとの可処分所得、そのうち幾らが貯蓄に向けられているかと申しますと、わが国においては大体15,6%が貯蓄に向けられております。つまり税金を払ったあとに年百万円の所得がある場合に、そのうち16,7万円は貯蓄される。そういう数字が平均的な数字であります。もっと、人によっては爪に油をとぼすような思いをして30万円もためるような人もあるでしょう。あるいは浪費家でもって3,4万しかためない人があるかもしれない。けれども大体において15,6万円の貯蓄をするというのが日本人の貯蓄の傾向であります。これを貯蓄性向と呼んでおります。

外国に比べてどうかと申しますと、外国の貯蓄性向は日本よりはるかに低く、大体7,8%である。アメリカあたりでは7,8%であります。欧州諸国で10%程度であります。日本の半分しかないのです。つまり年に10万ドルの所得があるとして、そのうち7,8千ドルくらいを貯蓄するという程度である。日本人から見るとはるかに貯蓄率が低い。この日本の貯蓄率が高いということが、従って日本の経済成長を高くしている大きな理由だということがここでわかってくる。つまり貯蓄されたその金がなければ、成長しようにも伸びられない。ところが、日本人は外国人から見ると2倍くらいの高い貯蓄性向を持っておって、入った金をできるだけ貯蓄に向けておるといふ傾向がある。これが経済成長を支えている大きな一つの波になっているわけであります。

ではなぜ一体貯蓄性向が高いかということですが、私は貯蓄性向が高いということは、人間として非常に高尚なことだと実は思っているのです。つまり貯蓄をしない人、あるいは貯蓄率が低い国民というのは、日本人に比べれば非常に低級だというふうに考えております。

というのは、先般私は九州の別府の近くの高崎山というところで猿を見てきたのです。御承知の方もあると思いますが、あそこには火野葦平の「ただいま零匹」という小説にあるように野生の猿を5,6百匹飼って見物させている。あれを考えたのは市長さんなのですが、その市長さんに御馳走になって一晩いろいろ猿の話聞いて大へん面白かったのですが、そのとき、この市長さんに、「あなたは毎日猿を見ているけれども、何か猿と人間とで違っているところはないか」と質問を出しました。そうしたら、その市長さんはしばらく考えておりましたが、「猿と人間とは三つ違うところがある」3本毛が少ないとは申しませんでした。

(笑声) どういう点が違っているかと申しますと、「第一に、人間と猿の違うところは、人間は家を作りたがるが、猿は家を作らない」なるほど猿の家というのは聞いたことがない。ああいう利口な動物ですけれども、岩の陰とか木の枝の茂みに体を隠すだけで、材木で家を建てるという智恵はない。ところが、人間はちよつと金がたまるとすぐに家を建てたがる。これが違う第一点だということです。

第二は、これはちよつと言にくいのですけれども「猿は非常に清潔で、交尾期が12月の中旬から1月の中旬まで、1年に1回しかない」どうも動物のほうが少し人間より高尚のようでございます。

第三に違うところは、これが非常に気に入ったのですが、「猿は貯蓄をしない」というのです。これはどういうことかと申しますと、野生の猿を呼び寄せるために、リンゴのあるときには毎日リンゴを餌にしてまく。猿はそれがあるから山から出てくる。ところが、猿はそのリンゴを腹一ぱい食べると、あとに幾ら残っておっても、それを持って帰ってためておこうという気がない。食べただけで、あとは全部置いて、また山に帰って行く。あくる日はまた餌を探しに出てきて、腹一ぱいになると帰って行く。だから毎日々々食糧の獲得だけに追われて、家を建てるひまもなければ、テレビを見る時間も出てこない。だから猿の歴史は何10万年経つかしりませんが、猿はやはり猿で、猿は高尚にならない。猿がほんとうに利口ならば貯蓄を考えるわけです。きようは腹一ぱい食べたがここにリンゴが残っている。これを持って帰って、あしたは餌を探しに行く時間を節約しよう。そしてその時間でもって家でも建てようとか、あるいは何か本でも読もうとか、いろいろ工夫がありますと、そこに生活の発展というものがある。毎日々々貯蓄をしないから食糧を探すことばかりに追われている。だから猿の社会には進歩がないのであります。これは経済の根本に触れている問題であります。

皆さんはロビンソン・クルーソーというイギリスのデフォーが書いた話を御存じでしょう。これは日本では子供の読み物になっておりますが、実はあれは子供の読み物ではなく、孤島に漂流したロビンソン・クルーソーがいかにして人間らしい生活をするようになったかという。りっぱな大人の読み物なのです。私はロビンソン・クルーソーは昔読んだのでよく覚えていないのですけれども、最初は毎日々々食物を探すことばかりに追われるのですが、それではいつになっても家も建てられない、衣服を織ることもできない。そこでフライデーという野蛮人の従卒と一緒にまず食糧を貯蓄することを始めたのです。貯蓄があれば、しばらくは食糧を探しに行かなくてもいい。そこでその時間を利用して家を建て、屋根をふき、だんだんと時間をよけい作って次第に着物を織るようになって、文明に近い生活になってきた。これが経済の根本なんです。

猿は毎日食べるだけで貯蓄しませんから、いつになっても進歩が見られない。ですから、貯蓄するということは人間の特性なんです。貯蓄しない人は猿に近い。貯蓄をする率が高ければ高いほど人間としては高級品で、日本人はその意味において大いに高級品だというふうにわれわれは確信を得たわけでありませう。

しかし、そうは申しまして、日本人の貯蓄というのには、一つは生活に追いつかれて、貯蓄でもしておかないと先行きどうなるかわからないという不安があるという面もあります。外国では社会保障が充実しておいて、病気になるっても、あるいは未亡人になっても、老人になっても国が面倒を見てくれる。それが日本ではないから銘々に貯蓄しなければならないのだ、こういう面もたしかにあります。

それともう一つは、日本人の基本的な考え方、あるいは行き方というのが、どうも二宮尊徳先生の哲学的なものが非常にあるのではないかと。つまり、働くこと自体が人生の目的だという考え方です。これがお互いの考え方の根本にある。つまり、働け働け。よくおれは働くことが趣味だという人がいます。そういうことをいうと外国では笑われます。働くことは趣味でもなければ、目的でもないのです。働くことは手段なんです。人生の目的は、一たびこの世に生を受けた以上は、いかにしてその長からざる将来を楽しく送るか。人生は楽しむためにあるのだ、これが大体欧米の人の考え方の基本だと思っております。おれは楽しむために生きているのだ、しかし、楽しむためには金が入らなければならない、その金を得るためにやむを得ず働くのだ、それが欧米流の人生哲学だと思っております。

ところが、日本人は働け働け、働くことが人生の目的だという二宮尊徳流の哲学が日本人の流儀です。そういうところから貯蓄率が高いという現象になっている。この点になりますと、私は貯蓄心が強いのは高級の人間だと申しましたが、日本人のようにむちやくちやに働くことだけが目的だ、人生を楽しむという感じがないということについては、いささか異論がある。やはり考え方としてみると人生は楽しむためにあるのだと思います。反対する人もあるかもしれませんが、私はそう思う。やはり欧米流の長からざる生涯であるから、できるだけ楽しみたいというほうが、何か生き方としては高尚である。

ただしかし、今の日本のように多くの人口を抱えて狭い国土で生きていくということになる、ただ楽しむのだ、楽しむのだといっていたのでは、それこそみんな首をくくらなければならないようになるから、そういう理屈は通用しないけれども、態度としてはやはり楽しむことが基本で、その楽しむがために働いて稼ぐのだということだと思っております。ところが、日本ではそういうことをいっているゆとりが今はない。しかも本質的に勤労精神が強く、それが貯蓄心となって現わ

れている。

もっとも金がかからない楽しみというものはないことはない。たとえば俳句を作るとか、坐禅を組むとか、そういう楽しみがある。昔の日本人は、生活が貧しかったので、そういう楽しみ方をいろいろ工夫したのだと思います。たとえば狭い裏長屋で、3尺四方の空地に盆栽を置いて楽しむ。あるいは風鈴を置いて楽しむ。これは日本人の行き方です。そういう金を使わないで楽しむという術を工夫すれば、働け働けという哲学と貯蓄するということが矛盾なく結合されるのですが、どうも今のように生活が派手に多角化して参りますと、金を使わないで楽しむということはなかなかできない。ちょっとお茶を飲みに行っても、コーヒー代を2人で100円以上とられる。あるいは旅行するということになる、自動車代や汽車賃がかさんでくる。外国人は何が一番楽しみかということそれは旅行です。その旅行も汽車旅行よりも汽船、それよりも自動車、飛行機というようになっている。だから楽しむということが直ちに支出の増大となって、貯蓄率は日本より低い。日本のほうは楽しむということより働けという気持が強い。その働くということは、同時に遊ぶための金を比較的費さないという結果になって、貯蓄率が高いという現象を生じているのであります。

しかし、いろんなことを申しましたけれども、私は貯蓄率が高いのは、概して高級な人間だ、ですから、この高い貯蓄率を何とかそう下げないで持っていくということがやはり必要だと思うのです。日本の経済は成長していかなければならない。成長するためには金が要る。その金は貯蓄が生み出すよりほかはないのです。そういうことになる、まだまだ英米の水準に比べれば日本人の国民所得は10分の1、5分の1というくらい低いのですから、英米に近いところまでだんだんに持って行って、それだけ私たちの生活を上げていくことが必要だとすれば、この日本人の貯蓄率の高さを急激に下げないように持っていくことが必要ではないかと思えます。

今申しましたように経済が成長するためには金があって、その金で必要な設備を作っていかなければ経済は伸びない。設備がふえないと経済は成長できない。その設備投資ができるような貯蓄の支えがあるということが、日本の強味だと思うのであります。

それともう一つ、経済が成長していくために重要な条件として輸出が伸びていかなければならないということも忘れてはならない点であります。というのは、今申しましたように経済が伸びるためには、いろんな設備を作り、工場を建てなければいけない。あるいは経済が成長するにつれて国民の消費がふえ、いろんな物資の生産が行なわれる。その物資の生産がふえるという場合に、わが国の場合

はどうしても原料材料を外国から買わなければならないという宿命がございます。総生産がふえていけば、生産がふえるのに応じて原料材料がよけい要る。ところが、わが国は国土が狭いためにその資源を国内で供給することができない。わが国の工業原料の7割は外国から買っております。

たとえば皆さんの着ていらっしゃる洋服の原料の羊毛は、国内の生産は零です。全部外国から買わなければならない。食糧にしたって、食糧の大体2割は外国から輸入している。綿製品にする綿花はどうか、綿花は全部外国から輸入です。そういうふうに総生産がふえれば綿花がよけい要り、羊毛がよけい要る。それは当然輸入の増大になって現われてくる。あるいは工場を建てるということになれば、鉄鋼が必要だ。その鉄鋼の原料の鉄鉱石はどうか、これも外国から輸入する。また鉄鋼の生産に必要な石炭も外国から買わなければならないということになりますから、経済の成長につれて、どうしても輸入がふえる、これが日本の宿命であります。

ところが、輸入するためには、その反対に輸出をして、金を稼いで、その外貨で輸入するほかはないのであります。私どもが綿を買い、羊毛を買うという場合に国内で貯金をして、日本の円でためたからそれで買えるでしょうか。円を持って行ったら売ってはいけません。国内で貯蓄しなければ工場は建たない。資金の面ではそうです。しかし、その工場を建てる原料をどうして確保するかという問題になると円ではだめなんです。その円がドルとかポンドとかいう外貨もしくは金の形で与えられなければできない。そのドルとかポンドあるいは金といったようなものは、輸出によってかせぐほかはない。

ですから経済の成長を可能にするためには、一方において貯蓄がふえることが資金面の一本の足です。もう一本の足は、物資面においては輸出が伸びて、それによって外国の原材料を確保する。この貯蓄と輸出が経済の成長の大きな柱になってくるわけでありまして。これは明治以来日本のとってきたコースであります。明治以来何で一体日本は輸出原料をまかなったか、一番最初は生糸です。生糸は国内で生産される。その生糸を輸出して、その生糸の輸出代金でもって戦前から必要とした大砲や軍艦を作る鉄なんかを輸入したわけです。戦前の輸出の5割は生糸であった。戦後は生糸がだんだんだめになって参りまして、いろんな新しいものがそれにかわって輸出されるようになりました。そういうように輸出を確保するということは、どうしても日本の経済的な発展のために必要である。この輸出をふやすためにはどうしたらいいかということが日本の大きな問題であります。

日本は国内の市場だけではやっていけない。結局海外に市場を求めて輸出をしていかなければ国内の経済の発展、私たちの生活の向上ができないという立場に

置かれている。その輸出を伸ばすためにはいろんなことを考えなければなりません、何よりも大事なことは日本の商品を安くする、コストを引き下げることです。高いものでは輸出はできない。中共だろうが、インドだろうがアメリカだろうが、日本の商品が高かったら、高いものを喜んで買ってやろうとは言わない。どうしても輸出ができるためには、日本の商品コストを引き下げること努力しなければいけない。商品コストを引き下げることになると、日本の産業の合理化、生産性の引き上げということが大きな問題になって参ります。むだを省く、合理的な経営を行なう、そして生産性を高めていくということが、日本の商品を安くする、つまり輸出を可能にする根本の問題であります。

そこに日本の賃金水準ということが一つの大きな問題になってくる理由があります。賃金は高ければ高いほど、それだけ国民の所得としてはいいわけです。賃金があがれば、それだけ所得がふえ、生活が豊かになる。だから労働組合が中心になって賃上げ運動が絶えず行なわれる。ところが、その賃上げはけっこうだが賃金が上れば、商品のコストに響く場合がある。商品のコストが上がれば輸出ができなくなる。そうすると日本の経済の成長がとまってしまうわけです。そこに日本の賃金上昇ということについての大きな問題がございます。日本の賃金は外国に比べれば非常に安いのです。戦前は安かった。戦後もずいぶん上りましたけれども、まだまだ外国に比べれば安い。しかし、その安い賃金でやっと外国と競争力を持っておるといふ現状でありますから、賃金をむちゃくちゃに引き上げるということは可能ではない。つまり輸出競争力を保持するかどうかということが問題でありまして、そこにおのずから賃上げ的な運動についても限界があるのではないかと思われる。これはもちろん昔のような賃金をうんと切り下げて、ソシヤル・ダンピングをして輸出を伸ばすということが必要だという意味ではありません。

たとえば賃金の上昇が輸出を不可能にするような形をとることは、結局自分で自分の首を締めるようになってくる。そこが一つの大きな問題点であります。

それともう一つは、輸出をふやすと同時に輸入を減らすことが、これに関連してくる大きな問題であります。わが国が必要とする輸入が減ってくれば、輸出はそれほど大きくふやさなくても済むわけです。輸入をできるだけ少なくすることになりますと、どうしてもここでむだな輸入を省いて国産の物資を受用することが必要になって参ります。ところが、日本人というのは、どうも外国品を何かありがたがって、舶来だというと、いまだに尊重するという気風が残っている。舶来という言葉も、日本だけの言葉だと思ふのです。外国にそういう言葉があるとは思えない。ですから、今でこそ為替の制限で輸入を押えておりますけれ

ども、この為替の制限は、だんだん貿易が自由化されてくるにつれてとり払われるでしょうが、とり払われた場合に日本人が今のように外国品をありがたがるという気風が残っていると、外国からの輸入がどっとふえてくる。そうすると、それだけ輸出をますますふやさなければならないということで、経済の負担が強かかってくる結果になる。ですから、貿易が自由化されても、できるだけ私どもが国産愛用と申しますか、同じようなものであるならば、できるだけ国産でがまんする、そういう運動あるいは気風を盛り上げていくことが、私はどうしても日本の経済の成長を助けるために大事だと思うのです。

ただし、私もそうは言いながら万年筆はアメリカのを使っております。これは使ってみると、日本の万年筆よりアメリカのものの方がいい。そういうのがまだ現にあるのです。それから私どもは毎朝ひげをそらなければならないのですが、日本のかみそりの刃は、たとえばフェザーにしても2、3回使うともうだめです。同じかみそりの刃であっても、青シレットであれば、その2、3倍は使える。明らかに万年筆とか、かみそりの刃というものをとってみると日本品は悪い。悪いものを無理にがまんして使わせるということはなかなか困難である。外国の品物の輸入を無理に押えていけば国内の品物がよくなる。だから、外国品はやはり入れた方がある意味では刺激になって、日本の生産品の質をよくするという面もある。だから国産愛用という気持ちで輸入を減らすのと同時に、国産の業者はそれに甘えてはいけない。外国品の方が現実的に品質がよければ、その輸入によって日本の業者に刺激を加えて日本品の品質をよくしていく、こういうことも私は必要であるように思います。

いずれにいたしましても、日本の経済が伸びていく2本足の一つは、輸出を伸ばす。それには総がかりで日本商品のコストを安くしていく、そういう努力が行なわれなければならないと同時に、私たちが消費生活の合理化としてできるだけ国産品を使って外国からの輸入を押えていくということが今後望ましいのではないかというふうに思います。私は先ほど申しましたように日本経済の成長力というものを高く評価しております。日本が自由経済の建前でソ連、中共のような強権で経済を動かさないで、しかも共産国家に優るような、あるいは劣らないような伸び方をしておるといふことは、日本の経済の非常な強味であります。底力だと思えます。その底力の根底には、先ほど申しましたように日本人が勤勉でしかも貯蓄心が強いということ、それから日本人が輸出に努力をして、それによって必要な外貨をまかなってきたという事実があるわけですが、今後も私たちの生活を豊かにしていくためには、高い経済の成長をはからなければいけない。その経済の成長を続けていくことによつてのみ私たちの生活水準も向上し、消費生活も豊

かになってくるのではないかと思うのです。

ともかく戦後のこれまでのような経済の成長の長さをずっと今後もそのまま続けていくということは、だんだんむずかしくなってくると思います。それはなぜかという、経済が成長するにつれて規模が大きくなる。大きくなるにつれて伸びる率はどうしても落ちるとするのは当たり前です。しかし、私ども9千万、やがて1億になるという人口を抱えて、しかも年々生活水準を高めていくということになれば、困難ではあってもこの経済の成長率の高さというものをできるだけ維持する、こういう努力を払っていかねばいけません。それには私どもの消費生活に合理性を貫いて消費のバランスをとりながら、一方においては貯蓄を行なって、成長の原動力を養い、そうして対外的には産業の能率をあげて輸出を確保することが前提になるのではないかと思います。

政府でも10年間に所得を倍増するという計画を建てようとしております。しかし、この10年間に所得を倍にするということは、口で言うほど簡単ではない。ぜひそうあってほしいと思うのですが、今申しましたような貯蓄と輸出とそれから消費生活の合理化、この三つがうまく結びつかなければ、なかなか10年間に倍にするということは実現できない。どうしてもそれをやるということになれば、日本のそういう諸条件を考えながら、国民が国民経済、家庭経済のあり方についてよく考えて、それに対処するということが前提だというふうに考えます。

家庭道德と公衆道德

東京教育大学教授 原 富 男
文 学 博 士

お疲れのところをたいへんかたい話でお気の毒に思います。まえの先生が最後に人間関係ということをおっしゃいましたが、わたしはその人間関係を主としたお話を申し上げようと思います。

いまお話くださった人間関係とわたしのいう人間関係とは少し違う。けれども、結局は同じ現実のありかたに落ちつくのではなからうかと思えます。この印刷物がお手もとへいっていると思いますが、「家庭道德と公衆道德」という題は、おそらく永井先生本来のお考えから、わたしにむかってご要求になられたものと思えます。このまえに、たしかお話し申し上げたかと思うのですけれども、永井先生とわたしは少し考えが違うのであります。結局のところは同じなのでしょうが、つまり理論の立てかたが違うのです。それで「家族道德と公衆道德」とあるしたに、「わたしはこういふ題目のもとで、生産活動（企業・経営・労働）と人間について語ろうと思う」とわざと書いたのです。というのは、わたしのいわゆる「人間」を実現しようとして期待しているのが、あるいは家庭道德といわれ、あるいは公衆道德といわれているものでありましようが、道德には家庭道德も公衆道德もないというのがわたしの考えかたであります。それについてちょっと申し上げると、先日わたしは小倉へ行って、道德の話をしたんですが、日教組がじやまをしまして、ひどい目にあいました。日教組の人々には道德の意味がわからないのですね。わたしが主張するのは、日教組がやろうとすることを援助し、勇気づけてやることになる道德なのです。それがすなおに聞けない、わからないで、むやみに反対するのです。同じようなことは、いわゆる生産活動のうちの労働組合などの動きにもあるのではないのでしょうか。それで、指導者のかたがたに、わたしの主張する道德を知っていただきたいというのが、わたしの長い間の願いです。つまり、家庭道德とか公衆道德とかと分けていうことが、もうすでに、工合のわるいことなのです。

小倉でのわたしの講演を聞いた一人が、こういう質問をしました。個人の幸福とか善とかと、社会の幸福とか善とかをくらべた場合、どちらが優先するかというのです。これは今日しきりに問題にされて、これが話題になると、どこでも、にぎやかなのです。ところが、わたしは、このとき、きめつけたのです。あなた

のおっしゃる「個人」はわかるけれどもあなたのおっしゃる「社会」はいったいどこにある、はっきり見せてもらいたい。社会はどこに存在する。いったい、あなたは何を社会というのか。それはどこにあるか、見せてもらいたい。現に見えているのは一人一人の個人であろう、現に生きているのも一人一人の個人であろう。社会的幸福などというけれども、その社会的幸福を味わうのは一人一人の個人であって、それ以外にならある。砂糖が甘いといったって、なめている者が甘いと感じるのであります。社会的とかなんとか言うけれども、みんなわたしならわたしがやっていることであって、やっている主体は、一人一人の個人を離れてはなし。社会はいったい、どこで動いている。わたしの思想体系からいきますと、社会というのは形而上のものです。もっと極端に言えば、一人一人のわれのうちにある。もしこれがわれの外へ疎外されてしまえば、一人一人の人の行動は変なものになってしまうのではないのでしょうか。われ以外のひとを一切疎外した人の行動などというものが、いったい、あり得るか。わたしはここに疑問をもつのであります。わたしのいう「人間」は、実は今日のことばで言うと、「社会」なのです。けれども、「社会」というより「人間」ないし人間関係と言ったほうが具体的で、現実的じゃなからうかと思うのです。いまの質問の例で、そういう人々がおっしゃる個人の利益とか社会の利益とか言うときは、なにかこう唯物論的なにおいがしてくるのですね。いわゆる闘士なんですから。けれども、そういうときの社会は、結局のところ、観念論的になってくるのです。観念的なものにおびやかされて、自分自身の構造の具体性を忘れてしまうのですが、実のところ忘れることなどできやしません。だから、口で言っていることと、実際おこなっていることと、はっきりくい違っているんですよ。しかもそれに気がついていないんです。そして明治維新当時のいわゆる「精神家」と同じように、おれたちは一にも正義、二にも正義、あいては一にも不義、二にも不義と思ひこむようになってきてしまっているのです。平等とか自由とか叫びながら、うちへ帰ると、君子ひようへん、たちまち亭主大明神こよなきタイラントになってしまうんですからね。おれは特別だということになるのです。おれは給料をとってくるんだ、お前たちはおれの給料で養われているんじゃないかという、げびた根性がでしやばるのです。理論のうえではそうじゃない、けれども実際はそうですよ。この限りではこういう講義をするわたしのようなものでさえ、うちへ帰ると、ちょっとよろめいてきますからね。あなたがたもみんな似たりよったりではなからうかと思うのですがね。そこで、わたしは「人間」をもう少し考えてもらいたいと思うのです。「人間」のありかたは、西洋でも東洋でも、ちっとも変わりはないと思います。

わたしは生産活動と人間ということをお話ししたいのですが、まず生産活動につながって、第一が家庭のことです。

わが国のような家庭組織では、一軒のうちで働く人は、だいたい、一人、ご主人といわれる者、その人が働くときに、われわれのようなものでは、月給～賃金をもらってくるということになりますが、この月給～賃金に対して、おくさんとか、子どもとか、妹とか、弟とかいうものが異常な関心を持っている。おやじの月給がいくらかということについては、無関心じゃありえないのです。つまり、一家の生活はそれによって営まれるんでしようからね。ところが、その関心の方向ですね。どういう方向においておやじの月給を考えているか。おやじ自身がどういう方向において考えているか。たいがいの場合、たれだって自分たちが満足するように思っているに違いない。がさて、満足させる方法となると、いろいろの壁にぶつかってしまうのです。そこで、お金とか物とか、とにかく物質的なものごとを中心に、ごたごたしてくる。満足させる方法——もっと月給～賃金を上げるとか、もっと節約せよとかいろいろ考えられるでしょう。けれども、それがなかなかうまくいかない。それらがうまくいかないとなると、いまこの状態において、どうしたらいいかを考えなければならぬ。ここでわたしは、あらゆる場合に適用できて、また人の生活であるならば、いつでもそうでなければならぬということを考えたい。

そこで言いたい、説明したいのが、「人間」の構造、その自覚と調和ということとあります。まずその自覚と調和はいわゆる家庭生活においてどういう形になってあらわれていったらいいかという、それぞれそれなりでありながら、つまり、おやじはおやじ、さいくんはさいくん、長男は長男、次男は次男、妹は妹、それぞれそれなりでありながらわれもよしとし、ひともよしとするようにはこんでいけばいい。自分だけいいんでも、ひとだけいいんでもだめです。——おやじがうまいものを食べたいと同じように、子どもだって、やはり、うまいものを食いたいと思う。奥さんなんかは、隠してはいますが、おやじが一ぱいのもので陶然としたいと同じように、奥さんだって、ほんとうはそんなことまっぴらというわけじゃない、やはり陶然としたいことにはかわりはない。それを、いろいろの事情を思いあわせて、抑えつけているだけのことだ。それをもう、今日では、自他ともにそういうものだと思いきこんでしまっている。あわれな話です。わたしは、それを、あわれでないように、もっていききたいというのです。

第二は社会と生産ということとです。先ほどの社会ということの意味とちよっと違いますけれども、ふつう社会々々といっていますから、社会ということばを使うことにします。社会正義ということがよくいわれる。「正義」ということばは

もっともふるくは、プラトンの哲学にあって、ギリシア語ディカイオスネーの英訳アップライトネスの邦訳です。プラトンの理想国は、およそ三つの階層から成り立っているのですが、哲学者が、いちばんうえにある、つぎに兵隊があって、つぎに生産者がある。これは、当時の現情に即する理想構成であるが、その各層がそれぞれ与えられた自分の任務を果たして、それぞれ互いに他の職域をおかすことなく、全体が調和する、つり合いがとれる、そういう情態をディカイオスネー「正義」というのであります。このような正義は、今日わが国の社会生活にあてはめても、一会社にあてはめても、もっとも望ましいのです。家庭でもそのとおりです。人の体に例をとれば、胃は胃、腸は腸、肺は肺でみなそれぞれの機能がありはたらきが違う。肺が腸のはたらきをしては困る。それぞれの特徴、はたらきを十分發揮して、全体としてつり合いがとれる。そういう情態が、いわゆる健康情態である。このような健康情態が、社会生活、国家生活では正義である。健康情態はたれだって気持ちがいい。不健康になると、顔色もわるくなるし、不愉快である。これをきめる標準はどこかという、愉快か不愉快かということになる。絶対的標準というものはない。道徳論で言いますと、善悪の絶対的標準というものはない。あるように考え、あるとするのが全体主義です。全体主義なら、ある特定の人のいいと思うことを、なにびともいいと思えと、押しつけるのです。全体主義がいけないということは、われわれ今日よくわかっている。全体主義なんかあり得ない。何となれば、われ、人というものの存在の型は絶対じやないからです。このことについては相待論というわたしの思想体系が別にあるんですがわたしもあなたも、例外なく、みんな支え合って存在しているのです。今日のキャッチフレーズで言いますと、いかなる個人も大衆のなかの一人にすぎないのです。わたしはあなたによって支えられ、あなたはわたしによって支えられている。あなたのないところにわたしはない、わたしのないところにあなたはなし。しかも、すべてのあなたはわたしであり、すべてのわたしはあなたである。だから、現実には、うごかぬ善悪の標準というものもない。もしあるとすれば、お互いに気持ちがいいということです。お互いにおちついて、気持ちがいい情態。友人関係だってそうでしょう。取引きですまされるあいだは利害ですまされるでしょうけれども、取引きの利害を越えたわたしとあなたの関係は所在にある。そういう場合に、標準は何かという、お互いに気持ちがいいということ、両方愉快であるということです。恋愛関係だって、かたほうだけが愉快だって、はじまらないのです。夫婦関係でも、かたほうだけが気持ちいい気持ちになっただけではへんなものでしょう。

そこで、生産活動の意義なんです、われわれはめしを食わなければ生きてい

けない、着なければいけない、家に住まわなければならない。われわれの生活には、どうしても、生産活動が伴わなければならない。それはわかっている。けれどもなんのためにいろいろの生産活動をしているか、と日常の意識にきいてみる、そこに大きな問題がある。食うためだ、もうけるためだというのが、ほとんどまったく、あたりまえのこのように思いこまれている。ところが、今日アメリカなどで生産活動意識のありかたをきいてみると、必ずしもそうじゃなくなってきているということです。P.R. ということをよく聞くでしょう。P.R. の意味は、われわれからいえば専門外のこのようだけれども、いっばんにも、実際はよくわかっていらっしやらないらしい。P.R. というと、何か宣伝のことかなどのように思いこんでいるらしいです。が、プロパガンダの略ではなくて、パブリック・リレーションの略なのです。企業（エンタープライズ）の大衆との関係、パブリック・リレーションズと多くの場合、複数でいわれ、社会大衆との諸関係において、その企業がどのような意味を持つか、それが問題になっているのです。だから、アメリカでは、こういうことが言われているということです。たとえば、わたしは杉並区の天沼に住んでいますが、天沼に一つの化粧品会社があるとする、その化粧品会社は化粧品を作り、それを売る、そういう生産活動が、天沼の大衆にとって、どのような意味があるかと考える。つまり、いかなる企業も、みずからが属するコミュニティの生活水準を高めることに役立つのでなければ意味がない、役立たなければならぬと考えるのです。さらに積極的に言いますと、みずからが属するコミュニティの生活水準を高めるのに役立つときに、はじめてその企業が意味と価値を持ち得るということです。だから、まあたとえばその利益配当について言ってみると、配当の対象は、資本家、経営者、それから従業員といういままでの三つのほかに、第四のものが数えあげられる。それはみずからが属するコミュニティであります。その具体的方法にはいろいろあるでしょうがね。このような思想ないし現実、わたしに言わせると、企業というものの人間関係における自覚を示しているのです。生産活動の意義はそういうものでなければならないと思います。したがって、社会的正義とこのことがうまく結びつくように考えなければならない。そこで、再び言いたいことは、家庭生活における人間の自覚と調和ということでありまして、ここでは家庭生活における人間の自覚が拡充していく、拡がり充ちていくこと。つまり、家庭における同じ型のもの、おやじのかせぎと収入にそれぞれの方向をもって家族が重大な関心を持ち、それが満足するように、その方法を考える、こういうことと同じ型を拡充していく、これだけのことではないかと思うのであります。

家庭道徳とか、社会道徳とか、技術的にいえば、あるいは分けて言うのがしか

るべきかもしれません。けれども家庭道德といい、社会道德といっても、実践するものは同一の人でありまして、別のものではありません。だから、夫婦、親子きょうだいというような人間関係の自覚が一般の人間関係に拡充する。家庭の調和からはじまって、その家庭の属するコミュニティの調和へと拡がる、そのコミュニティが無限にかさなり拡がり大きくなって行ってこそ、はじめて、世界人類全体の調和が、現実に期待される。そうでなければ、世界平和だ、何だかんだと口さきで、いくら言ってみたところで話にならない。つまり、世界がわれの存在構造のなかへは行ってこないことには、どのようにりっぱなことでも、現実化してこない。社会というものは、「人間」の自覚〜われの構造の自覚拡充において、はじめて現実化する。そうしないと、何か圧力を加えられたり、摩擦があつては工合が悪いと思つたりすることから、ある程度の規制はできても、ある限界へくればとまってしまふ。一切のものがわれに包摂される。さらにいえば、われ自身の行動が、すべての「われ」の行動が、「わたしとあなた」という人間存在の原型を拡充していく。そうしたときに、もう社会道德も家庭道德もありはしない。どうしなければならぬかということは、おのずからわかつてくると思うのです。わからぬというのほうそだと思う。勘がにぶいというものであります。

じゃ、なぜ勘がにぶいというような事実が起こるかという問題になって、わたしは「与えられた人間性」というものを考えるのであります。「与えられた人間性」——これは學術用語です。与えられたということは、漢語を使つていえば所与です。ちよつと説明しますと、わたしはいまここであなたがたに話をしているが、そちらにいらっしゃる先生がたはいったい計画して生まれてきたのでしたか。この寒いのに、こんなところへきて講習を受けるようになることを、お生まれになるまえから計画しておつて、これが一番いいというふうに扱ひとつて、この世に生きるようになったのか、とおたずねしているのですが、おそらくそんな人はいないと思います。これはじょうだんのように聞こえますが、じょうだんではありません、重大問題です。この問題と取組んで人類は、今日まで、どのくらい悩んできたかわからないのです。むずかしいことは、しばらく、おき、簡単に言つてみれば、しよせんわれわれは気がついてみたら生きておつた、というにすぎないものです。みなさん笑つていらっしゃいますが、ことばどおり気がついてみたら生きておつたんですよ。気がついてみたら生きておつたんだから、まえから生きておつたに違ひない。ただし、その限界はわからない。ここが、いわゆる実存主義の多くの人々の気持ちを引きつける魅力なのです。わたしは明治31年に生まれたと知っていますが、これはわたしの単なる知識にすぎないのです。このわたしが生まれたときの事実を、わたしは見えていない。と同様に、今度はやがて

死ぬ、消えてなくなるだろうと思ってはいるが、自分の死んだ姿を自分で見るわけにいかない。してみると、いつ生まれたんだか、いつ死ぬんだかわからぬ。けれどもいまここに、このように生きている、これだけは確実であります。これだけは疑うわけにいきません。だから、こういうことになるのです。いつというはじめはない、おわりもない。まえはわからぬ、うしろもわからぬ、でも、いま生きていることだけはたしかだ。しかも、なんびとも、例外なく、生きつづけたいと思っているでしょう。どっちでもいいというような人はありません。それだからこそ労働争議もあるし、家庭の悩みも、いろいろとおこっているのです。さあそこで、気がついてみたら生きておった。その自分というものを、よくよく考えてみるとこれは、正直のところ、実はとんでもないものなのです。いまでもいい、実際よく考えてみてごらんなさい。自分に損がいかぬように、いかなる場合でも自分に得がいくように……、このような用心、心構え、夫婦関係においてだって、思い当たるふしがたくさんありますね。つまり、人は、だれでも、おもてむきは、ひとまえでは、とにかく、こうしている、こうしておくのだが、ほんとうのところは、こうと、ひとりひそかに、ちゃんと、きめているところがあるのではなからうか。そのほんとうのところは、ぎりぎり、生命の保存に、つながっているのであろう。漱石の表現によりますと、人はいつでも仮面をかぶっているが、めしを食うときだけははずすという。はずさなければ、食えないから。あれは皮肉でも何でもなし。漱石はおそらく自分自身の姿を投げだして、そう言っているんだろうと思います。与えられたまま人間性というものはそういうものであります。これはおそらくどなたでも、われみずから正直に考えになったら、そうじゃないかと思う。

人間性というものは、わたしはずばり言うが、つまるところは、色気と食い気ですよ。よく考えてごらんなさい。そうでないような、非常に高尚なことを考えたり、したりするけれども、その由来するところを、だんだんつきつめていってごらんなさい。とどのつまり食い気、色気に帰着するのです。食い気は、固体を保存し、色気は種を存続するための原動力です。これは生きているものにとってぎりぎりのところでしょうね。これが基盤になって、いろいろのものが分化し、展開しているのです。さあ、こういう与えられた、所与としての人間性は、まあいわば、なさざるなきもの、いわゆるいいこともするかわりには、悪いこともする。限界を知らないポンピリティがある。漢語では、「能」(アビリティ)に対する可であります。日本語では可・能の区別がなく、どっちも「できる」と言っています。よく「可能」ということばをつかいますが、正確に言えば、ポンブル・エンド・エイブルの意味です。人間性というものは、限界を知らないポンピリテ

イを持つもの。こうしたほうがいいと、万万、承知していながら、そうしたくない、こうしたのが、よくある現実であります。与えられたままの人間性はそういうものなのです。どなたもお考えになってごらん下さい。ご自分の人間性だからといっても、そんなにりっぱなものじゃないのであります。われわれは例外なく、そういう人間性をもっていることを考えなければならぬのであります。

そこで、いよいよ今日わたしがおわかりになっていただきたいと思う話に、はいっていきたいと思うのですが、まずいま申したような人間性というものを、あたまのなかへ、入れておいて、それから家庭生活、いわゆる社会生活においてこうあったほうがいいのかどうかを考えたほうがいいと思うのであります。てっとりばよい話が、わたしならわたしを中心にしてある家庭なり社会なりが、いったいどんな情態を希望するかというに、一口にいってしまえば、われわれは幸福を求めているのであります。ところが、幸福とは何ぞやという幸福論は、むかしから非常にやかましいものであります。むずかしいことは、しばらくあずかりまして、十分に食うことができる、着ることができる、衣食が足りということが第一だと思えます。いろいろ論議される幸福のもとになるもの、基底になるものは、なんといってみたところで、衣食が足りることだと思ふ。ところが、その「足り」ということが、無条件で可であり、能であり得るかということが問題になるのであります。いましきりに文化ということが言われているが、これは一口に言うのと与えられてあるものを、そのまま、ほうっておかないで、手を加えて、よりいいものにしていく、そういう働きとその成果をいうのです。例をあげますと、土地は与えられてあるものですが、それをそのままにしておかずに、耕やしていい作物を作りだす、これが文化、われわれ自身について言ってみれば、この土地に当たるものが、与えられてある人間性であります。人間性はもう説明したようなものであるが、この人間性において、足ることが不可能である場合は、文化よりまえの段階です。足ることを可能にするときに、はじめて文化になってくる。つまり足りるか、足りないかということによって、文化以前か、文化以後か、あるいは人間以前か、人間以後か、問題になってくるのであります。「人間」を考えてくる～自分以外の「あなた」～「かれ」をも、自分の構造のなかに織りこんで考えてくるときに、足るということはある程度得るのだけれども、もしそのように考えない～考えられないときは、いくら金があったって、足りることはなかりと思われまふ。よく例にあるでしょう。100万円たまれば、200万円にしたい。200万円たまれば、400万円にしたい。このような欲望は無限に伸展する。一軒の家のなかのことでその通りで、このような例はどこへでも適用できる。わたしの言いたいのは、文化の段階へはいってからのことでもあります。というのは、つま

り、与えられてある人間性というものは、なさざるなきもの、どんなことでもなし得る。人殺しもあるのであります。もし与えられてある人間性がそのようなものでないとするならば、人殺しもなく、どろぼうもなく、この世は、極楽浄土さながらであらうけれども、事實はそうではない。どんなにりっぱそうな顔をしている紳士でも淑女でも色気と食い気の衝動にかられて右往左往している。そういう人間性をたれもが持っている。これは一般的である。この一般的な人間性のうえにたって、足りるか足りないかの例を引きのぼして行って、われわれの生きかたが文化〜人間以前であるか、文化〜人間以後であるかが分れてくるのであります。

つぎに、たれもが希望する情態、つまり、幸福になるために、われわれはどのような努力をしているかということであります。生産を盛んにしよう、月給を上げよう、収入をふやそう、ひっくるめて、今日、生産性向上ということが、よく言いはやされているのであります。今日、わが国においては、われわれの幸福を求めるために、総じて、現実に、諸方面にわたる技術は、たしかに、異情な進歩をとげているのであります。物質面でも、いわゆる心理的な面でもおどろくべきものがあります。たとえば心理的な面では、一会社の生産を向上させるために、人を使うにはどうしたらいいか、あるいは使われるにはどうしたらいいか。せんだって九州へ講演に行った帰りにある会社へ寄って、そこの常務さんと話をしましたが、やはりそういう心理的な技術の実施を考えているのです。生産性を向上させるためには、機械だけじゃだめだ、人を使う方法を考えなければだめだとしているのであります。フロイドとか、あるいはウイリアム・ジェームスとかいう人々の説がどんどん輸入されてきているのです。またたとえば物質面では、オートメーション化があり、ようやく、それに伴う労働力過剰の問題が起こってきています。オートメーションが採用される場合には〜技術が完全になる場合には、同時に人のことが考えられなければならぬということになってきているのであります。一般的に言って、人のことを考えない生産性向上などということは、まったく意味がないのであります。このことはあと回しにいたします。

心理・物理両方面にわたって、いろいろな技術が進歩することは、まことにけっこうなことでもあります。けれどもそのように技術が進んでいるなかで、たとえば一生産会社のなかで従業員（労働者）と経営者（企業者）の二つの系統がどんなふうになっているか。ひとしく幸福を求めてそれぞれが希望するところと、その実際がどうなっているか。これが問題になってくるのです。今日の現情を、おおよっぱに、ひっくるめてみていえば、双方について、みずからの目的と、その実現のための行動とのあいだに経営者は経営者、労働者は労働者（あなたがたは

その間に入っていらっしゃるでしょうが) それぞれにおいて、食い違いがある、しかも、それに気がついていないと言えるんじゃないでしょうか。この事実は、例を引きだせば、きりがありません。お互いに無反省である。反省があったにしても不十分である。ここにいらっしゃるかたがたは反省しようとしてきていらっしゃるんだと思います。その食い違いは、言ってみれば、民主主義的な考えかたを口にしていながら、その実際の行動は全体主義的に流れている。日教組なんかはたしかにそうだといえましょう。いっばんに労働争議の仕方がそうです。民主主義を唱え、その実現を望んでおり、そしてそういうようにするのだといながら、実際やっていることは全体主義そのままの行動である。ここに知性の混乱ないし弱さがある。あるいは自由、平等を唱え、あるいは独立というようなことを言いながら、自由を求めるときは平等を質入れし、平等を唱えれば、自由をすててしまう。自由も平等も、独立も、そう言う自分自身において、はっきりしてないのであります。

そこで、私があえて言いたいのは、技術とその限界ということであります。幸福を求めるために今日みんながいろいろな努力をしておるが、その努力は、ひっくりかかっている、技術の限界からでてないのであります。例をあげて言いますと新生活運動にいたしましても、あるいは人口問題を中心とする諸運動にいたしましても、これは要するに生活指導である。生活指導とは、生活の合理化ないし能率化のための指導であります。そこで、この生活の合理化、能率化とはどういうことを言うのか。これは所与としての人間性の直接的発動～先ほど申したようなつまり色気と食い気、こういうものを基盤とする人間性の直接的発動の合理化ないし能率化でありまして、要するに、技術の問題に終わっておる。そこで、永井先生は、わたしのようなものをつれてきて、技術だけじゃいけないという趣旨から、こういう話をさせようとなさったのだと信じています。先生は、技術の問題に終わっているということにお気づきになって、それだけじゃだめだ、これじゃ動かなくなっていると現情を見とおしていらっしゃる。さて人間性の直接的発動というものは、はやくいって、自分に損がいかないように、得がいくように、いついかなる場合でも、周到に用意する。これは自然のうごきです。教えなくてもできることです。それをいかに能率化するか、いかに合理化するか、これが生活指導の骨子であります。今日教育面では、道徳教育ということはいわなければならなくなってきました。それは、いわゆる生活指導だけでは間に合わぬということの意味しているのであります。生活指導でうまくいったように思っているむきもありますけれども、それは錯覚かあるいは反省不十分かで、やはり実際の人間生活としては、工合がわるいのです。だがさて、どこが工合がわるいんだ

となると、よくわからない。けれども、とにかくそれだけじゃだめだということだけはわかっている。何か欠けている。「道德」と言っても、何のことかよくわからぬ。けれども、とにかく生活指導だけじゃ足りない。何かあるのだが、それがわからぬ。それを表わす適当なことばも思い浮ばぬながら、その「何か」を「道德」という在来の日本語に籠めて、そのための教育～道德教育となってきたのではないのでしょうか。けれどもまだ、しつけと道德とを取りちがえたり、あるいは風俗、習慣と道德をごっちゃにしたりしている。結局そういうのは、技術面の延長でしかない。道德といっても、技術面に終わっている。日教組なんかしきりに生活指導だけでいい、といまでも言いつづけている。そうしてまた、多少ちがったあるものは、自分のところでは道德教育をやっているからきて見てくれと言う。けれども行ってみると、道德教育ではない。やはり生活指導からでていない。単なる技術の指導から抜けていない。だから、お互いが希望するところは、それだけじゃ足りないとわかっていながら、その足りないところをどうして補っていったらいいかがわからない。そこで悩んでいるわけです。踏みきれないのです。学校教育では、生活指導が、いま、壁にぶつかっているのです。会社などに例でとってみても、いわゆる厚生ないしそのための活動施設もまた壁にぶつかっているのです。そういうふうに技術的に合理化、能率化、つまり、与えられる人間性の直接的発動というものが能率化し合理化しても、それは今日いろいろの面において、画期的な発達はしてしましようけれども、それだけではどうしてもうまくいかない。そこで、あいまいながら教育面では道德教育ということを書いてきているのです。そこでわたしが言いたいのは、こういう技術面の根底にある～なくではならぬものについてであります。そういう技術の限界を越える～ぶつかっている壁を突き破る方法を考えなければならぬ、その方法は何か、と話を進めていきたいと思えます。わたしは、はじめから言っている「人間」の問題を、ここに取りあげたいと思えます。この「人間」は、さきほど「わたしとあなた」という原型を言って触れておきましたが、いくら技術的に手を尽しても、ついに壁にぶつかってしまうというのは、お互いのあいだに「人間」の自覚が足りないからだ、とわたしは言いたいのです。この欠陥は、おそらく、経営者のがわ、いわゆる労働者のがわ、五分と五分のかねあいといったところではないのでしょうか。かたほうは貴族的気位のドライさを持ち、かたほうは貧乏暮らしのウェットさを持つ、こういうものが、水と油のように融合しないままでぐしやぐしやしている。そこに「人間」へのエロースがない。まえの講師がおっしゃったように、「まあまあ」でとめるいわゆる人情主義というか、感情主義というかはある。けれどもそれはやはり、一種の技術しかない。エロースとは、――

エロティック、「エロ、エロ」とあなたがたがよくおっしゃるあの「エロ」ですが、「人間」の原型へのあこがれということです。その生物学的な典型的なのが男女相引くはたらきです。男と女、これが「人間」存在の原型です。男と女がいっしょになろうとして、お互いにあこがれる、これがエロースなのです。わたしのいう「人間」は、この原型を一般にあてはめて考えているのです。家庭は夫婦がもとでしょう。それで子供ができる。親子関係ができる。人は、こういう身近な関係からはじめて、限らない関係に結ばれて、それぞれの存在を支え支えられている。人というものは例外なく、たとえどんなにえらくても、自分以外の「ひと」・ものを除外しては存在しない。ところで、夫婦という関係は五分と五分の関係であります。夫がないところには妻はありえない。妻のないところには夫はありえない。このことはごく当りまえのことで、存在一般についていえることです。したがってそんなことはわかっていると、言うだろうけれども、わかっているがたとえ亭主族というものは、いっばんに、何か女房より価値がうえだといったような考えを持つ、なるほど、ある基準をきめて、それに照していえば、価値の上下があるかもしれない。しかし、存在として、家庭を作っているものとしての価値は五分と五分であります。おやじが八分で、子どもが二分ということはありえない。恥さらしながら、わたし個人を例にとってみると、なるほど月給はわたしが取ってくるでしょう。それからまた、女房なんてものは、ちっとも本も読まない、ばかなやつだと思っているけれども、その女房がなければ暮らしが立たない。これは重大な問題です。そこで、価値ということを考えなさい。価値をとかく自分に都合がよいように固定したがる。そうして、みずからの優越を自分以外のものに迫って承認させたがる。これは大げさにいえば、武力革命の原因になるのですよ。

革命というものは、ある特定の階級がその価値を強引に固定するところからおこるのです。価値を固定して、自分たちだけが優越する世界の価値を自余の階級に押しつける。そこで同じように生きようとする意欲を持っている者が反撥する。こうしたレジストがかさなりかさなって、革命は暴発する。価値は、あくまでも、相対的なものであります。それをとかく固定したがる。わが国の家庭生活～家族間にこの傾向が特に強く、ほとんどまったく、ふつろのようになっているのではないのでしょうか。いちばん重大なのは、夫婦間のそれでありましょう。おやじがいくら月給を取ってきたって、月給を取ってきたということだけでは、その価値は規定できない。家庭生活においてどういう機能を持つか、そうして存在としては五分と五分だという自覚のうえに立ってみななければならないのであります。かりにきめたある基準からいえば、そこに価値の甲乙がありましょう。けれ

ども、それは仮定にすぎない。これを「人間」の原型についてみますと、わたしはあなたによって支えられ、あなたはわたしによって支えられておるといふことこのわたしとあなたの関係は無限に広がる。つまり、時間、空間の二つの軸に沿って無限に広がっている。だから、家庭においての五分と五分の人間関係の自覚ができれば、それを拡げて、どこへ行っても、五分と五分の人間関係に、すくなくとも了解はいく。そうすれば、同じく電車に乗っても、バスに乗っても、おのずからその乗りかえができてくる。だから、どうすればいいかといふことは、この「人間」関係の自覚～了解からおのずからわかってくるはずのものであります。けれども、そこに、さっき言った人間性からくる故障が起こってくるのであります。してみると、要するに、人間性はこれを抑制しなければならぬのであります。文化といふ道徳といふ、「人間」らしさといふものは、与えられてあるもの（所与）をそのままに放っておかないで、これを制限するといふ方向において、創造されるべきであります。その制限には積極的な面と、消極的な面とある。性欲といふものをなくなすわけにいかぬ。食欲もなくなすわけにいかぬ。だから、そういうものが現にあることが、およびその発動を、十分に認めながら、制限する。といふことはどういふことか。わたしとあなたとの関係において、わたしもよしとし、あなたもよしとする、そういう情態ができあがるように、お互いにみずから、みずからの人間性の発動をコントロールすることです。これは、家庭では、ある程度心がければ、あるいはやりいいのかもしれませんが。けれどもたとえば、電車のなかなど、一般にいわれる社会生活では、ほとんどまったくなくなっておらんといふのが現情ですね。だから、わたしは、倫理学を専攻しようとする青年などには、あえて、つぎのように言ってきたのであります。

ほんとうに倫理学をやるには、洋の東西、時の古今にわたる知識も必要だろうけれども、要するに、いいだんなさまになる、いいおやじになる、いい兄さんになる、いい弟になること。そうなるように日夜心がける、これができれば、もうプラトンもアリストテレスも、わからぬでもいい。プラトンだって、アリストテレスだって、みんな要するにそう言っているにすぎない。それ以外のことは何にも言っていないと言っても過言ではない。論語を見たら、そのとおり、いいおとうさんになれ、いい夫になれ、女でいえば、いい女房になれ、いいおかあさんになれ、これだけのことでしよう。なんとすれば、どんな人だって、みんなおやじであり、子であり、兄であり、弟である。一般的にいえば、すべての「わたし」は「あなた」であり、すべての「あなた」は「わたし」であります。それを、たとえば、会社が違えばもうあかの他人だとそっぽをむいてしまう考えかたを、わたしは人間的自覚が足りないといふのであります。争議にしたって、会社をつぶ

しちやったら、みもふたもないでしょう。「わたしとあなた」「わたし」というときには、もうすでに、あなたがなくてはならぬ。このわたしは、いまここで、あなたがたをあいてにしております。いま、わたしがあなたというときは、わたしはロンドンの友だちなど問題にしていない。ここにわたしとあなたがたをつないでいるものがある。これを関係という。人倫の倫の字に当たる。この関係、「わたし」と「あなた」の関係は、無限に広がっている。けれども、もっとも現実的なのは、話をしているのはわたしで、話を聞いているのはあなたがた。話すものと聞くものという関係です。こういふ関係のうちにあつて、どうすればいいかはだれにだつて、よくわかっているのです。話を聞くあなたがたは話を聞く者らしくすればいい、話をする者は話をする者らしくすればいい、そうすればこの関係は満足する。ここで、あなたがたのほうではたばこを吸い、わたしが酒をのんだりしては、「らしく」ないということになる。むずかしいことはありません。ただ、そこでいつでも問題になるのは、与えられてある人間性であります。こうやつたほうがいいのかとはよくわかっているけれども、どうもそうしたくない。おれはたばこが好きだ、もう3時間もまない、のんだっていいだろうとみずからを合理化しようとするのです。人は、だれでも、しよつちゅう、こういふ限界に、うろろろしているのです。ここに「人間」へのエロースが強いか、弱いか、文化への意欲が強いか、弱いかという問題がでてくるのであります。いくらいい洋服を着ていても、この「人間」へのあこがれが弱いやつは、人間以前～文化以前です。いくら金があつても、その場の関係を満足させなければ、人間ではあり得ないのです。家庭でいえば、夫婦、親子の関係を満足させ、その場に調和あらしめなければならぬのであります。会社においてもそうであります。いくら技術が進んだつて、このような自覚～実践がないときは、いつかはつぶしてしまふ。個人の利益をはかつて、与えられた人間性のままに動いておれば、国家も何もありません。いや、そうでもないじやないかという面は、たしかにある。けれどもそれは、法律とか習慣とか、よそからくる圧力が加わっているからであります。だからそういう限界では、ひとが見ていないところでは、相当のことをやつてのける。ひとが見ているところでは、さっき言つたように、ひとのまえではとにかくこうしておくんだが、ほんとうのところ、こうときめてかかっている。このようなのは道徳以前であります。このようでもいわゆる社会生活では、人が見ていないという安易さにも流れていられます。しかし、家庭ではそうはいかない。だからわたしは、生産活動にしても、いわゆる文化活動にしても、家庭ではとにかく、いいおやじ、いい亭主、いい兄、いい弟、いい姉、いい妹になれ、と言いたいのです。それが、ほんとうに「人間」へのあこがれ、「わた

し」と「あなた」との関係を満足させるという熱意、ほんとうのあこがれから、そうなるならば、たれだって、そうなりたくないというやつはないはずであります。

実存主義者サルトルがこう言っています。「自分は、いまここで、こうしたいけれども自分以外のひとがそうした場合は、どうなるか考えてみる必要がある」と。だれもがそうした場合、満足できるかというのです。たとえばわたしならわたしがあなたのお嬢さんにはたらしかけて、所与の人間性の発動のままに、満足したとする、けれども今度は自分の娘がそうやられた場合、それでいいかということ。これは単なる例にすぎない。五分と五分の支えあいによってそれぞれの存在を支えている「人間」を自覚するとき、これは当然のことです。故障になるのは人間性だが、人間性がないことにはいっさいが始まらない。こういう撞着を、われわれはなんとしても、克服していかなければならないのであります。

そこで、わたしがもう一つ言いたいのは、道徳技術の問題ということになります。道徳とは、すべての「われ」がそれぞれの人間関係を証示し満足させるようにとすることばであります。例をあげますと、親子という関係がある。その関係を個別の親のおこないにおいて証示する、その関係を個別の子のおこないにおいて証示する。会社だったら、経営者と従業員という関係、その関係を個別の従業員のおこないにおいて証示する、個別の経営者のおこないにおいて証示する。社会というようなことばで言えば、人間関係一般、人と人との関係一般を、いわゆる社会人——電車に乗る人、道を歩く人、それぞれのおこないにおいて証示する。そういうおこないを要請することばとして、道徳という日本語が用いられているのではないのでしょうか。「道」は一般者をいう、その場～関係一般をいう。たれでも道を通る一般という意味で道という。「徳」というのは、それが個別の「われ」に自覚されて、おこないにあらわれる。証示されること。これだけわかっていれば、そんなにむずかしいことではない。親子という関係は、親がなければ子はありえない、子がなければ親はありえない。親と子は五分と五分の支え合いで、親のほうがいかに、子のほうがいかに、かではない。しかし、現実の生活では、おやじのほうに経済的にも現有勢力が大きい。が、そのおやじは現有勢力の弱い子がなければ存在しえない。そうしてみれば、存在としては五分と五分だ。だから、その親子関係を証示するようにおやじの現有勢力を使わなければいけない。子は子としておやじにはないものを持っているであろう。だからそれを使って、その親子関係を証示すればいい。それぞれの支えあいを否定することになると、自然法則の支配にまかす人間性の発動に流れる。いくらい着物

を着ておっても、人間以前・文化以前だ。ところが、それはそうだけれども、まあたとえば、わたしならわたしが肺病だとする。開放性で、たんをすると、そのばい菌が散らばると、ひとにうつる。そうなると、われもよしとし、ひともよしとする関係を見捨てることになる。けれども、町を歩いていて、どこへ行っても、たんつぼなどありはしない。チリ紙を持っていけばいいじゃないかというが、そうもいかない。たんつぼへたんができるように、学校とか会社とかで用意しておく、このようなのを道徳技術という。道徳行為ができるように、つまり、親子の関係が親によって証示され、子によって証示される、会社が経営者によって証示され、従業員によって証示されるようなおこないをやりやすくしてやるということです。これを東洋では道徳の経綸といいます。道徳の根本である「人間」へのエロースをかき立てるようにすることも道徳技術であります。けれども、この面への技術は、今日、まだきわめて少ないのではないのでしょうか。この面により一層の工夫をこらすとともに、たんつぼや便所の設備をよくするというふうな道徳技術が、会社で言えば、厚生施設などとは別に、必要じゃないかと思うのであります。

技術の問題が重大である。けれどもその技術を生かすのは、まえから言ってきた「人間」の自覚である。これは理論でわかってもだめである。のみならず、理論はいっぱんには、なかなかのみこめない。そこで教育としては、感激を呼びおこすことが大切である。方法としては、物語りとか、そういう実話のようなもの、できるならば実際の行動で、人と人との関係が五分五分だということがわかるように持って行ってやることだと思います。実際の行動となると、単に技術だけではないでしょうね。まことに失礼なことを申しますが、あなたがたお宅で奥さんは、うちの旦那さまは天下一理想的な旦那さまである、旦那さまは、おれの女房はこの世の中で右にでる者はないと、思い思われるように日常の実践がなければ、指導員たるのほんとうの資格はないと思います。完全なる表現は実践以外にはないのであります。いくら口で言ったってだめです。たとえばわたしが、しよっちゅう、人間関係を説いていまして、それだけではだめで、わたしの行動にそれが現われ、それをよそから見たとき、はじめて、ああ、なるほどとわからせることができるのであります。だから説くもの自身、指導の任に当たるものみずから「人間」へのあこがれを強くしなければならぬということになりますね。

もう一つそれについて言いたいことがあります。わたしどもは倫理学を専攻しておりますので、今日よく道徳教育についての演説をして歩きます。またひとの質問も受けます。ところが、そういう現情においてわたしがいちばん気にいらぬ

のは、道徳教育指導業者というものができてきていることです。新生活運動指導業者、何々改革運業者が所在に輩出しています。つまり、その主張なり知識なりを売り物にしそれによってもうけよう、名を売ろうとしているのです。だから、言うことと、行なうこととは別だ、としゃあしゃあと言っているのけていてあいも少なくないのです。たとえば倫理哲学の大学教授が、わたしは講壇に立っているいろいろ講義する、けれども、わたしの生活と別個のことだとおくめんもなく言いはなつ。こんなひとをばかにした話があるもんですか。言行の一致はむずかしい。けれどもできないまでも一致させようとの努力がなければならぬのであります。それを別だといって知らぬ顔をしておる。これはどうかしている。それと同じように、この種の大部分の運動が、それによって衣服住の資を得る職業になっている。だから、たとえば八百屋がダイコンを売っておったが、あまり売れない、もうからないから、今度はリンゴを売ろうというようなことになってしまうのであります。自分の主張し提唱することが、そのときどきの都合で変わっていくということになる。こんなことでは、たとえどのような運動にしても、なんら積極的な効果はあり得ない。それに関係している人が収入をよけいにするだけのことにおわる場合もなきにしもあらず。あるいは精々それに関係する人が失業からまぬかれるということで、いくらかの失業救済になるかもしれませんが、何々運動というようなことをうたって、ひとをごまかすことになる。ひとをごまかすということは、やがてみずからをごまかすことになる。そうなると、その人間としての行動は非常に狭く貧弱になる。そのようなてあいが、いくら博愛だ人類の幸福だと言ってみたって、おかしなものであります。そのようなてあいは、自分に都合のいい機会さえつかめば、どのようにも転向してしまうのです。この点をよくお考えになっていただきたいのであります。家庭道徳、社会道徳といいましても、結局はここへ帰着する。その実践面において、あるいは技術面において、家庭道徳とか公衆道徳とかいうことが言えるかもしれないが、そのもとの「人間」へのあこがれ、つまり夫婦仲よくしようという——夫婦は、五分と五分において、存在の原型に従って、いい夫婦になる、そういう「人間」へのエロース、それをアガペイ（同胞愛）に拡充していく。だから、家庭道徳と同じ型のものが拡がっていく、そこに社会道徳と呼ばれる道徳行為があるのであります。そこにながしかの技術は必要である。その技術は、そのときどきその場所場所において考えられるべきであります。何となれば、道徳の実践は個別的であるから。そのとき、その場所における具体的ないろいろの事情のなかにあつてわれもよしとし、ひともよしとするのでなければならぬからであります。だから、景気のいい会社と、景気よくない会社とは違っていてしかるべきであります。貧乏人と金持ちとは違っ

ていてしかるべきであります。けれども貧乏だから道徳はあり得ないということはない。貧乏は貧乏なりに、金持ちは金持ちなりに、それぞれ人間存在にくっついた道徳がなければならない。ところが金持ちになればなるほど不道徳になる。それは、人間の自覚がないままで、人間性のほしいままの発動に都合がいいような情態におかれるからであります。

×

×

問 ちょっとお伺いしたいと思います。

わたしのところでは4、5年前から新生活運動をやっているんですけども、最初は家族指導から公衆に及ぶということに重点を置いてやってきまして、いまでは話し合いによるグループ活動ということに重点を置いています。先生のお話のなかで、幸福追求のために、与えられた人間性に節制を加えて、人間の自覚と現実の人と人とのあいだに調和をつくりあげていかななくてはならぬということと、もう一つは、生活技術の指導だけではだめだということですが、では、わたしどものグループ活動が果たす役割というものは、お話とはどのような関係になるのでしょうか。

答 話し合いということですが、これを論理ずけますと、人間関係はお互いに個別の存在がぶつかっていくことです。話がわかるということは、電波の例で申します。ここに一般者がいる無限の直線であらわします。この地点から発した電波が、この一般者のここへぶつかる。この一般者はたれにも共通であります。ぶつかって、同じ角度でここへ帰ってくる、ここに話がわかるという事実が成りたつのであります。それにはこの線（一般者）がなければならない。これが人間関係です。だから、ここへぶつかるように、いろいろな場合に話を持っていかなければならない。けれども、実際われわれの経験においてそうなるかどうかかわからない。そこでわたしはそういう、まあいわば話のわからない人々には、人間関係を描写した小説、劇、芝居、そういうものを読ませて、そうしてほんとうにそうかなあと感じさせる。それがおもしろいものであれば、どんなに忙しくても読む。あるいはそういう話を聞かしてやる。そうするといまの話のように同じ角度でたものが同じ角度で戻ってくる。話し合いで話がわかるということは、だから人間関係が自覚されるということですね。落雷という現象は放電ですが、あれは陰極と陽極がある限界内へは行ってこなければありえない。つまり関係がつかない。だから話し合いはそこへは行っていくようにもっていかなければならない。だからグループ活動はいい。グループのなかの個人個人が話し合いをしていいグループになる、そのいいグループと、こちらのいいグループが話し合いを

する、こうなって、限りなく拡がっていくことが望ましい。

きょうも時間があれば、そういう点についてもっと話をしたかったんですが、労働組合というようなもの、それは法制によってきめられて長い間やってきた。これを決してくさすわけではありません。いままでのようなもののうえに、いま言ったような性格のものを考えていったらいいと思います。このようなものはフランスにはある。そういうふうに考えていくと、案外いらぬ摩擦がなくなり、経営者なり労働者なりがお互いにこの困難を打ち破っていく。しかし、そこにもう一つ故障がある。いわゆる革命気負いというものがある。これは日教組なんかにもある。わたしはそういう人々にむかってあえて言いたい。ほんとうに革命を望むのか、ほんとうに望むなら、からだを張ってやれと。しかしこう言われると案外なものでたいがいやらない。からだを張るのがいやなのです。だから、そのチャチな革命気負いなど止めたほうがいいと思います。だれでも自分が犠牲になるのはいやでしょうからね。こういうこともあなたならあなたが、ただ説いて聞かせたのではだめですよ。何かすぐれた文芸作品を味読させるのが、いちばん効果的です。理論でなくて、文芸作品によって感激させる。ことに、若い世代の高等学校をでて新しく会社へはいったくらいの者はそういうもので感激する。理屈を言ったってわからない。わたしは教育大学をでて連中で道徳教育をやるといふのによく言うんですが、子どもは自分らの教育を受けつけない、だめだ、だめだというのです。わたしは、あたまから、このばかやろうとしかって、そういうまずい説法よりは、こういう作品を読んできかせるらうとやってやるのです。ところが、こういう方法では、そのときにはよくわからないようですが、なんとなき感情としてはいつか、いつかは、その子ども経験のなかに浮かびあがってくるのです。そこで人の心の働きというものを考え直さなければならぬと思います。いまあなたがたはよく「理性的」とおっしゃいますが、いったい理性というものが現にあるでしょうか。はたらいている心というものは、理性的とも感情的とも意志的とも言いきれないものでしょう。理性とか、感情とかいうものは、ヴェントの心理学の分類に従う名前です。近ごろは別の分類もでていますがああいふもののどの一つだって、現前直下の心のはたらきを言いあらわすものではありません。肉体的なものをもふくめた心全体、そういうふうに考えていかなければいけないと思います。

問 結局強制はよくない。たとえば道徳なら道徳というものをこの方がいいといふので、グループならグループでやるでしょう。そうした場合に、強制のような形がでてきますね。それをしないということですね。

答 それをしない。わたしはそういう場合によく言うんだが、それは「待つ」以外にない。これは仏教の物語りにあるのですが、ゴータマになる前の修行中のシッターダに、おまえには何ができると聞いたら、托鉢ができる、ものを考えることができる、もう一つ、待つことができると答えたということですが、自分がある教育活動をすると、その効果が現われることを期待しすぎる。期待しすぎると、かならず期待はずれにみまわれる。あいてが、なかなかそうなっていないのです。そこでまたいろいろな方法を講じて、あいてを触発して、気ながに待つしかないのです。仏教では自分が悟ったことを、ひとに説いて聞かせる。それが仏教の本旨です。だからキリスト教の福音を説くのとちがいます。仏陀ということばの原意は友達ということだそうです。わたしもあなたも仏さまと同じなかまだ。わたしはこういう方法によって、こうなってきたとあいて～なかまに話をす、そしてあいて～なかまがそうなることを待つ、このようなのが東洋的のいきかたではないでしょうか。だから、人間関係を自覚せよという提唱は、単なる「まあまあ」の人情主義ではありません。われわれお互いのありかたは、まったく五分と五分です。ところが女房と亭主のあいだになると、そうでなくなる。それを五分と五分にしなればいけない。だから、わたしは結婚式へ招かれて、演説せよといわれると、はなむこにむかって「あなたは、当分ははなよめにむかってあなたと言っているだろうけれども、2年、3年たったらどう呼ぶでしょう。しまいまであなたと呼べるようにならなければ……」と、こう言ってやるのです。なんでもない、じょうだんのようなことですけれども、このようであることができさえすれば説法などしなくても、いいのです。

人口問題と新生活

国民経済研究協会理事長 稲葉 秀三

私は「人口問題と新生活」という題で、これから一時間半ばかりお話を申し上げることになりました。この二つの関係がどのようなものであるかということは実は私にもなかなかはっきり想像がつかない次第です。しかし、この二つをめぐりまして私の考えておりますことをお話申し上げます。

話が主題からちよっとそれるかもしれませんが、つい先ごろ私はアメリカ大使館から御相談を受けました。それは一体100年前の日本人の生活もしくは日本の経済水準は、今と比べてどのようなものであったかというのであります。ところで100年前の人口は正確にはわかりません。まして100年前の日本の経済水準とか国民生活とかいうものも把握が困難でございます。ちょうど今年から100年前というのは、日本にとっては非常に記念すべき年である。日本とアメリカとの間に初めて通商航海条約が結ばれた年なのです。その前にペルリが来たり、そのほか外国から多くの来訪があったのですけれども、下田港で通商航海条約が締結をせられ、それを契機として日本が近代産業国家の仲間入りをした、来年はワシントンで正式に調印されて100年目なのであります。そこで100年祭を迎えるにあたって、今とそのころの日本経済を比較して、どのように違うかということ計算をしてくれということを私が仰せつかったわけでありまして。

その後いろいろ迂余曲折はございますけれども、私は専門家にも相談し所得計算をしてみても、およそ百年前の日本の国民所得は39分の1ぐらいではなかったろうかという推定をいたしましたのであります。マッカーサー大使は、その後下田と九州の福岡で講演になったとき、日本は100年間に39倍に経済力を拡大せしめたのだという演説をなさったのですが、これは私たちの先に出したもので関係があるように思うのです。しかしこれが正しいか正しくないかということは、実は私個人も疑問とするところで実はこれよりもっと実際の経済はもっと高くなったのかもしれない。

それでは100年前の人口は一体どの程度のものであったか。おおよそ3,000万人見当ではなかろうかと推定されます。やや公式の日本の人口統計は、明治5年のものでそれに現在の版図での人口が34,806,000人ということになっております。明治維新の当時は3,000万人であるとか、いろいろ話がございましてけれども、おおよそ3,000万人ではなかったかと想定されます。そうすると、今の日本

の人口は大体 9,200 万人から 300 万人の方向へ進んでおる、すなわち 100 年間に大きな変化があったのです。

簡単に言えるのは、この 100 年間に日本の人口は 3 倍になった。しかし日本の経済力は 39 倍になった。その結果一人当りの経済力の分け前、最近のむずかしい言葉でいいますと、実質国民所得というものは 13 倍ということになるわけであり、それでは 100 年前と現在とを比べまして、はたして私たち国民は平均 13 倍の生活をしているのかどうか。100 年前と現在とは生活様式が根本的に違います。御存知のように 100 年前には洋服を着ておったという方はほとんどいなかったでしょう。また髪を分けたり、パーマメントをしていたという方も皆無であったと想像します。また電気、ガス、電車等もございませんし、合成繊維も、ラジオもテレビもミキサーもございません。また観光旅館の設備などももちろんなかったわけであり、ですからこれらを正確に比較することはむずかしい。ですけれども、この私の推定をいたしますのに、この 100 年間の間に一人当たり平均して暮らしが 13 倍に上っているというふうには考えられないのであります。それでは一体その間の計算はどうなっているのか。これについてこの私の考えますのに、日本は生活水準の向上に割く以上に、道路とか鉱工業生産設備とかあるいは教育といったような方面に、より多くの力を割いた。ですから一人当りの生活がその通り高くなったとは言えない。おおよそ 8 倍ないし 9 倍見当ではなかろうか、これも私の簡単な推定であります。

さて次は、ではどうして百年間に日本の経済力や国民生活がこれだけ変わったのか。日本の経済が通商航海条約の締結を契機として、西欧の生産様式を取り入れたからであります。その前のおよそ 300 年間というものはほぼ人口も固定をしておった。経済力はやや緩慢ながら成長しておりますけれども、ほとんど見るべき改善がなかった、こういったような時代であります。ですから 3 百年間は農業を中心にしたいわゆる封建経済の時代であり、それから急激に人口が上った。しかしそれ以上に経済力が拡大をしたということでもあります。明治の初めから現在までの平均の経済力の伸びは、実質は 3.5% から 4% といわれております。最近では神武景気以上の好景気になりまして、10月23日に出生した政府の経済見通しをそのままちょうだいいたしましても、1年に 11% 実質国民所得が伸びております。去年は戦後未曾有の不況といわれておったのでございますけれども、一年間に 4.4% 経済が拡大をいたしております。そして戦後の日本経済の平均成長率は おおよそ 9% 程度ではなかろうかと思えます。

その結果、政府はこの間閣議決定を経て、10年の間に所得を 2 倍にしたいということを発表しております。所得を 2 倍にするということ、月給を 2 倍にする

ということとは、およそ意味が違うと思えますけれども、ともかく所得を2倍にするということは、10年間に200%の国民総生産または国民所得を実質的に、つまり物価騰貴というようなものを入れないで築き上げるということでもあります。10年間に日本の経済のワクを2倍にするためには、年平均の成長率は7.2%程度でなければならない。少くとも最近はそれを上回っているわけでありまして。そして7.2%程度の成長率が今後100年持続をすると、100年後のわれわれの暮らしがどうなるかということになるのでございますけれども、それはまだ計算をしておりますけれども、39倍というようなものではなくて、おおよそ4,500倍見当にまで高まるのではなからうかと思えます。しかしはたして経済が順調に発展してくれるかどうかということとはわかりません。しかしこれが達成をせられたときの私たちの100年後の生活というものは、およそ過去100年とは違った、もっとカンホタブルな、すなわちずっとよいものになるはずだと確信をいたします。

しかし申し上げたいのは先のことはいざしらず、過去100年間で日本の経済力が40倍、人口が3倍になったというのは世界の歴史での好記録であったということです。もし私たちは苦しい家計をやりくりしてどういうふうに貯金をふやす、税金を負担するといろいろ真剣な苦勞をしているわけでありましてけれども、ともかく長い目で見ますと、案外私たちの暮らしは改善されている、経済というものは発達しているといえるのであります。

私は偶然の機会に今から12年前に経済安定本部という政府機関に招かれました。あの当時は日本の経済も、日本の国民の生活も非常にこんとんたる時代であったのであります。そのようなときに、一体どのように短期の経済政策をし、また長期の経済復興計画をつくれればよいか、これらの仕事に参画をする機会を与えられたのであります。その後政府は経済長期計画とか、自立経済計画とか、あるいは5カ年計画とか、また最近では10カ年計画とか、いろいろな計画を作ることになりました。その第一回目と第二回目の計画を作り上げる仕事に私は参画をしたのであります。当時私たちが行ないました仕事は、今から考えればだいぶ筋違いのものであったかもしれません。しかしここで申し上げたいのは当時私たちが作り上げました第一回や第二回目の経済建て直しの長期計画は別の名前で、「人口との闘争計画」というふうと呼ばれたことであります。

と申しますのは、100年間をとりますと、案外なだらかなカーブで経済や人口、またさらに私たちの暮らしが変化し向上していくのでございますけれども、現実には必ずしもそのようなものではない。ことに明治、大正、昭和の初めにかけては、経済そのものが発展をしたというものの、その間には上がったりがったりいたしまして、【最近の神武景気が鍋底景気に転落する以上の大幅な経済変動

や、生活変動の波があったのであります。特に敗戦という現実に直面をして、その従前の波以上にむずかしい状態に経済は直面しなければならなかった。私はもとよりのこと皆様方も当時身をもてこの変化を御体験されたと思うのです。たとえて申しますと、100年のうちの90年間の経過を、最後の10年間でまたやり直したといった状態なのであります。そこで主として戦後の動きを中心に経済と人口の関係を論じてみたい。日本の経済力と人口と生活水準、この三つを組み合わせで見ますと戦後のこんとんたる時代では今から見ると一寸想像もつかないような関係がなりたっていたのです。

明治の初めから日本の経済、別の言葉で申しますと日本資本主義が飛躍的に伸展し、それが最高水準に達したのは、昭和9～11年頃だといわれております。昭和12年から日本は日華事変の過程に巻き込まれ、準戦時経済、さらには戦時経済に突入することになったのです。

その戦前の最高経済水準時の9～11年の平均人口は、現在の版図で6,870万人であったといわれております。

それに対して終戦時の昭和20年の平均人口が7,200万人といわれております。そうするとこの10年間に300万人しか人口は増大しなかったということになります。戦前でも日本は深刻な人口問題に直面いたしてござりまして、一年に100万人人口がふえるということで、危機的な情勢にさらされたといわれたこともあるわけでありまして。しかしこの戦争を含む10年間では、およそ300万人とちよっとしか人口はふえておりません。ところがそれから2年たった昭和22年には、人口が7,800万人になっております。そうするとこの2年間に、一年平均300万人の人口増加を来たしたということになります。戦争期間を含む10年間には、子供を産む生産力が停滞をしておいて、終戦直後からもりもりと生殖力が増大をした。と申しましても死ぬ人を押さえて一年間に300万人の人口増加を実現することは、ほとんどできないのであります。しかもその間の出生率はほとんど増大をいたしてござりません。ではどうしてこの二年間に600万人も人がふえたのかと申しますと、これは敗戦とともに海外からたくさんの同胞を収容したということでありまして。海外からお帰りになった人の数が600万人といわれております。他方日本からお帰りを願った人の数が100万人とか150万人とかいわれております。従つてこの海外からの引き揚げ者の数を差し引いた残りが、出生と自然増で埋まったということになるわけでありまして。そうすると簡単に言えるのは、昭和22年では戦争前の最高時に対して人口はおよそ15%増大をしているということです。

それでは人口や国民生活を支える国民所得や経済力は一体どう推移したのか。昭和22年の日本の経済力が、昭和10年頃に対してどの程度のものであったかと申

しますと、これも厳密にはなかなかとらえにくいのでございますけれども、当時私たちがいろいろな統計を使って、日本の国民所得というものを計算をし、それを戦前とかみ合わせて、いわゆる物価騰貴その他を計算をし直して、戦前に対する実質の経済活動力を動員したものでは大体 60~65% 程度だということになるわけであります。私たちはこういったようなことを調べることによりまして、これからの日本の経済をどのように正常化していくか、また拡大していくか、人口と経済力の分け前をどのように直していくかの仕事を手がけようとしたわけがあります。さていえるのは人口は15%増大をしておるのには、それを包容するわれわれの経済力は 35~40% を下がっているという事実が昭和22年にあったことです。御存じのようにこれは国民経済でも、私たちの個人生活でも同じことでございまして、たとえば月収が3万円で、5人家族の方があったといたしましょう。その方の親戚に不幸があったとかその他で、自分のところで二人を引き取らなければならなくなってきた、こういうことになったといたします。そうすると収入の方は依然として3万であるのに、食べさせたりあるいは教育をしていかなければならぬ人が5人から7人ということになりますと、一人当りの生活程度は下がらざるを得ないのであります。簡単に計算はできませんけれども、5人家族で3万円の場合、一人平均6千円ということになります。従って7人になりました場合42,000円の月収があれば前と同じくらいの暮らしが続けられる。けれども3万円で7人ということになれば、これは暮らしを落さざるを得ないことは当然であります。それと同じように、人口が15%増大をして、それを養う経済力が60~65%ということになりますと、今申し上げました例よりももっとミゼラブルなことが起るはずであります。当時私たちは一体国民一人当りの暮らしを戦前の昭和10年と比べてどのようなものであるかということ測定をするという仕事をいたしました。時の大臣にお願いをいたしまして、私どもが毎月国民に発表する統計を二つ作りしました。その統計は、現在も引き続いて出されております。その一つは卸売物価でも小売物価でもない、いわゆる暮らしの物価といわれている「消費者物価」であります。つまり私たちの個人の暮らしに直結する物価やサービス料金がどのくらい毎月変動するか、それを毎月国民に発表するという仕事です。もう一つは、農村では戦前から農家経済調査というものがございまして、全国から5千の農家を選びまして、家計をつけていただいて、農家の暮らしとか収支の関係がどうなっているかということを書いておりました。またその仕事は戦後の今日も続けております。しかし都市の勤労者につきましては毎月そういったようなことをいたしておりませんでした。しかし民主主義の世の中になったのだから、そういった調査をしなければならないというので、都市の勤労者の家計

の調査を五千軒ぐらい選んでやる、その仕事も現在まで行なわれております。しかしその五千軒の家計簿をつけていただいている人たちの平均が、ほんとうに日本の都市労働者の平均であるかどうかということには問題がございます。確かに検討すべき問題があると私も思います。中には高過ぎるという方があり、一方ではこれは低過ぎるという議論もあります。しかしそれが私たちの現在知り得るものでしかない、こういうふうに申し上げてよいのであります。

さて当時やりました私たちの仕事は、一応家計のやりくりを物量で計算をしてその物量を価値計算をしまして、戦前の昭和10年ごろの家計調査比較をするというのです。その結果昭和22年には、都市の一人当りの消費の平均は戦前に対して55%だということになりました。つまり人口が15%ふえて経済力が60~65%であれば、一人当りの暮らしはそれ以下になるわけでありそれが実証されていることです。けれども経済の車の中では、どうもこの比率がやや高過ぎるというのが当時の私たちの推定でありました、当時の私たちの暮らしは、自分たちの所得をそのまま使って、それで物を買ひ、サービスを買うという形ではなかった。もっと端的に申しますと、その当時におきましては、御存じのように、非常に経済が失調関係になっていた、戦時中に引き続いて、生活物資はほとんど統制のもとに置かれておった、政府からもらう米やその他では私たちは十分の暮らしができませんでした。そこで東京、大阪、名古屋というような大都会の人人は、いなかへ行って、物々交換をしてサツマイモを買ったり、麦を買ったり、お米を買ったりして配給に増加しておったのであります。そのもとは一体何であったかと申しますと経済学の一寸むずかしい言葉になるわけでありまして、「過去の蓄積を消耗する」ということであります。つまり昔ためて置いた財産その他を売って、それをもとにして物を買うという形で、先ほど言った55%といった関係が成立せしめておったのではなかろうかと言いたいののであります。これが当時の日本の姿であった。当時私たちの暮らしが非常に苦しかったということは事実でございますけれども、その当時といえどもやみ屋さんや会社の社長さんで、戦前以上のりっぱな暮らしをなさっておられたわづかの方がいたということをお否定しているのではありません。また戦前の、5分の1、10分の1というそれこそ餓死線上をさまようといったような暮らしをなさっておった多くの方々がおられたということも否定はできません。事実私たちが連合軍司令部に交渉して、日本は外貨がないから、食糧をたくさん下さい。また衣料の原料をたくさん下さいといったようなことをお願いをしたことがございましたけれども、もしも当時のああいっただけの関係が引き続いて、もう1、2年も続くようなことになれば、暮らしが維持できないばかりか、多くの国民が餓死に直面をしたことでしょう。つまり乏しきを分け合

うということは、言葉の上ではうまく言えるのですけれども、乏しきを分け合うという気持が国民の間に浸透するという事は、ああいった状況のもとにはむづかしかつたのであります。当時は政府のやっていることはみんな間違っているという非難がされ、物を統制すればやみが出る。価格を統制すればまたやみのものが出る、それでは何も統制をしたことにならないではないかという非難が集中をされました。

また当時日本は生産を全面的に再開しなければならないという問題に直面した。それにはオカネが要る。しかしそのオカネは、いわゆるインフレで昔に比べて非常に減価をしていたわけであります。会社はオカネがない、そこで政府はオカネを出すといったような仕事をしていかなければならなかった。結局そうするとそれが物価騰貴を促がす、こういったことにならざるを得ない、そういったことがやはり不可避的なやり方ではなからうかというふうを感じたのです。

私たちの作りました経済長期計画では、この三つの関係を何とかまともなものにしたい、そうするにはどうしたらよいかということを考えることから始めたのであります。だからこそ私たちは、これを「人口との闘争計画」とよんだのであります。

まず私たちは7,800万人の日本の人口が、今後どのように変わるかということ推定する仕事を第一着手にしました。政府の中に人口予測部会その他を作ってもらい、5年後の昭和28年という年をもとにして、28年度のちようどまん中の、昭和28年10月1日の、日本の人口が一体どれくらいになるかということ推定を試みようとしてみました。当時私たちは、人口はもはや急激な増加はこない。というのは、海外からの帰還者の数はこれからだんだん減ってくる、他方で出生率はやや飛躍的に増大をしてもその後では減っていくだろう。死亡率も低下をしても先になると人口増加はよほど小さくなるだろうと一般的に推定しておいたのであります。けれども、死亡率の動きをどう見るか、出生率の動きをどう見るかということによりましていろいろな数値が出るわけであります。これらのことを考慮し、私たちが一応公式に推計をいたしましたのが、昭和28年10月1日現在の人口が7,866万人だということでした。その後実際の人口はこれより下がって7,810万人見当になったのでございますけれども、この差55万人というのは大きな読み違いだという人もいますし、786と781という推定値はきわめて正確に近いものだ、株価の予測や、生産の予測や、会社のいろいろな仕事に比べてもよくできたものだとしても、人口推定というのは、ほかのいろいろな経済現象の推定よりも非常に正確でりっぱなものだと言われる方もあります。そこで次の問題はその人口に対して、一体どの程度私たちの将来の経済力が上昇してくればややまともな

日本の国民生活が自前のできるようになるのかということです。私たちは将来民主主義を発展するのに必要な経済的な基礎をまかなえるということを目指して論議いたしました。そのうちの一番簡単なはじき出し方は、この60~65%の経済力がどこまでくれば、国民一人当りの暮らしが22年の55%から戦前なみにまでなるかということでした。

國の経済力の中で国民の暮らしの方に向ける部門と、それから道路とか、教育施設とか、会社や工場を立てるとか、銀行を作るとか、鉄道を建設をしていくとかいった投資割合をどう考えるかということは大い問題ですが、かりにこの二つの比率が戦前と同じということになりますと、国民総生産が人口増加率と同じになったら国民一人当りの暮らしが戦前と同じになるということになります。つまり8,766万を6,900万でわってその率127%を国民総生産で実質的に昭和28年度に実現をしよう。先になれば一年1%以下だろう。経済力の方はもつとびてそこから余剰が出てくるわけでありす。この余剰は、国民の平均生活の向上にも振り向けられるし、さらに投資やその他をふやしていく源泉にもなるという考え方を私たちは持ったのであります。

ところで経済力をここまで上げるとしても、じや具体的にどのようにして上げていくか。どこに経済力を上げていく手がかりを見出していくかということは、これまた別個の問題でございます。

私たちの計算では、大体国民所得を5年間で2倍にする、10年間でなく5年間で2倍にすれば、ほぼこういった地点に到達をすることができるのであろうと考えたのです。ですから所得倍増計画は、池田さんがおやりになる前に、私たちがやると申し上げても差つかえないと思ひます。

さて、所得を倍にするには、全体としての生産を倍にする、経済活動量を倍にすればよいわけでありす。しかしすべての経済活動量を2倍にするわけにはいかない。ところで昭和22年ごろの生産の水準を昭和10年ごろと比較をいたしますと、農業生産はおよそ80%程度である。ところが明治以来の非常に飛躍的な増大を示した鉱工業生産、工場や鉱山の生産高、特に工業生産についていえば、35%、およそ3分の1というようななじめなものでございました。さらに輸出につきましては、大体5%ぐらいしか輸出が行なわれていない、こういふようなアンバランスの関係に当時の日本の経済は立っておったのでございます。といつて必ずしも明治以降の経済のあり方産業のあり方が今後の日本に当てはまるというような簡単なものではない。つまり第二次大戦後世界のうちには独立をした國が沢山でた。特に今まで植民地であった國々が独立をして、たくましい勢いで経済建設、特に工業建設に乗り出してくると想定をされたのであります。従つて必

ずしも明治方式が今後の日本にとって正しいとは言えません。しかしいろいろ計算をしたり、論じ合ったりいたしますと、どうしても今申しのべたようなその当時を中心にしておくれたいた鉱工業や貿易を伸ばしていかなければならないだろう。私たちの推定いたしましたところでは、5年間に実質国民所得が2倍になるのには、鉱工業生産が5倍ぐらいになる、貿易の方は少くとも10倍見当ぐらいまで伸びる、こういったようなことにならないといけない。農業生産の増大をもってしても、経済力が2倍になり、国際収支が自立的に均衡するということはむずかしいのではなからうか。事は決してそう簡単なものではございません。

およそこういった趣旨でだんだん日本の経済を量的にも質的にも変えていて、向上をしていこうというのが、当時私たちが作りました経済復興計画の基本的な考え方でございました。しかし遺憾ながら私はそういった計画を作ることに参画をいたしましただけで、それを実行することはできませんでした。というのは時の総理大臣の吉田さんが、こういったことは実行せぬでもよいとおっしゃったからであります。

しかしここで申し上げたいのは、これらは御存じのように画に描いたモチであります。この画に描いたモチともいうべき計画の実現の可能性についてであります。しかしかりに私たちが権力を与えられ時の産業界も労働組合も、それに協力を願う。また当時は占領政策のもとでございましたので、駐留軍、特にアメリカ政府がこういったやり方を承認したとしても、戦前よりもこれだけ低下したのを、戦前の人口増加分だけ、国民所得が上回るということを実行するということは、なかなかむずかしからうと思っております。

しかし当時ではこれらは5年後の夢でありました。しかしその基本的な考え方は決して間違っていないかと私は確信をしています。ところが昭和28年というのは当時から5年後、12年たった今の34年から見れば7年前の時点になっています。計画策定のときには画に描いたモチで、かりに実行していても実現できないだろうと信じられておりましたけれども今日についていえるのは現実の昭和28年の経済はほぼこれに近い姿になっているといえるのです。しかしその後の日本経済は更に発展いたしました。たとえば昭和33年ごろをもとにして申し上げますと、その間にいろいろのデコボコはございますけれども、国民所得は戦前に比べて180%を若干上回っているところまできています。人口は9,200万人をこしました。約30%の増加であります。そして国民一人当りの暮らしは御存じのように都市と農村をあわせまして125%になっております。しかもそれは経済全体がそれを可能ならしめるように成長し、この10年とちよっとの間に日本の鉱工業生産は8倍に飛躍した。昭和22年には一年を通じて55万トンしか鋼材は作り得なかつ

たのでありますけれども、昭和33年には900万トンを上回る鋼材生産が行なわれ、さらに飛躍的に景気がよくなり、今年度におきましては、驚くなかれ1,250万トンぐらいの普通鋼々材が生産をされるだろうと推定されます。またセメントは、その当時は一年を通じて120万トン、月平均10万トンでしかございませんでした。最近のセメント生産は、月に150万トン、年に1,800万トンという数字になり、それが道路あるいはビルディングの建設、その他あらゆる用途に使われるということになっております。その上に輸出貿易は、この10年とちよつとの間に、およそ13倍見当の拡大をしているのです。実はこういうふうになりましたのは、アメリカの経済援助と、昭和26年から発生しました特需収入が少なくとも最近までの大きな支えになったということをごさいますて、必ずしも日本みずからの経済循環がこの幸運を可能ならしめたとは思いません。けれども事後的に申しますところいったようなことになっております。

そこでいよいよ結論に入りたいのでございますけれども、それでは個々の皆様方の生活改善とか、それによっていろいろ問題になっております局面は、それほど簡単なものではない、経済全体の動きから見るとこんなにうまくいっているとは思わなかったというふうに皆様方は思われるに違いはないと思います。しからは人口問題は解決しているのか、皆様方の生活問題は解決しているのか、また今後も解決の目途が十分ありやいなやと申しますと、それは必ずしもすべてが解決したあるいは解決するとは言えないといたい。私は率直に申してこれが現在の日本の姿ではなかろうかと申し上げたいのであります。

その一つは、割合平均成長率が高いにもかかわらず、いわゆる近代的な雇用の伸び方が十分でないという点であります。この点について詳しく申し上げる時間がありませんので、簡単に問題点を指摘をするということにとどめたいと思えますけれども、ここにおいでになります永井先生が主宰をされております厚生省の「人口問題審議会」で、いろいろな角度から経済と労働と人口とをつないだ検討あるいは建議というものが政府に対して行なわれております。一昨年出されました過剰人口とか潜在失業の状態、またそれをどのようにしてなくすかという対策について、政府はもっと真剣に考えていかなければならないということも指摘をされているのであります。また先ごろ出ました人口白書にもこのような点がはっきり打ち出されております。これだけ経済が発展をしながら、実は日本はまだ完全雇用、つまりアメリカや西ヨーロッパが進んでいるような完全雇用には到達していない。これは一体何かということであります。そこで問題になりますのは表面的に就業人口が増大をしながら、雇用人口の間にいろいろ差が拡大をしている。そしてさらに地域別にも私たちの暮らしや所得の間の差が拡大しているとい

うことがあるのです。簡単にその問題点を指摘いたしますと、その一つは、日本の場合人口増加の半面、出生率の低下によって総体的に成年人口層が多くなった。つまり労働市場への供給要因が多くなって、需要要因の方が実はそれほどにならなかったという関係もあり、また近代的な大企業では生産増大をむしろ技術の高度化や、合理化や、生産形式の高度化ということに求めました結果、生産性は増大したが、雇用は増大しないというような形になっている。むしろ雇用の増加を支えましたのは、サービス産業であるとか、中小企業であるとかいう方面にあります。やや極端に申しますと、大工業では雇用数はあまり増大しない。増大をしても臨時工的なものになる。そして賃金水準は割合に高くなる。その背景には労働組合の存在がある。他方中小企業では雇用は増大をするけれども、その半面労働条件は相対的に割安になる。こういった形で雇用の吸収や賃金構造が複雑化して、いわゆる等質的な雇用や賃金構造がまだ成立していない、こういった問題があるわけであります。

そういった点をいろいろな角度から分析して、農業における人口問題や、雇用の問題あるいは潜在失業、その他広範に存在をしているいろいろな問題を摘記し、これに対する対策を要請したのが、人口問題審議会の建議でありました。

それをさらにもっと包括的に将来と結びつけて指摘したのが今度の人口白書ではなからうかと申し上げたいのであります。

日本で等質的な雇用が行なわれ得るには、なお生産水準が低いということは否定することはできません。私の思いますのに、国民経済がもう2倍とか2倍半にならないと、たとえば農業とか、林業とか、水産業に従事されている人口、あるいは家庭労働、女中さんといったような方あるいは零細企業や家内工業に従事している方、さらに小売商店の従業員その他の方々が、やや平均に近い賃金で働こうようにはならない。これだけ飛躍的に大きくなった経済ではございますけれども、まだ不十分ではなからうかと思えます。

特にここで指摘しておきたいのは、出生率が予定よりも下がった。そういたしますと、将来は労働力人口は減っていくわけでありますけれども、過渡的には高い出生率によって生まれてきた人が15才とか16才になるに従って、学校へいくとかまた労働市場にいくといったようなことから、当面の過程ではよけいに事態を深刻ならしめるということも否定はできないということです。どちらかと申しますと政府の人口問題審議会や、内閣に置かれておる雇用問題審議会は、そういった暗い面を取り出されて、これに対するもっと真剣な政府の対策を御要望になっているといえるのです。

さてこの私の思いますのに、割合高い経済の成長率を今後も日本が維持するこ

とができますならば、だんだんと賃金較差は解消していくであろう。中小企業をもっと近代化し、働く人口を多く包容しながら、高度な輸出や、高度な国内経済に対するサービスというものができらる。そして昭和30年から始まっております私たちの暮らしの変化、たとえば昭和30年以降は暮しの中で、家庭用電気製品とか中級以上の繊維製品とか高級な飲食品でありますとか、さらには家具の方面だとか、そういったものに対する需要が平均の伸び以上に高まっている。そして多くの方々がそういったところで職を見つけつつある。さらに輸出市場でも最近日本は目ざましい勢いで雑貨や、機械、工業製品の輸出に成功しています。今では日本のカメラの輸出が世界一になっている。玩具の輸出が世界一になっている。今年はトランジスター・ラジオが飛躍的に伸びております。将来いろいろな形で、高級雑貨、中級雑貨、繊維製品というようなもろもろのものの輸出が進み、さらに今度はアメリカや西ドイツを追い越して、時計も世界一になり、自動車も世界一になるかもしれない。このようになりますと、その生産構造や輸出構造の変化に従って、雇用構造というものもだんだん変わっていく。しかもずっと先になりますと、人口圧力のもとになった雇用人口、就職を希望する成年人口の数は減っていく、ですから先になれば今多くの人が考えているわけも経済と雇用に相当の変化があるように思うのです。経済政策というものはそれをもっと早めることと、計画的にやるということに集中してほしい。こういう念願は私は捨てません。やや楽観的だといわれる分もありましょうが、私はこういう面も今の日本経済にあると申し上げたいのです。もっと多くの学者さんは、必ずしもこのような見方にはまだ同感ではございません。けれども、私は萌芽的に、つまり芽としてそういった新しい方向へ、おぼろげながら日本の経済全体が進むことを可能ならしめるような経済進行がある。私たちは素質的にも、そういったことを実現できる能力を示しつつある。それが先ほど申した輸出市場や中小企業の変化になって現われるだろう、現にそういったような影響から、最近の昭和33年からは賃金較差も狭まらつつある。つまり大企業と小企業の賃金較差が少なくなりつつある、この傾向は今後も続くものと考えます。ですからここで最低賃金法を作って、それをより早めるということは、政策としてきわめて望ましいことだと思います。そういった意味から私は最低賃金法の成立に一生懸命になって、労使を説得をしてこれをとりまとめるといったような役割を果さしていただいたのであります。

将来についてはそういったような可能性もあるということを考えてほしい。それらを乗り越えていって初めて、私は民主主義的にしてしかもよりりっぱな経済、りっぱな生活というものを達成することができる。そして現にそういった変化は現われているのだと考えるのです。以上の例のほかにも最近になりますと大都市

周辺の産業では、中学や高校の卒業者をうけいれるのに不足を来たしている、雇用争奪戦というものが一部には起こっております。また日本の農業は、最近50万人ずつ人口を他の部門にはき出しつつある、こういったような姿になりつつあります。

以上のようなことは経済の指導よろしきを得れば、今後ますます進んでいくであろうと思います。つまり今まで経済をまともにするということにともかく成功したのであるから、今度は経済の構造、新生活のもとになる賃金やその他の姿を変えるという質的な政策にもっと進んでいく必要があります。経済の実力は、それを十分達成し得る条件を持っていると私は信じるのであります。

そうは申しまして、最近でも業種別の経済の差、たとえば大企業は今までつぶれないといわれておりましたが、石炭がアップアップするとか、海運業界が参りかけるとか、肥料の産業がもはや昔日のようなプラスを実現し得ないとかいったような面がある、さらに長期でみますと、もう農業は今のような形ではいきにくい、林業や水産業のあり方も変えていかねばならぬということになっております。他方遺憾ながら所得較差、生活較差というものがだんだんと日本に現われて参りまして、この間出ました経済企画庁の「地域別国民生活の分布」——これは私は非常にりっぱな報告だと思っておりますので、値段は230円ですけれども、ぜひとも皆様お買いになって、この実態を御検討願いたいと思うのであります。——経済全体が伸びながら、後進県の方がなかなか伸びないで、大都市周辺に経済活動が集約され、人口もそつちに移動しつつあるけれども、生活水準や、所得水準が均衡は実現しないで、たとえば東京都の一人当りの所得や暮らしは、日本で一番おくれた鹿児島や宮崎のそれに対して3倍になっている、東京は日本の平均に対して、生活水準指数が昭和32年を中心にして190.6ということになっている。それに対して鹿児島は66.3ということなどがあげられるのです。政府の報告は東京はイタリー並みで、鹿児島はタイと同じだ、こういうふうに言っています。遺憾ながらそういう傾向が起こっているということは事実でございます。そして今のような財政の仕組、経済政策の仕組では、むしろ大都市、特に東京や名古屋周辺にあまりにも経済力が過度に集中する傾向が強い。その結果所得は高いけれども、だんだん行き詰まってきて、しまいには仕方がないから東京湾を全部埋め立てるというようなことを考え出したり、自動車もこのまま伸びていくと3年後には、自動車に乗るよりも歩いた方が早いというようなことになりかねない。これもハッターだと思っておりますけれども、政治家が一生懸命御努力になっている後進地域の開発、たとえば北海道の開発とか南九州の開発とか南四国の開発とか、東北の開発というのはかけ声ばかりであるというような状態でありま

す。しかしこれらについても今後の量と質を考えた経済の増大を推進していけば漸次その仕組は変わっていくであろう。そうした意味での政策もより強く考え推進されねばならない。新生活運動というものも、個々の企業、個々の家計における運動であるとともに、そういったような基盤を変えるという運動にまで発展する必要があります。それは政府の財政政策、また中央銀行を中心にする金融政策、それからかけ声だけでない産業界の自主調整等々といったような施策の実行にまたねばならない。また労働運動というものもほんとうに大衆の生活を守るためには、もっと建設的な、いろいろな面の政策を打ち出す必要があるだろう、こう思うのであります。

まだいろいろ申し上げたい点もございますけれども、以上のような要旨をもちまして、人口問題と経済問題に対する皆様方の御理解を新生活運動と結びつけて今後いっそう御健闘あらんことをお願いいたしたいと思っております。御清聴ありがとうございました。

労働運動と新生活運動

慶応義塾大学教授 藤林 敬三
経済学博士

今日わが国の労働運動は、もとより人によって見方がいろいろ違っておると思えますけれども、率直に申し上げまして、一面非常に不成熟、未成熟な点の一部にあるやに思われるのでございます。言葉をかえますと、必ずしも労働組合運動が合理的にのみ展開されているわけでもございませぬ。いろいろな不合理、不成熟、不十分な点が多々あると見られるのでございます。しかし、時代とともに組合運動の経験もだんだん積まれて参ったので、長い目をもって見ますと、たとえば戦後だけを考えてみましても、この10年以上にわたる戦後の経験の中で、幾らかずつでも正常な、従って合理的な方向にいきつつあるようにも思われるのでございますが、まだ何と申しましても、それほど十分に至っていないと思われる節がございませぬ。ただし、そう申し上げますのは、欧米諸国の労働運動に関するものの考え方、見方に従って見ると、確かにそう言えるというだけの話です。言いかえますと、欧米諸国の人々の目をもっていたしますと、極端な言い方をいたしますと、わが国はまだ全く体をなしていないのではないかというような見方さえもあり得ると私は思うのでございます。しかし、ところ変われば品変わるで、私たちは欧米諸国の人間と同一ではないのでありますから、風俗、習慣、労使関係の場合におきましても同様でございませぬ。やはり多少とも重要なポイントで違っておる点があっても、これはむしろ当たりまえであると言った方がいいかもしれません。もしそういうような見方をもっていたしますと、現在の状況がまがりなりにも、私たちの場合にはこうとしかいかない状況であるのかもしれない。こういう工合にも見られますが、しかし、それにいたしましても、まだまだ現状は今後もう少しあああってもらいたい、こうあってもらいたいというようなことが多々ある状態であることは間違いないかと存じます。

そこで、そういう労働運動に私たちは何を期待するかということが一つ問題であります。どういう方向に労働運動がいくべきか、従ってまた何をそこにわれわれが期待をするつもりなのかということでもございますが、私は率直に申し上げまして、アメリカの労働運動のようなものをすぐわれわれがここで考えるわけには参りませぬ。事実問題としても、比較的、例示的に申し上げますと、皆さん御承知の通り、今日アメリカの鉄鋼労働組合の大ストライキが起きて参っておりま

して、ついこの間ストライキ中止の指示に従って80日間ストライキが停止されるという状態に今ようやく立ち至りましたが、事ここに至りますまでに、すでに4ヶ月ばかりのストライキが続行されたわけでございます。ちよっと皆さんお考えになりましてもおわかりのことと存じますが、とうてい日本ではこういう大争議が起きるはずはございません。まずまずもって起きないと考えた方がよろしいわけでございます。日本の場合には、一製鉄工場の一つの溶鉱炉の火さえも消えるかどうかということは大へんな問題でございます、日本の労働組合も、あえてそこまで事態を強硬に推進するとも思われないのが日本の状態である。こう申し上げてもよろしいわけでありまして、こういう一例を申しましても、彼と我との間には大きな相違があるのでございますが、それはさておきまして、今日アメリカでのこのような大争議が、このような形で展開されております基本的な問題と申しますのは、労働組合は賃金を上げろという。もし経営者がこの賃金を幾らか上げることを認めますと、経営はその賃金を上げる部分と、労務費、人件費のふえた部分をどこかでつじつまを合わせていかなければなりません。どちらかと申しますと、日本の場合のように、經理の操作上幾らか弾力性のあるような余地でもあれば別でございましょうけれども、アメリカ人のやっております経営は、日本に比べれば、經理措置においてもはるかに合理的に措置をされておるものと想像いたしますと、どこでも人件費の上った部分の操作はできにくい。こういうことになれば、結局鉄鋼価格のつり上げにいつつじつまを合わせなければならぬ。鉄鋼価格のつり上げということになりますと、鉄鋼は皆さん御承知の通り、石炭、電気、あるいは石油などと同じように、産業あるいは国民生活の基礎物資でございます。基礎物資の価格値上がりは、やがてそれを材料、原料にする製品の価格値上がりをもたらす。しかも基礎物資であるだけに、いろんな製品の原料になりますので、その価格値上がりの波及いたします範囲は非常に広大であるといわなければなりません。広大な範囲にわたっているんな商品の価格が多少ずつ原料価格の値上りを反映して上がることになると、非常に多くの品物の値段が引き上げられていくということになります。言いかえますと、インフレ傾向という状態がそこに出てきます。物価上昇という問題がそこにでき上がって参ります。今日アメリカの経済、政治の場面におきましても、物価の値上がりという問題を非常に不都合なものと考え、できるだけ物価を安定せしめておく必要があると考えている。また国民経済、国民生活の内部事情ばかりでなく、対外的な関係、貿易関係等から申しましても、インフレ傾向を何とか抑制していきたいという強い要請があるわけでございます。これは単に一鉄鋼業者ばかりではございません。

単に鉄鋼業者だけならば、他人のことは我知らず、自分の会社の経理さえ立てばいい、鉄鋼業界だけ何とかつじつまが合っていけばいいという考え方もとり得るわけでございますけれども、今申しましたように、基礎物資でございますし、皆さん御承知の通り、ストライキの及んでおります範囲は非常に広大なものでございまして、従って、これは単に一企業だけの問題ではなくて、鉄鋼産業全体の問題であり、ひいては国民経済全体の問題でもあるということ、こういう角度でものを考えられております。従って、現に鉄鋼経営者は自分だけの問題ならば、こんなにストライキをしてあえて自分の方も犠牲を忍んで組合と対立しなければならぬということもないと思うのですけれども、そこまでいきますと、もはや単にプライベートの企業、プライベートの一産業だけの問題ではない。こういうせっぱ詰まった大きな問題に当面しておることが、今日のアメリカの鉄鋼争議をこのように長引かせておるゆえんである、こう考えざるを得ないのでございます。

ところが、日本の労働運動のあれやこれやは、このアメリカの鉄鋼ストライキなどに比べますと、一般に知られております問題としては、それほど大きな問題が方々にあるわけではございません。むしろ局所的に一会社が賃上げのために相当に利益を減殺されるかどうか、株の配当を少し減らさなければならぬかどうかあるいは従来やってきた償却を少し手控えなければならぬかとか、そういうような影響はすぐに現われるでありましょうが、それは単なる一会社の問題であってその会社が場合によっては消えてなくなっても、日本の産業全体としてはそれほど大事なことはない。たとえば先年王子製紙の争議なるものがございまして、非常に長引いて、集団的な暴力行為まで、はなはだ遺憾千万ながら発生をして、天下の注目する状態になりましたことは、皆さん記憶に新たなところだと存じます。あの争議も社会的には非常に遺憾千万な事態をあれやこれや伴ってございましたし、王子製紙がその紙の生産をストップしたことは、何かしら各方面に影響がございすけれども、しかし国民経済全体から見ますと、また国民生活全体から見ると、実はそれほど大した問題でもないようでございます。従って、今申しますようなアメリカのような大きな争議に伴う問題と、その問題の自覚というようなことは、それほど日本の場合にはないのですけれども、しかしそれは局所的部分的であっても、これを多く累積して考えますと、やはりわれわれの場合にも、そういう問題がないわけでもない。それは規模が違う、従って性格が多少違うというようなことも考えられはいたしますけれども、しかし、そうだからといって日本の場合の労働運動はそれほど大したことはない——私は今もっぱら経済問題だけについてしゃべっているわけではありますが、かりに経済問題だけに限定して

考えましても、そう大したことはない、こう言えるようにも思われます。しかしやはり大なり小なりそういう問題を含んでおくことは事実でございます。ところが、事柄がそれほど大きくなっておりませんために、そういう基本的な問題、重要な問題、単に一会社がどうなるか、こうなるかというような小さな問題ではなくて、産業全体とし、国民経済全体とし、あるいは従ってまた国民生活全体にどのような直接ないし間接の影響を持っていくだろうかというような問題が多少とも関連的にはあるわけでございますけれども、今申しましたようなことの結果、十分これが理解されていない、また理解しようとしていない。こういうところに不成熟であると申しますか、未成熟であると申しますか、あるいは必ずしも合理的でないと思われるような事態があると申しましたことの、これも一つの関連的な事態でございます。私は、労働運動に携わる者も、あるいはまたこれを受けて立つ産業界の経営陣の方々も、また第三者的な国民一般も、そういういかげんに事態を放置していかどうかということは、確かに反省もし、深くものを考えてみる価値がある問題ではなからうかと思っておるのでございます。

そこで、基本的な問題については、やはりそういうことを考えていかなければならないというのですが、今申しましたように、基本的な問題がこのようにあまり多くの人々の関心をとらえるところまで至っていないということにつきましては、いろいろな事情がここにあるものと考えなければなりません、その一つ二つのことを思いつくまま申し上げますと、一つは、非常に残念ながらそういう問題が一般に理解されないということは、言いかえると、国の経済全体がどうなるとか、ひいてはまた国民全体の向上発展というようなことは、言葉の上ではいろいろなところで出て参りますけれども、果たして基本的な問題がどうそれにかかわるかということは、われわれの日常生活の場面で個人々々としては別にこれを考えていないというのがその実情である、こう申し上げればいいかと存じます。これは、はなはだ遺憾千万なことではございまして、ひいてはこれがわれわれの日常生活の面にいろいろ現われていることは事実でございます。これはつまりわれわれ日本人が、非常に遺憾千万ながら、公衆道德の面におきまして、ゼロであると申し上げてよろしいかと存じます。

妙なことを申し上げて恐縮でございますが、私は少し遠方に住んでおりまして東海道を上って東京に参ります。学校の関係で品川駅でおりまして、品川駅から三番線の電車に乗りまして学校に参ります。市内電車のプラットホームに立って電車を待っております、そこらを見ておりますと、あのレールとプラットホームの間にたばこの吸いがら、新聞、なわくず等ごみだらけで、ときどき東京都の日雇い労働者の方々が来られまして、スコップと竹ぼうきであの道を掃除してお

られる姿を見かけますけれども、それはほんのたまのごさいまして、絶えずあそこにはたばこの吸いがら、たばこのあきがらなどが一ぱい捨ててある。私はそう長くヨーロッパに生活はいたしません、戦争前に2年ばかり留学生でヨーロッパに生活をいたしました。その大半を私は昔のベルリンに住んでおりました。ベルリンというのはヨーロッパ世界各国でも一番きれいな都市だといわれており、しかも私が下宿をしておりましたのは、労働者街ではなくて、普通の住宅街であったせいでございますか、非常にきれいな、清潔な町でございました。町を歩いておりましたも、ごみ一つ落ちておりません。たばこの吸いがら、たばこの捨てがらなどというもの一つも落ちておりません。非常にきれいな町でございました。それと比較いたしますと、何ともきたない。品川駅は今日は非常に交通の激しいところでございます。しかも、ある意味においては、市内電車の終点でございます。旧市内に入っていくポイントでございます。ここに立ってみると、かくのごとくごみだらけであるということは、ある意味においては恥さらしである。外国人がここに立ったら、日本人は一体何という国民だろうという感じがいたすであらうという気がいたしました。こういう一例を考えますと、たばこの吸いがらをそこへポッと捨てていかななくてもよろしい、いわんやたばこのあきがらまで捨てる必要はないのではないか、ポケットに入れてうちへ持って帰ればいいのではないかと思うのでありますけれども、これを遠慮会釈なく捨てている。こういう点にはなほだ考えが足りないのは、互いに見て遺憾千万だと思ふ。私はたばこを吸いませんものですから、そういうことを申し上げているようにお受け取りかと思いますが、そうじゃございません。やはりこういうことが一事が万事で、社会的にももっと広い意味でものを考えるという習慣がこの間にないということの証拠ではないかと思ひます。要するに、そういうところにもそういう工合に社会性の未成熟が現われておると考えております。やはりもう少し広く筋道の立ったものの考え方と態度があつていいのではないかと思ひます。

戦後の労働運動に期待するものは非常にたくさんあります。たくさんありますが、これが労働者の集団的な行動であり、労働組合という団体を基礎にしておる活動でございます。しかも、今はまださほどでございせんけれども、だんだん力を持ちますと、アメリカの労働組合のような偉大な力を持つようになるところにいくかもしれないのです。今日アメリカの経営者、あるいは一般の学者の中にも——これは最近のことではございせん。今から10年も前に、ついこの間になりましたハーバード大学のスリプターという有名な経済学の先生がとなえた言葉だというふうに伝えられておりますが、——労働主義、あるいは労働主義経済、レーバリズム、レーバリストイック・キャピタリズムというような言葉が使われて

いる。それは、今日のアメリカの経済の中で労働組合というものは無視できないばかりでなく、労働組合は非常に大きな力を持ってきた。それでこの労働組合がある意味においてはアメリカ経済全体を動かす最大の存在であるのだという意味でこういうような言葉をこういう有名な人が使い出したくらいであります。それに比べれば、今日わが国の労働組合はそれだけの力を持っているとは認定できません。しかし、あるいは今後日本の経済の発展とともに労働組合も順調な発展を遂げますと、そういうところにかぬとも限りません。遠き将来のことはともかくとして、現在はそれほどでないのでありますが、しかし多少ともそういう方向、そういう傾向、影響力というものを持つものといえますと、私たちはここでやはりそれが全体的にどう影響を及ぼすかという問題については、それに関与する者も、関与しない者も、このことを十分よく考えた上で事を処していくべきではないか。自分さえよければ、あるいはうちの会社だけがどうであるか、こうであるかというような考え方で事を処すべきではないのではないか。しかし、まだ今はどちらかといえば、そういう段階にいてないことも事実でございます。客観的に申し上げますと、まだそこまで全体的に成熟しておるわけではございません。その話はある意味においては少し早過ぎると思えないわけではございませんけれども、やはりそういう問題意識を少なくとも少しずつは持っていく必要があるのではないだろうか。ところが、そういう意味で期待的に申し上げると、どうも日本の労働運動にはそういうものが比較的少ないと考えたいのであります。たしかに私は労働組合運動をそう100%に弁護したり、あるいは味方に立ってものを言ったり、考えたり、従来いたしてきておりません。言うべきことを言うという態度で組合運動を見て参っておる者の一人でございますが、そうかといって、私は労働組合運動を何でもかんでもこきおろそうと思って皆さんの前でお話を申し上げているわけではございません。というのは、何がしかこれに期待すべきものがあるという感じを持っておりますので、何でもかんでもこきおろそうというつもりはないのでございます。そういう意味で事態をながめますと日本の労働運動につきましては、実はいろんなことが批判的には言われております。経営者の方々の方からも、あるいはまた政府筋の方からもいろんなことが言われております。いろんな批評がなされております。なるほどその批評、批判の中にはくむべきものもあると思いますが、何か相手方を押しつぶそうとか、少し強硬な態度に出れば、それを弱めることができようとか、そういう意味だけで批判がなされているような向きもないわけではない。これは正直に申し上げると、いささか公正の感はずれているといわなければなりません。客観的な存在としての労働組合のまことに順当な発展ということは、これは今日のわれわれとしては、

やはり当然考えるべき筋のものでございます。ただ不成熟のゆえをもって若干至らないところがあちらこちらに事態として現われる。こういうことがあるだけでございます。そういう批判を100%のみ込むわけには参りませんけれども、私はやはりその批判の一部もくむべきであるということを申し上げて、組合運動の順当な成長を考えていこう、こういうことが、どなたが事態を考えても正しいのではないだろうかと思っておるのでございます。

しからは労働運動に何を期待するかということでございますが、一つは今も申しましたように、われわれ日本人の一つの重大な欠点は広い視野でものを考えることがないと申しますか、何か四畳半の中に入り込んでしまったようなもの考え方、井戸の中に入ってものを考えて、そこでお互いにあくせくしているというような感がなきにしもあらずでございますので、もう少し広く全般的なものの見方と態度というようなものがこの組合運動の中で行なわれていくべきではないか。ところが現在の労働組合運動は必ずしもそういうことになっておりませんので、それをそういう方向に持っていくにはいろいろのきっかけがあり得ると思えますが、その一つのきっかけに、私はこの新生活運動などというものも大いに取り上げて、考えられてしかるべきではなからうか、こういう意味で、率直に申し上げまして、非常に結びつきの悪い課題でございますが、私は少なくともそういう意味で、新生活運動が労働運動と密接な結びつきをすると申しますか、労働組合が新生活運動をみずから問題としてもっともっと積極的にまじめにこれと取り組んでいくことがあってしかるべきではなからうか、こう思っておるのでございます。

なぜかと申しますと、何と申しまして、私たちのよってもって立っております一番大きな基礎的な事実が家庭生活でございます。働く者は家庭生活の一員として、その世帯主として家庭の全体の幸福を自分が責任を持ってしよっているわけでございます。その世帯主である労働者は家庭生活に十分な足場を持っております。十分筋の立った家庭生活の方向、そして自分自身はその一メンバーとしてまたその家庭の主宰者としてその家庭の行き方、方向をみずからもきめ、その中にはまり込んでおり、そしてそういう家庭生活の中で十分な足場を持って安定的に日常生活を営んでおる。これはうまいものを食うとか、まずいものばかりしか食えないとか、そういう問題もございませうけれども、やはり何をおきまして、たとえ二尺三間の小さな住居に住み、まずいものを食ひ、貧しい服しか着られないというような生活状態の中でも、家庭生活をどのようにし、どのような方向に持っていくということについてははっきりしためどが立っているということは、人間の日常生活において一番重要なことであるのではないかと思われるのでござ

います。

私は、そういう調査研究などもかねて昔からいたしたい、いたしたいと申しながら、だんだん年をとってしまい、年数がたってしまい、いまだそういうことを研究者としてほろくにやったことはないのですが、今からもう20年も前の戦時中の見聞をお話ししましょう。戦争が始まりまして間もないときに、私はある軍需工場の見学に参りました。ところが、そこに非常におもしろい方がおられました。労務管理上労務対策の一端をになっておられる方で、若い労働者の指導に当たっておられる。ところが、その人の体験談をその工場で伺って、なるほどと思つて感心いたしましたことがございます。その人は絵をかくこともできれば詩をつづることもできるという非常に多才な方でございました。そこで、若い少年工たちに絵を学びたい者には絵の手ほどきもしてやる、歌を作りたいという人間には歌の手ほどきもしてやろうというわけで、人によっていろいろやっている。ところが、すべての若い労働者ではないのですけれども、その人に私淑をしてついできた青年の中には若干かって家庭的には不良少年でどうにも手のつけようがない、親兄弟も、どうもこの手はしようがない子供だと思つた子供がある。その子供にその人が接して絵を教え出した。ところが、自分が絵をかけるなどということも思つてもいなかった子供が絵筆をとつて、絵をかき出した。すると、だんだんおもしろくなって、熱心になって、ひまがあると絵をかくようになる。そういうことになって以後その少年はすっかり不良少年のような態度がなくなつて、まじめな少年工として工場に働いて、ひまがあれば絵をかくというような子供になってしまった、こういふわけであります。もう一例申し上げますと、戦時中で、その工場もだんだん殺風景になりつつある時代、昭和14、5年のころであったのですが、その人があるとき労働者に呼びかけて、何か演芸会をやろうではないかといふので、急ごしらえの舞台装置を作って、これこれの出しものでやる、そういう指導までその人がやった。

そしてだれが何の役をやるかというような役の割り振りをやつて、夕方作業時間が終わると残つて芝居の予行準備をする。たまたま主役に当てられた労働者が40近い労働者であつたそうなのですが、非常に能率の悪い、じだらくな、なまけ者の労働者であつた。それが主役に当てられた。何を思ったか、仕事ほろくにしないなまけ者の労働者が、その与えられた役については非常に熱心で、初めから作業が終わると、夕方、うちへ帰る前にみんなと一緒に予行準備をやる。そうして何日かそういう準備をいたしましたあげくに演芸会が催されて、そこで一役買って、多数の労働者の前で熱演をやつてみせた。大へん喝采を博した、こういふことがあつたそうでございますが、その後、それを契機にそこに集まつた連中が

もろろと劇団のような格好で、今後とも努力をして、また次の演芸会には何か別のものでやろうではないかということになった。そうこうしているうちに、この非常になまけ者であった労働者がすっかり変わってしまって、非常にまじめな熱心な働き手の労働者になったということです。私はこの話を聞きまじるときは、まだその本質には気がつかないのですが、人間というものは、事のいかにを問わず、毎日目をあいて息を吸って飯を食って、うちにブラブラしている場合だるうが、工場、会社に行っている場合であるうが、何か心のどこかに、その生活そのものの中によりどころがあるかないかということが非常に大事なポイントではないかと感じました。絵をかくことであるうが、詩を作ることであるうが、演劇にふけることであるうが、碁、将棋、マージャンでもいいかもしれませんが——マージャンをよびてやっけて一睡もしないで、翌日青い顔で会社へ行くなどというのは少しおかしいので、そういう意味においては、趣味はよるしく高尚であるべしということになるうかと思いますが、——やはりまじめな意味におきまして、一つのよりどころというものが必要であるのではないか。ことに若い青年たちの場合にはまだ十分のよりどころを持っていない。戦後の今日は昔と違って非常に自由であるとか民主主義であるとかという世の中でございます。旧道徳は弊履のごとく捨てられている感じもなきにしもあらずの時代でございます。従って、わけでもこういふ若い人たちにとっては何か一つのよりどころが必要である。これは単に若い人ばかりではない。30代、40代に近いような労働者の場合でもやはり同じことが言えるのではないか。何かそこに一つの柱が必要であるのではないか。さらにこのことをもう少し拡大して申し上げますと、日常生活、しかも家庭を持っているものについては家庭生活が何と申しましても、一番大事なポイントでございます。この家庭生活について一つのよりどころといえますか、生活の仕方でもこうしかじかだというきわめて明快なる方向を自覚し、これを日常生活の中に事実営んでおるということが、百の説法以上に効果があるのではないか。倫理道徳を説く人は非常に多いと思います。しかし私は倫理道徳を説く前に具体的に、人によっては絵を覚える、あるいは人によっては演劇をやってみる、あるいは人によっては尺八を吹いてみたまえ、また人によっては南国土佐じやありませんけれども、お前の国はどこだ、君の國の歌でも歌ってみたまえと言った方がいいかもしれない。そういうことが、むしろわれわれの日常生活にいい影響を与え、1日24時間の生活の中に生きがいを感じさせる方向の柱が立つということであって、それが全体の生活を規制していくことになると思います。要するに現在の私たちにはそういう全体の日常生活を規制して引き締めていく方向がないのが一番問題です。それがぶらぶらして何でもかんでもやるという

態度、合理的にものを考えない、いいかげんなことしかしないという現状の一番大きな理由ではなかったかと思えます。私は新生活運動の専門家ではございませんが、私のこういう運動に対する期待は、繰り返して申しましたように、何か一つの柱をそこに立てることです。私はこういうことについて、実は大きな期待を持っております。

かねて新生活運動は、人口問題的に申しまして、また経済的、家計的に申しまして、いろいろの効果が付帯して現われるはずでございますから、一石二鳥一石三鳥というような効果をこれでねらい得るかと思えますが、私が労働運動との結びつきで申し上げたいと思えますことは、そういうこともさることながら、今申しましたような事態をここに植えつけていくことが必要だ、しかも労働組合がこれを熱心に取り上げていくということになると、組合員自体がそういうよりどころを持った人々であるということになれば、おのずから労働組合のものの考え方にも全体として何がしかの影響が現われてくるのではなからうかと私は思うのでございます。こういう面から申し上げますと、あるいは経営者の中には従来労働組合運動の行き方に苦虫をかんでおられる人たちは、それが多少とも改まっていくというならば、陰に陽にこれを大いに推進したいという下心あつての態度で新生活運動の発展を支援されたり激励をされたりしている向きはあるかと思えますけれども、私は実はそういう下心を必要としないと思うのであります。もっと公正に考えて時代の発展を理解すればよろしいのではないか、そうすれば、今申しましたような効果がおのずから現われるだろうと思っておるのであります。そういう意味で、今後労働運動を大いに推進したいと思えます。

つい先日——今から2、3週間前でございますが、私は京浜地区にある、ある会社の社長さんとお話する機会がございましたが、その社長さんがいわく——これはおそらく日本鋼管の影響を受けられたんだと思えますが、——私の会社の従業員は新生活運動なるものに関心を持ち出して、今やりつつある。時間がございませんでしたので、あまり詳しくは何いませんでしたけれども、大へん結果はいいということです。経営者から見ても非常に好ましい事態である。今さらながら、こういうことならばもう少し早くから会社としても考えるんだったといわぬばかりの印象を率直に漏らしておられました。私は、それは当然のことではないかと思うんです。従業員、組合員のものの考え方なり態度なりというものがもっと推進していけば、当然そういうことになるのではないかと私は考えるのでございます。そこで、そういうことを期待しながら日本の組合運動がもう少し合理的なものになっていくということも基礎的には私はここに期待し、かつ考えたいと思っておるのでございます。

先ほどは、労働組合運動について非常に不成熟であるとか、不十分であるとか、不合理であるとかいうことを一般的な言葉でばかり申し上げました。ここで具体的に少しくお話を申し上げてみたいと思います。あるいはお集まりの皆さんは、私以上に労働組合のことについては自分たちの問題として、すでにあれやこれや御経験もお持ちの方も多いと存じます。しかし、私のような立場のものが見ますと、一体どういうことになるかということをお願いして、あるいは参考にならぬか、また場合によりましては、御参考にさせていただいてもよろしいかと思えますので、若干申し上げることにいたしたいと存じます。

先ほども申しましたように、アメリカの鉄鋼労働組合に例をとりますと、組合は百何日もストライキをやった。しかもアメリカの鉄鋼業界の大手十何社かを含めて溶鉱炉の火を消したわけでございます。鉄の供給は非常に減っておる。新聞の伝えるところによりますと、アメリカの鉄を材料にする産業はたくさんございます。その中でも一番の花形産業であり、大きな産業は自動車工業でございます。自動車工場では作業ができないということで、影響がそこに及んでいるわけでございます。アメリカのようなところで自動車製造が少しくらいストップしても、かえっていいかもしれないのでございますが、それにしても、客観的にはこういう影響が波及して参るくらいストライキの影響は大きいわけでございます。そしてもう一つは、アメリカの鉄鋼労働組合は、私は今正確に最近の数字を調べておりませんが、戦後はアメリカの労働組合の中では一番大きな労働組合であります。すでにこの労働組合は今からちょうど10年前の1949年に大争議をいたしました。このときも80日近く溶鉱炉の火が消えたことがあります。このときの争議以来の、今日それ以上の大争議を展開しているわけでございますが、この労働組合は今から10年前にすでに115万人ぐらいの労働者を組合員に持っているわけでありまして、百万人以上の組合員を持つ大労働組合であるということでもあります。今日ではこの組合員がもう少しふえているのではないかとと思われる。そしてアメリカでやはり最大の労働組合であるのではないかと私は想像いたしておるのでございます。そしてアメリカの製鉄工場、大小多数の工場があるようでございますが、この多数の製鉄工場に働いている労働者を打って一丸とする組合として組合員を擁しておる組合でございます。そしてこの組合がたびたび賃上げ要求に立ち上がり、経営者がこの要求を入れないということになると、全部ではないようでございますが、大手筋十社余りの会社、工場の溶鉱炉の火を消して、今日まで交渉して参るといふ状態になるのでございます。ところが、日本の労働組合は組織が違ふ。御承知の通りあの巨大な北九州にある八幡製鉄は単にあそこに工場を持っているだけではございません。ほかに工場を持っているわが国には八

幡だけではなくて、日本鋼管であるとか、富士製鉄であるとか、神戸製鋼所であるとか、川崎製鉄所であるとか、いろいろの製鉄会社がございます。どちらかと申しますと、神戸製鋼であるとか川崎製鉄所というのは二流会社——二流というどちまうと語弊がございませうけれども、八幡とか富士とか日本鋼管という大製鉄メーカーに比べれば、その次に位する会社であるということです。

先日私は神戸に参りまして、この工場をちらっと見ました。大阪の方から参りまずと神戸に入る手前のところ、省線の方からいえば、省線の下、浜側にあるのでございませう、次位の会社ですら、これを一つとってみましても巨大な工場でございます。ところで日本の場合には、そのほかにもいろいろ製鉄工場があると思ひますが、それぞれの製鉄工場、製鉄工場別に労働組合がある。もちろんその労働組合は上部団体としておのおの鉄鋼労連という労働組合を実は持つております。しかし日本の場合には、会社は会社に別の労働組合がある。北九州の八幡製鉄所など非常に大きな工場でございます。私は実はあそこに入ったことはないのですけれども、汽車で通りますと、えんえんとして汽車が八幡製鉄所の横を通ります。非常に膨大な工場でございます。あそこに数万人の従業員がいるわけです。ああいづところの労働組合になりますと、組合は一つだけでなく、二つか三つくらいあるようでございませう。日本の場合には、皆さん御承知の通り同じ組合でも第一組合、第二組合、場合によりましては第三組合というように組合が分れて存立しておる例も多々あるわけでございます。一つの従業員で組合が二つも三つも分れておるといふ状態でも、一応基礎としては会社々々に労働組合がある、その上部団体がある。組合運動はこの上部団体が大体采配をふるう、旗を振るといふことになるのが通例でございます。しかし、旗振りかどのように旗を振りましても、旗を振る通りに組合が動いておるかという点、必ずしもそうでもない。そうでもないために、旗を振る方もいろいろ振り方も問題でございまして、むづかしい。そう簡単に旗を勢いよく振りさえすればいいというものでもないというのが日本の組合運動でございませう。ところが、アメリカあたりはそういうのではないわけです。組織が違うといふことになるわけでありませう。同じ労働運動と申しましても、労働運動が行なわれます基礎としての労働組合の組織はまるっきり違ふ。

アメリカの場合には、鉄鋼労働組合というものが一つあって、その組合がどうする、こうするということをきめれば、その通りに動くわけでありませう。ところが日本の場合には、全般を統制しているかのごとく思われる上部団体が賃金をどのように上げてもらおうではないかとみんなで相談をしてきめる。その要求をどういう場合にしてするが、これも簡単にきまる。各社別に賃金の交渉に入る。経

営者がこれを簡単にば入れてくれない。それではストライキをやるかというあたりまでいきますと、ストライキをやるかと言う人もいるしというので、やるかという組合もあるにはあるかもしれないが、おれのところは今とてもストライキをやれそうもないから、営者がなかなか言うことを聞いてくれないのは遺憾千万だけれども、どうもストライキをやることにはついていけないという組合もある。そこで足並みが違う。従いまして、強硬に旗を振りさえすればみんながついてくるかと思うととんでもない間違いだということになるのが日本の状態であります。

最初に申し上げましたように、アメリカではあんなストライキが行なわれませんが、日本ではああいうストライキがますます行なわれなくなっていくでしょう。もし行なわれたらどうなるか。言いかえますと、強引に組合運動を展開したらどうなるかという、脱落者が出るということになります。初めは、あんまりそう言うからとついていって見たけれども、とてもついていきまれないから、私の方はやめましょうという人間がそこへ出てくるわけであります。もともとそういうような状況が基本的にございまして、これは単に製鉄事業、製鉄業界というような全体の場合だけでなく、一つの場合を考えてもそうでございます。先ほど王子製紙の争議ということを申しましたが、王子製紙の争議を皆さんお考えになりまして、あの争議が起きてしばらくすると第二組合ができた。第一組合と第二組合が対立をした。もともと争議を強行した第一組合は、分裂したやつを裏切り者だという感じで、住宅街においてもいやがらせをやる。今度は争議が一応おさまった。おさまったわけではありませんが、一応ストライキはやめになってみんなが働き出すと、第一組合にいた人間は職場の中へ入れぬというようなことを言う。日本人的な感情から言うと、お前たちがおれたちと仲間はずれになるように分れていくものだから、自分たちも幾らか弱腰にならざるを得ない。自分たちの要求を営者が取り上げてくれないのはお前たちのせいだということになる。営者の方も憎いけれども、それ以上にお前たちが憎いんだということに日本人としてはなる。第一組合と第二組合が対立した場合には、第一組合はだれを敵としてというか、相手として戦っているのかという、営者と戦っているはずだと思ふんですけれども、実態は第二組合と戦っている、組合同士がけんかをしているわけです。この8月19日にも、皆さん御承知の通りに、亀戸の田原製作所で争議が起きた。ああだごうだといって集団的にもみ合っている中に警察隊が入っている。とうとう第一組合員のある人がそのいざこざの中で死んでしまったという事件がございました。労働争議をやっているうちに人が死んだというのはおそらくこれが初めてでございます。

それから労働大臣も中小企業の争議がかくのごとき遺憾千万な事態を伴ったというので、警告を発するような態度に出ているわけです。しかし、日本の労働運動の場合は、中小企業の場合だけにああいふ集団暴力行為というようなものがあるかという、決してそうではございません。王子製紙のような大工場の場合だって、集団暴行事件というものはある。何も中小企業に限ったことではございません。だから、私はどうも労働大臣の声明はおかしいと思っておるのです。そのもっと前の例で申し上げますと、皆さん御承知の通りに、日産自動車では経営者も非常に強硬で、バリケードまで作って、会社の中へ入ってきちやいかぬというようなことをやって、第二組合ができた。第一組合と第二組合が目のかたきのように、それこそほんとうに敵同士のように対立抗争したというような事態が起きたことがある。こういうのはだんだん少くはなりつつあるのですけれども、日本の場合には、第二組合がすぐできるというのは必然的な傾向でございます。もともと日本の労働組合は、会社々に労働組合があるという形をとっております。そうすると、日本の労働組合の運動のやり方いかんでは、組合員は従業員でありますので、その従業員の諸君が組合員として、組合運動の旗振りの方に向かって行動を一にしても、どうもこういうことをいつまでやっても困るのじゃないかというような若干の足を踏んだ批判的な考え方をする者が出て参ります。というのは、争議が長引いたり、争議が非常に激烈になったり、経営者の態度がなかなか強硬で、争議が急にはおさまらない、従って組合もまた強硬な態度にならざるを得ない、経営者はますます強硬であるということになりますと、いつまでもこんなことをやっておっても始まらぬのではないか、またこんなことをいつまでもやるべきではないのではないかということになって、第二組合がそろそろできそうな格好に必ずなる、こういうのがわが国の状態でございます。

そこで私がここで申し上げたいと思っておりますことは、欧米諸国の組合運動と非常に違う点は、今言ったように、組織から違っていて、向こうはまずそういうのではないのでございます。全然ないかという、そうでもないんですけれどもたとえばイギリスのような国に参りますと、労働組合と申しますと、みんな全国的な大きな労働組合でございます。日本のようにちっぽけな20人で組合を作って、しかもそれが独立の労働組合であるというようなことは、イギリスの労働組合としてはあり得ない。本部はロンドンにあって、その末端はイギリスの端っこに労働組合員がいる。中心に本部があって、本部の下には全国組合があり、地方々に組合の支部のような格好の組合がある。そこに組合運動を主宰する者がいるわけです。つまり地方の幹部がいる。その下にもっと狭い意味の地区の組合運動の推進機構があって、そこにも地区の幹部がいるわけです。それから今度は個々の

会社、工場に働いている組合の組合員がいるわけです。しかも地区組合の幹部というのは日本と違いまして、従来はどこか近所の会社の従業員であった、組合員であったという人がなっているわけじゃない。そうすると、人間的なつながりからいうと、たとえばここにある工場があって、その工場の何人かの労働者がその組合の組合員である。これまではいいんです。その自分たちの組合が所属しておる地区組合の幹部は何の何がしてある。それは自分たちの仲間であった人間でもないし、その会社にいた人間でもない。人間的な関係からいうと、別に何の関係はない。向こうは組合の役員として、地区の指導者として任命されてそこへ来ているというだけの人間であります。人のつながりが無い。何かその組合の末端の職場の諸君がああしたい、こうしたいと思うことをその上に伝えるのです。もちろんそこだけで決裁される小さな問題もあるが、少し大きな問題になると、ずっと本部の上の方まで通って決裁を受けてこななければならない。それから下の方へおりてくるには、何日か時間もかかるし、そういう全国組織になりますと、末端々々の組合員の言うことを聞いておったんじやハチの巣を突ついたようになりますから、大きな組織になるとなかなか末端の言うことを上の方ではいれてくれないということです。これは官庁ばかりでなく、大会社の場合を考えてもそうです。職制がずっとあって、そうして職制の末端にいるたとえば職長というような人が自分勝手にこうこうしかじかにすべきだというような意見書みたいなものが課長から上の方へずっといって、大きな問題は社長決裁までいければ、社長までいく間に途中で消えるかもしれませんし、社長までたとえ持っていっても社長は必ずしもうんと言ってくれるとは限らないということになる。となると、こっちは一生懸命熱を入れてやろうと思っても、何のことだということになるおそれもある。

イギリスの組合運動の場合も同じだ。そうなりますと、末端の諸君が、自分たちは組合員だけれども、組合員の機構を通じていたんじや話にならぬ。要求は自分の現実にぶつかっている問題に関連するんだから、今の問題をどう解決するかという問題に従業員組合の方でぶつかっているのに、いろいろ上の方へずっといって、それからおりてくるんじや全然だめだということで、組合員ではあるけれども、組合の言うことなんか聞いていられないというので、勝手に行動することがある。組合と組合が戦うわけじゃないけれども、そういう動き方もあるにはある。これとわれわれの国の場合とはいささか事情が違ふと思います。

日本の場合にはどちらかというと、組合運動は組織の上からいいますと、組合員の運動ではあるが、組合員はいつでも特定の会社の従業員である。それは外国の場合だって変わりはないのですが、日本の場合には、組合自体が労働組合とい

う看板ではございませけれども、率直な話が何何会社の従業員の組合です。労働者というのは、その職のいかんを問わず、さらにまた雇われている人のいかんを問わず、どういう雇い主のもとに働いているかということを問わず、賃金、俸給をもらっている人間が労働者である。欧米諸国では、そういう意味で、職が同じだから一つ組合を作ろうではないか、雇われている産業が同じだから労働組合を作ろうじゃないか、こういう形になって組合ができおるわけです。その場合、いずれも雇い主が何々株式会社というようなことは問題ではない。ところが日本の場合には、あるのは何々株式会社の従業員であるということで、それが先決問題である。そして会社々々で労働組合が組織されていて、名前は労働組合ですけども、労働組合という前に、むしろ従業員の組合である。そしてこのことをもっと率直に申しますと、たとえば同じ産業であっても、うちの会社とよその会社普通日常語をそのまま使いますと、こういうことになります。経営者がそういうことを口にされるのならば、その会社の主宰者ですから、うちの会社とかよその会社というのはわかりますけれども、そうじゃない。従業員の末端の諸君もうちの会社とよその会社——何も自分が会社をやっているわけじゃない、雇われて、働いて賃金をもらっているだけだということに、これはおれの会社だ、おれは何々会社の従業員である、会社が違えば他人だといわんばかりの感じを持っておるのが従業員だ。労働者と自称するのはおかしいのです。そんなつもりはないのですけれども、実は従業員というのです。言いかえますと、日本の場合には、そういう組合運動の組織の中には日本人らしい、いわば日本的な意味における人間関係が非常に密接に結びついている。われわれはそういう人間関係から切り離されていないというのが実情である、こう申し上げることができます。組合を作る場合でも、これを断ち切ることはできない。

これは非常に不合理千万だという例を一つ一番わかりやすい例で申し上げますと、皆さんには関係のないことでございますが、一つ公務員の場合をお考え願いまししょう。皆さんの親戚の中にはそういう国家公務員である方もおられると思ふ。ある者は通産省に籍があり、ある者は労働省、ある者は農林省、大蔵省であり、文部省であり、法務省である。いろいろ役所は違う。しかし、国家公務員の賃金、俸給、その他の労働条件はどうしてきめられているのか。今日の制度は皆さん御承知の通り、人事院制度なるものがあって、人事院総裁が物価、生計費の変動及び一般の民間の賃金水準の変化、こういう三つの点をよく考慮して、一年一年その推移を考慮しながら、国家公務員の給与を引き上げなければならないというならば、幾ら幾ら賃金を引き上げるべきである。ここをどうすべきであるということを政府及び国会に勧告するという制度になっている。その人事院総裁の

勸告なるものは、一般行政官についていえば、農林省の役人であるが、文部省の役人であるが、大蔵省の役人であるが、区別なくこれを取扱っているわけです。なるほど職種別には、税務署の役人であるとか、あるいは国家警察のおまわりさんであるとかという特定の職種については別号棒立というものがあるようでございますが、一般の行政官については、何省の役人であろうが、無差別に勸告が出され、また政府の給与の立て方も、これを無差別に立てているわけでございます。

労働組合というものが何を一番大事な問題としているか。国家公務員の場合には職員組合というものがござりますが、これは民間の組合と違ひまして、団体交渉権というものを認められておりません。従ひまして、そこへいきますと、ちょっと例が不適当な感なきにしもあらずでございますが、しかし団体交渉権も認められていないというならば、それだけにますますある意味においてはこの国家公務員の諸君が一致団結をすることが必要だろうと思われる。もっと言いかえますと、その団結は大きい団結であってしかるべきように思われる。ところが民間企業の場合と同じように、公務員といえども同じく日本人なんですから、いかにも日本人らしく、自分は労働省の役人だ、お前は通産省の役人だ、何か役所が違つと、お互いに他人であるかのごとく思つておる。それじゃ労働大臣が労働省の役人の給与をきめておられる、通産大臣が通産省の役人の給与をきめておられると、しかも労働省の役人の給与と通産省の役人の給与が、主宰者が違つて違つて違つているんだということになると——民間企業ならさういうことですけれども、——お前とおれは違つんだ、同じかまの飯を食つているわけじゃない。おれは労働省のかまの飯を食つている、お前は通産省のかまの飯を食つている、お前は文部省の役人じゃないかという筋はあるんですけども、この場合には、それが全然ないわけです。役所は七つあるが、十あるが、中央政府は一つだ。私は実は非常におかしいと思つております。そしてこういう話をあらゆる機会に説いているんですけども、国家公務員の組合は一般の労働組合と同じようになるうとしております。これはなぜか。これがやはり日本なんです。民間企業の場合には、国家公務員などと比べて、幾らかその会社々々の諸君が労働組合を作ることについては、それは理由がないわけではありません。たとえば同じ紡績会社といつても、富士紡と旧清紡と鐘紡とは違つ。皆さん御承知のように、鐘紡は去年非常に左前で、従業員の給与を一割下げなければならぬというような苦しい思いをしておつた。ところが、よその会社では苦しいには苦しいけれども、鐘紡ほど苦しくないといつて涼しい顔をしている。鐘紡の従業員と、東洋紡の従業員とはああいう問題になると非常に違つ。だから同じ紡績工場の労働者であるとい

ってみたところで、これは始まらぬではないかということになりますけれども、国家公務員にはそういうことはないと思う。にもかかわらず、おれは労働省の役人だから、労働省の場合には労働省職員組合、いわばけつの穴が非常に小さいということになりそうでございますが、しかしこれをよく言えば、日本人的な人間関係だということになりそうでございます。そういう点では、日本人は欧米諸国の人間と違っておることは事実でございます。

個人主義的、他人行儀、お互いにものを考えていない。第一に内と外を分けうちの会社である、うちの工場であるとかという感じを従業員が持っておられる。お互い同僚同士、また経営者、雇い主との関係というものがやはりうちの関係なんですね。うちという関係は何か人間的な関係をここに持っているという関係なんです。こういうものが私たちの生活の中に非常に根強くにんじておりますゆえんは、これが日本人的な非常に大きな特徴だと思いますが、単に日本人だけでなく、朝鮮人や台湾人を含めた東洋人の一つの傾向かとも思われますけれども、他の国の諸君はともかくとしまして、われわれの場合には、そういう傾向が非常に強い。これはもう明らかです。この人間的な関係でものを処しますと、社会党の代議士じゃありませんけれども、まあまあというような問題も出てくる。そう理屈ばかり言わないでもということになる。そう目にかど立ててものを言わぬでもいいじゃないか、人間的にはそういういい面がある。私など労働委員会で中立委員として労使のまん中に入っていますから、両方の意見を聞いておりますが、ピタリ一致することはまずまずない。あちらを立てれば、こちらは立たず、両方がけんかする中に入っておりますが、まあまあと言わざるを得ない。従って、筋を立てようとなると、なかなか立ちにくいんですけども、私自身がそういうことを言うのはおかしいですが、これを日本人的に扱いますと、割合に扱いやすいものである。

これに筋ばかり立てていると、アメリカの鉄鋼労働組合のストライキみたいになる。日本でああいうものが起きないゆえんは、組織上の問題もあるが、問い詰めてこれを言えば、やはり日本人的なんですね。人情的なんです。人間的であるということは決して悪いことではない。人間的であることをやめて非常に冷酷な動物になるわけにもいきません。冷酷な人間になれと言ってみたところで、これは始まらない話でございますが、しかし、それだけに合理性を抹殺しておるといふ面もある。われわれの行き方としては、情におぼれている面が非常に多い。漱石の言葉ではございませんが、情にさおさせば流される。ものの考え方、生活態度、公の機関の運営、団体行動、あらゆる面でやはり情におぼれている——というところと少し何か言葉が妙でございますけれども、そういう面なきにしもあらずであ

る。もう少しこういう事態から欧米諸国のまねをして、完全に足を洗うわけには
いかないにしても、幾らかでも筋を立てていく必要がある。まあまあばかりでな
くて、もう少し合理的な、もうちょっと筋の通った方向へ行くべきではなからう
か。そして労使関係も、人間的な情におぼれた労使関係ばかりに基礎を置いても
のを考えるのではなく、やはりもう少し筋を立てて考えるということが必要であ
るのではないか。デモクラシーという言葉がたびたび使われますけれども、果た
して日本人にほんとうにデモクラシーというものが根をはやし得るのかどうかと
いう疑問を持って考えれば、そういう疑問も成り立たないわけではない。政治を
見てごらんください。政党を見てごらんください。まじめに考えたら実は非常におか
しい。大ボス、小ボスが寄りあってブツブツけんかをしてやっているというのが
日本の政党であり、政治であるわけです。それは単に日本の与党ばかりではあり
ません。社会党も、共産党の諸君といえどもそうでしょう。これが日本人であ
る。ただ、しかし今日の状況ではもう少し筋を立て、合理的な面をふくらまして
いく必要があるのではなからうか。そういう意味では、先ほどの論点に帰しまし
て、労働組合の諸君が組合運動の中で、というより組合自体が各会社、工場の職
場々々で、自分たちの日常生活の場面でこの新生活運動に熱意を持っていかれる
ことが、いろいろな意味におきまして、今後の労働運動のあり方、国民生活のあ
り方から考えても、基礎的には非常に重要な問題ではないかという感じを私は持
っておるわけでございます。

家 族 計 画

東京大学教授 森 山 豊
医 学 博 士

避妊の方法きようは母体の健康という点から見た家族計画について、お話し申し上げます。

もともと妊娠をしないようにするには受胎調節と人工妊娠中絶と不妊手術（優生手術）この三つの方法があります。受胎してから分娩、出産があるわけですがその受胎してから途中で妊娠を否定するのが人工妊娠中絶です。妊娠しないようにする即ち避妊には、一時的避妊法と永久避妊法とがあります。受胎調節というのは一時的な避妊で、自分の欲する時期だけに受胎するようにするのが受胎調節であります。即ち避妊法には一時的な避妊法と、永久避妊法の二種類あって、前者はある期間だけ妊娠を避けるという方法であり、後者は一生涯妊娠をしないようにする方法であります。そして、一時的避妊法とは受胎調節、計画出産というものがあり、永久避妊法の中に不妊法と去勢法とがあります。優生保護法では、避妊を目的に去勢をやってはいけないと規定されておりますので、これは普通やっておりません。ですから、現実には避妊のためには受胎調節、人工妊娠中絶、不妊法（優生手術）の三通りが行なわれているわけです。

妊娠の成り立ち 妊娠の成り立ちをのべますと、まず膣に入った精液の中の精子が子宮の中に入って行く。さらに子宮の上部の両端にある右と左の卵管に精子がみずからの運動で入っていくわけです。そして卵巣から出た卵子、これを普通「排卵」といっておりますが、この排卵された卵子がやはり卵管の中に入ってきております。その卵子と精子とが卵管の中で相合します。これを受精といっております。受精というのは卵子の中に精子の頭が入っていくことで、頭というのは精子という細胞の核に相当いたします。卵子の中にも卵核というのがあります。この性細胞である卵子も精子もおのおの一個の細胞であります。しかし精子に比べて卵子は非常に大きいもので、精子の長さは0.05ミリぐらいのものですが、卵子の方は球形で直径が0.2ミリぐらいあります。そして、男性が子孫に伝える遺伝物質は精子の頭部の中の核にあり、女性が子孫に伝える遺伝物質は卵核にあります。受精して卵子と精子とが相合しますと、この精子と卵子の核も融合して両親の遺伝物質が子供に伝わることとなります。こうして受精が行なわれますと、受精した卵子はおよそ一週間ぐらいかかって、この卵管を通りぬけ、子宮の中に下りてきて、子宮内膜に附着するわけです。これを「受胎」といいます。こうして

受精卵が子宮内膜に附着して根を下しますと母体の血液供給をうけて、發育してゆくこととなります。

このように「受精」と「受胎」という言葉は普通は分けて使っております。つまり受精というのは精子と卵子が会うことで、受胎というのは受精した卵子が子宮の中に下りてきて内膜に附着した現象を言うのです。ですから「受胎調節」という言葉も正確に言いますと、受精調節なんです。荻野学説にも婦人の受胎期という言葉がありますが、あれも受胎期ではなく受精期というのがほんとうです。婦人の排卵期は次の月経前第12日より第16日までの5日間で、婦人体内における精子の生存期間が3日間ありますから受胎期は8日間であると言っておりますが、この8日間は実際は受精の時期なんです。受胎というのは受精卵が子宮の中に下りてきて、子宮内膜に附着したことを云います。受精卵が卵管の中を通るのに、およそ1週間かかりますから、受胎の時期は受精からさらに1週間あとということになります。この受精卵が卵管を通過するとき、卵管のどこかに狭い所があると、受精卵はそこでつかえてしまいます。例えば淋菌性卵管炎や卵管結核などをやって卵管の一部が狭くなっていると、受精卵がそこでつかえて、受精卵がここで受胎してしまいます。これを子宮外妊娠といっております。ここで胎児がある大きになると、卵管が薄いものですから、これが破れてどんどんお腹の中に内出血する。これは非常に危険です。日本ではこの子宮外妊娠で死亡する人がだんだんふえる傾向で、妊産婦死亡原因の第三番に当たっております。この原因の一つは人工妊娠中絶のあとで、卵管の炎症を起して、卵の通りが悪くなることも原因です。

避妊の方法、さて受胎しないようにするためには精子と卵子を会わせなければいいわけで、それにはいろいろな方法があります。精子を膣の中に入れてないようにするとか、あるいはペッサリーを使って子宮口から精子を中に入れてないようにするとかいう方法もあります。人工妊娠中絶というのは、ここに受胎した受精卵を機械でもって外に一挙にかき出すことです。あるいは女子の左右の卵管を手術して結紮してしまいますと、精子と卵子が会いませんから受精しません。それを不妊手術（優生手術）といっております。だから、妊娠しないようにするためにはいろいろな方法で精子と卵子とを会わせないようにする。コンドームを使ったり、あるいは避妊薬で膣の中の精子を殺すようにしたり、あるいはペッサリーで子宮口を塞いだりするわけです。このうち人工妊娠中絶は、胎児を外に出してしまうのですから、母体が回復すればまた妊娠するわけで、これは一回きりの妊娠だけを否定する方法です。不妊手術というのは卵管を縛ってしまうのですから、一生涯妊娠能力をなくしてしまうわけです。

家族計画の内容、この受胎調節の計画内容としては、(一)初産の時期をいつにするか。(二)生涯に何回出産をするか(出産の回数)(三)何年おきに出産するか(出産回数)。(四)出産の季節、時期を何月ごろにするかこの4つになります。

初産はなるべく早くこのうち初産の時期ということを一一般はあまり考えていないようです。近頃女子の結婚年齢がだんだん遅れつつあります。また、このごろは結婚しても勤めておる人が多いので避妊をしたり、人工中絶をしたりして、初産年齢はだんだん遅くなってゆきつつあります。このように初産年齢が遅れてくるということは産科学からみるとこまるが多々あります。一つは女子というものは年齢が多くなればなるほど妊娠能力が低下する。それから、年とってからの高年初産には難産率が高いということです。結婚後まだ一回もお産をしない人が、避妊をやっていたり、人工妊娠中絶を繰り返していると、不妊症になってしまうこともあります。それから、初産は早い方がいいということは、たとえば結婚して受胎調節も何もしなくても妊娠しないという例が世間によくあります。結婚者の8%から10%ぐらいのものが不妊ですからこのような主婦は何も受胎調節をしなくても妊娠しないわけです。それが結婚後受胎調節をし、そして、結婚して2年なり3年なりたってから、もう出産してもいいだろうと受胎調節をやめてみたらできない。それで、あわてて病院に来るといふ人が時々あります。ですから結婚してからあまり長い間調節をするということは危険であります。こういうことで女子の初産年齢をいろいろな原因で遅らせることは、婦人の体質からいって非常に不利です。さらに年をとってから妊娠をすると、難産率が高いのですがゆらに妊娠中に妊娠中毒症の発生率が、若い妊婦に比べて3~4倍も高いのです。妊娠中毒症というのはむくみがきたり、血圧が高くなったり、尿に蛋白が出たりするのですが、これを起すと母体や胎児に非常な悪影響を及ぼします。これは日本だけでなく、世界のどこの国でも、妊産婦の死亡率は妊娠中毒症が一番高いので、日本でも妊産婦死亡者6割ぐらいがこれです。この病気はまだ発生原因がわからないので予防法がありません。ただ過労の防止とか塩分を制限するというくらいです。

この中毒症になると胎児死亡率が高くなり、胎内で死亡するまでいかになくとも胎児の発育が悪くなります。これは胎児の方に充分血液が行かなくなるためです。このようないろいろな理由で、家族計画の中で、初産はなるべく早くやった方がいろいろな点で有利です。

人工妊娠中絶について、この人工妊娠中絶は数が多く、これによる弊害もまた多いもので、手術を行なうときに子宮を破ったり、穴をあけたり、子宮口が切れたりすることがあります。そのため出血したり、また切れ方によっては、その次

の妊娠のときに流産や、早産をして、満足なお産のできない人がよくあります。しかも何回も続けて流産や早産をすることがあります。これを医学の方では習慣流早産といっております。習慣流早産の原因としてはこの頸管裂傷がかなり多いものです。

また人工中絶のあとに子宮外妊娠が多くなっております。それからお産のあと後産がなかなかはがれない。胎盤が癒着してしまって、赤ちやんは産まれたけれども、胎盤が出ないような場合が多くなっております。

ところが中絶をやると弊害があるということを知っておりますと、逆に中絶をおそれ過ぎて、中絶ノイローゼになっている人もあります。これは2、3カ月ぐらい前でしたか、朝早く私宅に電話がかかってきました。聞いてみたら、20日ほど前に人工中絶をやった。その弊害をよく知っていたので、そのあと十分に注意し、安静にしていたのだが、20日たっても出血がとまらない。本を読んだらいろいろこわいことが書いてある。それで、これは余病を起したのではなかろうか、とても心配で、きょう診察に行っていいかというのです。それで病院に来てもらいました。一つはほかの病院で子宮外妊娠ではないかと言われたのですが、外妊娠でもない、子宮の中に残っているわけでもない、ただ左の卵管がはれている。それでお腹も痛い、出血がとまらない。それを外妊娠ではないかと言われたらしいのです。そして、入院の用意までしてきている。入院するほどのこともないのだが、一応入院させて、手当をして、よくなりましたので、安心するように話して帰りました。そうしたら、幾日もたたないのに、ちよっとお腹が痛いといっではすぐ入院の用意をしてくる。いわゆる中絶ノイローゼです。この間二度も来ましたが、そのたびに、何でもありません。こういうノイローゼになっている人もありますから、中絶はよほど考えてやることです。

不妊手術について なお不妊手術は男女どちらにやっても妊娠はしないわけですが、男の場合は精管を縛る。女性ならば卵管を縛ります。これは卵管、精管を縛るだけですから、男性ホルモン、女性ホルモンの分泌には影響がないので、躰にはちよっとも害はないといわれますが必ずしもそうではありません。

この手術後の体の変化についての報告をみますと、大体不妊手術をやった人の60%~70%の人が月経が不順になっております。月経不順になるというのは卵巣の働きが悪くなるということです。同じ性ホルモンといっても、男性と女性ホルモンは非常に違うもので、男性ホルモンは一種類のホルモンですが、女性の場合は、卵巣から二種類のホルモンが規則正しく分泌されております。その点が女性が男性の生理と違うところです。しかも、この二種類のホルモンが女性の体に及ぼす影響は全然違います。つまり二種類のホルモン（卵胞ホルモン、黄体ホルモ

ンが分泌されている時期によって体の状態がちがいます。これは体温についてもいえることです。男性の体温は朝晩の差はありますが、他には大きな差がないのが普通です。ところが女性は朝晩の差のほかに、月経が終わると体温が低く、卵巣から排卵されると体温が高くなります。また体温だけではなく、心臓の働きも違ふ。その他の働きも全部違います。この体温が低いのは卵巣ホルモン、高いのは黄体ホルモンが出ているからで、すべての働きがこのホルモンによって婦人の気分、精神状態、体の状態が違います。月経のときお腹の痛い人はたくさんあります。これは大体若い娘さんに多いものです。また月経のくる4、5日前から気分が悪くなる人があります、これを月経前緊張症とって、やはり両方のホルモンのバランスが変わっていくからで。頭痛、目まい、頭が重い、憂うつになる、人と話をするのがいやになる。ちょっとした争いごともしやになるという状態です。それから、卵巣ホルモンの出方が少なくなると自律神経に影響してのぼせ気味になったりします。更年期婦人では卵巣の働きが弱くなり、卵巣ホルモンが減るために体にいろいろな変化がまいますが、その症状の大部分はホルモンが減って起るための自律神経の変化に原因しております。一番多いのはのぼせ症それから冷え症です。顔はほてっていて、手足や腰が冷えたりします。あるいは気短かになって、人に文句を言ったり、人のやることが一々気にかかったりします。このようにホルモンの変化は婦人にとっては精神、肉体の両方に影響を与える。だから、先ほどお話ししました不妊手術で月経不順になるというのは、卵巣の機能に変化が来たということで、そのため全身に変化が現われますから、全然害がないということはいえないわけです。

それから、不妊手術というのは男の場合は割合に簡単で、入院せずに通いでできる、切開ぐらいで済む。女性の場合は開腹手術をせねばならぬので、大へんだということを言われます。結果としては、夫婦のどちらに手術しても妊娠しなくなるのですが、手術が入院しないで行けるとか、簡単だとか、手数がかかるとかという理由で、どっちをやってもいいというのは間違いです。というのは、たとえば実際には男の方に精神病の遺伝があるという夫婦があったとして、どちらに手術を行ってもいいということで女子方に手術をしたとします。この夫婦の間は不妊になりますが、男子には妊娠させる能力があるので、もし離婚して、別な婦人と再婚すれば、またその遺伝病を伝えることとなります。それから体が弱くて不妊手術をする場合も同じことです。不妊手術をやった後で、夫が病死したので再婚したところ、今度の夫との間に子供が欲しいということになり、この結紮したのをほどこないだろうかと相談に来た方があります。そういうふうに離婚とか死別とかいう特殊な場合もあるわけですから、一生涯妊娠しない手術をするというこ

とはよほど考えなければいけないわけです。優生手術という名前があるように、精神病とか奇形とかいう遺伝病を持っている人は、産まれる子供にとっても社会にとっても非常な迷惑を及ぼしますから、そういう優生学的な目的でやる場合の手術はもっとふやしていいのですが、こうゆう場合は非常に少なくて、年間1,300件くらいです。現在こういう遺伝病を持つ人は、精神科の医者が産まぬ方がいいと判断した場合には、国で手術料を全部出せるようになっております。本人がどうしてもその手術はいやだと言ったら、都道府県優生保護審査会というものがあって、審査いたします。それでも本人がいやだと言えば、厚生省直属の中央優生保護審査会で審査判定をして、本人に手術をすすめることになります。

今述べたように避妊法には受胎調節と人工中絶と不妊手術とがありますが、人工妊娠中絶はなるべくしない方がいいということ。それから不妊手術はよほど慎重にやるべきです。だから、そういう場合には家族計画として合理的な受胎調節をやった方がいいということです。

この家族計画が普及しないのは、婦人科の先生が中絶をやり過ぎるからいけないのだという声がしばしばきかれます。それは必ずしもそうではありません。人口白書を見ても、昭和25年の調べを見ると、子供の希望人数は3人というのが最も多いのですが、32年の調査では、2人というのが圧倒的に多くなっております。そうすると、受胎調節をするか、人工妊娠中絶の方法をとるわけです。その場合、受胎調節の知識がないと、どうしても人工中絶ということになります。この場合中絶手術を行うのは婦人科医ですから、婦人科医がやるから悪いのだといわれがちですが、それはあくまで結果であって、やはり一般の人々が中絶は不利であるという認識をもつようになりますと、自然に減っていくと思うのです。これは企業体における2、3の指導結果を見れば明らかなんです。組織的な指導をやれば必ず減ってまいります。だから、要は指導方法だと思うので、皆さんもこれからそういう仕事をなさるわけですが、その場合はぜひそういうふうに御指導いただきたいものです。

家族計画の進めかた 家族計画は、いろいろな方面から総合的に指導しなければ効果はあがりませんので、家族計画をやる意欲がないのに、国がいくらやれやれと騒いでもやらないわけです。だから、まず、なぜ家族計画をやらなければならぬかということを理解させることが必要です。何人産んだっていい、何とかなる、生活保護を受ければいいのだという考えのところに、いくら避妊の技術指導を行なっても無意味です。その前に家族計画の必要性を理解させ、それから後に技術指導をやります。このためには各層の人がそれぞれの持ち場において総合的にやらなければ効果は上りません。受胎調節実地指導員、婦人科医、その他の指

導者の方、皆さん方がいろいろな方面から協力して初めて効果が上るわけです。戦争中は産めよふやせよと、国をあげて人口増強を奨励しました。しかし、母体の健康とか家庭の事情を無視して、どの家庭も多くの子を産めということを云ったのは誤りです。同じことが今の家族計画においても云えると思います。これは人口が多過ぎるから減らせという運動ではなく、家庭の事情によってあるときには産む、あるときには産まない。それが基本なんですから、受胎調節をやるのもその家庭において一番幸福な方法をとることが必要です。それで、産児制限とか受胎調節という消極的な言葉は不相当とされ、家族計画という積極的な名前に変わってきたわけです。ですから、これは政府が補助金を出すからこの運動をやるとか、人口が多過ぎるからやるということではなく、あくまで家族自身で自主的にやるべき問題なんです。私は家族計画については、このような考えでやっております。

— x —

問 女性が卵管を結紮した場合卵子は出ているのですか。

答 卵巣から卵子は出ております。卵管を繋りますと、精子は卵管の一部には入ってゆきますが、繋った部分から奥には入れません。それで精子と会うことはできないので、妊娠はしないわけです。だから、卵管を結紮しても女性ホルモンは分泌されて、月経も普通にあります。男性の場合も、射精はするし、精液も出ますが、精子だけが出てきません。

問 女性の不妊手術についてはよくない傾向があるという話がありましたが、男性の方についてはどうですか。

答 私は男性の方は調べたことがありませんので、くわしいことはわかりませんが、泌尿器科専門医の方々は害がないと云っております。婦人については、手術をした数百人について調べましたところ月経の変化がおよそ70%、体全体の変化が30%という結果が出ております。

問 人工妊娠中絶後の排卵は平均して大体いつごろですか。

答 これは中絶したときの妊娠月数によりちがいます。月数の進んでいるほど母体の回復はおくれますが、大体手術後1カ月から1カ月半ぐらいで排卵は起ります。

問 その際メンスは当然起きるものですか。

答 排卵後12日ないし16日して起るわけです。

問 私の友人で最近妊娠2カ月中絶をして、その後1カ月になるのにメンスがないというので、一応体温を見たら二相性になっている。それでメンスみたいなものが少しばかりあるのだけれども、どうもいつもと違うというので心配しているわけですが、これはどういうものでしょうか。

答 体温が二相性になっていて、月経がないのは内膜の方の変化だと思えます。妊娠2カ月中絶すれば、次の月経は1月半か2カ月目ぐらいにあるわけです。1カ月後に排卵して、それから半月ぐらい遅れて月経があります。とにかく基礎体温をとってみて二相性になったら排卵が始まったといえるのですから、それで月経がないというのは、内膜の再生が不十分なので、月経出血が少ないためと思われます。

母子衛生と育児

愛育研究所長医学博士 内藤 寿七郎

昔とくらべますと、育児の方法などもだいぶ変わってきていることがあります。たとえば、昔は子供は胃腸が弱いものである、消化器などは大へん弱いものであるというような考えのもとに、離乳につきましても生後8カ月にならなければ取りかからなかったのですが、最近では多くの者は5カ月、特に早い者は3カ月あるいは4カ月ごろに離乳を始めているようであります。あるいはまた子供の下痢というようなものにつきましても、以前は胃腸が弱いから、この下痢は消化不良によるのだというふうに解釈をしていたのでありますが、このごろの場合、この下痢は消化不良にあらずして非消化不良であって、これは単なる神経の反応だ、鋭敏さにすぎないものだというふうな解釈をして、下痢をしている子供にも減食しないで普通に与えていく。そうしないとかえっていけないということがいわれております。また着物につきましても、冬は5枚、6枚、7枚というふうにたくさん着せておったのを、このごろではむしろ生後1カ月を越した場合、乳児は大人と同じあるいはむしろ大人より1枚少なく着せた方がいいのだといわれてきております。だんだんとそういうふうないろいろな点が違ってきておるということを最初に申し上げておきます。

そういうふうな育児の違いはありますけれども、せっかく計画して産んだ子供でありますから、丈夫に育てたいというのは当然の願いであるわけですが、子供を丈夫に育てるにはということになると、栄養、いい環境、疾病の予防、こういうことに要約されると思うのでございます。疾病の予防のうち、未熟児の予防なんかになりますと妊婦の問題に関連してくるのでありまして、ほんとうにいい子供を育てるためには、妊娠中からの注意が必要であるということをごの人も唱えておるわけでありまして。

では小児の方からながめまして、妊婦の衛生がなぜ大切か。一つには今申し上げた未熟児の問題がございまして。未熟児というのは新しい言葉でございまして、ちょっと説明いたしますと、生下時の体重が2キロ半またはそれ以下、こういうようなことを世界中の保健機構の人たちが相談をしてきめたわけでありまして。日本の新生児は大体小さい傾向を持ちますから、外国に比べたら日本は未熟児がやや多くなるかもしれません。日本で生まれる未熟児は大体7,8%、ときにはもっと多いときもありますけれども、これ以下の体重の者は疾病予防の点からいって

不利でありまして、疾病にかかりやすいので手がかかり、また金もかかり、非常に困るわけでありまして、たとえ育っても、未熟児は普通の子供の約10倍以上も死亡率が多いといわれるのであります。これは2キロ以下の者は50%から70%の者が死亡し、1キロ以下の者は90%死亡する。そういうふうにならなければなるほど死亡率が高いわけでありまして、これは幸いに助かってくれているわけでありまして、この助かった者のうちから、人によっていろいろ数の違いはありますが、20%ないし30%は脳性小児麻痺を起こすということをいっているわけでありまして、この脳性小児麻痺はわが国に非常に多いものであります。これは精薄児の大部分を占めるものであります。社会の大きな問題でもあり、社会的な方面から考えますと社会の負担になり、また各個人の立場からいうと非常に不幸なことになっておるわけでありまして、こういうものはどうしても予防してやらなければならないと思っております。その意味においても、未熟児が生まれないように妊産婦の指導をしてやるということは、実に文化的な生活からいきますと欠くべからざることであります。では未熟児が生まれるとすべて小児麻痺になるか。もちろんそうではありません。御承知の通り、英国のチャーチルなんかも未熟児であって、初めのうちはポーっとしておったということでありまして。わが国でも某大学の小児科の教授なんかで、8カ月の未熟児で生まれた人を知っておりますけれども、りっぱな業績を残し、研究生活を続けておられます。未熟児も生まれたら仕方がない。それは一生懸命育てなければならぬけれども、たとえ一生懸命育てても、そのうちの3分の1あるいは4分の1は脳性小児麻痺になるから、まずできるだけこういうものを産まないようにすることが小児科の側からも望まれるわけでありまして。未熟児の生まれる原因がわかっているものもあります。原因がわかっているものは妊娠中毒症、これは私の専門ではありませんが、妊娠中毒症を起こした場合に割合に多く未熟児が生まれるわけでありまして。妊娠中毒症というのは、産婦人科の先生からお聞きになったと思っておりますけれども、やはり妊婦の過労だとか睡眠不足だとか、こういうことから起こりやすいと聞いておりますが、妊娠中毒症などを起こさないように、また起こしたならばこれを早く回復させるように気をつけてやる必要がある。過労、それからやがて出産するといふときの不適当な運動、自転車に乗ったりあるいはミシンを長くかけたり、つけものの石をかかえたり、いろいろなことが原因になっているようでありまして。たとえば妊娠末期になって引越したという場合など、もう少しがまんすれば満期のいい子供が生まれたであろうに、不適当な運動をやったために未熟児が生まれることがしばしばあるわけでありまして。それからたとえば腎臓病にかかるとかあるいは結核とか、いろいろな病気にかかるとか未熟児の原因になるわけでありまして。このようなことを

われわれはほんとうに注意して、妊婦を大事に、といいますか、妊婦に正しい生活をしてもらうように努力しなければならないと思うのであります。未熟児はなぜそういうような小児麻痺を起こすかと申し上げてみますと、未熟児に限らず脳性小児麻痺の一番大きい原因は脳の出血で、とくに未熟児は血が出やすいものですから、ちょっとしたことで脳の中の出血が起こってくる。それからもう一つは、脳の神経に黄胆が起こる。普通はこんなことはないわけですが、脳の神経が黄色く染まってしまうと、黄胆を起こすと脳性小児麻痺になってしまふ。こういふことで、さきほど申し上げたように未熟児から高いパーセントで非常にあとせわのやける子供が出てきて困るわけでありまして、できるだけこういうものを予防していくことに重点が向けられなければならないわけでありまして。ただこの未熟児の生まれる原因のわからないものが50%あるといわれておりますので、なお一層の研究が必要とされております。

それから今度は栄養問題に入りたいと思います。乳幼児の栄養をまず考えてみると三つあります。母乳栄養、混合栄養、それから人工栄養です。これらの比率は母乳が70、混合が20、人工が10というパーセントで行なわれているようです。

ところが都市では、特に東京都では、母乳が50%未満、あと混合が30%、人工が20%と、人工栄養がだんだん増加しつつある傾向が見られます。つまり母乳栄養が減少しつつあるのです。母乳栄養が一番人間の子供にとっては願わしいことで、また経済的にも非常にいいことですから、できるだけ私たちは母乳栄養を保存したいという気持ちでいるわけです。といつてもいつまでも母乳がいいというわけではありません。6カ月を過ぎたら母乳が必ずしもいいものではなくなるからです。

離乳とはちょっと意味が違いますが、乳を離す「断乳」の適当な時期を忘れてならない。これにはいろいろと議論があります。いつごろ母乳を離すべきか、ある方は一年半といい、ある方はいつまでも、小学校までも飲んでいいと言う。そういう方の議論は、とにかく栄養になるじやないか。母乳は動物蛋白、脂肪と栄養もあるし、大へんいいじやないかという考えで、あとまで飲ましてもいいと言われる。しかし1年以上も母乳を長く続けていますと栄養失調になることがしばしばあります。これは実にむずかしい問題をふくんでいる。結局は1年で断乳すべきである、乳を離すのはお誕生ごろでいいということがいえるのであります。そうしないと多数の者が栄養不良になる。これはただやせているというだけでなく、あとあと疾病を起こしやすい状態になる。

病気をさせないためには栄養不良であってはならない。断乳のときに素人はい

いろいろ工夫していますが、皆さん方に一ついい方法を申し上げておきます。これは簡単なことでありまして、48時間だけ乳房を子供につけないことであります。そうしますときれいに断乳ができてよく御飯を食べて顔色もよく、睡眠もよるしい。疾病の温床でなくなってくる。お誕生過ぎてもなおこういうことをするような人があったら、それはもう乳をやめたがいいと指導していただくと大へんありがたい。その方法は2晩だけ親ががまんする。子供の方は暴力をふるいませんから、親がだめといっておけば子供はあきらめる。また泣くことがあっても2晩目にはほとんど泣きません。48時間過ぎてから乳房を見せても今度は忘れて飲もうという意思を示さない。これは実にはっきりしています。どんな子供でもそうです。

2年近くになって母乳を飲んでいるのをやめさせることもありますが、その場合なども子供は大分知恵がついておりますから、母親が母乳をやらないと縁側にひっくり返って頭をコツン、コツンとぶっつけて親を脅迫する。それでとても困ってバンソウコを張ってみたり、痛い痛いと言って見せたりするが、子供はひざにまたがって考えた末、バンソウコを取ってまた飲んで最後にバンソウコをびたりと張ったりする。このようにからくりを見破りますから子供というものはだまして育ててはいけなしいと思います。

子供は詳しい理屈はわかりませんから、ゆっくりと話して聞かせる。そして導いていくのでないと、だましたら結局そんになる。だますことは最もいけないことです。

鬼の面なんかを画いてもだめ、ニコニコと笑って、これを絵本と同じに考えてこわがらずに飲んでいく。苦いものをつけてもだめ、断乳しようと思ったら母親が48時間だけがまんする、必ず成功します。そうすると子供は夜泣かなくなる。ごはんはよく食べるようになります。

話がちょっとさきに進み過ぎましたが、母乳栄養がいいといってもいろいろな条件でできない場合があると思います。そういう場合でも、2カ月あるいは少くとも3カ月までは何とかして母乳を続けていただいたら、その乳児の健康上にあるいは精神上に仕合せをもたらすことが多いと思います。

母乳はことに6カ月までと条件をつけますが、6カ月までは乳児に適した栄養を持っている。母乳100ccの中に蛋白質は1.2、脂肪3.5、乳糖7.2、鉄とかカルシウムなど無機質が0.2、カロリーは60あるいは65カロリーになっています。蛋白質は人間の子供に大へん工合のいい蛋白質であり、脂肪も非常に消化のいい脂肪で、母乳は成分からいっても大へん願わしい。おまけに免疫物質を持っている。ですから母乳を飲んでいる子供の方が初めのうちは病気にかからないといわ

れている。これを腸から吸収することができる。同時に無菌である。もちろん乳腺炎を起した場合は別です。そして適当な温度であるということから母乳は何かとありがたいものであります。

ところがこのありがたい母乳がどうかすると都会地ではだんだん減少していく傾きがある。母乳の分泌をよくするにはどうしたらいいか。第一に母親の栄養が正しくなければならない。それには親が偏食してはいけない。甘いものばかり食べ過ぎたり、ごはんだけを食べておかずを好まなかったり偏食があってはならない。

授乳中の母親はほんとは3,000カロリーくらいをとるようであればいい。そのカロリーは含水炭素だけではいけない。たとえば蛋白質としては大豆の蛋白、豆腐や豆乳、キナコなど。大豆の中には催乳ホルモンがあるとすらいわれたこともあるのです。だから大豆の蛋白などはもっともっと利用したらいいと思っております。肉が栄養があることはもちろんですが、大豆は畑の肉といわれるくらい栄養がある。われわれのところでも離乳期の子供に4、5カ月から納豆をやっています。大へん消化もいい。とにかく蛋白質というものをもう少し使ってもらいたい。

そういう正しい栄養をとった上に、授乳中の母親に大切なことは過労に陥らないこと。疲労はかまいませんが、疲労も蓄積されて過労になると母乳の分泌はとたんに悪くなっていく。農繁期などの肉体的な過労はよくない。

同時にさらに大事なことは、精神的な過労を授乳中の母親が受けると、乳の出はぱったりと止まって、混合栄養や人工栄養に頼らなければならないようになってくる。精神的な過労はなぜいけないかという、乳の分泌を促進するプロラクチンというホルモンが脳下垂体から出る。これが乳腺に働いて乳を出す。このプロラクチンは脳下垂体から出ますが、脳下垂体が十分に働くためにはこれを管理しているところの間脳が元気でなければならない。間脳がくたびれると脳下垂体の調和がとれなくなってくる。

間脳はどういうときに不健全になるか。精神的な過労、たとえば感情、怒り、悲しみそれから取り越し苦勞なんかの不安、子供が育つだろうか、また夫がどこかに行って無事だろうかというような不安、あるいは悲しいこと、怒りが出ると間脳は不健全になる。同時に下垂体の分泌物が少なくなってくる。そうすると母乳の分泌は早く悪くなっていくから、精神的な面をよく解決することによって、母乳栄養を続けることができることもしばしば見られるのであります。

また母親の間脳が不健全になると実におかしいことが起り、せっかく出る母乳を飲まなくなってくる。母乳ぎらいという厄介なことが起ってくることもこのご

ろの新しい傾向であろうと思います。母親があまり過労に陥りますと神経衰弱になり、その乳を乳児が飲まない、飲み残してしまふ。その時に母親が牛乳を与えると牛乳なら飲む。ふつうの場合には、牛乳は飲まない。母乳なら飲むのが大多数。ところがこのように自分の乳は飲まないが牛乳をやるとよく飲みますがと言ってくる母親がある。そういう母親がこのごろだんだんふえてくる。そういう母親について調べてみると、どうも精神的な疲労が認められます。

せっかく出る乳を全部カラにしない、母乳を飲み残すということは母親を不安にさせ、プロラクチンの分泌を押えることになるわけで、母乳が乳房に残っているとますます分泌を抑制する。極端な場合2、3日乳を飲ませないと母乳は出てこなくなる。母乳を出す催乳ホルモンの出が悪い。ますます母乳が不足になって早く混合栄養に頼らざるを得ないという悪循環をくりかえす。

母乳がらみの場合これを治せないかといえ、これをあきらめてしまうのはどうも早い。授乳期の生活あるいは精神生活というものの指導がこの場合必要になってくる。単に栄養だけとっておれば十分乳は出るかといえそうではない。これに加うるに精神的な指導も重要なことで、それによって母乳が出てくることになるのです。一番いけないのは不安、悲しみ、怒りその他感情の問題などで、これを処理してやるのが母乳を多く出す根本になる。

そして最後に母親の睡眠ということが間脳のみならず脳の疲労回復のためにはなほ大切である。睡眠を十分にとると間脳も健全になって再びホルモンもよく出てくるし、乳も張ってくる。睡眠は大体8時間は連続とるようにしなければならない。ところが実際聞いてみると都会でも大体7時間、農村では6時間、農繁期などは3時間という程度です。そうするととたんに母乳の出が悪くなってくる。睡眠は十分にとらしてやりたいものだと思います。

この間も農村に行きましたが、乳をいつまでものませ過ぎてどうも困る。いろいろと農協の人たちと話した。そうしたらあるお嫁さんが、「先生実は乳をやるということは私たちにとっては楽しみです。」「どうしてですか。」「乳をやっている間だけが私たちちすわってじっとしておれる。」そういう訴えを勇敢に言ってくれた御婦人がありました。これはほんとうの意味で生活の改善ができていないんじゃないかという気がする。睡眠を十分とったら嫁さんも能率がよく上るんじゃないかと素人ながら考えるのですが、睡眠がずっと不足していますから、乳をやるひまを盗んでちよっと落ちつく。こんなふうでは授乳中の母親の睡眠時間などに対する一般的な周囲の考え方がまだまだ十分徹底していないように思うのです。

一方、都会地では労働によって睡眠不足になるわけはありません。都会地の母

親は多くは、子供が育つだろうか、このさきどうなるだろうか。主人が毎晩おそく帰ってくるがどうしたんだろうかという不安でございますね。主人の帰りのことはしょっちゅう母親から聞かされていて、そういう点ではどうも母親の方に味方したくなるときもありますが、睡眠がとれない、あるいは不安であるということが都会地では分泌の大きな原因になっているようです。そういう場合に母乳を飲み残すようになる。そして人工栄養にしようと思ったら人工栄養もきらって飲みません。やせる一方でどうしましょうという母親が実にふえました。相談の際には自分で感きわまって涙を流してしまふ。ほんとうにそういう方が都市では多くなって参りました。私はそのときにどれどれというわけで、臨床医者でありますからいろいろ聞く。まず足を出してごらんなさいといって足を拝見いたします。足のふくらはぎをつかんでみます。乳の出の悪い、疲れたような顔つきをしてくる母親の場合にはこれをつかみますととても痛がる。単につかんだだけでとても痛がる。息がつまるくらいに痛む。私は以前にビタミン B₁ 欠乏の症状とばかり思っていたのですが、B₁ 欠乏なら B₁ をたくさんやれば治るはずで。こういうお母さん方は、自分でアリナミンを飲んでいます。メタポリンを飲んでいます。ポポンを飲んでいますといって、こちらでとめなければならぬほど飲んで。そしてちっともよくなっていない。B₁ では片がつかない。

兎などの動物実験を先生方がやっているのを拝見しましたが、間脳をつつくと兎がくたびれると同時に B₁ が1時間後に 30% も急激に減るということも拝見しました。人間でも間脳がくたびれると B₁ が減ったような状態になるだろうと考えたわけです。

そこで B₁ 剤は普通にとっているならばそれ以上のことはやらないで、間脳をもう少し落ちつけて上げたならば、健康回復して母乳分泌がよくなりはしないかと考えて、あるお薬を調剤して母親に飲んでもらいました。これは乳の出がよくなるお薬だから飲んで下さいといって1週間くらい続けさせた。同時に睡眠は必ず8時間おとりなさいということをした。そうするとその次の週にきたとき母親の顔つきが違っております。非常に血色がいい。子供の体重を計るとそれまで足踏みしていたのが1日30グラム、40グラム肥っていく。実に見事な発育をしていく。「このごろはお乳がよく出てよく飲んでくれています……。」どれというので足をつかんでみると全然痛がらない。まるで別人のようです。「先生あのお薬よく効きました、とても眠い薬ですね。」実は脚気の薬でも何でもなし。間脳を安定し精神をおちつけるお薬が入っていただけです。都会地の母乳不足は大体そういうことでも相当いい影響を与えていくと信じています。

子供がよく育つためには母親の間脳の安定が大切だ。極言すればそういうこと

も言えるかもしれません。とにかく母乳栄養の確保ということが一つの目印でありたいと思います。アメリカなどでは実に困っておるようであります。生後7日目に純粋の母乳だったものは最近10年間でたった11%、その前の10年は20%は母乳栄養だったのに半分にへっているわけです。わが国でも、うかうかするところという傾向になっていくのではないかと心配しています。

私どもは生れてから3、4カ月母乳を何とかしてやろうと思って、3日までは新生児には水もやらないで母乳をつけております。このごろでは85%くらいは母乳栄養で退院しています。その後はいろいろな理由から、人工栄養という希望があればあとで切りかえますが、そうでない場合はできるだけ母乳を最初からやっていくという心がまえで指導すると、1カ月目には母乳の人が80%に減ってまいりますが、これもやむを得ないことかもしれません。とにかく生れ立てのときだけでも母乳をやっていきたいと思っておるわけでありす。

母乳をよく吸ってもらうためには生れ立ての赤ん坊に元気をつけておくため、まる1日間くらいはうぶ湯を使わせないでそっとしておきます。そうすると生れ立ての子供の体力が大へんよろしいようで、うぶ湯を使わせない子供と使わせた子供と新陳代謝の検査をしますと、使わした子供では非常に新陳代謝が盛んになって、その結果母体からもらってきた脂肪すらも使い果したと思われるくらい消費が盛んになりすぎます。結局このことは新生児にとってむだであると考えております。初めの一日間くらいそっとしておく。そして元気よくなったら沐浴を始める。生れ立てに汚れたものがくっついてるとつい洗い落としたいくなるが、胎脂は皮膚を保護するものだし、殺菌作用をするし、これがついていたとて湿疹とかになることはない。われわれ長年洗ってきましたが、大事なものは別に洗わなくてもよさそうです。

次に人工栄養の要点をあらまし申し上げておきます。人工栄養は主に牛乳やヤギ乳やいろいろあるのですが、牛乳を例にとると人工栄養はあくまで母乳が得られないときにやるべきであります。牛乳100cc中の蛋白は3.5、脂肪3ないし3.5、乳糖は4.5、無機質は0.8、カロリーは60から62くらい。母乳にくらべて蛋白質が多いことがいつも問題になり、一方乳糖が少ないことが問題になる。また無機質が多いということ、これも母乳に比べて問題になる。

ことに蛋白質はカゼインというのが80%もあって、アルブミンというものは非常に少ない。脂肪の中にも揮発性の脂肪は脂肪酸とグリセリンとからなっていますが、脂肪酸の中で揮発性の脂肪酸が母乳の10倍以上もある。揮発性というものは赤ん坊のいろいろな消化器の粘膜を刺戟するものですからあまり好ましくないのです。

それから乳糖が少ない。無機質はカルシウムなどは多いのですが鉄が少ない。乳児はビタミンAを15cc国際単位必要であり、 B_1 を0.4ミリグラム必要である。 B_2 は同様。ニコチン酸は6ミリグラム必要であり、ビタミンCは25ミリグラム必要である。ビタミンDは400国際単位必要であるということになっていますが、これらの牛乳のビタミンを母乳とくらべると、Aは牛乳の方が少ない。 B_1 は母乳にくらべて2倍以上多い。ニコチン酸、 B_2 は牛乳が多い。Cは母乳とくらべて少ない。Dも少ない。

人工栄養をやるときには少ないものを補うことが必要です。現在はこういうようなものを混ぜた調整粉乳が都会地では多く使われている。都会地ではその辺はよろしいのですが、調整粉乳を使わない場合は足りないビタミンをどうしても補給しなければならない。

その次はうすめ方。牛乳は最初はうすめてやるのですが、最初の1か月間は3分の2を使う人もあれば、半分々々にうすめてやる場合もある。2か月から3か月くらいは3分の2になる。4か月以上は全乳になる。これにはもちろん牛乳だけではだめで、添加物を加える。最初は砂糖を8%くらい加える。あとは5%くらいに加えていく。それから骨粉あるいは澱粉も1ないし3%くらいの割合で3か月くらいに加えてやる。

新生児の場合は生れた日数から1を引いてこれに掛ける70あるいは80cc、これが1日の量になる。その後は大体1か月ごろは1日に700から800、3か月ごろは800から900、それ以後は900から1000どまり、1日の量が1000ccどまりというのが人工栄養のあらましです。

クル病が人工栄養にはしばしばつきものです。ビタミンBの欠乏、Cの欠乏は近ごろ果汁など加えますからほとんどなくなりましたが、ビタミンDの欠乏はまだ非常に多い。これには日光浴が一番安全であり、しかもただです。日光浴によって皮下にあるプロビタミンBがDに変る。これはビタミンD₃で、日光浴で作ったビタミンDは一番ありがたい。

このごろでは牛乳やミルクの細菌の混入はほとんどなくなりましたが、それでも油断すると、いつでも人工栄養は細菌がねらってしまっていて、混入しやすい。したがって自分の手を2回くらい洗ってから人工栄養の場合は用意することが大切です。

最後に牛乳をきらう乳児について。これもだんだんケースが多くなってきますので、ちょっと申し上げておきますが、これは生後3か月ごろから始まる事柄です。ちょうどそのころ母乳が足りないのに、人工栄養、混合栄養にしようと思うとどうしても牛乳を飲もうとしないのがある。こういう場合にはどうい

題がおこるかという、結局栄養の低下から病気の下地ができるから、なるべく
こういうことは早く処理していかなければならない。

牛乳きらいの場合の第一の原因は家庭環境の問題が大きく働いている。この場
合の家庭環境は家族構成に大きな問題がある。大人の数、特に老人、祖父母があ
ったりすると、しばしば子供の3カ月ころの牛乳きらいがおこったりする。また
母親が非常に不安感の強い人だと牛乳きらいが起る。家庭においてなぜこうい
うことが起るのでしょうか。牛乳きらいは病院に預っている子供には起らない。こ
れは乳児の神経の発育に関連のあることです。生後1カ月から2カ月くらいまで
はあまりこの乳児の神経発育は問題になりませんが、3カ月になると多くの乳児
が条件反射を完成すると言われる。3カ月ごろになると抱えて排便の習慣をつけ
れる。ハイとかシーツという条件反射をすることができる。このように同じこと
がいい面にも現われますが悪い面にも現われてくる。

たとえば今食べたくないとき、今欲せざるものを無理に乳児に与えることをす
ると非常に乳児にとって苦痛です。もう生後3カ月になると、今飲みたくない牛
乳は飲まない。それは何かの理由がある。医学的にいろいろありますが、何かの
理由で今は飲みたくない。今は飲めないといっているときに無理やりに授乳をさ
せる母親が非常に多くなっている。これだけのものをやらないと乳児が衰弱する
んじゃないかという不安、そういう不安感が乳児の苦痛を呼び起す。そうすると
乳児が3カ月ごろになると条件反射ができ上りますから、苦痛を与えたいいろ
んな条件、たとえば乳首や牛乳の味やにおい、その他母親の態度、母親のにおい、
その他哺乳ビン、こういうものに対して条件反射を起して、哺乳ビンを見ただけ
で苦しい感じが起きてはねのけようとする。あるいはちよっと飲んだだけでいや
になる。母親が同じような格好でだっこしても逃げ出そうとする態度をとって
いく。条件反射がこういうことをさせるのであります。こういう条件反射が起きや
すいのは神経質な子供に多い。したがって母親がこの場合取り扱い方をよほど正
しくしないと、いつまでも栄養がとれない状態に立ち至るわけですから、こうい
うようなことが起らないように、無理強いに、無理やりしてはいけないとい
うことをわれわれは説いているのです。無理をすれば条件反射が起るぞとい
うことをいつも説いている。そして扱い方が正しくないと神経過敏症を起す。そう
いうものを起すと条件反射はさらに強くなっていく。神経過敏の現象はどうして起
るかといえば、乳児の神経の過労が原因になる。神経の過労ということは緊張過
度が大なる原因になって、乳児の神経がいつもピンと昼間張っていると今お話し
たようなことが起り、またそのほか夜泣きの悪習慣ができる。それからいろいろ
と願わしくない性格が養われていくことになる。

緊張過度はわが国の家庭における乳児に非常に起こりやすい。なぜならば家庭における乳児の人格が尊重されないからだと言いたい。実際生れ立てから人間として扱ってくれない。乳児はいつでも自分たちの思う通りに扱うことができる。あるいは自分たちの私有物であるというように考えてしまう。確かに昔からそういうふうにしてきたわけでありましょうが、しかしそこにもまた人間として生れ立てからの心の余裕を大人たちは持ってやらないと、とても正しい人格形成なんかはできないのじゃないかと思えます。

緊張過度の大きな原因は、俗な言葉でいうとあやし過ぎです。あやすことはいいのですがあやし過ぎる。しかも大人の勝手な時間に勝手な気分でやってしまう。あやし過ぎは乳児にとっては生活の破壊であるかもしれない。自分はおとなしくあるいは考えごとをしていきたいのかもしれませんが、そういうときに大人がちよっといじってみたり、パーとかワァーとか言ってみたりする。あれなんかほんとうに乳児がもしも人権侵害を訴えることができたなら訴えたいくらい腹が立つことがあるかもしれない。自分は静かにしていきたい。あるいは自分は手をいじったりして経験を楽しくしていきたいのだというときに、それを取り上げてほっぺたに吸いついてみたりする。それが一人ならいい。今おばあちゃんがやったと思ったらおぢいちゃんがやる。応接にいとまがないというのがわが国の家庭における乳児の現状じやなかろうか。これが夜泣きとか牛乳ぎらいというものを起こさせる。乳児院や私の病院に預っている人工栄養児にはそういうものはほとんどありません。去年増築の場合にコンクリートをこわし始めたら大きな音でびっくりしたのか、5、6人が牛乳を飲まなくなった。あわててすぐ鎮静剤で治りましたがそういうことが家庭においてはしょっちゅう起る。子供は夜泣きするものだというふうにきめ込んでいる。あにはからんや夜泣きの原因は、おばあちゃんにあったかもしれない。何とか声をかけなければかわいがったと思わない。とにかく黙ってかわいがって下さればとてもありがたいのに、言葉をかけますと3カ月ごろから子供は何を言われたのかしらと、言葉の抑揚によって声色を判断に苦心する。判断するときに頭はピンと緊張してしまう。

子供が一番喜ぶあやし方は、こちらで黙って顔色を見てニッコリ笑ってやる。子供には何もおもちゃを買ってやる必要はない。あるいはお土産などをやる必要はありません。子供が一番好かれるのは子供の顔色を見てニッコリ笑ってやる。そうすると子供は非常に安心感を持って精神生活が豊かになるようであります。たまには言葉をかけてもかまいませんが、適当にかけてやる、それでちょうどいいのです。

夜泣きをされますと両親は実にヘトヘトになります。毎晩何時間か睡眠を中断

されて、お父さんも朝からボーッとしているでしょうし、お母さんだって早くから疲れた顔をしなければならぬ。夜泣きをさせないためにはあやさないで、できるだけ子供の一人遊びのときには妨げない。これは乳児ばかりじゃありません。わが国のお母さんたちは育児の面であまりにも「禁止」の連発が多い。

私はいつもお話をすることですが、たとえば怒るとどもり出す子供の場合です。何か舌がもつれていないか診てくれと母親がおっしゃいますが、どもり勝ちの原因はどうかと、からだをみましても何も原因がない。ふっと見るとお母さんが下の赤ちゃんを抱いている。結局これはお母さんの注意が赤ちゃんにだけ行っている。赤ちゃんだけをかわいがる。兄ちゃんは今まで自分が占領していた母親というものを取られた。これはだれにでも湧くらしいのですが、神経の鋭敏な子供にはほとんど例外なく湧く気持です。お母ちゃんのひざにまたがって自分もお乳を飲もうとする。「何です、お兄ちゃんのくせに。」これがいけない。これが子供の非常な精神的な負担あるいは欲求不満（フラストレーション）になって、これがどもりになっていく原因になる。こういうどもりには何も薬は要りません。そういうときには「どうかお母さん、兄ちゃんを先に3分でもいいから、5分でもいいからひざに抱いていただきたい。今度は赤ちゃんに貸してやろうね、と納得させておろして下さい」といつも頼むわけです。一週間もしないのにどもりは取れてしまいます。「またどもった」とお父さんが叱ることもやめていただくことを私はついでに言っております。何々をしてはいかぬと強く言うことは、その子供にさらに潜在的に意識づけることになる。「どもっちゃいけない。どもらずに話さない」というと、どもるということが自分に対するコンプレックスになる。そういう場合には黙ってゆっくり聞いてあげる態度を大人がとればよい。欲求不満があると思ったら欲求を充たしてやる。また睡眠をよくとらしてやるというところでうまくいくんじゃないか。

私は非常にせっかちでありますから、早く治そうとする場合には冬眠剤を使う。なぜならば、これは大人にもあるのですが、自律神経の過剰反応というものが起っているからです。人間には自律神経（交換神経、副交換神経）というものがあって、普通の人ならば生理的に反応しているのに、神経過敏の人は過剰な反応を起こしてとんでもないところに病気を起こしてしまうのです。

ひどい例を申しますと、ちょっと寒い目にあいますとすぐに腎臓炎を起こしてしまふ。蛋白が出てくる。離れた器官に神経の反応が起こることがありますが、要するにこのような神経の過剰反応などのある場合は、冬眠剤が医者の間では使われる。

ちょっとした刺激によって眼をパチパチしたり、夜尿とかどもったりいろいろ

な問題がありましようが、そういう場合にも冬眠剤を使う。しかしこういうのを
使わなくても治せる。それは子供の欲求不満を絶えず起こさせないこと。しかし
欲求がいつも通ると思わせてはいけません。たまには欲求不満があってもいいの
ですが、いつも欲求不満が子供にあるような状態を作らない。

禁止の連発、これは親たちが気をつけなければならない。こういうことをやっ
ていると曲った性格の子供ができる。そうすればまたわれわれ社会の負担になる
のですから、そういうことのないように、あやし過ぎなどがないように家庭の環
境を持っていかなければならないし、幼児の場合はやたらに禁止ばかりをして子
供の欲求不満を絶えず起こすというようなことがないようにしていくことが、い
い子供を作ることになるでしょう。欲求不満が続いていきますと幼児の食欲不振
なども現われてまいります。ほんとうにおかしなことではありますが、こんなこと
でも食欲不振の原因になり、問題になるわけです。

家庭における子供はやはり一人の人間として考えてやるということが大事なこ
とであろうと思います。

最後に離乳のことを申し上げます。これは世界中でわが国だけが問題にしてい
たのです。なぜならばわが国には消化不良が非常に多かったからであります。こ
のころでは離乳はあまりむずかしいものではないということになってきている。
なぜなら、離乳ということはまだ母乳が十分あるうちから開始することが行われ
るようになってから、離乳期のいろいろな問題はとれてしまうという状態にあり
ます。すなわち多くは5カ月ごろ、まだ母乳が十分あるうちから、母乳の分泌が
あまりよくなければ4カ月ごろからでもかまいませんが、普通5カ月ごろから離
乳し始める。

一番金のかからない安全な方法はスリ鉢の小さいのを置いてスリ餌を作る。こ
れが一番簡単でむずかしくなくできます。すなわち母乳がまだ十分出ているうち
から、鳥の餌をするようにして、大人の食物をすりつぶしてやれば、一番安全で
正しい離乳食であるということです。実にやさしいことです。

昔は母乳にいつまでも頼り過ぎていた。したがって母乳が出なくなって栄養失
調になるころあわてて離乳したということがわれわれの手こずった原因でした。
このころの乳児は消化器を小さいときから馴らせば相当馴れるものだといこと
がわかっていきますから、馴らすという方向に持って行って、早いうちから少しづ
つ馴らしていくということで、昔多かった消化不良病、医者通いをしなければなら
なかった状態を非常に少なくできるのではないかと思っています。

今日は乳児を主にいたしまして、私が臨床医者でありますので具体的な事にな
ってしまいましたけれども、そういうことで昔と大分違ったし、また育てやすく

もなったし、からだの方ではもう昔の優良児の標準を皆がほとんど全部突破してしまうという状態ですが、今度は一つ乳幼児の心の問題も育てなければならないという方向になってきつつあるということでもあります。生んだならば少なくとも心身ともに健康である、ただ生きているだけでなく、ただからだがかいというのではなく、心身ともに健康である乳児を育てていきたいものだとお互いに願うものであります。

× × × ×

問 断乳の時期はどのくらいが一番適当か、それから離乳期にサシミを食べさせてもいいということが出ていた。サシミは良質の蛋白質があるのでいいというのですが……。

それから夜尿症に困っている方が多い。先生はさっき冬眠剤を与えればいいと言われたが、それ以外に何かいい方法があるか。また冬眠剤は医師の指示がなければいけないか。

次にすり餌をやるときにこれは注意した方がいいだろうという食物があると思う。何でもかまわずにいいものか。

答 断乳については、大体8カ月を過ぎると多くの母親が乳を出すために非常にからだが疲れる。そして乳そのものがどういう物質が含まれるためかわからないが、乳児そのものの神経を刺戟するようになる。したがって夜泣きが起こってみたり、ほかの離乳食を食べられないような状態をかもし出すことが多い。そこで私は、お誕生までに断乳をする方がその後の発育に多くの場合有利である。そう解釈しています。早い人は8カ月といっていますが、私はお誕生までに断乳するという考え方です。

離乳食のお話ですが、サシミと食べてはならない食品のことを一緒に申し上げます。サシミは確かに消化がよろしいし、蛋白質もけっこうでありまして、私どももずっと以前試みたことがあります。ただなぜこれをあまりお話ししないかという、大人には免疫がありますから平気で過されることも、これによって乳児はしばしば消化器の感染をもたらすであろうということが第一、もう一つは生の蛋白でありますとしばしばそのまま腸管から吸収されていく。そしてサバなど食べるとシンマシンを起こす。あるいはカツオを食べると下痢をするという厄介な事柄があとになってかもし出される危険があるだろうということで、生のものはそういう点であまりお奨めしないことにしております。無菌的に取って使ってどうか、消化不良は起こらないと思いますけれども、熱を加えた方があとのためにいいのではないかということ、サシミはあまりお話ししないことにしたわけです。

それから食べてならない食品というものは、月齢によってだんだん違って参ります。たとえば半年前では玉子の白味などは食べてはいけないものに属しましょう。またすりつぶしてもあまり小さくならないようなものはもちろん食べてはならないものに属しましょう。すりつぶせばドロドロになって、味噌汁とかそういうものを加えれば容易に通るものが多いということになる。またその中で刺戟物質がいけないのは申すまでもありません。トウガラシとか強い調味料の入ったものはいけない。動物性の魚などはすりつぶしてお上げになってけっこうです。煮魚のすりつぶし、納豆なんかも新しい納豆を袋に入れて、うちでは庖丁の背中であたいてやっております。玉子の白味のような、あとになって困るようなものは避けています。ただし玉子の白味は9カ月ごろからは自由に与えている。

夜尿の問題ですが、夜尿というものはいろいろな原因がある。ことに就寝後2時間目、あるいは夜明けと睡眠の深い波が2度ある。深い睡眠のときに起りやすいことは注目しなければならないことであります。

大脳の抑制の機能が行われない人が、異常に深い睡眠をとる場合に起りがちであると考えられる。昼間あまり強い刺戟を受けないようにしておけば、異常に深い睡眠が比較的少なくなる。そして自分でも夜尿はやめようと思っておりますから、そういうときに抑制が働くようになる。

たとえば夜尿している子供が親類のうちに遊びに行くと夜尿しない。これは自分の抑制の気持が強いからです。うちでいつも臭いふとんに寝てしまおうとまたやりたくなるということもあるようです。ある人なんかはきれいなふとんを思い切って作ってやったらその日から夜尿をやめたといっております。昼間の異常な疲れと異常に深い睡眠と条件反射が関連してくる。冬眠剤などはある程度効くようです。しかしそういうものをやらなくても夜尿自体を招くような昼間の取り扱いを大人たちは考えて、夜尿々と叱ってはいけない。また叱らないでも、またしたのかなどと陰で言うのは非常な精神負担になる。顔に困ったという表情を出さない。いずれ忘れてしまうくせである。夜尿は決して病気ではない。心配することはないと言っております。だんだん遠のいていくことが多いと思っております。またあるときには刺戟を加えるために脊髄からB₁を入れたり、わざわざレントゲンの大きな音のするのをかけてみたり、精神療法的なあるいはいろいろな刺戟法的なこともやりますが、あまり夜尿ということを子供にコンプレックスに思わせないでいくと、いつとはなしに忘れてしまう。

人口問題からみた生活設計

人口問題研究所長 館

稔

家族の人々がみんな健康で、働く人々はみんな愉快に精一ぱいに働き、勉強する若い人達は専心勉強ができて、次第に生活が向上して豊富になる。一生活を楽しみ、不時の災難や老後の憂いがなくて、家族の人の間には愉快的共同生活が保てるような秩序ある人間の関係が成立し、家族や家庭の間にもお互いに幸せに人間生活が楽しめるような秩序が保たれている。一これ等がわたくしたちの生活の理想であることはいうまでもありません。

こうした理想の家族や家庭の生活がさまたげられるところにいるいろいろの社会の問題が現われて参ります。このいろいろの問題のなかでも、もっとも広い、そしてもっとも深い大きな問題の一つとして人口問題があります。人口問題も、結局は、わたくしたちの生活の問題にほかなりません。例えば、人口を養う経済の力を超えて人口が多過ぎたり、経済の伸びる力よりも人口がアン・バランスに速くふえたりすれば、わたくしたちの生活の程度は、一般に、引き下げられてくることになります。生活の程度が下がれば、働かなくていい人も、たとえ十分な収入や所得が得られなくても、家計の補助のために働きに出るということになります。学生もアルバイトをしながら学校で勉強しなければならないことになります。そうすると、職業戦線はいっそう困難を加えてくるということになります。すると、それはまた生活程度をひき下げる方向に働いてくる。また、一方、貯蓄をしようとしても思うに任せず、貯蓄は伸びなやんでくる。そうすると経済の伸び方がそれだけさまたげられてくることになって参ります。こうした事情がひどくなると、おしまいには、家庭の生活も、やけのやんばちになって、でたとこ勝負のその日暮しになってくるおそれがあります。こうして、悪い因果が一そう悪い方へとめぐることになります。はてしない悪循環がおこることになります。



幸にして今日のわが国では、きびしい人口問題に当面していながら、ことここには至ってはおりませんが、それだからといって、決して楽観していい状態ではないと思われます。今日の低開発国では、まさしくことここに至るおそれが多分にあるので、世界はこの問題にあらゆる努力をしているのであります。

こうした問題に対しては、社会や国がしなければならぬ多くのことがあります。ことに、わたくしたちやわたくしたちの家庭や家族の責任に帰せられないことがらについては、社会や国が適当な処置を講じなければならぬこというまでもありません。しかし、これと相まって、わたくしたちの家庭や家族の生活を積極的に建設してゆく努力があつてはじめて真に問題を解決に向かわせることができると信じておるのであります。

それでは、わたくしたちの家庭や家族の生活を向上するにはどうしたらよいのでしょうか。ひと口にいつてしまえば、わたくしたちの家庭生活を近代的に設計し、建て直してゆくということであります。わが国では、こうした努力や運動は決して新しいことでもなければめずらしいことでもありません。これまで、幾千万の人人が努力し、それぞれ相当の効果をおさめてきたのであります。こうした運動は、よく、新生活の運動と呼ばれております。



わが国では、新生活の運動は相当長い深い歴史をもつております。今日では、新生活の運動といへば十中八九の人々が、“カドマツ廃止か”、“お台所改善か”、“時間励行か”、“貯蓄奨励か”等と、すぐに何かのスローガンを思いつく程度にまで普及発達していることは大きなことでありまして、まことに幸なことであるといわなければなりません。

そこで、こうした運動が、今後、もう一段と発展し、社会のいろいろの問題を解決へ導くために、さらに効果を拡大しようとするれば、いろいろの社会の問題の視角から、もう一段とほり下げて深く考えることが必要なときにきているのではないかと思われるのであります。



生活の設計ということを考えるためには、設計の対象となる“生活”ということと、“設計する”ということと、“どんな立場”で設計するかということを考えてはなりません。こういう考え方をすると、わたくしたちの生活の設計にはどこをどう改めなければならぬかということや、したがって、新しい生活の運動はどうあらねばならぬかというようなことがわかってくるのではないかと思われるのであります。

これから、わたくしは、しばらく、これ等の問題をわたくしがたずさわっている人口問題という窓から眺めてみようと思ひます。

設計の立場は、近代人間主義というか、いわゆるヒューマンイズムに立つことが

必要だと信じて居ります。近代ヒューマンイズムが何かということは、それ自体一つの大きな問題で、ここで論じることは適当ではありません。ただ、ここで必要な限り、気付かれる2,3の特徴を挙げておくことといたしましょう。

近代文明がものすごい技術の発達に裏づけられておりますことは御承知の通りであります。その結果、わたくしたちはややもすれば機械に使われて人間らしさを見失ってしまうおそれがあります。電気やガスの炊飯器や洗濯機やテレビや一やがては、核エネルギーがお台所や茶の間にどんどんはいつてくることになるに違いありません。これ等はみんな結構なことですが、そのために人間らしい生活を見失ってしまうてはなりません。何よりもわたくしたちは、生活の主体は人間なのでありますから、真に人間らしい生活を保ち、あるいは、取りもどさなければなりません。ですから、人間の生命が尊重せられ人格の尊厳が確立され、そして、近代文明の発達に順応してゆかなければなりません。人間の解放、人間の復活は、男女ともに異なるところがあつてはなりません。またこうしたヒューマンイズムは一つの宗教や一つの民族やその他あらゆる社会の階層の中のお互同志だけであつてはなりません。世界人類に等しくゆきわたったヒューマンイズムこそ、今日のほんとうのヒューマンイズムであります。

また、人間生活の主体としての個人は、個人の責任において、自由に生存し活動する、すなわち、生活することが確保されなければなりません。けれども、例えば、今日の老人が、戦争によって老後の生活のそなえをなくしてしまったとか働こうとしても働くチャンスがなくて生活ができないとか、個人の責任ではなく多くの生活のさまたげがあるのであります。こうした場合には、社会や国によってその生活が保障されなくてはならないこと申すまでもありません。



近代文明は合理主義の文明であります。わたくしたちが近代文明の中でよくこれに順応し、わたくしたちの生活の理想を実現してゆくためには、わたくしたちの生活を合理的に設計してゆかなければならないのであります。

生活の設計をすることは、より高いより豊かな生活を建設するために計画を伴ふことであります。積極的に建設的な行動であります。ですから新しい生活運動は、あれをしちやいけない、これをしちやならないといったいじけた消極的なものではなくて、ああしよう、こうしようという積極的な行動でなくてはなりません。



設計するためには、建設の目標を明らかにとらえるとともに、現状を分析してそれをしっかりと捕えることが必要であります。家計簿をつけてこれを分析するなどのもその一つの仕方であります。けれども分析するだけが設計でもなければ計画でもありません。分析のしっぱなしほどおそるべきものではありません。たとえば、友人を分析することは友情を傷けるものであります。ミス何何を分析することは名画や彫刻をぶちこわすわざにも等しいものであります。設計のための分析は、建設行動に向って総合されてゆかなければならないのであります。

生活は天衣無縫の一体であります。生活には衣食住などいろいろの局面があり、物やお金やいろいろの要素があります。けれどもこれ等は、あたかも、一本一本の柱や、一本一本の釘が住宅の要素ではあるが住宅でないと同様であります。一本の柱や一本の釘は、それぞれの住宅を構成する要素としてお互の素材との関係において意味をもっておるのであります。お台所の改善も貯蓄奨励もみんな結構であります。だが、それ自体として一つ一つ意味があるのではなくて、わたくしたちの生活の全体の設計の中において始めてほんとうの意味をもってくるのであります。



経済学の本を読むと、世帯の生活、あるいは、家計のはたらきは消費であると書いてあることが少なくありません。経済学といったような一つの学問の角度からみればたしかにそれでよいのであります。けれども、それはわたくしたちの生活の経済学からみた一つの局面であるに過ぎないことを忘れてはなりません。わたくしたちが一日働いて疲れをやすめ、はつらつとした明日の活動の力と意欲とをふたたび生み出すのは家庭における生活であります。すなわち、わたくしたちは家庭の生活において明日の働く力を再生産するのであります。例えば、工場安全運動の貴重な経験から、問題は工場内部だけの問題ではなくて、それが健康な労働力の再生産の場としての家庭の生活に深く連らなることを学びとったのであります。また、わたくしたちの家庭の生活の中で、新しい人間の生命が生み出され、もっとも直接にその中ではぐくみそだてられてゆくのであります。人間のパーソナリティは社会のいろいろのグループの場でそだてられてゆくこと申すまでもありませんが、そのもっとも身近な場は家庭の生活であります。こう考えますとわたくしたちの家庭生活は、物やサービスを消費する局面もありますけれども、もっと大きな人間生命の再生産という働きをもっていることを忘れてはならないのであります。

◇

実際のわたくしたちの家庭生活には、いろいろの条件があること申すまでもありません。その中で、もっとも一般的で決定的なものは、時間と空間、すなわち時間とわたくしたちの生活する地域社会とであります。

わたくしたちは、お互に、限られた時間に生きております。この生活の絶対的な条件は昔からわたくしたちの意識に上ってきております。ある時代には“時は金なり”といわれ、また、ある時代には“時は金以上である”ともいわれ、“時間を守らない人は他人の生命を奪っているのだ”とさえいわれたこともありました。“時間励行”は生活運動のもっともおなじみのスローガンとなりました。時間を合理的に使うことはそれだけ生命を延ばすことであることはいうまでもありませんが、また、それがそれだけわたくしたちの生活を高め、豊富にすべきことを考えることが必要であります。時間を上手に使うて生み出された余暇が、わたくしたちの健康を増進し、教養を高めて、ほんとうに生活を内容あるようにするには、まだまだくふうが必要であると思われるのであります。

向う三軒、両隣りは、これまた早くわたくしたちの生活の意識に上った条件であります。一般に、外国でもわが国でも、農村での協力についてはたくさんの佳話がありますが都市ことに大都市ではなかなか容易ではないのであります。

◇

生活の要素にはいろいろありますが、物と金と人にと代表させることができると思えます。衣食住についての物を一そう有効に使って、わたくしたちの生活を一そう健康に、一そう豊富にしようという努力は、早くから生活運動で取り上げられて、今日では、相当の効果をおさめていると思われるのであります。進んだ近代技術がわたくしたちの生活にどんどんはいつてくると、これに順応して一そう有効に物を使うくふうが促進されなければならないことはいうまでもありますまい。

◇

お金についても、貯蓄の奨励といったような形でこれまでの生活運動がいつも取り上げてきた大きな課題であります。少くとも貯蓄を多くしなければならないということは、誰れでもが知っていて、誰れもが考えていることでもあります。ここで一言だけつけ加えておきたいことは、何しろ、ネコのひたいのようなこの狭い国土に9,300万人に近い沢山な人々が住まっているのですし、近頃全体の人口

の増える割合は大分下ってきましたが、今後当分の間——おそらく、今後10年近い将来にかけて、15歳以上の働き盛りの人口は依然としてふえつづけることがたしかでありまして、これ等の人々のために十分働ける職場をつくり出してゆくためにもわが国の経済が伸びなくてはならないということでもあります。わが国の経済が着実に伸びてゆくためには、蓄積がぐんぐん増えることはいうまでもありません。

これまでの生活の運動で、物とお金についてはずい分よく取り上げられてきましたし、相当の効果をあげてきたと思われます。これに比べて、かんじんの生活の主体としての人間については、これまでの生活運動で取り上げられることがひじょうに少なかったと思われます。

生活の主体としての人間については、複雑ないろいろの問題がありますが、大きくわけて次の三つの点をぜひ考えなければならないのではないかと思います。その一つは、家族における人間の数ということ、簡単にいえば家族の大きさということでもあります。第二には、家族の人々が、より一そう健康であり、より一そう高い教養を身につけるとということ、簡単にいえば、家族の人々の質を一そう高めるということでもあります。第三には、家族の人々の間における人間関係、さらに、これから出発して家族の外における人と人との関係についての新しい秩序を作ってゆかなければならないということでもあります。この第一と第二の問題は、“家族計画”といわれるものでありまして、第三の問題は、社会道徳、公衆道徳ともいわれる問題であります。

家族計画の普及とか家族計画の運動とかいわれるものは、単に、“受胎調節”という技術を普及させる運動ではありません。つまり新しい生活の設計としてわたくしたちの生活にとけこみ、真にわたくしたちの身についてこそはじめてその効果を期待することができるのであります。社会道徳や公衆道徳の問題にしても貯蓄増強の問題にしても皆同じことだと思われます。わたくしたちの生活は、いろいろの局面をもち、要素をもってありますが、それはこん然とした一体をなしておるのであります。生活の主体である人間について、物について、お金について近代的な生活の設計にとり入れられて、これにもとずいて新しい時代の生活としてわたくしたちの身についてこそ、新しい生活の運動は実を結ぶとともに、きびしいわたくしたちが当面する人間問題も着実な解決への道をふみ出すことになると考えられるのであります。

生活設計

日本女子大学教授 氏家寿子

この前現場にいらっしゃいます若い方々にお話を申し上げたのございますが、その上にお立ちになって責任をお持ちになっていらっしゃいます方に私が聞いていただくような材料は、実はないように思いますけれども、一応どうということをお話したかというようなこともお聞き取り願っておく必要があるのではないかと、というふうに思ひまして、お招きにあずかりましたので厚かましく伺った次第であります。

ここにトピックを書いたものの、実はこれでは用をなさないかと思いますが、私が非常に痛切に感じておりますのは人間の条件が変わってきたということでございます。人間の条件が変わった、そういう言葉を使ってよろしいかどうかわかりませんが、その大なる部分は生活の仕方が変わったということになるかもしれません。それと同時に価値の判断が変わってきたということがいえるだろうと思うのございます。これらは私ども学校という現場にありましても、若い人々を指導し、若い人々と一緒に生活する上におきましては、非常な転換と申しますか激動というようなことを感じまして、日ごろ切々と自分にも迫られるものを持っているわけでございます。そういうことを初めにお考え願いましたならば、私が申し上げるつたないこともあるいは御理解をいただけるのじやないかと思うのであります。私どもの生きる条件が変わってきたんだ、こういうようなことは、もちろんそのもとの何に価値が一番高く感ずるのだろうかという、価値判断の仕方が変わってきたんだらうということと、一連のものだと思ふのでございます。お見受けいたしましたところ、皆様はお若くはいらっしゃいますけれども、やはり年代の落差と申しますか断層、そういうものを否定することはできないのじやないかと思ひます。私は年をとっておりますけれども、私どもの目から見ますと、そういうことはどうであるのかしら、それよりもっとこういうことを貴重に考えてほしいものだといったような、そういう差がございまして。これはみんなが長いこと見たい見たいと思つていた月の裏側も見られる時代でございますから、何ともいたし方のないことではないかと思ふのでございます。ただそれじや全部ひっくりかえったんだらうか。片方には大きな声がございまして、昔のものこそいいんだ、古いものにこそ値打があるのだ、返れ返れということが、官庁を初めとしてだんだんと濃厚に表われてきておりますが、その中間に立って生活

しているんじゃないかというのはだれもの共通の問題でございます。それでその中で変わらないものがあるだろう。これにはずがるべきでございます。変わらないものとは何だろうということでございますが、皆様も御承知のように、ルネッサンスから人間性というものが取り上げられてきております。その取り上げられ、尊重される人間というものはただむちやくちやに尊いのだろうか。私が考えますと、そもいえるかもしれませんが、人間が尊いということは人間に値打があるということでありまして、人間価値が尊いものとして大事にすること、これが申せば一番変わらないところの中心じゃないかと思うのでございます。

多少センチメンタリズムな表現かもしれませんが、だれもがしあわせを追求していくということは、どんな時代が参りましようとも当然じゃないか。若い人であろうと何であろうとしあわせになりたい。しあわせの条件やしあわせを獲得する方法は変わってきたかもしれませんが、本質的にしあわせを追求しているということは確かじゃないだろうか。そういう意味から考えますと、私がすがりたいというのはやはりこのしあわせということなのでございすま。どの人もしあわせを追求していく、これだけは変わらない。水がさかさまに流れる世がきても変わりますまい。こう考えてきますと、そのしあわせを拡大していくということがやはり生活の条件にならなければならない。そしてそれが生活設計の根本でなければならない。

実はNHKと日本銀行中央貯蓄推進部と地方貯蓄推進委員会の共催で家計簿の体験というものを年々募集いたしております。お聞きおよびかと存じますけれども、今日その審査会をすることになっております。まだ審査会の以前でございすから、審査員の一人として内容をごこにお話し申し上げることははばかりますけれども、最近の傾向といたしましては、一応自分の生活設計というものを経済上で考えない人はありますまい。御列席の皆様におかれましても、もちろん職場でこれから先何年たてばどうなるのだということはお考えになっていらっしゃる。ましてや人の上にお立ちになっていらっしゃるれば、みんなおのおのどうなんだということは御配慮になっていらっしゃると思うのでございますが、このころはそれが非常に濃厚でございます。家計の範囲を逸脱しはしないかと思うくらい濃厚でございまして、今回の応募の御投書の中にもそういうものが非常にたくさんございます。たとえば、何年目に停年だ、その間に自分の給与はどのくらいのカーブを描いてふえていくはずである、そうするとその間に子供はどうであり、学令に達してどうなるというようなことを事こまかに作表していらっしゃる。そのためにむしろしばられてしまって、だからこれだけしか使えないのだというようなところに追い込まれていらっしゃる方もずいぶんございます。私はそのことは

一種のはやりだとさえ思うのでございますが、生活設計というものがもしそのようなものだといえますれば、私はとうていついていけないのでございます。

私が申します生活設計とは、やはり自分で生きていく条件というようなことになるわけでございます。それで今のように経済的な計画ということももちろん中に入りますけれども、それも含めてもっと幅の広いものであって、そうしてもっとある意味でしんの通っている動きのないものだというふうに考えるのでございます。そういたしますと、この激動の中にあつて、私どもの生活というのは一体何をめがけていったらいいんでしょうか。そこで先ほどから申し上げたように、しあわせということをもう一ぺんここで吟味してみる必要があるのじやないかということになるのでございます。自分も勤労生活者でございますが、わが田に水を引くつもりもありませんし、またここにおいでになる皆様のお職場の関係におもねるつもりもないのでございますけれども、働く人の働く喜び、満足、これが非常に大きなしあわせの条件だと思つてございます。それで働く人の、自分は経済設計のために働かざるを得ないのだ、こういつた考え方は否定はしませんけれども、それが大きくあつてはつまらない。そうではなくて、自分の値打が大きくなっていくということ、あるいは自分が生きがいをそこで感ずるということじやないだろうか。そう申しますと、よく職場の若い方は、だって先生つまらないのですよ、毎日あんな同じ仕事をして、生きがいなんかありやしないとおっしゃいます。けれども私がその生きがいを持ちますゆえんは、手前みそでございまして一つあるのでございます。それをこの間も若い方に聞いていただきましたから、皆様にもちよつと聞いていただきたいと思つてございます。

私自身のことになつて恐縮でございますけれども、私は実は一人の夫と三人の子供を持っております。夫はずつと一人でございますけれども、それが非常に気に入つて一人でなければならぬということを提唱しているわけではございません。このごろでは、人生に二度以上結婚をすべしという議論をなさる方もございますし、また結婚ということについてはただいま二つの流れがございます。結婚への疑義と申しますか、そういうものもある時代でありますから、私はあえて一夫一婦ということ強調するつもりはそんなにないのでございます。でも働いていて忙しいということとはしあわせなこと、お互いにこんな男じやなかつた、こんな女じやなかつたというように、長年つき合つておりますればいろいろ欠点も出てくるのでございますけれども、取りかえるひまがないというのでございましょうか、そういう意味で夫はずつと一人ということを申し上げているのでございます。その間に三人の子供がございまして、「子供三人貧乏線」とはよく申したもので、ずつと貧乏線の引きっぱなしでございまして、三人の子供に対して、私

の母性意識というのでございますか。人間意識というものがそこに一つコチンとできてきたわけでございます。これは人様並みにかわいいことは申し上げる必要はないのでございますが、実は私の心の旅から申しますと、まだ学生時代のときにエレン・ケーに非常に私淑いたしました。エレン・ケーは女の人でございますが、この人が書かれたものを私は非常に傾倒して読んだのでございます。忘れもいたしません。その中に「子供は親を選ぶ権利がない」という一言があったのでございます。このごろの学者はこれを書き直して、子供は家族を選ぶ権利がないなどといいますが、私は「子供は親を選ぶ権利がない」といった方がいいと思います。なるほど、これほどずばりといったものはないのじやないかと胸のすく思いがしたのでございますけれども、私はわが子を初めて見ましたときに、この言葉がひらめいてたまらない思いがいたしました。子供は親を選ぶ権利がない、私も選ばれてこの子の親になったのではないのだ、もしこの子に親を選ぶ権利があったら、もっとほかの条件のいい家に生まれていたかもしれないのだ、私は親としてたまらない気がいたしました。いささか神経質になっていたわけでありませう。でもわが子となったら、子供が私の子として生まれたことをいいことだと思っただけ、そうであるようにしよう。

ではこの子をどうしたらいいだろう。エレン・ケーが書いておられますのに「子供は親を選ぶ権利がない、しかれども愛される権利がある」このごろの学者はまたそこを書き直しまして、子供は教育を受ける権利があるとか、育てられる権利があるとかいうふうに、いろいろこまかく説明しているのでございますが、一言をもってすれば愛される権利がある。こういうのでございます。私はその言葉にすがりまして、そうだ子供を愛すれば、かわいがればいい、こう思ったのでございます。ところがかわいがるといことがよくわからない。スタンレー・ホールは、子供を愛するとは子供を知ることである。而して知れば知るほど子供を愛することになると申しております。これは実に立派な言葉ですが、その時の私はそういう教育学説で満足できない。子供を愛するとはどういうことか。そうだ、この子をせいぜい私の力でしあわせにしてあげようと思ったのでございます。なぜならばしあわせは人間が一番望むものだから、そう思いましたが、そのとき私が考えたしあわせの条件というのはどうもわが家がないのでございます。というのは、しあわせの条件として第1に頭に浮かぶのは、現代の生活もそうだろうと思いますが、お金があるということです。ところが私の家には金がない。ないことはないのですけれども、少ししかないというわけでございます。私は学校の教師でございませうから、金のもうかるはずがないのでございます。それから私の夫は国家公務員でございませう。公務員というのは、お金が沢山もう

かりますとどこかに行かなければならない。夫はまだ小菅にもどこにも出入りしたことがないだけに、お金には縁がない。けれども退官後ただいまは自前で特許の弁理士として事務所を開いておりますので、特許関係に御用がありましたら、どうぞよろしく御引立をお願いをいたしたいと思っております。と、まあこれは私事で恐縮でございます。そういうわけでどうもお金というものが親にはない。それじやどうしたらいいか、りっぱな邸宅があれば、そういう家に住んでいればしあわせだと人は見るかもしれない。しかし私の家は小さな家で、とうていそういうようなことではないのでございます。金もない。家もない。林子平じやないけれども、何もない。それじや世の中の安定した身分といったようなものが保障されているだろうか。親にそういうものがないといたしますと、子供をしあわせにする手がかりが私にはない。非常に悩んだのでございます。真剣に考えました。私はおよそ人生の中で純真に考える機会ということはあるにはないと思っておりますのでございます。私が今真剣に考えたと言い切れますのは、私の子供にかける愛情がほかにかける愛情よりかも純粋だと思ふからでございます。ほかの場合には、たとえば恋人にかける愛情では（まんざら経験もないことではないのでございますけれども）私がこんなに思うのに彼はどうだろう、こういうふうに考えます。そのほかの場合、友だちでもそうです。親友もでございますけれども、私はこんなにあの人のことを考えてあげるのにあの人は？と思ふのでございます。しかし子供に対して無条件、いわば愛しっぱなしで、打てば響く愛までも要求していない。最も純粋だと思ったのでございます。その純粋な私の心境でもって悩みましたことは、ほんとうに人生の悩むに値する悩みだと思ひました。そしてどうしたら子供がしあわせになるのだろうか、こう思ったのでございます。ですから、私にはハピネスということが大へんな問題でございます。ゆくりなくも私は少女のある日を思い出したのであります。私が少女のころに、実は親戚にとても金持の家がたった一軒ございました。私はその家にアルバイトに行っておりました。そのころ私はやせておまして、今の学芸大学の前身青山師範付属小学校に通っておりました。ここにはあそこで学ばれた方もおいでかもしれませんが、庭に藤棚がございまして、その下へ子供を集めて、先生が朝お話をなさる。

筋金のはいった勤勞教育でございました。「みんなよい子になりましょう。よい子になるとは働くことです！」それから先は先生のテクニクでございまして、忘れもしません。働くということはハタラクだから、はたを楽にすることだ、こういうふうに習ったのでございます。今日の子供でしたら多分に批判的ですからよい子になりなさいということをいうと、それは何かということをまずいうでしょう。はたを楽にするとはいふだろうかというふうにいふでしょう。自分を楽にする

ということをいうでしょう。そのころには私は血のめぐりも悪かったりして、先生というのは非常にとろとい方だと思っておりました。実はそういうことを申しはなんですが、お手洗いにもいらっしやらない神聖な方だと思っておりましたから、全身全霊をもってその言葉を信じまして、よい子ははたを楽にするという生活信条で固まっていたのでございます。親戚の家は会社設立の間ぎわで非常に忙しく、お客様の相手をするのは叔母の仕事でございました。私はこの人にかわいがられまして、気をきかして何でもやったのでございます。たとえば客が見えたときでも、叔母が「玄関だよ」こう申しますと、玄関の横の応接間は土足で入るようになっておりますので、お客様は要件が済んだらすぐ帰られるから、まごまごしないで番茶の熱いものを持っていこうと思いましたが、「お二階だよ」といわれれば、これは長くおいでになるから途中で紅茶を持っていこうというふうにいたしましたから、私のはからいましてはことごとく叔母の思うつぼにはまったわけでございます。「よい子だ、役に立つ子だ」といってほめられる。人間ほめられるということはほんとに嬉しいものでございます。人をお使いになる方はほめることをどうぞ惜しまないでいただきたい。ほめたとて何カロリも要ることはないのです。聖書にもございますね。はじめに「神天地を造りたまひ而してよしと見給えり。」おほめになるには、ただ「いい」「そうだ」といって下さるだけでいい。「あたりっぱだ」とか「けっこうだ」とか、あまりやたらにほめてはおかしくなります。私はそういうふうにはほめられたことがいかに嬉しかったか。それでよく御婦人がお集まりになるときは、夫の飼育法はまずほめることだということを申し上げているのでございます。「もう少し働いて収入を」なんていわないで、「あなた大へんですね、おえらいですね」といってごらん下さい、馬力がかかりますからということを申し上げているのでございます。(これは裏話で、きょうお話すはずのものではなかったのでございます) そういうわけで、ほめられましたが、ほめられているだけではないのでございます。

私はお小づかいをもらいました。お金をもらうということはさらに嬉しかったのでございますが、それよりもっと嬉しかったことがありました。というのは、私がチラッと横目で見ておりますと、叔父の食卓はとても豊かでございます。外国から帰りたてで、それこそベルモットだのなんだのいろいろなお酒を並べて、肴の皿数も多くて豊かに楽しんでいました。それに比べて、父の晩酌は何と貧しかったことでしょう。小さな茶ぶ台に一皿くらいのさかな、それを突ついているのでございます。今日でしたら、その階級差というもので私は左巻きになっただろうと思うのですけれども、そのころは何らそういうふうに思いません。ただお

父さんは気の毒だなあと思っておりました。ところで私が働いて帰りますときには、叔母がその叔父の食べているような肉だの珍しいさかなを包んで、「お父さんに食べさせなさい」といってくれるのでございました。それが非常に嬉しかった。きようはお父さんはおじさんと同じものが食べられる、「さぞおいしいだろう」と胸ふくらむ思いでございました。そこで夫の飼育法の第二でございしますが、お酒をあがる方には一皿盛りはやめた方がいい、全部離して皿数を増した方がお酒はおいしいものですよということをよく申し上げるのでございます。そういうわけで喜んで働いていたのでございますが、年末のころになりますと、もう一人私のいところを呼んだのでございます。私のいところに当たる子は私とは性格も全然違いまして、おとなしくてほんとうにやさしいいい人でございました。この人はなくなりましたが、そのころ彼女は太っておりまして、モーションがゆっくり私はチョコチョコと早い。また条件が違う。「よい子ははたを楽にする」という非常にとうとい生涯の徳とすべき生活信条を、彼女は学んでいなかった。学校が違いましたから。彼女はおっとり、のんびりしております。けれども、叔母から見るとだれかれということはありませんから、その子をつかまえても、「お二階だよ」「お玄関だよ」ということを言うのでございます。どだにおぼは半分しかものを言わない。その子はゆっくりしていますから、ゆっくりゆっくり「おぼさん、どのお茶碗？ どのお盆？」なんて聞くのでございます。私が聞いていても歯がゆいくらい、全部聞かなければ動けない。それでおぼはどなってしまう。「お前さん、わからなければいいから台所に行きなさい」と言ってどんどん二階へ行ってしまう。台所に行けということでもありますから、彼女はすなおに台所に参りまして、広い板の間のまん中のところにべたんと坐りまして、落ちついてから静かに回りに働いている人の方を見て、「ねえー。何かさせてよ」とたのむ。そう言われると早速この提唱に対して応じなければならぬ。それはそこをどいてほしいということです。女中さんは申しました。「お嬢さん。済みませんが廊下にいったらどうですか」というのは長い畳廊下があって、柱時計がかかっているあたりでよくみんながとぐるを巻いて話をしたところなのです。彼女は何か用事が降ってくるかとそこに行って待っております。ところがだんだん時刻が移りお食事をあげたり、お銚子を出すことになると往來が激しくなる。また彼女はじやまになって、女中さんたちに「隠居所に行ったらどうですか」とやられます。実はこの家は池田山にございまして、一代ですった家でございしますが、お通りがかりのときにはごらん下さい。目黒から五反田の間で省線の中からごらんになりますと今はきたないアパートが建っています。あの一山が親戚の持ち物だったのでございます。

一と日が暮れまして、多分目黒の方へ行くときが多かったと思うのでございますが、二人はおみやげや小遣をもらって途中まで一緒に帰ります。その日は何ですか私は未だ興奮がさめ切れず、「ねえ、しいちやん、きょうとっても忙しかったけどおもしろかったじゃない？」と何か言うつもりで口を切りました。と、しづ子が今にも泣きそうな声を出しまして、多分泣いていたのでしよう。「あら私つまらなかつたワ」と申しました。私は話を切られてしまって思わずあの人の顔を見ましたら、ほんとうに憐れな顔をしているのでございます。目をふせて、私はあの人の死に顔よりそのときの顔が忘れられない。彼女は「だって、私、何の役にもたないんだもの」私は心から同情したのです。ああそうだろう、しいちやんは一日中ああやって追いやられて、さぞつらかつたろう、淋しかつたろう、こう思ったのでございます。私の思い出した風景はそれなんでございます。私わが子を置いて墓の下に入る日が必ず参ります。その時子どもたちは一体どんな営みをしていることでしょうか。どんな営みでもあれ、「お母さん、私は何をしに生まれてきたんだらう。つまらなくてしかたがないの」と言ったとしたら、私はどうしたらいいだらう。けれどもどんなささやかな営みでもあれ「母さん、僕は張り切っている、生きがいを感じていますよ」と言ってくれたら、私は空の隅の星くずになっておるのでございませうが、心から満足して、よかつたとまたたき返すことができるだらうと思ったのでございます。あ、しあわせとはこれじゃないかと私は思いました。つまり人間価値じゃないか、人間価値を発揮してそれが回りの社会に受け入れられていくということ、回りの社会と申せば、最も小さいものは家庭社会でございます。その中でお前はじやまなんだ、あっちに行ってくれといわれぬことだ。そこにいてくれ、それをやってくれ、あなたがそれをやったらとてもよかつたのだ。こういうふうに自分が扱われ、自分がその力を発揮できるということがしあわせじゃないか。

これは私が勝手に申すのではなくて、先ごろおなくなりになった前国会図書館長の金森徳次郎博士が、憲法草案のころにその気持を私どもの大学でお話し下さしまして、最もポピュラーな言葉で「日本国民の生きがい」ということをいわれました。私はこの言葉は非常にとろいと思つているのでございます。しあわせとは生きがいということじゃないだらうか。どんなものがありましようとも、お前はあっちへ行け、何も用がないというようなことでは、ほんとうによかつたとは思わないだらう。私はわが子に対して、私の全精力をあげてこの子の生きがいを作り、人間価値を発揮し、人間価値がますます大きくなるように助けよう、その手伝ならぬ。こう思つてやや安んじまして、今日までその道をたどつて参つたのでございます。今何をしているかと申しますと、長男は石川島重工の研究室に

勤めさせていただいております。つい先ごろ結婚いたしました。東大を出ましてからアメリカに参りまして、助手をしたり何かしながら、向うのMITで働いておりました。実験助教授という時代を過ぎまして、今石川島で使っていただいております。あとは二人の娘でございますが、次の娘はせがれの親友と結婚いたしました。私の家におります。私にたった一人のかわいい孫をオモチャに——といっは悪いのですけれども、私の生きがいにくれるくらいでございます。下の娘は本学の児童科を出て、うちの付属の小学校に勤めさせていただいております。これが人間価値というものをやはり信ずるようになりまして、自分の付属の学校の子供たちはみんなピカーだと思っているのでございます。あの子に話を聞きますと、「あの人この間とても上手にやってピカーよ、お母さん」また次に出てきたお子さんも「ピカーよ」何でもピカーです。「あなたの学校にはピカーばかりでピカニヤピカ三はないの」と言ったら、「お母さんもそう言ったじゃないの」と私に申します。というのは、人間の価値というものはその簡単にだれの次にだれなんて評価できるものではない。それぞれのヒューマン・バリューというものがございます。ある点では兄がすぐれ、ある点では弟がすぐれ、ある点では姉がすぐれ、ある点では妹がまさっている。クラスの子40人いれば40番あるのではない、それぞれの価値があるのではありませんか。と学校で話したことがあるからでございます。

私はつい先ごろある小学校へ参りました。東京の特殊学校でございます。鐘がなって、ほかのお子さんはびっこ引き引きでも、手車に乗りながらも、みんなクラス・ルームに入ってしまったのに、一人うずくまってげた箱のところに残っているお子さんがいました。うしろから見ましたら、14、5歳のお子さんでしたが、私はどうしたのかと思ってそばへ行きましたら、人の気配でそのお子さんが顔を上げて私を見たのですが、私は実はぞっとしたのでございます。非常なけいれん性らしゅうございまして、顔の半面がグッと喰い違っている。すごい顔付なんです。そして目も片方に寄っている。そして唾液の異常分泌で大きな黒いよだれかけをかけて、おせじにもかわいいなんて言うどころではなかったのでございます。私は自分が人間価値は尊いものだなんて言いながら、そういう意識を持ちました。そのお子さん何をしていたかという、げた箱からげたをみんな出して、また端の方から入れている。これは知能テストからいいますと、赤ちやんの1歳半位でございましょうか。ここにお父さんやお母さんでいらっやる方がおいででしたら覚えておられると思いますが、1歳半のころに子供が抽斗からみんな物を出す時代があるじやありませんか。ですからそのころには抽斗をみんな高いところあげて育てるようなことをしなければならぬ時代がある。あのころの知

能指数でございましょう。それを14, 5歳と覚しきお嬢さんがやっている。私は感無量なものがあつたのでございます。ところが時刻が移りまして、学校給食の牛乳屋さんとか学校の用務員の人がこの廊下を幾人も通る。通るとき、皆、そのお子さんのうしろから「ゆき子ちゃん」と軽く頭を叩くと、それに対して見上げました彼女の顔は何とまあ世にも嬉しそうな顔でございました。自分に対して愛情を注いでくれる者、見知っている者に対しては、しんから嬉しそうな顔で、何とかかわいいことでしょう。私は先刻夜叉かと思ったのに、今は非常にかわいい顔をしてむかえるのでございます。期せずして思い出したのはパール・バックのごとでございまして。パール・バックは「大地」という本を書いて日本に紹介された女流文学者でございまして。支那の奥地の生活をそのまま写したのですが、彼女が支那の奥地の生活に深かったのはお父さんが奥の方で伝道にたずさわっていたからでございまして。その少女の日に彼女には夢がありました。自分は子供が好きだから、お嫁に行ったらかわいい女の子を幾人も持ちたいというのでありました。夢が遂げられて、彼女は結婚してかわいい女の子が生まれました。

非常にしあわせになりそうだったのでございますけれども、どうしたことか、その子がいつまでたっても笑わない。口をきかない。それでお医者さんのところへ連れていきましたら「これは支那の医学ではどうすることもできない、早くアメリカへお帰りなさい」といわれ、びっくりしてアメリカに連れ帰りました。精神医学者、精神科学者を9人か10人門を叩いた。そうしたらみんな異口同音に、これはだめだ、どうにもならないといわれたのだそうでございまして。あの若き日の夢が音を立ててくずれてしまいました。幾夜か泣いたというのでございます。それでも現実にはそこにいるわが子を見ますと、どうしてもこれを捨ておくわけにはいかない。そこでアメリカにはこういうことで苦しんでいるお母さんもたくさんあるであろう、一緒になって何とかしようというので、呼びかけをして特殊学校を作ったわけでございます。そこへ入れたところが、刺激が同じ程度ですからお子さんがとても楽しくなり、少し笑うようになり、たどたどしい口をきくようになりました。その欲のない美しい姿というか生き方というものにはほんとうに打たれて、人間の値打というものはこういうものであったかというので、彼女は今まで持っていた浮世的な人生の条件というものがすっかり変わり、人間価値というものがあったといわれたのでございます。この時の著に「母よ嘆くな」というのがあります。

私はその特殊学校の廊下に立っておりまして、ゆき子ちゃんといわれたそのお嬢さんを見てそのことを非常に思ったのでございます。人間価値というものは私ども一番中心としてあらためて考えなければならぬことじやないか。そうして

人間は自分のそのヒューマン・バリューを発揮したときにほんとうに生きがいを感じるといふことになるのじゃないか。ですから働いている人は、自分の生活をどうしても尊重せずにはられないのじゃないだろうか。そういうしあわせの条件をまず持っているんじゃないだろうか、こういうふうに思うのでございます。それでいいかげんなものでなしに本質的に働いているといふことの喜びなり意義なりを、いろいろな時期、いろいろな方法でお互いが知り合い、それを確立し合うことが日々の生活にとって非常に必要だと思ふのでございます。

私がこういうことを申し上げるのはどうかと思いますが、近代経営学の中では利潤ということが第一の要素でございます。第二の要素は従業員の福利ということだそうであります。経営学者はそういうふう書いているようでございます。第三の要素は社会的責任といふことでございます。事業というものは没人間性のものでございまして、人情を相手にしていたのでは利潤追求はできないといふふうにだれもが納得して、いわゆるゲゼル・シャフト、こういうふうにしたのでございますけれども、近代は人々が人間を大切にしようになつて、経営におきましても、利潤を非常に得るためには従業員の福利ということが取り上げられなければならない、従業員の福利といふことは働いている人間を尊重することであつて、その職場において厚生事業がよくできておるといふことではなくて、その働いている人の家庭生活なり個人の生活なり、会社、事業所に来る前の生活といふものがほんとうに安全であり、しあせわでなければならぬ。こういうことが書かれていふようでございます。私は職場の方は存じませんが、そのことを非常に賛意を表し、共鳴する者でございます。そういうわけでございますからその個人個人といふものがほんとうの意味で尊ばれ、人間価値がそこに浮き上がらなければならない。人間価値を育てるといふことは、では、どんな条件があるのでございましょうか。ここへ話がくるのでございます。

人間価値を育て、人間価値をできるだけ大きくして、これができるだけ回りの社会に使ってもらえるようにするといふこと——お断わりいたしますが、回りの社会の最も小さきものは家庭社会であるといふことでございます。そこから始まるのでございます。潜在失業だとか失業問題をお前は知らないかとおっしゃられますと困りますが、私は最も小さき家庭社会だ、そこから出発するのだ、その上に国民生活といふものが社会の問題になるのだ、そういう理論に従つていく者でございます。そういたしますと、私どもの生活の設計といふのは自分のしあわせを追求し、作つていくことなんでございます。こういうふうを中心がきまりこれが人生の最後のゴールである、ときめていいんじゃないか。そういたしますと、これに従ふために私どもの持っている材料といふものを考へてみる必要

がございませう。ここに取上げたのは七つの材料なのでございませう。これはどこの家庭にもあるもので、Aの家にはあるけれどもBの家にはない、そういう不平等なものを取上げてはお話になりませう。どこの家にもあるもの、こういうふうにかんがえたい。この要素をできるだけ有効に持ち、かつその値打をできるだけ能率的に発揮する、こういう働きができるようにする生活設計ということになると思ふのでございませう。申し上げるまでもなく、第一が身体的な要素、私たちはからだを持っているということ、第二は精神的な要素でございませう。皆様御承知のように近代科学では身体、精神なんてそんなに分けないでかんがえているらしく、人間は身体精神的存在である、こういうふうにお説きになるようでございませう。私もそういうかんがえ方は好きでありますけれども、一応要素的にかんがえますと、まず二つの面があつて相関関係であるとかんがえたいのでございませう。それからエネルギー働く力とでもいいましようか、次が時間、金、その次が社会的用役、ここには私が原稿を書き違へたのだと思ひます。「要」は用いるという字を書いていただきたい。社会にありますいろいろなサービス、設備、諸活動というものをここにとりまとめたのでございませう。これは一言で申しますれば、それらが有効に発揮されるようにということであるのでございませう。ついこの間の新聞にソ連政府が中央委員会で決定したことが出ておりました。タス通信で「共産党中央委員会とソ連政府は、このほど1960年、61年の2年間に、文化生活用品と家庭用品の生産を大巾にふやし、その種類を多くし、品質を改善する決定を採択したというのであります。ソ連が今までどういうことをしたかということは私も少し聞き込んでおりますけれども、今度はそういうふうにして国民の文化と福祉を向上する、そうして参りましたが、一そうその要求にこたへ、その国の勢力をそちらに向けるのだというのでございませう。これはよその国のことながら非常にけっこうなことだと思ひますけれども、彼の国の真の意味はよく存じませう。

私どもの生活の設計というものは人間生活のためにこれらのものがよりよく動員される必要があると思ふのでございませう。そしてそれは簡単な言葉で申しますれば、生活の水準を上げるということになるのでございませう。この間発表された経済報告によりますと——経済白書ではございませう。企画庁がその前に出したもので、私ども委員が持っているものでございませうから、出してはどうかと思ひますけれども、成長率を7.2にしますと、その場合に消費というのは1.6倍増だというのでございませう。消費の増加率は非常に小さい。この消費というのは大きな消費者は主として国ではございませうけれども、これを生活の面でかんがえますと、非常にアンバランスになつていて、私どもの生活が貧困だというふうにかんがえてもいたし方がないのじやないか。美濃部氏あたりはそれを突いて、日本の経済

の貧しい姿ということをおっしゃっていますけれども、とにかく人間が作られていく場におきまして、これらのものができるだけ有効に、豊かに扱われるような生活というものが必要じゃないか。ですからこれをもっと別な言葉で申しますと、生活を受するという、生活を受するというは自分を受するという事なんです。先ほどこちよと申し上げましたように、自分を受するという事は当然なんでございますけれども、今の若い方々とはかく価値判断が違って参りましたたとえば結婚というようなことでも、今相当の年輩の方は、結婚というものは人生の重大なことである。また子孫に及ぶことである、その責任を持つべきものだから非常に神聖なものであって、これはほんとうによく考えて決断すべきことだ。そしてそのゆえにこれはとうとばれることであり、祝福されることである。こういうふうにお考えになるであろうと思うのであります。もしそれに宗教的な色彩を持ちますならば、「神が合わせたもうもの、人これを離すべからず」と申しまして、キリスト教でも仏教でも、人生の一回の盛儀を行なうのだというふうに尊ばれて、非常に慎重にされていると思います。これに対しまして、それは人間の自由であり、結婚なんということは全く当人同士がしあわせならどうでもかまわない、期間の長さだとか条件の不備ということはあえて他から問うべきではないのだ、二人がよければ3日でも4日でもいいじゃないか、もしそれが工合が悪かったらいつでも解消してもいいじゃないか、こういうような論も一方のみんながほんとうに信用するような人たちがかついでいるわけでございます、そしてほんとうにそうだといってそれに従っていく人もあるんじゃないか。切ってみると今そういう二つのものがあるのじゃないか。学者はこれらを取り上げてまして、結婚に対する疑義というように申しているのでございます。

これを尊奉して、それをほんとうにそうだといって手を叩いているような若い人のある例を申しますと、4年制の大学を出ようとする相当教育を受けて理論走っているような人が婚約をいたしました。自分の結婚の相手ができている。それで「それじゃ今から結婚生活に入るまでに一年間余裕があるので、今からあなた方はどういう態度に出るのですか」と言いましたら、その女の人の方は「結婚生活に入れば多少とも束縛を感じるから、この間二人は十分に自由を楽しみたいと思います。彼がどういう人とどんなつき合いをしようと、どんな生活をしようと自分はとがめない。」というのは、多分に性的なことも入っているのでございます。「そのかわり自分も全く自由にさせてもらいます。ですから彼ともそういう約束をしました。大いに男の友だちも作り、いろいろと楽しんでいこうと思っているのです。」こう言うのですね。それがお互いに結婚生活に入るある意味の準備であり、自分たちの全く楽しい思い通りの生き方がある。こう言っているので

ございます。こういうことを聞きますと、あれっと思ってびっくりすることがあるのでございますけれども、結婚とはそういうものじゃないかという論を立てている方は決して若い人でなくて、相当の年輩の方でございますが、結婚は全く本人同士の自由じゃないか、3日でも5日でもいいのじゃないかという極論をいっている方も、「ただし」といってつけ加えてあることがあります。というのは、「もちろんこの当事者はどちらも良識を持った人間であるということが前提である」こういうふうにつけ加えてあるのでございます。しかし得てして世の中は、ことに若い人は気が早い。その前提だのただし書きは見ないで、上の方だけ見てそうだそうだ、こう言っているのじゃないか。そうしてその点だけを見て憂えている人もあるのじゃないか、こういうふうに思うのであります。

そのように考え方がいろいろでございましてけれども、私は学生に対しても申しているのでございます。自分を大事にしたらどういうふうになるだろう、自分をそんなにひどいところに追い込まないようにすることが必要じゃないか、お金の使い方にせよ何にせよ。そういう意味で吉田松陰という方はえらい方だと思うけれども、合理的でないということを言いたいのでございます。吉田松陰という方はえらい方で尊敬しますけれども、あの歌が気に入らない。「かくすれば、かくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」かくすればかくなるものと知っていたならやめたらいい。かくすればかくなるものという良識を今の人は持っている。こんなふうになったら自分が追いつめられて大へんなことになるということがわかったらしない方がいいんじゃないかというふうに思って、吉田松陰様にはすみませんけれども、私は頭に残る歌としてそれを持ってきて、自分を大切に方法じゃないかということをお願いしているのであります。少くともただいま徹底した個人主義であってよいでありましょう。決してそれは単なる利己主義というのではない。ほんとうに自分の主体性を守って自分の主体性を育てる、そういう生活信条であっていい。ですから自分が主体性を持っていればどうでもいいということじゃなくて、自分が主体性を持てば持つほど自分がかわいくて、これをほんとうに尊重し、汚されないようにしようということにならなければならないのじゃないか。そのためには勇気が要る。ですから生活設計というものも並べてみてそのバランスがとれるという考え方が必要じゃないか、こういうように考えるのでございます。ここのところは、私が不調法でおくれてきて申し上げるひまがなく、大へん相済まないと思っております。プリントについて御賢察を煩わしいと思っております。

先日も例にあげた一つの話がございまして、それをまた今日も聞いていただきまして、お別れを申し上げたいと思っております。それは私が非常に心服いた

しておる実例なんてございますが、実はついこの間フィリピンからマニラ大学の家政学部長が参りまして、いろいろと話をしてほしいというので話をしておりましたときにも、そのフィリピンのある人の話が出まして、彼女は非常にりっぱな人だというわさをしたことでございます。皆様もあるいはお心に残っているかもしれないませんが、フィリピンに「金の星未亡人会」という戦争未亡人の一番大きな会がございまして、その役員を数年前に10人ほど招いたことがございます。私どもが属しております大学婦人協会というのがこれを主催いたしましたので、25の婦人団体から拠金、御援助をいただいてこういうことをしたのでございます。事の起りは、向うのフィリピンの婦人たちが日本に対してうらみ骨髄であるという情報が入りまして、日比の親善というのは非常に大事だと思いましたのでそういうことを起こしたのでございます。そのとき参りました団長がミセス・ノルマンデイという人でございます。この人はことしの一月なくなったのであります。団長は二人の男の子を連れて参りました。その下の子が胎内にある時(妊娠9カ月)彼女の夫はその目前で惨殺されたのです。これらの人を直接の問題としてお話しているわけではありませんけれども、その事柄をお話し申し上げた方がいいと思ってお話するのでございますが、日活国際ホテルで正式な——正式なというのは、バンドがついたのがそうなんだそうですが、そういう歓迎会をいたしました。そうしてみんなこどもも立って、よくいらして下さいというようなことを述べ、日本の婦人は今まであなた方の悩みを知らなかった、戦争後日本婦人はみんな…何だかんだあらゆる言葉を尽して歓迎したのでございます。そうしましたら、それに対しまして団長ミセス・ノルマンデイが壇上に立ちまして、ものを言おうと思ったら彼女は涙が出てくるのでございます。私はものの本に「暗涙をのみながら」と書いたのでございますが、まさにその姿だろうと思いました。雄弁家ですのにとつとつと言われたのでございます。そのお答えの言葉の中で、私はほかの言葉は実際みんな忘れてしまって、何を言われているか頭に入りませんでした。一言胸につきささったような言葉がございました。というのは「過去は私から今去りつつあります」と言われたのです。ingをつけて申しました。日本に対するうらみを私はまだ捨てかねている、彼女はまさしくそう言ったのでございます。私はそれを聞きましてドキンといたしました。大へんなことだなあと思ったのであります。

他の国に観光客となって3週間遊んでいって下さいとって招かれていながらまずそれを言わなければならないというのは容易ならぬことだなあと思っただのでございます。会の皆さんは力を尽して3週間方々に見物旅行をおさせしました。たくさんパーティもしました。お別れは椿山荘でいたしました。実際山の

ようにおみやげも用意いたしました。きっと皆さんの関係の会社をお願いをしたことと思うのですが、非常なおみやげを用意して歓待をつくし、お別れの会をしたのでございます。そのときに団長が立って申されました。このことを皆様にお伝えしたいのでございます。「私は今日ここに立って、日本に対するうらみのかげらもなくなったことを見出しました。一体これはいつからこうなったのでしょうか。なぜだったでしょう。」あとで聞きますと、実は前日だったそうでございますけれども、「なぜだったのでしょうか。決してあちらこちら見せていただいた美しい見物旅行のためではありません。またにぎやかにしていただいたたくさんパーティのせいでもありません。それから今日ちようだいした山のようならず高いおみやげのためでもないのでございます。とすれば一体なぜだったのでしょうか。私どもが旅行しておりますときに、小さな駅に汽車が止まったときに、われわれに会うために長時間立って待っていて下さった日本の戦争未亡人の方たち、その方たちにお会いしたときだったかもしれません。汽車の中でまどろんでおりますと、どなたか日本の紫のスミレの花束を窓から投げ入れて下さった、それを手にとったときかもしれません。汽車の窓から外を見ると、お百姓さんのこどもがレンゲの花を手にとって「さよなら、さよなら」と振ってくれる。それをながめたときだったかもしれません。最後に私は大阪の会に参りました。大阪の会で一人の日本婦人が私のところに会いに来て下さったのであります。この方は英語がおできにならない。それで一人の新聞社の方が通訳について下さいました。小さな箱を持っていらっしやいました。おっしやるのに、「この箱の中に日本のサクラの押し花が入っています。それから私の子供の名前が書いてあります。(名前とは戒名のことだったのです) それから私は別にここに子守歌を持って参りました。私はその子守歌を歌って、この子が——グッド・ウイルという言葉を使っただけでいらっしやいましたが——よい心がけの人間であるように、平和を愛し、人を愛する、やさしい美しい人格を持った人間であるように思って、大切に育てたのでございます。けれどもあなたのお国に参りました。あなた方を苦しめるような、そんな悪いことをした人の中にわが子がいたのでございましたらどうぞかんべんして下さい。それはこの子の本心だとは思われませんから許してやっていただきとうございます。この箱はマニラにお持ち帰り下さい。マニラ湾に流していただきとうございます」こう言って帰られました。私はその箱をもらって、自分のホテルの部屋の棚にのせて、さてその前に立ったときに、もはや日本に対するうらみのかげも心の底から消えたのを見出したのでございます。今日連れて参りました二人の子供、やがて日本に寄越します。あなたのお国の大学教育を受けさせたいと思いますから、その節はどうぞよろしくお願いいたします

す。」こうおっしゃったのでございます。

私はその話を聞きまして感激いたしました。そうだ、このときに一番大きな国民外交をしたのは、何とおっしゃる方が存じませんが、大阪の一人の日本の婦人だったと思ったのでございます。けれども考えてみますのに、相当会話の上手な方たちでも、みんなが英語でペラペラやっているところに飛んで出ていけるものじゃない。まして一言も英語ができないのに、人についてきてもらってまで、国民外交をしようなどこのお母さんはお思いになったのじゃないと思うのでございます。このお母様に勇気をつけたのは何であつたらうか。それはひとえにお子さんに対する愛、愛といえはそれまでですけれども、すでになくなってしまっているお子さんへの人間価値の尊重観念だつたと思うのでございます。戦死したお子さんの戒名など書いて、一体だれに覚えてくれというのでございましょうか。あの遺骨でさえ、遺骨収拾団がフィリピンにいらしやいまして、満足などくるを二つ、どなたかわからないのを備え拝んでいらしやる。あとはみんな一握りの灰にすぎない。私は遺骨については特別の感覚を持ちます。かわいがった主人の弟がございまして、この人がノモンハンで戦死をいたしました。遺骨とはどんなものが帰ってくるか、身にしみて存じているからでございまして、骨でさえあなくなってしまう。つわものどもが夢の跡、何を覚えよというのでございましょうか。このお母様に勇気をつけたのは、ひとえに自分のお子様の人間価値が尊くて、この価値は、いづこいかなるときにも、生きるゝ死ぬとの区別なしにだれによつても、どんな場合においても汚されてはならない。汚されたままであつてはならない、こういうことであるに違いないと私は思うのでございます。ですから私が自分を大事にしましよ、自分を愛する、自分を尊重するというようなことは、なまやさしい、かりそめのもと思つて申すではありません。自分の小さな体験で申しているではありませんで、このお母様の命がけな行動によりまして知らしていただいたことを尊く思いますので、皆様にもそのままお伝えいたしまして、皆様の何かの御参考になすつていただきたい、こう思つたからでございまして。それで自分を愛する勇気が必要だ、生活を愛する勇気が必要だ、生活とは生きることであり、生きるということはどんなに条件が変わりましようとも、人間の価値が中心になり、生きがいを求めることがしあわせである。これを設計の中心としたいと信ずる次第でございまして。大へん整わないことを申し上げましたが、皆様の御自愛と御自重を願つてお別れいたします。

生活相談と青少年問題

東京都広報渉外局 山 室 民 子
公聴部家庭相談担当

きょうは大へんに大きな題目を与えられていますが、私は私らしく自分の立場からお話しますので、問題はおのずから範囲が限られてくることかと思っております。

こんな話を聞いたことがございます。知恵の足りない子供、精薄の子供を扱っている施設で、子供たちのテストをいたしました。先生は子供たちを水道のところに連れて行き、それから水道のねじをおひねりになったのです。そうしましたら水がどんどん流れ出しました。そこで先生は子供たちに言われたのであります。「こんなに水がどんどん流れてきます。廊下はぬれてしまいます。どうしたらばいいのでしょうか。」そうしますと知恵の足りない子供はまごまごしておりましたが、ある子供は駆け出してほうきを持ってきてそれでそこを掃き始めました。またある子供はぞうきんを持ってきてそれでそこをぬぐい始めたそうでございます。けれども水はどんどん水道の方から流れてくるばかりです。そのうちにその子供らの中で幾分知恵の進んだ子供が何か思い出したように走って参りまして、水道のものを固くいたしました。そうしましたところが、水のもとがとまりまして、もう水は流れなくなったのでございました。

これは一つの例でございますが、こういうことがよくわれわれの世の中にもあるのでございます。もとを閉じておきませんと、あとからあとからと問題が水道の水のように流れて参ります。そこをほうきで払ってみても、あるいはぞうきんでぬぐってみても間に合わないのでございます。物の根源へ帰っていくのが大事です。子供の問題はそれに似ております。私どものように社会福祉の事業に携っておりますと、実際いろいろの問題が次から次へ出て参りまして、その措置に追われます。一体いつになったら問題が少なくなるのだろうかため息を吐きます。つまりは子供をよくしなければなりません。子供をよくいたしますならば、ちょうど水道のもとに手を伸べたと同じこととなります。もとが整って参りますと問題も少なくなり、次の時代は今よりも安からであらうと思えます。そこで私は本日のこの課題に対して自分は非常に興味を持ち、また関心を寄せているものであるということを申し上げることが出来ます。

ところで今七五三を迎えようといたしております。申すまでもなくこれは子供のお祭でございます。七つになった子供、五つになった子供、三つになった子供

たちのお祝いをする催しであります。私はその本来の趣旨には賛意を表します。それまでに赤ん坊のときから育ってきた子供のお祝いをしてやる。そしてその将来を神に祈る。これは美しいことであり、奨励されてよいことであります。私はただいまの時代に殊に欠けているのは、天をおそれる心、神を敬う心ではないかと考えております。最近私どもは特に著しい人間のわざを見ております。人工衛星、月ロケット、ジェット機の発達等枚挙の暇も無いほどです。今の人々が物質文明に酔うのも無理ないと思うこともあります。人間のわざは驚くべきものではございますけれども、それで人間が思い上っていいのかしらんと思わせられる節が多々あります。いろいろすばらしいものを発見したり発明したりいたしますがもしもそれで人間が高慢になって天をおそれることを忘れますならば、どういうことになりましょうか。せっかくの骨折りによって発見され、あるいは発明せられたものを乱用いたしまして、私の楽しみのために、私の利益のためにのみそれらが使われるようになり、戦争その他の悲劇を招くことになるのではないかしらんと思えます。こうしたときに幼い子供たちを神の前に連れて参りまして、その将来を祈るといふのは、大へん好ましいことのように私には思われます。

今日の日本の教育に欠けている一つのことは、宗教心を養う機会が欠けている点ではないかと思えますが、それは家庭や社会で補われなければなりません。人間は本来宗教心を持っています。そしてあるときには宗教を求めるのですが、全然その素養がございませんと——宗教にも、低いものから高いものまで色々ありますから、その選択をあやまりまして、みずから不幸を招く人々も少なくありません。親御さんたちも自分の信じておられる最も高く最も崇むべきだと思ふ神の前に子供を連れていくといふのは、そういう意味の教育をすることにおきましても好ましいことのように思われます。

ただ七五三の例をとって考えますと、本来の趣旨はよいのですけれども、その方法には近ごろだいぶ弊害が見られるようで、残念でございます。商売をしておられる人々が商魂をたくましくして、物を売ろうとなさいます。一般の人々がそれにつられまして、子供さんの衣服やまたはお参りについていくお母さんの衣裳を買います。そのようなことにばかり金が使われたり、また頭が使われて、本来の大切なものが忘れられ勝ちのようでございます。美しい衣裳を着せられることは子供にとってしあわせであり、又それは教育的であるかということを疑います。そういう行事の際に衣服を変えて、あらたまった気持になるのはよいことですが、それにはおのずから限度がなければならぬと思えます。殊に或る子供がりっぱな衣裳を身にまとして得々として出かけていくときに、それをうらやましそうに見ている多くの子供やお母さんたちのあるのを見受けたりいたしますと

これは考えなければならぬと思います。りっぱな衣服をまとうことのできる人も、社会に生活している以上は、おのずから慎しみというものがなければならぬのでしよう。こういふような行事も社会的に考慮されて、一部の子どもばかりでなく社会の子供らが同様に祝福を受けるのでなければならぬのではありますまいか。ちょうどシーズンでありますから、先ずこれを例にとってお話してみたいのですが、こんな一つの行事も考えてみればいろいろな問題を伴っております。

家庭相談に携わっておりますと、お子さまの問題がおのずから出てまいります。お子さんは将来があり、私は希望を持ってこれに当たっています。家庭の方々が相談に持ってこられますお子さまの問題を、大体二つか三つに分類することができると思います。その一つは特殊なお子さんの問題でございます。その数は多くはありませんが、盲聾啞という種類のお子さんがあります。また身体の不自由なお子さんたち、小児麻痺のようなものも近ごろだいぶ目に立つ問題の一つです。それから精薄のお子さんたちもおります。これらをどうしたらいいかと、親御さんたちが大へん心配されまして、相談にいらっしやるのです。身体は不自由ではないけれども何かの性癖を持っている、例えば夜尿癖とか盗癖とかいふような癖を持ったお子さんもいてそれも問題になります。また一般のお子さんのしつけの問題、あるいは学課の成績のよくないお子さんの扱い等々の問題もあります。

医学方面では最近予防の医学が、治療と並んでたいせつだと言われているというふうに聞いております。病気は進んでからよりもその初期、あるいは病気になる前にその危険が防止せられるのが一番好ましいことであると思います。お子さんの問題も子供が悪くなってしまってからよりも、むしろ悪くなる前に早くじやまものは取り除き、彼等がよけいな苦勞をしたり、傷を受けたりしないで、人生を安らかにすこやかに進んで行くようにいたしたいものでございます。

問題は先ずよく調べなければなりません。こうした問題を相談に持って来られた場合には、こちらとしては相手のお話を聞き理解するように努めます。せっかく問題を持って来られたのに、いいかげんな扱い方をしたり、ただ一時だけの解決では申しわけないと思います。できるだけ事の根本に立ち入って、正しい解決に至るようにいたしたいと存じます。そこでお話を承り、その原因がどこにあるかをまず探し出そうといたします。お話を聞いておりますればおりますほど、私はその原因がお子さま自身というよりも、むしろ家庭にあることを常に見出すのでございます。最近扱いました実例ですが、お子さんが肢体不自由児でございます。一人のお子さんがそうであるばかりでなしに、その兄弟もみなそうい

うふうなのです。その気の毒なお子さんのことについていろいろ心配いたしました。特殊な児童を入れる施設に託そうかと思って、調べてみたり、あるいは特殊学級に入れることが最も好ましいかしらん、あるいは家庭においてその子を成長させることがよいかというようなことについて、かなり研究をいたしました。文部省の特殊教育関係の先生方にもお目にかかって、御意見を承りました。そういうお子さんがいる限りは何とかその子をしあわせにしなければなりません。そのお子さんは放っておきますと、学校へ行く時期も逸します。そのうちに年令が進みますと、よけい学校に行くことがむずかしくなってきますから、あせったのでした。それにしてもどうしてかようなお子さんができたのかしらんと思って聞いてみましたところ、その夫婦は仲がよく、家庭も円満なのですけれども、近親結婚であったのです。そのため、こどもらが欠陥をもって生れることとなったらしいことが分かりました。これはそうした子供の問題を解決するとともに、結婚というところまで戻ってきて考えなければならぬと思いました。

こういう実例を見るにつけても、私どもは婚期にある若い方々に対して思慮深くあるよう注意を与えています。お子さんのできがよくないという場合に、それが親の性急であったり思慮の浅い結婚に起因しているのを見出すことが折々あります。結婚が正当ではなく、子供には隠していたけれども、不倫な関係があり、やがて現われてくる。それが子供に失望を与え、その子供が厄介者になるというようなことがしばしばあるのです。お子さんのことを思うにつけても、両親たちの関係がその初めから明るく正しくあることを希望せざるを得ないのです。それからまた結婚されましたならば、その結婚生活をさらにりっぱなものに建設していくように努力していただきたいのでありまして、私はお話にこられます方々に、それをお勧めしているような次第でございます。

それから皆さんも御関係のございます家族計画についても、同様のことが申されましょう。子供が多過ぎるとか、手が届きかねるとか、妻の健康がすぐれないとかいうことは、おのずから子供たちに悪い影響を及ぼしています。子供たちがすこやかに育つことができずそれが家庭問題、また社会問題を引き起しているのです。又家庭の不和は暗い影を子供たちに与えます。私は子供がどうこう言われる親御さんのお話を、初めは聞いているのですけれども、そのうちにはそれはまず親である、あるいは保護者であるあなた御自身の反省が、最初になされなければならぬのではないのでしょうか、というようなことを申し上げなければならぬことがしばしばございます。

私は子供の言い分を書いた資料を、ここに少し持っているのです、読ませていただきます。私は二、三の青少年の雑誌に関係して、問題を扱わせてもらっており

ます。若い人たちから受け取った手紙を読んでもみましょう。中学二年の女の子がお父さんのことについて、あるいは家庭のことについて訴えております。その手紙の中に彼女はこう申します。「私は長女です。父は最近愛人ができて……。」中学二年のお嬢さんがこういうことを言うのですからかわいそうなものです。「父は最近愛人ができて、家にはめったに帰りません。たまに帰ってもこわい顔をしてろくに口も聞かず、母につらく当たります。年老いた祖母と母は毎晩のようにおそくまで長々と話しています。私は勉強なんかしたってつまらないという気持ちになり……」勉強しないといっってこういう子供を責めることが、どうしてできましようか。私は御両親をまず反省させたいのであります。

また中学三年の男子がこういう手紙を寄こしました。彼はいわゆる第二の妻の子供なのであります。「現在僕は母と弟と三人で、いなかの父と離れて都会に住んでいます。というのは僕たちは父の第二の妻の子なので。父は父の住んでいるところに来いといいますが、僕たちは母から離れて父のところへは行きたくありません。母も一緒にというわけにはどうしてもいかないのです。」というのであります。こういう子供たちが素直に伸びないといっても、これも子供を責めることは私にはできないのでございます。御両親が悔い改めて仲がよくなり、円満な家庭を作って下さいということを申し上げなければなりません。

そこでどうしたらいいだろうかということを話し合いお子さんの問題に入ります。問題の原因につきましては、家庭における教育あるいはしつけを考えなければならぬ場合がよくございます。一般に日本のお母さんたちは、雑事に追われ疲れているようですそのためかどうも機嫌が定まらないことがございます。いわゆるお天気やなのです。あるときには大へん機嫌がよろしいけれども、あるときにはそうでない。機嫌がいいときには何でもいいですけども、機嫌が悪いと何でも悪い。そして小さなことでお子さんがみかみ小言を言っています。子供はなぜ叱られるのかわからないのに怒られているというようなこともたびたびあります。そんなですから、ほんとうに子供に聞いてもらいたいときに、また例のお母さんのヒステリーが始まったのかと子に思われたりして、聞いてもらえないこともあるのです。そういうわけでだんだんと母親の権威というものがなくなってしまふ場合もあります。ですから私はお母さんたちに、どうぞお子さんたちを叱るときに、あるいはほめるときに自分の感情にまかせないでよく考えて下さい。お母さんは家庭の大切な教育者でもあるのですから、というふうに申しております。お母さんたちがよい健康を保ち明るい、正しい精神でお子さんを導いて下さらなければならないと思ひ御相談しながらもそういうお話をしているのです。

私の受け取りました子供からの手紙の中に、こういうのもございました。小さ

いことでこの子供はいつもどなられているらしいのです。「先日学校の帰り道で腹が痛くなったので、親戚の家に寄って休んで帰ったら、家に入ったとたんにおそいと言って怒られました。また映画館の帰りに自転車のチェーンがこわれたので、自転車屋へ持っていったら、多勢待っていて手間がかかるというので、近所で遊んで自転車の修繕が終ってから帰りました。家ではどうしておそくなったかと尋ねた上、自転車を置いて帰ってくればよかったというので、すぐ直すといったのが、手間がかかったのだと答えたら、このばかりと大声でどなりつけられました。そしてパチンコでもやっていたんだろうと言って、兄も横から口を出した。そんなに疑ったりするからおそくなくても帰らないのだと言ったら、なぐられました。そしてがんがん大声で怒られました。僕はその夜は一睡もできず、よほど家出をしてやろうと思いました。民主主義の立場から両親たちの態度はこれによるのでしょうか。」中学生の手紙にはときどきこういうことが書いてある。近年子供たちは学校で、民主主義というものを習っているのです。

民主主義の社会ではもちろん各人の人格が認められなければなりません。ところが民主主義といえ、今では一般の人々が、頭で理解するようになりましてけれども、これが一番行なわれていないのが家庭であると思います。家庭ではおやじさんが相変らず暴君である。お母さんは相変らず口やかましいという場面が、少なくないのではないのでしょうか。そして子供の言い分が聞かれてないのです。この手紙を読んで思いましたのは、このお子さんの両親は決して悪い人たちではないということです。悪い人でないばかりか子供をかわいがっているのです。そのかわいがっている子供がおそく帰ってくるものですから、腹がたって子供をがみがみ叱ったり、彼に怒ったりしているのです。かわいさ余ってこうなっているのですけれども、子供はそうは思わないのです。親は全く訳がわからない。自分をどなりつけてばかりいる。自分の言うことを一つも聞いてくれないではないか。だから家出でもしたいということになってしまうのであります。私は家庭相談しながら時代も変わったのですからお子さんの言い分をもう少し聞いてあげて下さいと親御さんたちにいっています。民主主義の時代で子供たちは学校でいろいろそれについて習っているし、その発言権も認められている。だからこの子供のように子供がおそく帰ったりした場合には、自転車がこわれたとか、その修繕に手間取っていたとかいうことをよく聞いて、その上で、そういう場合には自転車を置いて帰ってこいとか、おそくならないようにするのでとか言えばいいのです。けれども、そうしないのがみがみ怒っているのが悪いのです。私はこれからのお父さんもまたお母さんも、もっともっと家庭において教育的になり、子供の気持ちもなってみて子供の言い分も聞いて、そして指導して下さるようになって

ほしいのです。そして子供の年齢が進んできたならば、親と十分話し合いができるようになってほしいと思うのであります。

それから問題の原因につきましては、確かに社会にも多くの欠陥があります。家庭のお母さんたちに対しては、どうか円満な家庭を作って下さい、もっと教育的でありましょうということを申しますけれども、社会に対しても多くの言い分があるのです。私の申したい一つのことはマス・コミであります。よくない読物あるいは映画などが最近たくさん出ております。これはごく近ごろあるお子さんからもらった手紙ですが、その中にこう書いてあります。「僕は中学二年のころから好し悪しを判断せずに大人の本を読み続け、そのため少し不良じみてきたので心配です。人前に出るのは前より一そりやになってしまいました。しかし今後まじめな人間になるのにはどうすればよいのでしょうか。まじめな人間になる可能性は僕にあるのでしょうか。」私はこの中学二年の子供の手紙を読みまして感動いたしました。悪かったと気がついてどうかやり直そうとしているのであります。子供は愚かではございません。

私はこんな返事を書いたのですが、いかがでございましょうか。「人はだれでも読物の影響を受けます。少年時代には特にその傾向が強いのです。あなたがよくない大人の本を読んでそのようになったのは当然です。しかしあなたは早くそのことに気がついてよかったと思います。あなたはそういうものを読み初めてから、まだそう長い年月を経ているのでもなく、ほんとうに不良になったのではありません。あなたは直ぐに健全で明朗な少年に立ち返ることができるに違いありません。今後どうすればよいかといえば、まず悪いと気がついた本は絶対に読まないようにすることです。初めは少しさびしいような気がして、読んでみたいような誘惑を感じるかもしれないが、それに負けてはなりません。そのうちに悪いものを読まない習慣が身につくでしょう。悪い本はもとよりよくないように見える本はいっさい読まないようにして下さい。そのかわりによいと思う本は進んで読むようになりなさい。よい本は悪い本よりも最初は親しみにくいように感じられるかもしれませんが、そのうちにその味がわかり、よい本を読むのが楽しみになります。そしてあなたはよい本の感化、影響を受けて、よい人、すぐれた人になることができるでしょう。教科書やそれに関係ある参考書には、進学するのにもまた就職するのにも、ぜひ知っておかなければならない基本的なことが書いてあり、それらの本はまじめに読み、またお学びなさい。一般的な教養や趣味のための本は、あなたの年齢にふさわしいものが、学校図書館あたりに多分備えてあるでしょう。

よい友も助けになります。同じ年頃のよい友だちも得て、心の健康や若さをす

みやかに取り戻し、社会的にも有益な人におなりなさい。」と申しますのは、本を読む子供は大体お友だちの少いのが常のようでございます。本に親しむことも大事ですけれども、よいお友だちを持つことがこころいう子供には非常に必要のようには思いますので、これを書きました。悪い本は子供をこのように苦しめているのです。子供が悪い本を読み、ませていやな子供になったという場合には彼のためよい本を探すのはもとよりですが、御両親たちもつまらない本を持ち込んで、家にほっておくというようなことはなさらないようお願いしたいのです。それと共に親が子によい手本を示して下さるようというのを願わずにいられません。

イソップ物語でしたか、こんな話がございませぬ。親のかにが子供のかにに申しました。「なぜあなたは横にばかり走っているのですか。みっともないからほかの生きもののようにまっすぐにお歩きなさい。」そうしましたところが、子がにがあわを吹いてぶつぶつ言いながら、お母さんに小言を申しました。「だってお母さん、あなたも横に走っているではありませんか。僕にだけまっすぐというは無理です。」かにの話ではございませぬけれども、この世の中には親で横走りをしてながら、子供だけにはまっすぐ、まっすぐといっていられしやる方が少くございませぬので、相談の折にはそういうお話をいたしまして、子供をよくしたいならば先ず親がよくして下さいと申します。子宝と申します。子供のない人もあるのに、子という宝を与えられた以上は大事にし、またその宝を持つにふさわしい親になって下さいということをお願いするのでございまして、子供に引かれてだんだんとよくなる親御さんもあるのは喜ばしいことです。

相談に来られました方々には、理屈を言ってもしょうがないので、何とか彼等の問題を解決しなければなりません。原因はできるだけ探り、そしてそこからせいぜい根本的な解決に至るようにはいたします。何とかかんとかいて、ただそれを論じているわけにもいきませぬ。実際的であり、解決に至るよう事を運んでいかねばならないのです。解決策といたしましては、お子さんたちに関してはことに最近法律も整って参りましたし、制度も整いつつございませぬ。私どもはできるだけそういうものを知っておきまして、まだ知らない人たちにはそれを示さなければならぬと思ひます。児童福祉の法律がございませぬ。あるお子さんは社会の施設に入れることができます。また数は非常に少いのですけれども、特殊な子供を教育する学校があります。盲聾啞の子供の学校とか、肢体の不自由な子供の学校とかもあるのです。そういうものを示します。子供が精神薄弱であるかないかという、そこらの境の判定はむずかしいものです。精神薄弱な子供を普通の子供の中に入れることは、普通の子供たちにとっては迷惑であり、そこに入った

子供に対しては苦しみでございます。ですからできるだけ特殊学級に入れるのがよいようです。しかし、また子供によりましては教育がおくれているので時とともに幾らかづつでも尋常に伸びる可能性があります。そういう場合にそれを特殊の学級に入れてしまいますと、伸びなくなることもあります。そこいらの見分けがデリケートであります。私はこういうお子さんに当りましたときには、その専門家に見てもらいます。それから知能のテストもよくしてもらって、その上で普通の学級に入れることもあり、あるいは特殊なところに入れてもらうこともあるのです。特殊な学校や特殊な学級に入れることを非常にいやがる親がございます。何とかして普通の子供の仲間に入れたいと思って無理をする場合があります。けれどもその場合にはあきらめてもらわなければなりません。

パール・バックと申しますと、ノーベル賞をもらいました現代の女流作家でございます。彼女が多くりのりばな作品を発表していることは、皆さんもよく御存じの通りです。彼女は長い間中国におり、また日本にも来たことがございます。そして日本のよき友人でもあります。彼女は彼女自身がそういう特殊な娘さんを持っていることを書いております。彼女が中国におりましたときに、自分の娘が普通でないことを発見したのでした。パール・バックはその娘を連れてアメリカに行くのですが、その途中日本に立ち寄りました。日本の人々はその知恵のおくれているお子さんに対して大へん親切であつたらしく、パール・バックは感謝しています。それからアメリカであっちこっち当たってみたのですが、遂に彼女は自分の娘さんを特殊な子供を入れる施設におくことが、彼女に一番しあわせであるということに気がつきます。母としての愛情に耐えがたいものですけれども、遂にそこに置いてくるというところを書いております。私はこれを読んで感銘を受け、同様の立場にある親御さんには、それを読むことを勧めています。そういう場合に私は親御さんたちが子供に対する愛情を正しく生かして下さるようなことを願うものでございます。

日本鋼管で最近扱いました一人の女のお子さんは肢体が不自由で頭脳の発育もおくれています。彼女の母は非常な難産で彼女を産んだそうで、彼女はいろいろな痛手を小さなからだに受けているのです。6才の時に学校に行きましたが、どうしても子供はいやがりますし、他のお子さんたちについていけそうもなかったとのことでした。この子供につきまして教育研究所でテストして貰いました。その結果彼女は今はおくれていますけれども、やがて伸びるだろうということでした。それでその親御さんたちを励まして、このお子さんは普通のお子さんの行く学校に入れるよう申し上げましたら、その御両親は非常な決心をいたしました。そして今はもう8才になっておりますけれども、6才の子供たちのクラスに

入れたのです。そうしましたら、二年前には学校に行くことをいやがっておりまして子供も、二年たって少しはわかるようになったのでしょうか、この頃は学校に行くのを楽しむようになりました。不自由なからだなのですけれども、ランドセルを背負って行くのです。お母さんは先生のお許しを得て、毎日学校に行っているそうです。そして遠足のときはお父さんが工場の方からおひまをいただいて自転車で子供を連れていったそうです。みんなが大切にして下さるものですからほがらかになり、字も覚えてきました。親が申しますのに、この子供が人並みにものが読めるようになり、ものの道理がわかるようになれば、こんなうれしいことはございません。そうでなしにこの子供をこのままにしておくことは、親として子に対しても、社会に対しても申しわけないのですからというのでした。どうかして彼女がりっぱに育つようと願っております。この間もそのお子さんを連れて日本鋼管の相談室に両親が来られたのですが、そのお母さんが子の最近の進歩を泣いて語られるのを見まして、私は感動を受けました。この種のお子さんの場合には特にあちこちに当たって見る必要があります。どの方法がいいか、法律にも照し合せ、いろいろな施設のことも考慮に入れて相談しなければならないのです。

それから家庭の問題につきましては、お子さんのことに関係して、できるだけ助言を与えなければなりません。家族計画などにつきましてもお話ししなければなりません。家族計画に関して女の方がよく承知しているのに、男子の方が協力的でないというような話を、相談室で聞くことがあります。男女が相互によき理解をもってするのでなければならぬことを、痛切に思わされています。家庭が円満で男女間に理解がございましたら、家族計画もよき解決を見るのであらうと思います。それから特に家族が不和というのでもないのですけれども、どうもみんなの考えが足りないために、子供に悪い影響を及ぼしていることもあります。子供たちの手紙を見てそう思うのです。夫婦げんかをする夫婦が、いつも必ずしも仲が悪いというのでもないようです。すぐ派手なけんかをする人人も、実際は仲がいいのでそういうことになる場合もあるだろうと思うのです。外から申すのもおかしいのですが、その子供に与える影響というものは、非常にデリケートなものがあるのです。子供は私の両親は始終けんかをしています、というのです。そしてあまりけんかが激しいといやだから外に行きます。などということを書いているのであります。長い間には夫婦が口論したり争わなければならぬこともあります。長い間には夫婦が口論したり争わなければならぬこともありましようけれども、それは、なるべく子供が見てないところでなさるようにと私は願います。問題があったらできるだけ子供がいないうちに話合っそれを解決してほしいと思います。そして子供の前では少くともよいところを、

夫婦や家族が協力するところを見せていただきたいものと願うのです。そうでないと、子供は動揺し自分の将来に対して何か不安を感じるものらしいのでございます。

きょうは私は性教育には入りませんが、性教育のことでも私は思うのです。いかげんな性に関する知識を与えるよりも、むしろよい家庭で子供を育てることが、一そう大事であります。子供たちが見る最初の男女の関係は両親のそれがあります。その関係が円満であり、しあわせでありますと、子供はそのことについて非常に明るい考えを持ってきます。しかし両親の関係が不しあわせでございまして、子供たちの考えも非常に暗くなり、性のことについても明朗さを欠いて、またあやまちが多いようでございます。私はお子さんのためにも家庭の円満、平安を願わずにはおられないのです。

夫婦のことばかりでなしに、しゅうとめさんとお嫁さんのことについても、同じようなことが申されると思うのでございます。時にはお子さんに関してお嫁さんとしゅうとめさんが争いをなさることがあります。おしゅうとめさんは子供にたくさん衣服を着せたいと思います。お嫁さんの方は新しい教育を受けておりますので、子供は薄着で育てた方がよいと習っております。多分新しい薄着の訓練の方が道理に合っているのでしょう。ある寒い朝どちらをとるかということになり、おしゅうとめさんの方は暖いものをたくさん出してきて、子供に着せようとしみます。お母さんの方はそれをぬがせようとしみます。引っぱり合いをする。子供はどっちについていいかわからない。そんなことで学校がおくれそうになり泣き出します。それではおばあさんとお母さんが争いちっとも協力しないように見え暗い感じを子供に与えます。そこでそういう場合にはお嫁さんの方が一步譲歩したらどうなのでしょう。おしゅうとめさんが3枚着せようとし、自分は1枚着せたかったら一步譲って2枚着せる。そして子供がいないときにしゅうとめと話し合いをする。近ごろのお医者さまはこういうふうに言っておられます。ラジオではこう言っているではありませんかというようにでも話して、だんだんとおしゅうとめさんを新しい方向へ教育していく方法はないものでしょうか。そしてあまりあせらないでお子さんのためにも仲よくして下さいと申し上げるのであります。

お子さんは大体学校に参ります。最近の学校はお母さんやお父さんが行っていたころの学校とだいぶ趣を異にいたしております。それですからお母さんたちはお忙しいのでしようけれども、なるべく学校で催されるPTAの会合などには出させていただきたいのであります。子供が学校でどんな生活をしていて、何を教わっているかということも知らないでは家庭で導くことはむずかしいだろうと思

います。PTAに行ってみますと、いつも同じような顔触れのごく限られた人ばかりが出席しているというようなことが多くあるのでございます。そうでなしにごく気軽にすべてのお母さんたちが出かけていただきたいのです。そして学校と家庭が車の両輪のようによく調子があって、お子さんたちをすこやかに伸ばしていくようにする。そうすれば問題も少なくて済むのではないかと思います。ところがあるお母さんは忙しいからとか、おっくうだとか申しまして、なかなかそういう会合に出かけないのであります。

そこで私は、イギリスで聞いたお話を思い出します。ずっと以前のことですけれども、イギリスにピール家という政治でよく知られた家柄があったのでございます。そこに美しい令嬢がいて、才色兼備で知られておりました。その令嬢があるときりっぱな宴会に呼ばれることになり、夜会服を注文したそうでありました。彼女はロンドンに住んでいたのですが、ロンドンという都会は膨大な都会であります。大体西の方には宮殿があったり、美しい公園があったり、住宅があったりですが、東の方は昔は貧民窟などありましたし、今でも工場等があって概して雑然としております。近年イギリスは福祉国家になりまして、だいぶ模様が変わっておりますが、これは以前の話で、今ほど西部と東部が融和していないときのことです。このお嬢さんは西の方に住んでいましたが、ボンド街というところで夜会服を注文したのです。ボンド街というのは東京ならば日本橋とか銀座というようなところですが、そこにある有名なお店で注文したのです。そうしますと期日になってそれができて参りまして、令嬢はその夜会服を着て宴会に出席したのです。美しい令嬢が流行の夜会服を着て出ましたものですから、大へん人目を引いたのであります。その令嬢の写真が新聞などにも出まして、評判になったそうでありました。ところがその晩あたりから令嬢の容態がすぐれませんでした。大へんな熱病にかかったのであります。そこで騒ぎになりまして、医者も呼んだのですが、どうもよくなりません。かえって悪くなってしまって、とうとうその令嬢は亡くなったそうです。あの才色兼備の令嬢がどうして死ぬようになったのかというので、イギリスで騒ぎになりまして、厳密な調査がなされたそうです。その結果こういうことがわかりました。その令嬢は確かに西の方にある有名なお店で、夜会服を注文したのですが、その注文を引き取って仕立てたのは、あにはからんや東の方のごみごみした家に住む一人の未亡人であったといひます。彼女は悪い熱病を病んでいる息子の看病をしながら、夜会服を作ってお店に納めたのであります。それでその令嬢はそのかわいそうな子供の熱病が伝染したということであったのです。

ちよっと考えますとその美しい、有名な令嬢と、そのかわいそうな未亡人の息

子とは何の関係もないようです。けれども社会生活とはそういうもので互に遠いように見えても非常に近いのであります。みんな互に関係があるので。うちの子だけがよければいいとある両親たちは言っており、事実そういう態度をとるのです。うちの子さえりっぱに、いい学校へ進んで就職すればいいのだという態度を、私どもは相談に当たっている間にもしばしば読みとることができます。けれどもそういうものではないのです。うちの子がほんとうにしあわせになりますためには、ほかの子供もよくならなければならない。ことに毎日うちの子が行なっております学校に不良の子がいるか、あるいは病気の子がいるかいないかというのは、わが子の問題でなければならないと思うのです。そういういろいろな問題を、PTAの一部の熱心な両親とか先生にまかせておいて、自分には行きませんというのは、ずいぶん無責任な話ではないのでしょうか？

私はお母さんたちに言うのです、最近では電気釜ができたり、電気洗濯機ができたりして、集団住宅などでも皆が競ってそういうものを買っていらっしやるようです。考えれば今の家庭婦人は昔のおかみさん、奥さん方よりは家事の手数はあぶけ時間ができたはず。その時間をどう使っているか。どうぞそれを子供さんの教育のために使って下さい。学校にも行って見て下さい。そして一層すぐれたお母さんになって、自分のうちの子も大事だけれどもその子供の周囲もよくするために尽して下さいということを申します。幸いお母さんたちの中にはその理由がよくわかりまして、PTAなどに参りまして、家庭で作りました幾らかの時間を学校のために、社会公共のために使うようになっている方もございます。そういうふうにしていろいろな問題が解決して参りますれば、子供たちはもう少し学校でもしあわせに勉強することができるのではないかしらと思うのであります。そしていくらかでも学校のことに関わっておりますうちに、お母さんたちはすし詰め教室をどうしたらいいか、教育委員さんとか、あるいは町会議員さんとかに、もっと力を尽していただかなければならないのだということもわかって参ります。そして選挙などにも関心を持って、自分たちにも責任があり、よい人を選挙しなければならぬということも、自分の身近かな問題として感ぜられるようになって参るのでございます。

あちこちの工場地帯にも一般の地域にも近頃お母さんたちのいろいろな集いができております、文部省では母親学級を奨励して、それには補助金も送っているはずでございます。お母さんたちもできるだけそういうようなところに出るようにお勧めしたいと思います。彼女らの見解が広められ、社会のこともわかって参りますと、子供を導くのに張りが出てくるようでございます。

私は家庭問題を相談室にばかり限らないで、グループの活動とも提携していき

たいと思っております。ときには相談室では言いにくいことも、数名あるいは数十名の数の女の方がいらっしやるところでは、問題を一般化して気軽にお話ができることがあるわけです。それからまた同じような生活をしていらっしやる婦人たちの集会に参りまして討議や話し合いをしておりますと、婦人たちも自分の持っている問題が自分だけのものでなくて、ほかの方も同じように悩んでいらっしやるのだ、ほかの方も努力していらっしやるのだということを知りまして励みを得ることもあるようでございます。ある家庭の問題等につきましては、どこまでも秘密を守っていかなければなりません。一方婦人は社会に接触し、ほかの婦人たちと共に学んだり話し合いをしたりして啓発されることが必要のように思いますので、その種の会合にも出席なさることをお勧めしている次第でございます。

母親学級等には、若いお母さんたちにも出てもらいたいし、また御年輩のおしゅうとめさんにも出ていただきたいと思っております。時代はどんどん進んでいるので、おしゅうとめさんもそういうところにいらっしやいますと、なるほど新しい育児法というものはこういうものかとわかるようになるものです。また若いお母さんたちも、女学校などで習ったことも、今はだんだん古くなっているので、そういうところに出て話を聞いたり、教えてもらったりなさることが助けになります。そういうふうにして、家の中に閉じこもって、ただよくよく考えているよりも、少しはそとに出て、そういう仲間に加わるようにいたしますれば、もの見方も変ってきて、もう少し自分の問題を客観的に見ることができるようになって、その問題を自分で解決するようになることもおりおりございます。それですから私どもは相談室におきましてある程度のお力添えをしますのですけれども、あとはこういうグループによる指導等にそういう方をお勧めいたしまして、そこでその方々が自分の力で自分の問題を解決し、さらにその自分たちの進路を開拓して下さるようにと願っています。

それから家庭相談室の中で、一番多いのは十代の反抗期のお子さんの問題ではないかと思っております。ボーイ・フレンドとかガール・フレンドあるいは純潔の問題というのがよくこのごろ問題になっております。ある場合には親御さんたちが心配し過ぎていることもあります。親が心配するほどでなく、子供たちは相当の考えを持っているようでございます。戦前の子供たちと違ひまして、近頃の子供たちはかなり自主性を身につけている。自分の責任というものを知り始めているようです。子供たちの自主性を認めて、親は干渉をするよりも、むしろ子供たちが責任を持って善処するように助けてやるのがよいのではないかと思います。家の中に秘密がなく、又、それには親がいつもよき相談相手となって、子供と話し合いのできるような雰囲気があるってほしいと考えます。

それからあまり望ましくない異性のお友だちができたような場合、親が取り乱すのはいかなものでございましょうか。賢明にこれを指導していけるようになってほしいと思います。それについて外国の例を持ってくるのはどうかと思いますけれども、こんなお話を聞いたことがございます。アメリカのある教養のある人の家庭に一人息子がおりました。その息子にとんだガール・フレンドができました。しかも彼は相当夢中なんです。両親は困ったと思ったけれども、がまんしたそうです。そしてその友だちを家へ連れて来るように言ったので、息子は彼女を家へも来るようにしてつき合いをしていたそうです。息子は、そとでは愉快なおもしろい娘さんだと思って気にいっていたのですけれども、家へ連れて来てみますといかにもその娘さんが粗野でもあり、無知なことが目につくようになった。そこで彼はその娘さんを自分の生涯の伴侶にするのにはふさわしくないということがみずからわかったそうです。それでそのお友だちと結婚するのはやめまして、その後ほんとうに家の人も満足するし、社会の人もりっぱな配偶であると思うような相手を探したということです。

私は親御さんたちの話を聞いておまして、少しあせり過ぎていると思うことがございます。あせらないで、ときにはがまんをして静かに見守る必要もあるのではないかと思います、そのことを話の中で申し上げることもあります。よけいな干渉をしないとかえって若い人たちは自分で自分の責任を感じて、正しい選択をするということもあるのではないかと思います。非常にむずかしい時代でございます。若い人人は向こう見ずに走ることがあります。このごろカミナリ族というのがありますが、あれこそほんとうに向こう見ずな若い人人の象徴であると思います。あれをどうやってとめるか、親が大きい声を出して叫んだところで効果はありません。むしろ静かにして彼等が自分で責任をもつようにいたしますと、彼らも気がついて立ちどまり、自分の進路を新たに考える。正しく進むようになることがあります。若い人人の問題は容易ではありませんが、およそ今申し上げましたようなことを考えながら、相談室にいらっしやる方のお相手をしております。

大事なお仕事に携わっていらっしやる皆様方が、ご健康でそれぞれの責務を果して行かれますように願ってやみません。目立たないところで貴重な貢献をしておられます。皆さんに対しまして、高いところからではございますが、敬意と感謝の意を表したいと思います。

どうぞ人々のため、社会のために引き続きご尽力下さいますようお願いを申し上げます。大変不用意でございまして、非常にお聞き苦しかったことと思っておりますが、御静聴下さいましたご厚意を感謝いたします。本日はまことにありがとうございました。

新生活運動の実践要領

人口問題研究所技官 篠崎信男

きようは最初のお話といたしまして、この運動を実践する具体的な要領を、かいつまんでお耳に入れたいと思います。

もうすでにこの運動をお始めになっている企業体では、実際におやりになっておりますので、ここで再び私の話を聞くまでもないかと存じますが、もう一度復習の意味もかねまして、こういう工合にいろいろな企業体ではやっておられるし、またそれで順序よく、ほどよくこの運動が進行しているという実例も合わせまして、順序を立ててお話し申し上げたいと思います。お手元に若干順序の次第が書いてございますが、この通りの順序でお話しするというには必ずしもならないかもしれませんが、一つお耳を拝借いたしたいと考えるのであります。まだ私のあとにいろいろの先生方のお話がございますので、それを全部お聞き願ってからお話し申し上げた方が、本来ならば頭に入るのではなからうかと思うのであります。きよう、あしたとお聞きになることですから一応話を進めたいと思います。

まずこの講習会でいろいろの先生方のお話がありまして、その最後につきましては永井先生がおまとめになることになっておりますので、それは避けたいと思いますが、そういう諸先生方のお話をまとめまして、自分の会社ではどういう形で理念を確立したらよろしいか。ある会社では、とてもうちでは生活の設計までは入れない、しかしながら家族計画はどうやら労働組合も反対はすまい、従って一応自分のところではこの新生活運動を家族計画の運動として始めよう、こういう一つの理念の確立と申しますか、そういう考え方もあろうかと思ひます。またある会社では、とにかくこれは従業員の家庭の福祉に役立ち、それが陰に陽にはね返って職場に返ってくる。従ってこれは産業安全と結びついて、はっきりこうだとは言ひ切れないにしても、とにかくにも家庭福祉と職場安全とは結びつくであろう、こういう理念の統一をいたしましてこの運動をお始めになるということも一つの道でありますし、さらにはもう一つ大きく上回ります、とにかくその運動はいいが、もう一つ大きく考えて、今日の企業体というものは、特に大企業体におきましては新しい福祉経営の考え方を取り入れてみようではないか、その一つの運動としてこれを行なってみてもいいではないか、つまり福祉管理というような一つの近代経営のあり方を打ち出してもよいではないかというよ

うな理念のまとめ方もあろうかと存じます。おのおのの立地条件やおのおのの経営規模の形に応じましてこれを統一することが先決でございます。ただしそれはあくまで理念の統一という形でございまして、これを具体的に行ないます場合には、どうしても最初は私どもは家族計画から出発していただきたい、かように考えておるのでございます。

さてこういう工合に一つのものの考え方というものが統一されまして、うちの会社でこれをやってみようということになりますと、いろいろと準備が必要になって参ります。もちろんそういうようなことを進言し、あるいはやるという意味はどこから行なわれてもけっこうであります。最後はやはり会社の幹部、重役、労務担当の重役であるとか、あるいは経理担当の重役であるとか、とにかくやはり重役陣に一人入ってもらわなければこの運動はうまくいきません。また健康保険組合を動かしてやられるところもあろうかと思いますが、上層部に理解がなくて、幾らやってもそれが波に乗らない、軌道に乗らないということは、やはり企業体として行ないます場合には、1人や2人の力ではなくて、やはり職制という線あるいは組織がございましたらきちんとその組織の上に乗っけることが、やはり企業体においてこの問題を始めますところのキー・ポイントではなからうかと思ふのであります。一般地域の活動では1人や2人の御熱心な実地指導員さんあるいは御熱心な役場の吏員さん、そういう方が運動を展開いたしまして事が運ぶのでございますけれども、企業体では限界がございまして、行き悩みの状態にぶつかるのであります。今日約50社に余る企業体においてこの運動が、歩みはおそくとも着々と進行いたしますところのものは、この大きな上から下までの協力体制と主婦の組織、こういうような組織力が非常にものをいまして、会社でございますから3年に1回あるいは2年に1回担当者の人事異動がございまして、その組織の上に乗りました以上、どなたが来られてもこの運動が進行するというような状態にありまして、これが企業体において、非常に歩みはおそくとも進行している一つの原因ではなからうかと思ふのであります。

そこで、こういうことをいたします場合には、どうしても重役、部課長、そういう方を集めてやはり私どもの話を聞いてもらいたい。と申しますのは、やはり第三者がそういう話をいたしますと、非常にそこに公平なものの判断力も出て参ります。たとえば経理担当の重役さんで、不要不急と思われるこのような運動をする必要はなからうではないかというような気持を持たれている方でも、いろいろとこういふ運動を行ないますところの実例をお話し申し上げますと、なるほどそういう行き方もあろうかなという工合に、割合に虚心たんかいに受け入れてくれるのであります。現にそういう方向をとらないで、非常に行き悩んでいる会社

も数社ございます。名前をあげるのは差し控えますけれども、私どもが行きまして、やはりそういう体制ができませんために、せつかく会社内部でお始めになったのでありますけれども、結局そのまま進行していかない。ですからやはり企業体というものがこの運動をいたしますためには、どうしても部課長以上の上層部の方々に御認識をいただかなければならないと思うのであります。もちろんそれを動かすのはその会社のどなたでも熱心な方がそういう体制なり部内の会を作ってくださいことは申すまでもないのであります。最後の画竜点睛をいたしますために、そういう会に私どもも出席させていただきましてお話し申し上げることになっております。どうぞその点は、お始めになるという決意がございましたら上層部その他全部の理解、認識を得られた方が将来非常に有利ではなからうか、かように考えるのであります。ですから一口に申しますならば、よけいなことだということではなくて、近代的な大企業は福祉経営として単に社宅を与えるにとどまらず、社宅を与えた以上、その中に生活しますところの従業員の家庭生活に対してあたたかい手を差し延べるといふ経営方針は、決して無意味なことではないという立場に会社全体を統一していただくならば、これは経営法として非常に有意義な一つの手段であらうと思うのであります。

さてそういう工合に私ども永井先生を初めおじやまいたしましていろいろとお話し申し上げ、よし会社はこれでやろうということになりますと、そこで初めて担当をどこにするか、労務課にするか厚生課にするか、これはいろいろと会社によって違いますがこれを決めることになるわけでありまして。労務課でこれを取り扱っているところもあれば、あるいは厚生課で取り扱っているところもございまして。あるいは人事課あたりで取り扱っている会社もございまして、とにかく全体と申しますか、それを担当する事務局をここで定める。そしてやはり課長あるいは係長は、会社の仕事もありますが、兼任でこの仕事も手伝うという形になります。そしてその係員は、この運動にかかりきりになれるような専任の事務局員がぜひとも必要だろうと思ひます。せつかくお始めになるのでありますから、しり切れトンボにしないためには一人専任の係員を置く、そしてこの運動をどんどん事務局で進めていくということが必要でございまして。

こういう会社の体制ができましたら、今度の問題は労働組合の体制でございまして。この運動はやはり労働組合の協力なくしてはスムーズに参りません。必ず妨害があったり途中でじやまされたりしまして挫折するおそれもございまして、どうしてもこういう会社の体制ができましたならば、労働組合に渡りをつけるということが肝心でございまして。そのために労働組合の幹部を呼びまして皆様とお話し合い願うわけでありまして、その場合に私どもは出ていろいろとお話し申し

上げることになっております。日本鋼管の例を申し上げますと、日本鋼管ではあまり労働組合を問題にせず、会社がこれをどんどん進めたわけであり、労働組合は、これは何だろうと言っているうちに全部運動が進んでしまったものですから、今さらどうしようもないという、反対しようにも主婦が非常に協力をして喜んでおられるのでということで、今では大体労働組合も認識しまして協力しておられるようであります。こういう行き方も最初のときにはあったのでありますが、そうではなくて、やはり労働組合に話された方がスムーズだろうと思うのであります。また東芝では最初は労働組合にだけやって、会社はただその費用を出してもらっただけというような案をもちまして、永井先生と私と行って、労働組合の方を集めていただいてこの運動の趣旨を御説明申し上げたのでありますが、どうも労働組合は反対ではない、しかしこれを労働組合がやるというためには労働組合としては準備態勢が整っておらない、これはぜひとも会社側でやってほしい。ただその会議がどういうことをやるかについては、労働組合から一つ運営委員として委員を出すというようなことでありました。いろいろとケースがあるのであります。とにかく家族計画に関する限りは反対する余地がないのではないかと思うのであります。大体今までの実例を見ましても、労働組合が家族計画に反対するというような例はあまりぶつかっておりません。ただ労使双方にほかの問題でわだかまりがございますと、どうもそれにひっかかって話し合いが十分に進まないという例もございます。その場合でもいろいろと研究会の方で皆様のお力添えをいたしたいと考えておるのでございますが、そういう一つの会合もぜひとも固めるためには必要な行事でございます。

さて労働組合との話ができましたら、今度は健康保険組合もそっぽを向いてい
る必要はない。そこで健康保険組合もやはりこういう運動に参加してもらおうとい
うことで、その健保の方は大体問題なく協力していただけるものと思っております。
そして会社はこういうものを負担する、健保はこういうものを負担する、と
いう風になるわけですが、大体今までの実例を要約いたしますと、会社側は実地
指導員の費用だとかあるいはその他会合費とかいうものを負担し、健保は——こ
れは健保の支出の項目がございますので自由ではございませんけれども、施設活
動費として、厚生省もこの運動に対して大幅に認めておられるようでありま
すし、施設活動として施設費の中から費用を出すということが考えられるのであり
ます。そういう点におきまして、やはり実地指導員の研究費だとかあるいは会合
費、あるいは家族計画に関しますところの避妊器具、薬品の費用の負担、そうい
うことについていろいろと健保の応援体制ができるものと思っております。労働
組合はPRを引き受けるくらいの形で進むのが非常にスムーズではなからうかと

思います。

さて、会社、健保、労組と三者がこれを全部やろうということになりますと、完全に準備が当事者側として整ったということになります。現にそういうような形で発足している日本通運がございます。これは三者共同という形で、りっぱに労働組合と会社側との約束、これは労働協約ではございませんけれども、お互いの申し合わせ事項をちゃんと取りかわしまして、りっぱに全国的に組織して着々と進んでおられる例もあるのでございますから、これはやはりそういうような体制がよろしいのではないかとこのように考えております。

そういたしますと、今度は何年から始めるか、本年度のこの運動の目標というものを事務局で作成いたします。たとえば家族計画あるいは生活設計まで一緒にやろうというならばそれを掲げる。大体そういった一つのその会社自体で取り上げますところの目標、今年度に運動を行ないますところの目標をまず事務局で作成し、それから同時にPRを始める。PRの仕方はいろいろございますが、非常に参考になります例は、月給袋に「これから家族計画運動をいたしましょう」とか、「いい子を産んでりっぱに育てましょう」とかいうような形で、具体的にしゃべります前にそういうように小さな紙にガリ版でも刷ってやる。あるいは各会社に社報というものがございますでしょうし、あるいは小さな新聞などもあるかと思しますので、そこでこれから会社はこういうことを始めるぞというようなPRを徐々に行なう。徐々に行ないつつ事務局は漸次具体的な対策に乗り出していくのであります。

さておのおの会社には予算の時期がございます。その時期は上半期、下半期と分かれていることと存じますが、まず何をおいても必要なのは予算措置でございます。先ほども申しましたように、健保との打ち合わせも済み、ここは健保側が持つ、ここは会社が持つということにいたしまして、大体いろいろの例を見ますと、最初は従業員全部をやることはちょっと問題があるとしても、従業員の数に応じて具体的にモデル的にやろうということになりますれば、大体500世帯くらいを一つのモデル地区とする。特に集団社宅などのあるところが非常にモデルとしてはよろしいようでございますが、そこで始めてみよう、そうしていろいろな問題の出方あるいは様子などを見て、全地域あるいは全従業員に及ぼそうというので、段階的にやろうということも一つの手であります。もちろん一ぺんにやってしまうという勢いがございますれば、それも決して不可能ではございません、ただ予算措置の問題だけあります。そういう形でまず、500なら500、600なら600世帯を対象としてこの運動を始めようということになりますと、そこで初めて第一線に立って指導していただくところの家族計画の実地指導員、法律用語で

申しますならば、受胎調節実地指導員が必要になってくるわけでありませう。大体私どもの今までの経験では、300世帯に一人の実地指導員がありますならば十分にまかないきれるといふ工合に考えております。従つて600世帯を最初の第一段階としてモデル地区として実施いたしますならば、二人の実地指導員が必要になる。この実地指導員も、現在は助産婦さんが全国に全部で78,000人くらいおりますが、大体60,000人近くの方が優生保護法によりまして実地指導員の免許を持っております。しかしながら形式的には優生保護法によつて実地指導員をしてよろしいといふ免状を得るのでございますけれども、この問題はなかなかさう簡単に参りません。そこで私ども研究会はそういう助産婦さんあるいは実地指導員の免状を持った方を、企業体に向くように再教育をいたすのであります。もちろん実地指導員の免状を持っておるのでありますから、そのまま採用になつても一向に差つかえない理屈でございますけれども、どうもそれではうまくいかない。うまくいかないといふのは、實際そういう認定講習と申しますものを受けましても、さてやってみるとほとんどできない、忘れている、やり方がわからない、形式的な認定講習会でございますので、また大勢寄つて免許をとるための講習会でございますので、十分に頭に入つておらない。これでは逆に現在は奥様方の方が雑誌や新聞その他で非常に進んでおられますので、かなり進んでおる奥様方は、もう実地指導員以上の腕前あるいは頭の働きは持つておられますので、そんなところへなま半可な知識を持つ実地指導員を向けますならば、奥様方になめられる。これが私どもの先生なのか、ろくなことは知らぬじやないか、こんな先生に自分が指導されるなんて、もつてのほかのことだ、私の方がよく知っている、研究している。そうなつて参りますと、アリの一穴と申しますように、一つ水が漏れると、次々と伝播いたしまして、今度来たあの実地指導員は何も知識を持っておらぬ、私の方がよほどよく知っている、あんな人に指導されるのはまっぴらだといふやうなうわさが飛びますと、第一線で働くその実地指導員は信用を失う。信用を失うといふことは、もはやりばな實際の指導ができにくくなるといふことでございます。そこでそうならないようにやはりもう一度再教育いたしまして、奥様方にお会いしましても、なるほどやはり実地指導員だけのことはある、自分もよく知っているつもりだけれども、やはり専門に教育を受けた方だけあつて、私どもより微に入り細にわたつて知っている、そういうふうに言わせるやうにいたしませんと、どうも工合が悪い。そこでどうしても再教育の講習会が必要になってくるのであります。その再教育講習会は私どもの研究会でお世話する。大体現在各企業体に配属しております数は、もはや200人に近いかと思ひますが、みな再教育いたしまして御推薦申し上げておるのであります。

さてそういう実地指導員ができますと、そこで主婦の組織化がその前後に始まります。というのは、先ほど申しましたように、一般地域では家族計画運動が調子のいいときにはずっと普及するが、またずっと消えてしまう。この根本の原因は、自主的に主婦が動き出せるところの体制が一般地域の家族計画運動にはなかなか難しい条件があります。ところが企業体においては、多少職制の線があるにせよ、主婦は同じ会社の従業員の妻であるという立場において主婦の組織化ができるのでありまして、この力が非常に大きいのであります。これをやらなければこの運動は根本からくずれてしまう、ここは企業体における非常な特徴であります。そこでこの組織化をまず600世帯についていたしまして、大体において10世帯に一人の世話役あるいは委員さんをお願いいたします。そして10グループずつまとめまして、それに一人ずつ世話人さんを主婦の中をお願いいたします。もちろん最初はどなたがいいかわかりませんが、近所の評判やあるいは会社に伝わってくるころの風評やらで、御家庭の事情あるいはその奥さんの積極性、性格なども考えまして、事務局の人が指導員を連れてお願いに上がるということも必要でございましょうし、あるいはあるグループがお互いに話し合っ、選挙でもってその委員さんをおきめになってもけっこうです。きめ方にはいろいろあろうと思いますが、最初のときにはどうしても事務局の方が出て、そうして趣旨を説明してお願いするという段階になろうかと思えます。1年か2年も過ぎますと、今度は自主的に主婦の方で、交代制にしようとかあるいは選挙制にしようとかいうこととなりますが、最初のとっかかりは、どうしても足を運んで世話役さんをお願いするということになろうかと思えます。

そういう体制ができますと同時に、今度はこの運動が実際に始まります前に、その600なら600のその夫婦世帯の実情はどうであったかという実態調査が必要になって参ります。よくこの運動を始めます前に、調査などやると逆に運動を阻害するから、しないでどんどん実際にやればいいではないかというせっかちな行き方をするものもありますが、これではせっかくやっても、1年たつて、やらない前とどう違うのか、どういう効果が現われたかということがさっぱりわからない。そうなりますと、会社の幹部でも、やることはいいことだし、わかったが、一体1年やってどういう効果が現われ、どう変化があったか、それもわからないというようではとても会社の予算を出すわけにいかないという工合に、必ず経理担当の重役から言っ参ります。そうするとせっかく部課長や何かが持っていても、結果はどうなのか、結果がわかりません、つまり数字を出しようにも出せないのですからやったあととやらない前とどう違うかということがわからない始末となります。そうなりますと不要不急のことをやってもしよ

がないじやないか、やめにしようじやないかということで、せっかく1年やってもだめになる。またこの運動は1年や2年でほんとうの効果が上がるものではない。そこでせっかく始まったものがだめになる。現にそういう会社が若干あるのです。これはその前に調査なんかめんどろくさいといってやらなかった、だから翌年の予算をとるための材料ができない。これはぜひともその始まります前にはありのままの実態調査をやるべきであると私は考えるのであります。また調査をやっても書けないじやないかという方があるかもしれませんが、私はこの調査には、この運動に関する限り二つの意味を持っていると思います。一つは調査表を配ることによってPRになるということです。偉大なものです。調査表自体が主婦に対しまして非常なこの運動のPRの材料になる。どんな人間でも調査表を見れば何だこんなものと言って、書かないまでも目を通す。ははあ、家族計画というものがあるんだな、それだけでもりっぱなPRです。中には、これはおもしろそうだ、書いてみるかということになれば、それだけでもりっぱなPRです。認識を与えている。書けなくても、それだけでもりっぱな宣伝になっている。PR活動の一翼をになっているというのが一つの意味です。それからもう一つは、書いて集まった表自体の意味、たとえば100枚配って60枚しか返ってこなくても、あと40枚返ってこないというところにまた意味がある。それだけでこの地区では40%が無関心だということがわかる。何にも書いてなくても、書けなくてもけっこうです。もちろん書いてこられました60枚を分析してみれば、ここに統計が出てくる。それを最後に比べるときに必ず使います。それをいろいろ統計学的に調整することができますので、そこで大体の実態がわかる。そして1年後にもう一度再調査をやるのであります。これは習慣です。とかく調査といいますが、どんなもおきらいになるのでありますけれども、これはやはり竹の節々で、中はがらんどうになっていても、ある程度はびしびしと竹の節をつけていかなければ、この運動は締めくりがつきません。ですからこれは当然のこととしてやらなければならない。そういうようなためにも主婦の組織作りが全部必要でございます。

さて、そういう調査も配り終わりました、これから始めようという段階において、小さな地区でございましたら全員の奥様方、大きい人数の地区でございましたら世話役さん並びに委員さんの方々でもけっこうであります。一堂に会して、これからやろうという一つのふん切りをつけるお集りをするわけです。これを私どもは発会式と呼んでおりますが、なぜ家族計画運動がもたもたしてできないかというのは、恥ずかしさがあるわけです。奥様方にとっては恥ずかしい、だんな様にとっては照れくさい、だんな様も奥様も両方ともめんどろくさい、こういう一つの心理的な障害がありますので、やろうと思ってもどうもできない。

それとてかくこういうことはこそそとやりたいものです。こそそとやること
が、よけい恥ずかしさと照れくささを増すのであります。だから永久にできな
い。そこで私どもはその逆をいきまして、堂々と打ち出して行く、そういうもの
があってもこの運動にじやまにならないように仕向けて行く、これが大切であり
ます。一人でやるのではないのだ、みんな大勢そろって手をつないでこの運動を
するのだという、そういう意味合いにおきまして発会式をあげていただきたい、こ
う言うのであります。ある企業体におきまして発会式をあげずにやったところが
ございますが、発会式をあげてから始めたところと、全然そういうものがいつ始
まったかわからない、ずるずるべったりに行ったところとでは、主婦の意気ごみ
に大へんな違いが生じております。またある会社では、そんなことはむだなこと
だ、そんな金を使うならすぐに早く助産婦を歩かせた方がいいということをやっ
ておりますが、これはあとでどうにもならぬということになります。そこで私ど
もは一つの組織集合を持つということを言うのであります。これは祭典という意
味もありますし、主婦がお互いに顔を見合わせて、なるほど自分だけではない、
これだけそろってやるのだというように勇気が出る。そこへ会社の方々も出て、
こういう趣旨のもとと一緒にやってみようということによって激励をする。こう
いうものには重役さん方にも出てもらいたい。労働組合の幹部もそこへ出てもら
いたい。もちろん健康保険組合の幹部も出てもらいたい。私どもも時間がありま
したら、永井先生か私か、あるいは研究会の諸先生方か、とにかくだれかがそこ
へ出て行く、そうして主婦に向かって激励をいたします。そうしますと今まで何
だかふにやふにやと考えていた気持が、大勢そういうことをやろうということ
でお互いに顔を見合わせ、あるいは今まで知らなかった隣りの奥様がやはり同じ会
社の同じ奥様であった、こういうことでだんだんと気分が変わって参りまして、
だれでも妊娠、出産を心配しないわけではないのですが、どうも今までできな
かったふんぎりがついて参ります。これは男が考える以上に女の方にはびんと頭
にくるわけです。妊娠、出産ということほどからだ知っている事実はないのであ
りまして、男性は、妊娠をしたこともなければお産をしたこともありませんから
、それほどまではわかりませんが、奥様方にとってはびんとくる。そこでいよいよ
度胸がきまりますと、ほんとうにみんなで考えてやろうということになるので、
私はやはりむだなようであっても、さっき申しましたように竹の節々という
意味においてびしとやるべきだと思えます。そのときにもしも間に合いますな
らば、事前に調査をいたしました実態調査の結果をそこで発表する。この間やり
ました調査の結果はこうです、これは一人一人のことではありません、何百か集
めた統計です、ですから結局個人に迷惑をかけるわけではありません。何%はこ

うである。さあここに問題があります。それをちゃんと実践なさる奥様方に教えておく。自分たちのこの運動をやるときにはこういう問題がある、たとえば若い層に人工妊娠中絶が多いけれども、なるほどこれはそうかもしれない、自分一人がここそやっておったけれども、これは大へんなことだというふうに、決して調査のしっぱなしでなくて、その結果の大体のアウト・ラインをその奥様方に教えておくということは、非常にこの運動の励みになるわけでありまして。そういう意味で発会式を持ちます。

それから今度はスケジュールを全部事務局員が作るわけでありまして。まず本年度はこれから始める。まず1カ月は全部集団指導をやる。それには委員さんを通じて、何月何日はどこそこの何々さんのお宅に集まってやろう、翌日はここでしよう、これを実地指導員と相談いたしまして、この運動につく係員の方がスケジュールを作る。そうしてそれを委員さんあるいは世話人さんに全部知らせる、そうして集団指導を始めてもけっこうであります。これは午前がいい人と午後がいい人というふうにいるいろいろありますから、大体奥様方の時間を聞いてやる。大体2時間あれば実地指導員は掛図あるいはスライドをもって、総合的に家族計画全体の話を申し上げます。そこで認識を深めてその場で直ちに具体的な個人指導に入る場合もございます。それで大体1カ月かかりますと、300世帯は必ず一応できるわけです。10人ずつでありますから、1日1回でありまして30日で集団指導は一応全部できる。それを午前、午後やりまして、上手に残りくまなくやればあるいは2回くらいできるかもしれない。とにかく2カ月、3カ月の間には必ず全部一通りの集団指導はできるという計算になります。それが終わりましたから、今度は個別指導、個別訪問に移っていく。その場合どなたが一番必要であるかということとはわからないにしても、とにかく一応お伺いして、奥様方は都合が悪ければ、きよりは都合が悪くお断りになればよろしいのでありますから、順繰り順繰りにやっていく。そうして実地指導員が全部ほんとうに手をとって教える。手をとってめんどろを見るというところまで徹底いたしませんと、家族計画運動はうまく参らないのであります。そういうわけで、結局それを繰り返していく。そのうちにはだんだんと個別指導を受ける方がふえて参りまして、そうしてりっぱにこの受胎調節の技術を身につけることができるようになって参るのであります。

こういうことを大体1年やります。しかしながらやりっぱなしではいけないのであって、やはり1カ月に1回なり、3カ月に1回なりその担当課長並びに担当課員、あるいは実地指導員あるいは健保の担当者が集まって、どういう問題があるかということで、やはり研究会を開かなければなりません。その地区ではどう

いう問題があるかということ、もちろん家族計画に関する技術につきましては、もう実地指導員はお手のものでありますが、しかし簡単には参りません。社宅という問題からどうしても家族計画ができないような家庭事情にある方、あるいは子供が病気になりがちで、どうしても気が散ってできない、あるいは借金に苦しんでいる、そういう家庭の事情でいろいろなものが出て参ります。そういうときに実地指導員が家族計画以外のことにあまり先走っていきますと、かえって問題がありますので、そういう問題は聞いておいて、そうしてその研究会で、だれだれさんのお宅ではこういう問題があったけれども、どうしたらいいかということ十分に協議して、そのお宅で完全に家族計画ができるような環境ができるようにしていかなければなりません。そのためには、やはり指導員だけで事を運ぶのではなくて、その研究会で問題を出す。あるいは医学的なむずかしい問題にぶつかる、そういう場合には病院、診療所並びにそういうお医者さんをまじえた研究会を開く。大企業体では必ずといっていいほど病院あるいは診療所がありと存じます。ですからその診療所の、産婦人科の先生がおりますればけっこうでありますけれども、必ずしも産婦人科の先生でなくても、内科の先生でも、そういう研究会の委員をお願いしておくわけでありまして、ですからやりっぱなしでなくて、やはり2カ月に1回あるいは3カ月に1回ずつそういうような合同研究会を持つ。もちろん私ももひまがありましたら、そのお招きによりましてその会議に出ることもあります。

あるいは1年の初めに運営委員会ということを持ちまして、健保、労組、会社と、今年やる方針を全部そこでほんとうはきめるわけですから、そうして始めてから1カ月に1回とか2カ月に1回とかいうように、そういうような問題点の研究合同会議を開いて、そうして1年間の全体の様子から出ましたところの問題点を、全部そこで認識する。それから拡大していくという形になります。これが非常に大切なことでありましてこれをやるとやらぬとでは、また問題が非常に違参ります。それで私どもはその問題につきましてできるだけ出るのでありますが、1年たちますともう1回実地指導員の再検討講習会みたいなものをやる会社もございまして、そうしてさらに認識を深め、技術をさらに深めていくことをやっている会社もございましてこれはその会社におけるやり方次第でございまして、やはりやりっぱなしではないということでございます。

さて予算でございますが、予算の点も最初はやはり1世帯について1,200円から1,500円くらいの予算が必要だと思っております。と申しますのは、何もかもひっくるめてでございますからそのくらい必要でございます。実地指導員の日当の費用あるいは集団指導に用いますところの掛図あるいはパンフレット、あるいは

はその他模型、避妊器具、薬品、あるいは最近是非常に遠い所でございますと、
実地指導員に自転車などを買って与えている会社もございます。そういったよう
に、その場で消えないで残るものでありますので、その準備の金が要りますの
で、最初はそのくらいの予算がかかるかと思えます。しかしながら1年目を過ぎ
まして2年目になりますと、もうほとんどそういうようなものは要らなくなって、
あとはスライドのフィルム代であるとか、助産婦さん、実地指導員の手当であ
るとか、あるいは避妊器具、薬品代の負担費だとか、その程度になります。結局
300円以下に負担が軽減してくる。1,200円かかったものが4分の1で済むとい
うことになって参ります。従って金銭的に申しましても決してペイしないもの
ではない。と申しますことは、人工妊娠中絶が現在ではまだ減っておりません。一
昨年が112万件でございまして、少し減るかと思いましたが、昨年度も112万件
余りになっておりまして、まだ全国的に減っておらない。ところが大企業体で運
動を始めますと、1年目には急速に減らなくても、まず3年目には人工妊娠中絶
は半減すると私は見ております。そういう意味で、とにかく今までしなかったら
もっとそれ以上中絶がふえたであろうというのを、これで押えておる。そうす
ると、町でやみでやる方もありましようけれども、大体健保にのせてやる方がた
くさんあると思えます。健保では妊娠中絶費としては認めておりませんからでき
ないわけですが、それが婦人病とかあるいは子宮病とか、いろいろな名前が出て
おります。ですから、これはある会社の事例であります。健保に上がってくる点
数を見ると、一番大きく出てくるのは結核である。ところが二番目に出てくるの
が、何とこれが婦人病である。2万点くらいある。その婦人病の大半は中絶費な
んです。ですから健保で非常につまらないところに金を出している。またそれ
によって中絶をした人の40%は何らかの障害を受けております。これは統計的に
確実です。そのためにもまた薬を飲んだり何かしてまた費用がかかる。それがど
んどん減ってくるのですから、健保の出す金はだんだん減ってくるわけです。利益
を健保は得てくる。会社側といたしましても、そういうことによって主人公が休
む、あるいは女房がからだをこわしぶらぶらしているために会社へ行けないで欠
勤する、あるいはいらいらして事故を起こす、そういうようなことも全部防げる。
そういうふうな陰に陽に安全運動とこれが結びつきまして、どういふものか知
りませんけれども、この運動を始めた会社は3年目から——3年目と申しま
すが、1年目でも結果は出ているのですが、とにかくにも急速に災害率が減少
し、欠勤率が減少しているのです。もちろんこの運動のためだとは申せないか
もしれませんが、無関係ではあり得ないと思えます。これは現に日本鋼管を
初め日立造船の向島、因島工場でも、りっぱに客観的に証明されているのです。

これは私の知人が広島県庁の健康保険の係におりまして、県下の全部の企業体の様子を検査した。そうして因島、向島工場へ行きますと、こういふふうに急激にカーブして下っている。然し他の同じ企業体の規模のものではこれが下っておらないのであります。ところが日立の因島と向島の工場が下っているので不思議に思った。それでいろいろ聞いてみますと、3年前からこの運動を始めていることがわかった。ほかに原因がわからない。これは非常にいいことだが、この運動はどこでやっているのか、それは人口問題研究会でやっている。その人は元人口問題研究所にいた男ですから、よくわかって、この間わざわざ私のところへ来て、篠崎さんこの運動は非常にいい運動だ、健保から見ても何から見ても、県下全体で見てこの運動をやっている会社とやってない会社では全然違う。これは私の方でやってくれと頼んだわけではないので、勝手に県庁がやったのですが、ちゃんとカーブが出ている。これはこの運動が会社にとっても決して無関係であり得なかった、つまりいい意味で非常に役立っているという客観的な証明をしてくれたことになるのであります。結局そういうことが期せずして出てくるのであります。ですから、そういう意味から申しましてこれは非常にペイするし、また好まない妊娠をし、余計に子供を生んだ費用はかなり莫大なものです。若干物価指数の変動もございませうけれども、満4才までは大体2,500,600円の金が毎月かかる計算になっております。5才から9才になりますと3,700円、9才以上になりますとそれより多くなる。満18才の家族手当を支給されなくなる年齢までには、どうしても80万くらいはどうしてもかかるわけです。そういうものが浮くということこれは目に見えないけれども、会社側にとっても非常に有利であります。もちろんそんなことのために会社側はやるのでありませうけれども、とにかくペイはする。しかし1年や2年や3年ではペイしないということでございます。それは経理担当の重役などで、どうも金銭的にはかもの判断のできないような人もございませうのでこういうこともあるという参考に御話をしたわけであります。ですからこれを示せばなるほどそうかということになる。しかしそれ以上に有形無形のものがたくさん出てくるのであります。

たとえば労働組合にしても感情的に走ってむやみやたらな闘争はしなくなりまして、やはり合理的な闘争になってくる。会社の経営にふさわしい合理的な闘争の形態になってくる、こういふことになりまして大へんな違いであります。そういうめんどうを見ることによって、実際に労働組合が要求した問題が解決した例が多々あります。ですから労使協調の面から役立っているということは、これは陰に陽に言えるのではないかと思います。従って最初は1世帯1,200円かかりましたものでも、2年、3年、4年とだんだんたちますうちには、健保の赤字が黒

字になる、だからいつの間にか金が余ってくる。その余った金は会社がふとこ
に入れてはいけない。これをやると労働組合がまた怒りますから、余った金は全
部いろいろの厚生施設、福祉施設にどんどん入れる。会館を作るのもいいでしょ
うし、いろいろやり方がありますが、従業員の福祉のためになるような施設に
それを使う。ある炭鉱ではそういう運動を起こしまして、余った金で会館を作っ
たという例もございます。そうしますれば決して労働組合も反対する理由はない
のでありまして、もしも余ればこの運動に使い、この運動に使ってなおかつ余れ
ば、そういうような会社の福利施設にこれを使うということになれば、非常に道
徳的にもいいことだと思います。しかしそういう面ばかりを申し上げると、これ
はいいものだと簡単に思いますけれども、そのためには並々ならぬ努力がその陰
になくはならないわけです。そういうような一つの企画あるいはやり方、ある
いはそういう進め方をしながら最後はやはりこれを主婦が自主的に自覚的にやる
ように持っていくわけです。よく会社の中では器具、薬品はただでやろうという
ことをいうところがある。これは非常にけっこうなことなのですが、器具、薬品
は決してただでやるものではありません。これは従業員の御夫妻が使うのであり
ますから、若干でも、あるいは5円でも6円でもなるべく取るべきです。とかく
慈善事業と間違えて、こうやれば主婦が喜ぶだろう、こうやれば労働組合が喜ぶ
だろうということで、避妊器具、薬品代をやるというような案を立てますが、こ
れはいけません。と申しますのは、大体最初はやろうか、やるまいかと悩んでい
る。それをただでやると、みんな捨ててしまいます。自主的に立ち上ってからな
らまあいいのですが、どうしようかと思っているときに、ただでやると失敗しま
す。ただほど人間を墮落させるものはない。私の伯父が下町で昔施療病院をやっ
ていたことがあるのですが、天皇陛下から薬とかいろいろなものをもらって、そ
れを貧乏人に分けてやるとのまないのだそうです。みんな捨ててしまおう。現金な
もので、少しよくなればのまない。これが一銭でも金をとられたとなるとのむの
です。これはバス・コンでも同じことで、会社はいいだろうと思ってやったので
しょうが、それは自分たちが使うのですから自分で買うことです。しかも各会社
へ私どもが一流メーカー品紹介して、町で買うよりはるかに安く買える。200円
くらいのものだったら50円くらいで買える、それを会社が30円負担すれば20円に
なる。だからコンドームなんかただみたいなのです。ですから自分たちが使う
ものは、やはり自分で金を出すという習慣をつけることによって、よけい大事に
使う、これは間違えないようにやっていただきたいと思います。だから同等に半
額負担ということになりますれば、結局その負担がだんだん切り下げられて会社
の負担が少なくなる。5年目には会社が金を出さなくてもいいということになり

ます。これは主婦側でも決して喜ばないわけではない、むしろ喜んでこれをやると思います。そういう形で大体計算いたしますと、会社が一時もうける以上に、主婦側は6倍くらいもうけるというような計算が成り立つわけです。ですから最初ちょっと金がかかったように見えても、これは決して不当に金がかかっているのではない、完全にペイするものだということがわかって参ります。と同時に、やはりいつまでも会社側におんぶしてこういう運動を続けさせる習慣は考えものでありまして、いずれ2年、3年たつうちには、やはり主婦がみずから立ち上がってやろうという空気を作らなければいけないのであります。家族計画は子供を生む、生まないだけの問題ではなくて、育児の問題、あるいは環境衛生の問題も入って参ります。要するに、いろいろの周囲の衛生状態を改善する運動に立ち上がるとか、そういう一つの主婦の立ち上がりになるように持っていかなければならないわけです。最後には会社は主婦の要望においてやるという習慣をつけませんと、やはりほんとうにこの運動が実のつたとは言えないわけです。と申しますのは、この運動は家族計画だけで終わるものではないと思います。子供を生む、生まないという技術を覚えただけでは、決してほんとうの実が実のつたことにならない。なぜこういうことを最初に始めるかと申しますと、恥ずかしくて仕方がない、このような性的問題に入り、今までかまっていたことを、夫婦がコントロールしてそれを身につけたという自信は、今後の生活に非常に役立つ。家計簿をつけるなり、あるいは生活設計をするなり、そういうことのきっかけになるのであります。だから、私はよくはげましの言葉にこういうことでもあなたはできたではないか、できた以上はあとの生活設計などは完全にできるといっておるのであります。また本人もそういうことで自信を持つてくるのであります。このためにまず第一に家族計画を取り上げているような次第でございまして、結局これは次の過程の生活の設計に向かうために、これを最初にやるということにすぎません。ですから家族計画で終わってしまうということになると、これは画竜点睛の点睛を欠くわけです。もちろん最初からこれを全部やろうとすれば労組の反対がありましょう。だがこれを3年もやってみますと、労働組合も、なるほどこれは反対できない。主婦が喜んでいるじやないかということになる。そうすると主婦からは今度は家庭生活の設計をしましょうという声が出てくる、その声と会社の声と合わせて生活設計をやろうということになると、労働組合としてはこれに反対するわけにいきません。ただ問題が出てきますのは、どうも会社は家族計画で成功すると、今度は生活設計、家計簿などをつけさせる。これは現在の賃金でがまんしろという賃上げストップの資料にするのではないかという疑心暗鬼を持つ向きもあります。しかしながらこれはやはりもっと話

し合って、労働者といえども生活の水準を向上させることは一向差しかえない、与えられた月給の中でどんどん生活水準を向上させることは当然のことである。つまり文化生活をするということである。そのために必要な賃上げはまた別個に考える。また会社側も、それをやったからそれで食えるじゃないかということで押える手はない、だからこれは別の問題である。従ってこの運動のためにこれが阻害されることはないということを、労使双方が確認し合わなければいけないと思うのです。それでもなおかつ労働組合が生活設計の問題に不安があるならば、費用は出すから労働組合がその生活の革命なり何なりやりなさい、家計簿をつけなさいということで、労働組合にイニシアチブをとらせれば、決して労組は反対とは言えないと思うのです。労働組合といえども生活向上と母体保護というのは、これは二大眼目です。そのためにこそ労働組合は闘っておるのだらうと私は思うのです。だからそんなに会社側に不安だったら、労働組合にやらせる、費用は会社が出す、ここまでいわれたら労働組合は決して反対はできないと思います。そうすれば会社側はそういう運営委員会でよくわかればよいというような、お互いの理解協調ができるようになってくると思うのでありますが、ただできないのは、ほかの問題があって、そのほかの問題で衝突している場合にはこの問題がなかなか軌道に乗らないという心配が多分にございます。しかしながらせつかくここまで始めた以上、やはり生活設計が伴いませんとこの運動はほんとうではないのでありまして、どうしてもそこへ持っていかなければならない。その場合には今度は家族計画実地指導員だけでは間に合いません。会社はこの運動が始まって3、4年後にはちゃんとペイしていますから、余力を生じてくる。そこでここに生活相談員を世話しなければならぬのであります。現在進んでいる企業体ではもうこれが行なわれておりまして、社会生活学校や社会事業大学を卒業して社会福祉主事の免許を持っている、そういうケース・ワーカーを再教育いたしまして、そうして必要に応じて皆さん方の方に推薦申し上げておるのでありますがこれと家族計画実地指導員と合わせて生活設計をやらせる、そして両方面相待って指導していく。家計簿のつけ方もやるし、グループの指導の仕方もやる、これが理想的な最後の体制でございます。もちろん進んだ企業体におきましては、生活相談所などを作って、家庭生活の法律の問題、特に借金で苦しんでいることに対する問題、あるいはよそに金を貸して金がひっかかって困るという問題、そういう問題について、有名なエキスパートの山室民子先生、久米愛先生とか、そういう先生方によって身の上相談をしてもらおうというようなことをやっているところもございます。

それはおのおの会社のあり方でございますが、とにかくにもその実地指導員

が、こういうことをしようじやないか、子供のしつけはこうしようじやないかという相談もいたしましょうし、また指導目標の中にもこれを入れよう、そしていい家庭を作ろうじやないか、あるいは地域を合同して清掃運動を始めようじやないかということで、押しつけるのではなく、自然に呼吸が合ってくる。そういうグループがだんだん多くなればなるほど、組織立ってくればくるほど、非常にすばらしいいい仕事が出てくるわけであります。そこで、生活改善運動と結びついてくるわけであります。私どもの考え方は、必ずしもいわゆる生活改善のための改善という考え方だけではありませんで、やはり何かそこに新しい一つのあり方、あるいは新しい一つの生活環境と申しますか、そういうものが出て、それがその一職域にとどまらず、一般社会地域に向かって移っていく。そうして気がついたら、非常に豊かな快的な生活環境の中にあつたというように、これが影響力を及ぼしていかなければ、この運動はほんとうに実が実のつたとは言えないのではないかと考えております。お互い同士だまっています、この狭い日本ではばた餅式にいいものがくるわけではないので、やはりお互いに集まって努力していかなければならない、そうしなければいい生活の環境や気風やモラルというものはできないわけであります。それを作っていかなければならない、それが何よりも実地指導員の無言の教育になるのでありますから、そういう形でやっていく。ところが生活設計の問題にいきますと、主婦は家計簿をつけない、あるいは月給が足りないとかをこぼす。これは結局生活相談員が、その家計簿をつける前にどういう障害があつたかということを発見していかなければならない。

実地指導員と同じことです。そうしてそれを除去していく、そうしてだんな様にも協力を頼む、これは今まで奥様だけを対象にいたしましたけれども、ある段階を過ぎますと、今度は職場で奥様方の声を反映させるように、だんな様方を教育する。昼休みの時間を利用していただきまして、実地指導員が家族計画についてお話し申し上げる、すでにそういうことをやっている会社はたくさんあります。昼休みの30分間職場で集まって、実地指導員がそこへ行ってスライドをもって家族計画について説明する、そういうことをやっております。あるいはグループで家計簿をつける指導をやっている。そしてその録音をとって、その録音を職場へ持って行って聞かせる。そうすると自分の細君同士がしゃべっているもので、だんな様は安閑としていられません。初めは何を言ってやがるというふうに思っていますが、だんだん考え方が変わってくる。男ですから急に言うといけない。こういうふうに集めて言うと、男性というものは誰れでも考えるものです。——そういう形で非常に家庭が明るくなって参ります。これはもう理屈ではなくて、実際それをやってみるかやってみないかというだけの違いでありまして、結局はこれは

今までの私どもの体験では、とにかくやればやっただけの効果はあるということ
は確実に言える。また期待しなかったいい芽が出て来るのであります。

一例を申し上げますと、トヨタ自動車であったことですが、伊勢湾台風のとき
に、主婦の組織ががっちりできていた。つまり主婦の組織があったものですから
あとは引き受けますから行っていらっしやいということで、御主人は職場の方へ
出した。あとは主婦が立ち上がって協力してりっぱな力を発揮した。これもまた
ずっと前の台風のとくに日本鋼管で起きた例ですが、社宅が全部水浸しになっ
た。会社は救援の手を延べようにも、どこにだれが住んでいるのかわからない。
ところがたまたまこの運働をやっていたために、何のたれがどこに住んでいるか
ということがすぐわかった。しかも実地指導員はずっと個別訪問をしているか
ら、その家も、世話人さんも知っている。そして実地指導員がすぐにおにぎり
を作り、それに救急箱をつけて、それでずっと救出の手が延びた。ですからやっ
ている会社とやっていない会社とは雲泥の差です。やっている会社はすぐわか
りますから、すぐおにぎりを持っていく。隣の会社の人はだれも来ない、これは
そういう運働をしないために組織ができておらないのでわからない。これは有名
な話ですが、この運働をやっていたおかげだということをつくづくさとしたわけ
です。こういふような思わないおみやげは、私どもも決して予期していなかつた
ので、こういふ不意の事件に対しても、この運働のあずかった力は非常に大きな
ものがあるということ、私は最近つくづく感じておるのであります。そういう
例を申し上げますと、どろぼうよけ、空巢ねらい、そういうものも全部防いでお
ります。そういうわけで、いろいろな形でこれがとんでもないいいものを生んで
いるということは事実でありまして、私どもはそれは全然予期しなかつたこと
であります。そういう予期しないいい実例が、たくさん企業体からどんどん報告
されてくるのであります。

従って、こういふ運働につきまして、私どもはぜひ皆様方にこれを新しい経営
の方策としてやっていただきたいということ、確信を持ってお勧めする立場に
立つわけですが、ただ、やるからには不徹底なことはやらない方がいい、徹底
してやらせる、いいかげんなやり方だと、かえって奥様連中を甘やかすことにな
るので、徹底したやり方をしろ、こういふふうに申すのであります。もちろん、
もうこういふことをやっている会社は現在もう50社以上あり、準備中のものは百
数社ありますが、なかなか踏ん切りというものがつかない場合が多いのであり
まして、これは最初の踏ん切りだけが大切なんです。あとは自然にすうっといく
ものです。最初スピードを出して軌道に乗せるまでは非常に力が要りますけれど
も、乗せてしまったあとは、すうっと自働的にと申しては、はなはだ言い過ぎて

ありますけれども、かなりスムーズに順繰り順繰り進んでいくものであるということがよくわかるのであります。ですからこの新生活運動というものは理屈ではないのでありまして、やるかやらないかというだけのことでありますが、やり方は一般地域とは相当やり方が違うのでありまして、会社独自の立場でいくということがきわめて大切であります。

また、産業安全やその他の結びつきにつきましても、児童における家庭災害や学校災害から防止して日頃の訓練から身につけるように致さねば本当の人間安全にはならないものと思うのであります。従ってそういうことを何もやらないで野放しにしているところの児童の災害率とでは、格段の相違があるということが伺えるのであります。もちろんこういうことをやりながら、衣食住、このうち住は特に社宅がございまして、別といたしましても、衣の講習会、着物の講習会、ネクタイの洗濯の講習会、それから食の方では栄養のとり方の講習会、これはそのたびごとに講師を呼んできて、グループで勉強していく。そういう工合にだんだんとこれを加味していきますと、これが非常な主婦の張り合いになってきます。私最初の11日にこちらへおじやまして、皆さんとお目にかかるつもりでいたのですが、実は日立造船の大阪の主婦の世話人大会がございまして、そこへぜひ出てくれと申されたので、実は飛行機で11日に行って参りました。なるほど西の日立造船といわれるだけあって、400人からの主婦の代表が集まりました。そこで家族計画の体験、保健衛生の体験、生活設計の体験、いろいろな体験談を主婦が述べられたのですが、実に堂々たるものであります。奥様方というものは人前ではなかなかしゃべれないものでしたが、この前も厚生省が主催いたしました全国家族計画大会でも、私どもの方の分科会では主婦が非常に盛んに発言しておりました。一人前の人でも大勢の前ではなかなかしゃべれないものでありますけれども、自分の恥を話すようでございますがということで、家計簿の体験談や自分の子供の体験談なんかを堂々とおやりになっている。またそれをみんなかたずをのんで聞いております。私はずっと最後までその会に出ておまして、最後のあいさつをしてきたのであります。日本鋼管・川崎製鉄でもそういうことをやっておりますけれども、西では初めてのことで、やはりそこまで奥様方が成長するわけです。ですからこれは大へんな効果もう現われておる。今まで何も知らなかった奥様連中がそれを実践し、それを述べておる。また自己の欠点なり自分の盲点なりを虚心たんかいに知ろうとしておる。これは人間的に伸びているということです。今までのように、だんな様ばかりいじめたり、子供ばかり怒ったり、自分だけいい気になって何かしたいという、そういうけちくさい根性を忘れて、ほんとうにお互いの立場について堂々と自分の意見を言って、お互いに伸びてい

こうというようなりっぱな成長ぶりを、目のあたり大阪で見て参りました。これは何といってもすばらしい収穫だと思えます。金がもうかるとか、もうからないとかいうことも大へんなことだろうと思えますけれども、それ以上に、一個の人間がかくもりっぱに成長するということは、大へんなことであります。この運動は日本だけではないと思えますけれども、特に日本が新生活運動としてこれを行なっております。将来特に東南アジア諸国は家族計画をやらなければ、とても改善できない。パキスタンあたりはこの運動をやらなければ産業が復興しないとまで言われております。

このアジアで日本は唯一のこれの進んだ国です。おそらく生活環境もアジア人種としてお互いに手を握り合えるだろうと思えます。その中でやはり日本は指導的な立場に立つ、ことにこの家族計画運動という奥様方のこの運動は、ビルマ、タイ、インド、そういうアジアの御婦人の非常によい相談相手になるのではなかろうか、こういう工合に考えざるを得ないのであります。ですから私はこれは日本だけの、企業体だけの運動ではない、自分の家庭だけよくなればいいという小さな運動ではないのだ、これは一般社会福祉、産業の基盤に役立つような力強い捨て石にもなってくるし、それが同時にアジア全体に対していい影響と指導力を発揮し、いい人柱ができるということになるので、私はこれを非常に考えている一人であります。

大体かいつまんでお話し申し上げましたが、これで一応私のお話を打ち切らせていただきたいと思えます。

わが社の新生活運動

日本鋼管株式会社 武田 潔
厚生課長

わが社の新生活運動は傘下各事業所のうち最大の川崎製鉄所が発祥の地となりまして、昭和28年4月に始まりました。その際、財団法人人口問題研究会理事長の永井先生その他の方々の懇切なる御指導並びに御協力によりまして発足に踏み切った次第であります。

第1年度の昭和28年には手初めといたしまして川崎市内の社宅地区1,122世帯を対象としまして、それに指導員1人、助手2人、計3人をもって発足し、その重点を家族計画に基づく受胎調節ということに始まったのであります。翌29年度には第二段階と申しますか社宅以外にも組織を拡大、川崎市在住従業員全世界約5,300人を対象といたしまして、第一段階を一步広めたわけであります。

次に昭和30年には新しく生活相談所を開設いたしまして家庭の相談の方にも手を伸ばしたのでございます。以上のように川崎製鉄所において発祥を見たのですが、会社幹部の理解も次第に深まり、従業員の協力、それに主婦の自覚が目ざましく、ここ3年の間に従業員からも非常に感謝と期待をもってこれを見られるようになったのでございます。また労務関係から見ましても非常に好ましい現象を示すようになってきたのであります。昭和33年1月には川崎で労働省制定の無災害記録証を100本もいただきました。従いまして労働大臣から特別表彰を授与されました。昭和34年現在に至りましては134本という無災害証を受領するような経過をたどって参りました。また家庭への衛生の指導もいたして参りました関係上、伝染病の発生はその間ほとんど見られておりません。これには関連安全衛生関係諸機関の適切な施策と努力も実ったことではありますけれども、家庭を管理する主婦の自覚というようなことが一そう効果を上げしめたものとわれわれは信じている次第であります。以上が川崎の発足当時の状況でございます。

ここで本運動の動機と申しますか、それを簡単に申し上げますと、従来の労務管理といわれますものはわれわれの間には労働の8時間の間だけを管理する傾向がございまして、一日の生活の残りの16時間は主として放任されておったといっても過言でないと思います。ところがその家庭における16時間というものが生産の重要な労働力の蓄積をはかる、またその生活が直接生産に影響されるということとはよくわかったのでございますが、この16時間を最も有効に使っていただ

く、そうしてこの中で明るい幸福、明るい家庭を、会社もそれによって喜んで生産に従事していただくというのが本運動の動機といたしますか、非常に基本的な最初の動機でございます。またわれわれは一定の収入によって生活を営んでおります。一番必要なことは家計の予算生活でございます。予算生活に大きな影響を及ぼすものは家族の扶養人員で、これに積極的な計画性を持って、要するにかわいい子供たちへ親としての責任を果たして、また子供と家庭の幸福をはかろうと思うならば、当然そこに受胎調節の正しい進行がなければならないという考えに達したのであります。また一方工場においては先ほど申し上げました通り安全運動を非常に重要視いたしまして進めて参りました。従来「安全は家庭から」という言葉をときどき聞くのでございますけれども、実際になかなか行なわれにくかったのでございますが、家庭に対しては本運動を通じまして協力を得、安全の面において先ほど申し上げた通り好結果をもたらしました。われわれもこの運動の最初に基本として考えたことが非常に間違っていなかったということをごさらながら考えているのでございます。以上が本運動実施の動機として考えましたことで、またそういうことで踏み切ったのであります。

ただいま申し上げましたのは昭和30年までの川崎製鉄所を中心にした動きでございますが、次にこれを全社的な方向に持って参りました経過の工合をちょっと申し上げますと、川崎製鉄所の新生活運動は非常にりっぱな成績を上げ、また世論の注目するところとなりましたのですが、一事業所でいい成績を上げたものは他の事業所にも延ばさなくてはと考えたわけです。他の事業所と申しますのは当日本鋼管には川崎製鉄所のほかに京浜地区に鶴見製鉄所、鶴見造船所、浅野ドック、子安肥料製造所などを、新潟には新潟製鉄所、富山には富山製鉄所、清水には清水造船所、また岡山には炉材製造所というふうに多くの事業所を持っております。これらはそれまで全然動いていないかったわけでありまして、これらを全国的に取り上げたらどうだということで話が盛り上がった次第であります。労務管理政策からも一事業所で効果を上げたものは逐次全社的にこれを推し進めるということは当然のことです。そこでこれを全社的に推進しようというような方向で進みました。ただそのとき漫然とこれをやるというものあまりにも非科学的なことでありまして、従業員がこれを受け入れする立場に立ってどういふふうな気持ちでいるだろうということで、この新生活運動に対する世論調査を行なったのであります。この調査は東京大学社会学研究室的尾高朝雄教授と統計数理研究所に依頼し、なお会社及び労働組合がこれに協力するという形で行ないました。調査対象は全従業員28,000人を母集団とするランダム・サンプル約2,000人、調査方法は自記式質問紙を用いました。計画産児の指導をどう考えているだろう、料

理やさいほうなどの講習会をどう考えているだろうか、生活相談についてはどのような考えを持っているだろうか、ということてただいま申し上げた通りの調査をいたしまして、本運動に賛成をされましたものが約80%ということがわかり、いよいよこれから全社的に実施しても間違いないという確信のもとに計画の実施に踏み切った次第であります。そうしますと全社で対象世帯が18,000世帯になります。昭和31年以来各事業所ごとに発足いたしましたのですが、発足の期日と申しますかこれが一斉にいきません、労働組合との話し合いとか諸準備の都合もございまして、まちまちではございますけれども32年秋以来全社的の発足ということで現在に至っています。発足に際しての各事業所で準備と申しましたが、それには一つは従業員の住宅の分布図、同じく従業員の町村名、従業員の家族構成員表、同じく出産統計表、従業員の妊娠可能年齢調査表、対象世帯の実態調査、あるいは家庭の最も望んでいるような事項等の調査を実施し、事務局の設置、担当者養成、指導員の再教育および配当の諸準備がなされたわけであります。

次に管理運営のことについて申し上げますと、事業所の大きさによって厚生課のあるところもあり、また労務課の中に厚生係があるというような小さな形になっているのもございますし、また庶務の中で労務、厚生全般をやっているような小事業所もございますので、事業所によっては主管の課が異なりますが、いずれにせよここに事務局をおいております。この中で課長が局長を兼任しています。本社の厚生課長が——私でございまして——一応全般的な調整並びに連絡の任に当たっていますが、事務局制度をどうして置いたかと申し上げますと、最初はこの運動の運営は会社がイニシアチブをとっていますが、逐次主婦の自主的運動に移行してこうという最初の方針でございまして、職制という形でなく職制とは別な形の事務局あるいは家庭の皆さん方の自主的な運動を伸ばす連絡あっせんを中心となるところというような意味で、この形をとったわけであります。

このあり方につきましては人口問題研究会の永井先生のお考えをうけたまわり、指導研究機関として付属病院、付属病院の中の診療所、所轄保健所、健康保険組合の協力を願ひまして実施に移したという次第であります。この表でおわかりと思いますが、病院には技術的な面、健康保険には費用の点で何かこの運動に協力してもらっているのであります。事務局には家族計画指導員、生活相談員が所属し、各家庭と連絡を保っております。

それではわが社の新生活の理念というものは何かということ申し上げますと、基本方針として「日夜生産に従事する夫の留守をまもる家庭婦人が誇りをもって、幸福は家庭と明るく秩序正しい社会を築くための礎となる。隣人愛と相互扶助を基にして、互いに教養を高め、道義を高揚し、生活の向上を図る」とのべ

ておりますように家族計画、生活設計、子女の養育教育を通じて、家庭、職場、社会のモラルを高めることにあります。

次に運動を始めるに際しまして具体的にどんなことをやったかと申しますと、主婦のグループを作るということにあります。まず従業員主婦を何とかして組織的なものに作り上げるということが重要な問題でございまして、1グループ5世帯から15世帯を標準に1人の委員、世話やきと申しますかそういうものを主婦の中から選出してもらいまして、次は数グループを標準にこれらグループ委員を以てブロック委員会を作る、このうちからさらに中央委員を選出する、事業所ごとに中央委員会を設けて、それに委員長を置き、労務部長をあて、副委員長2人は主婦の代表がこれになるというような、一つの組織を作り上げたのであります。このグループ活動の中心はどこまでも主婦自身のものであるという建前から、委員の選出に際しましては職制上の指名を行わず、グループ内でどこまでもよく話し合っていたいで、これを選んでいる次第であります。民主的にしかも主婦の自覚の上に立って選んでいただくという形をとっています。

今言ったようなブロックができて、まず家族計画の集団指導、個人指導を繰返えし、次に家族計画の指導に続くものとして予算生活の指導、いわゆる家計簿兼用の主婦日記を無料配布しまして、予算生活の重要性の普及に努めまして、その後は生活相談員が巡回して各主婦の協力並びにその指導に努めた次第でございまして。もちろんグループの融和、教養のためにはいろいろな講習会を開催しております。たとえば洗濯講習会あるいはふとんの縮入れ講習会、ふすまの張りかえ、いけ花、お茶の立て方、人形の作り方、和洋裁、編もの、染色、料理などたくさんの講習会を実施して参りました。また子供の育て方、性教育、時局問題というような面まで専門講師のお話を願ひ、さらに家庭の保健衛生の講座、幻灯会、映画会、レクリエーションの集り、万般のことにわたって運動を進めて参ったのでございまして。

さていろいろ家庭生活ということを掘り下げて参りますと、やはりその中で最も重要視をしなければならぬことは子供の数でございまして。結局計画産児ということが最も初期の時代の重要な項目でございまして、各主婦に受胎調節の方法を懇切丁寧に説明することが、最もこの運動に入る最初の賢明な策だと思ひます。当社におきましては川崎製鉄ではもうすでにその指導が7年に達しております、他の事業所も先に申し上げた通り発足の年は区々でありましたが、おおむね3年は経過いたしまして、現在は一般的な計画産児の指導は一応終了しまして、脱落の防止と新婚世帯に対する指導ということに主力を置く状況で、現段階では生活設計に重点をおくというような段階に来ているものと私たちは考えております。

運動の第二段階の目標は生活相談にあるわけですが、生活の関連から計画的に産んだ子供を健康に、よりしつけよく教育するのが第二段階の目標であります。ただいま言ったように家族計画の指導が逐次浸透するにつれまして、家族計画指導員と従業員の家庭との結びつきが次第に密接になっていったわけでございます。そうしますと家族計画問題以外の家庭の悩みごと、あるいは法律問題の無智などが意外に多いということが逐次わかりまして、しかもその相談を持ちかけられる場合が次第に多くなってきたというような報告までございました。その中には指導員の手に負えないような問題も出され、なまはんかの判断、助言がかえって重大なる影響を与えるものじやないかという危懼がございまして、昭和30年3月に生活相談所の開設ということに踏み切りました次第でございます。そうしまして31年6月に生活相談員を採用しまして今日に至っております。

それでは生活相談のことでどういふ運営の方法をとったかお話を進めていきたいと思ひます。毎日巡回している家族計画指導員がこの運営の下部機関となって問題家庭の主婦の訴えを聞いて生活相談員の方々と密接なる連絡をとらなければこの運営はなかなかうまくいきません。従って家族計画指導員がまずいろいろな面でその家庭の悩みごとなどを聞きますと、これを生活相談員の方に持ちかける、また生活相談員はその家庭の雰囲気なり悩みごとがありそうだということを知れば、問題家庭を訪問し、主婦の訴えを聞きそれを専門的にいろいろな調査その他のことをやりまして、それから生活相談所の先生にどういふふうにやったらいいかというような連絡をとる。生活相談所の先生には相談日程が組んであるわけですから、生活相談員は今言った専門的の先生たちが問題を早期に解決する方法を聞いて、これらの主婦に伝え、また必要ならば、直接相談室に来てもらって、先生から話しをしてもらう。生活相談所の先生には法律問題担当としましては女流の久米愛弁護士をお願いし、身の上問題の専門家といたしましては山室民子女史、田辺繁子女史をお願いしてございます。今申し上げました通り生活指導員は三先生に連絡して面接の日をきめたり、あるいは官庁（市役所、保健所、児童相談所など）学校その他必要なところに専門知識を聞きに行ったり、担当先生方のほんとうの助手として働くわけでございます。これら相談員は東京都社会生活学校の卒業者の中から優秀なる方を人口問題研究会が一週間にわたる講習をし、その中から適任者を推薦していただきまして採用したものでございまして、社会福祉主事の資格を持つ婦人たちで、この方たちの評判は各家庭でまことによく、ほんとうにいい人を選んでいただいたということで私たちは喜んでおります。

ついでに生活相談所の内部機構をちょっと申し上げますと、先ほど申し上げま

したように法律問題は久米愛弁護士、身の上問題はいままで山室民子女史、山本杉女史をお願いいたしましたが、このたび山本杉女史が参議院議員に当選されましたので、後任といたしまして田辺繁子女史をお願いすることになりましたわけでありまして。勤務の時間が、久米先生が月三日、山室、田辺女史が各一日ずつとなっております。常勤の助手となって活動する生活相談員は現在京浜地区で10人ございます。この相談員のほうは各事業所の常勤の職員囑託でございまして、毎日この相談所を本部としまして、先ほど申し上げましたように家族計画指導員の方々と密接なる連絡をとりまして各地区に飛んで行きます。あるいはまたグループ・ワーカーとして生活設計のグループ会を盛上げ、またケース・ワーカーとして問題家庭のよき相談相手となって主婦の信頼を集めると同時に感謝されており、現在に至っております。

次に相談所施設のことについてちょっと申し上げます。一口に施設と申しますが、この施設は主婦がこの施設を利用するとき、何の気がねなく出入りのできるような配慮をしなければならぬということが一つの問題点であります。川崎におきましては主婦が外部から直接相談所に入れるよう設計されてございます。控室、相談室ともあたたかい雰囲気と外部から見られないという配慮、かつ話し声が外に漏れないようにしてあります。そういうような配慮がないとせっかく作りました相談室にもなかなか来なくなりますので、この点特に重要視をしています。事務室は約8坪ございます。相談室が3坪ばかり、控室も同様3坪くらいございます。この運営で最も注意するのは機密の漏洩、これを非常に皆さん当事者は気にいたしますので、当事者以外のものはたとえ会社関係といえどもこのことについては漏らさないということ、これが一番この運営についての問題点だと思っております。なお問題の内容については三先生におまかせしまして、職制上会社関係といたしましては一切これにタッチしない、どこまでも親身になってお考え願っている先生方を御信頼申し上げている次第でございます。

それでは今までの生活相談所の処理内容についてちょっと申し上げますと、法律問題につきましては年間の受付が300件でございます。主婦が担任の先生に面接触した接触回数が715回を重ね、問題300件のうち解決数が269件でございます。土地、家屋、金銭貸出し、離婚、相続といった問題が多いようです。身の上相談は事件受付が306件、主婦に面接回数が522回、うち解決件数が296件。子供の教育、主人の飲酒、カケごと、女性関係、結婚問題、家族間のトラブルなど多岐に亘っています。以上のような数字でございまして、指導員、相談員、担当先生方の涙ぐましい本運動に対する努力のほどがわかっていただけるものと思えます。なおこういう法律問題、生活身の上等についての相談は、生活がいろいろ安

定するにつけまた逐年増加の傾向がございまして、相談員の人数を強化するというところで本年度は進んでいます。

この新生活運動の本来の目的でございまして、ところの明るい安定した生活をどうしたら営む家庭を作り上げることができるかということについて、この運動の主眼がございまして。このように健康な悩みのない明るい家庭を作りましてこそ、職場でも明るく、生産に懸命になってもらうということができると存じます。そしてこれがひいては社会建設の基となることを確信いたしまして、わが社は非常に力を入れてこの運動に邁進している次第でございまして。この運動が始まりましたからすでに七年、永井先生を初め諸先生の御努力も逐年実を結びまして、私達も関係者一同張り切って本運動に挺身している姿を御想像願いたいと思っております。

以上当社の新生活運動の現段階といたしましては計画産児から一步を踏み出しまして生活指導という場面の方向に進んでいるということを申し上げまして、私達の現在の歩みを御説明した次第であります。

わが社の新生活運動

東京芝浦電気株式会社 厚生課長代理 深川吉郎

先ほど永井先生からもお話ございましたように、新生活運動は国民の生活を再建して新しい日本を作るといふきわめて大きな命題を持っているわけでございます。これをわが企業に引き当てますならば、わが社の従業員の生活を刷新しまして、企業の発展とひいては日本の隆盛に寄与するのだというような大目的になるのではないかと思います。毎年行なわれていますこの種の講習会でも各講師の方方からもそういうお話、あるいは人口問題研究会の諸先生方からもたびたびこういう点を強調されているわけでございますけれども、しかし実際に企業体でこの運動に当たります場合、おのずからいろいろな制約がございまして、あるいは経済的に、あるいは歴史的に、あるいは指導員の陣容の面でもいろいろな問題がございましてなかなか思うようにはいかないのが実情でございます。他の企業の皆様方、指導者の方々もこの点はやはり痛感されているのではないかと存じております。

私の方もまず大ざっぱに特徴的に申し上げますならば非常に大企業であるとは思っておりますけれども、本運動に関しましては指導員も少なく、また支出する経費等も非常に少ない、いわゆる非常にひそひそとやっているわけでございまして、組織も集団社宅居住者を主たる対象にして、なかんずくアパート団地、寮、独立社宅の集結した地区において、大体が社宅住宅居住者というものに限りしております。また先ほど申し上げましたように指導員等が少なうございまして、指導上の機関あるいはメンバーも非常に少なく、その点人手の足りない悩みがありますが、一面これは同じ指導員が受持つのですから個々の居住者と指導員との間のつながりが非常に強い、運動がそういう意味では非常に熱意を持って進められているというようなことも考えております。ただ現在は家族計画においては集団指導を一通り終了し重点を個別指導の方に置いております。生活合理化の方面では一連の主婦教室を計画してまして、その約7割くらいまで進めております。これはあとで詳しく申し上げます。

先ほど日本鋼管さんからお話のありましたような人事相談的の業務、これは相当組織の進んだ地区においてのみ実施可能なものでございまして、その点まことに敬服に値するものでございます。私どもの方には会社としての相談室制度はご

ざいますが、家庭に対する人事相談的の業務にはまだ至っていません。しかしながらこの運動が将来はこのような身上相談、人事相談的な持っていく方の母体になる、あるいは推進力になるのではないかと考えております。現在でもあとで若干御説明いたしますように、家計簿、育児、子供のしつけ、あるいは夫婦生活、あるいは土地建物の売買、あるいは住宅の建築、すまい方、こういったようなことの相談に若干タッチしているのですが、やはりこれは相当権威者の方々によって、あるいは組織的にスムーズな運営のもとに進めて、いろいろの意味での生活刷新の方向に発展していかなければならないと考えて、そのように努力しているわけでございます。私の方はきわめて大ざっぱに言いまして組織力も非常にまだ未完成な姿、指導陣容も少なうございます。経費も年間せいぜい百万円前後の支出しかしていません。

ただ、私どもは、生活改善の指導をするに当り、具体的にわかり易く覚えていただくため、小冊子を作ったり若干の指導カード等の準備をいたしまして、指導効果をあげる努力を払っておりますので、これに基づきましてごく簡単にお話ししたいと思っております。東芝ではこの運動に「上手な暮らしの運動」という名称を使っております。全従業員が29,000余人、約30,000人にならんとしております。これは正規従業員だけでございますが、そのうち世帯持用の社宅を利用しています世帯者数が12,500世帯ほどございます。しかしながらこの全部の社宅にこの運動を全部漏れなく普及するということはまことに困難でございます。現在では約4,000世帯もしくは5,000世帯くらいをこの運動の対象にいたしております。当社のこの運動が始まりましたのは、動機といたしましては昭和29年人口問題研究会の永井先生からの御要請、御指導のもとに取り上げたものでございまして、当方でもずいぶんいろいろこれについて審議しましたが、企業内におけるこの運動の重要性を認め、「従業員家族の生活水準と健康の維持向上をめざし家族の幸福を計る労務管理の一環として」取り上げた次第でございます。

当初昭和30年から実際に運動を始めまして、府中地区に府中工場という工場がございまして、そこの集団住宅の600世帯をまず第一回目のモデル地区に選定いたしまして開始いたしました。その後川崎地区、鶴見地区という本拠地区に運動を広めまして、逐次これを関西方面にまで拡げて参りました。総計4,200世帯までの組織化をとにかくにもまず作りまして、さらに32年からはこの運動を「上手な暮らしの運動」(GLM)というように改称しまして、その範囲も家族計画ばかりでなく、衣、食、住、保健衛生、文化、教養の各分野に亘り、生活様式および生活態度の刷新合理化をはかり、「健康と幸福な家庭を築く」という趣旨のもとに拡大いたしまして、なるべく有意義でしかも興味のあるテーマをとりあげ、具体

的に生活技術を教えるという方針で現在進めているわけでございます。

組織でございますが、本社の労務厚生課に本部を置きまして、各工場に厚生課がございますので、これら厚生課をこの運動の支部といたしまして、各工場にGLM支部を設けてございます。主婦の組織は一般的などこの企業体でもおとりになっていらっしゃる方式で世帯を10~20世帯にまとめて世話役(主婦)を、世話役の上にさらに幹事(主婦)を置く、幹事が相談する幹事会を設け、これが各工場の支部につながっている。支部は幾つかの支部になりますけれども、本社が統轄しているという形態であります。

次に今までの実施概要でございますが、30年度は先ほど申し上げましたようにまだ基礎指導の段階を主体にしまして個人指導は従という段階でございます。地域も最初に府中地区だけを施行しまして17の会場で基礎指導をやり、対象と目されました参加者の対象者のうち約65%前後の方々に対する集団指導と延べ1,021人の個人指導をいたしたわけでございます。

31年度には引き続き地域を広めて川崎、鶴見、京浜周辺地区1,444世帯を対象にして集団指導57会場、約78%の参加率を得たという工合になり、主婦側の熱意も増しております。さらにこの年度は、個人指導延べ1,826人および府中地区の追指導とを行っております。

32年度は「上手な暮らしの運動」と改称して生活指導をあわせ行う段階になりました。家族計画の方は関西の方にその手をあげまして、約1,544世帯の基礎指導を実施し、32会場で約62%の参加率を得ております。一方生活指導の方は、電気教室、これはわかりやすく家庭用電機器具を図解した指導カードを作りまして、現地におきましていろいろ指導者を中心に和気あいあいと話し合うというような一つの教材になっております。奥さん方は、今までアイロン一つ直せなく、ただ電気がこわいものだと頭からきめこんで電気屋に修繕に出していたのが現状なので、好評をばくしています。こういった生活技術指導をたくさん計画して逐次実施しているわけでございますが、一番最初にこの電気教室をやったわけでございます。ご主人の会社が電機会社でございますので、主婦たちは今までも電気方面への知識、電化生活というものについては相当関心があったので、まず第一番にこの教室を取り上げたわけでございますが、故障の見分け方、修理法、眼によい照明の工夫、まちがったコードのつなぎ方などの実物説明を全地域に約4,000世帯にわたって実施いたしました。参加率は60%くらいでございました。

その他、栄養教室、美容体操教室も実施しております。

昨33年度には家族計画が逐次全地域にびまんいたしました。指導の重点は基礎指導を逐次終わっておりまして個別指導による追指導に移行し、さらに無痛分

娩法、赤ちゃんの育て方、ガンの家族検診などを併行して指導しています。生活指導の方はさらに項目をひろげ看護教室を全地域に実施し、家庭内の応急手当、止血法、人工呼吸法、体温や脈のはかり方、ホータイの巻方などを教え、108会場で参加率66%くらいであったような状況でございます。

今年34年度におきましては家族計画を特に新婚家庭及び新規開拓に重点を置いて指導を施行したわけであります。新規開拓と申しましても必ずしも分散居住の一般住宅にまで手を広げるということはまだまだ困難を感じております。というのは会社の住宅政策の面から新しくどんどん社宅団地を作っておりますので、そういった新しいアパート団地に新しい方が入る、そこが新規開拓の対象になるというような形でございます。生活指導の面は、新しく子供のしつけ教室をとりあげ全地区で63%の参加率を得ております。冬からは家計の勉強教室を企画しております。

次にこの運動の項目として取り上げております、各教室の内容について若干補足させていただきます。まず家族計画教室、これは何と申しましても本運動で一番重点的に考えているわけでございます。そしてただ受胎調節のみならず、ここでは受胎調節の結果首尾よく希望のもとに生まれ出た新しい赤ちゃんを上手な育て方というようなことに、しつけ方というようなことにも少し相談に乗ってあげたいという気持ちから指導員の方に特にお願いしているわけでございます。対象もこの家族計画の面ではもう逐次新婚家庭の指導の重点を置き、あるいは共かせぎでいるような御婦人が会社企業内に勤めていらっしゃるというような場合にはどんどん積極的に事業場内で指導をしているわけでございます。一般家庭、いわゆる非社宅者にも伸張するという方針でございしましたが、これはなかなか困難でございますので、かねてより済生会の木下先生に御指導を受けまして作った小冊子の「家族計画受胎調節のおはなし」あるいは「体温計を利用する基礎体温法のはなし」を配っています。これは指導員が初めて訪問するというような場合にもこういったものを話題にして接触を開始する目的にも使っているわけでございます。あるいはまた具体的な指導の際にも一つの教材として使っている次第でございます。

次に電気教室でございますが、これは指導カードをごらんいただきますとわかりますように、いろいろ家庭の婦人として最小限知っておかなければならないような電気知識、あるいは電気器具の取り扱い方等について平易にかつおもしろく、しかも実物器具を使いまして実際に指導しているような形でございます。御承知のように電気器具がどんどん日進月歩新しい器具を使うようになり、あるいは家庭電化で電気器具というものがどんどん新しい品種が出て来るというような

ことで、指導員が各主婦から質問される内容が非常に多種多彩にわたるようになります。これなどはふだんの研究あるいは教材等の刷新をはかっているかといふこと、なかなか追いつかないと考えております。そういった面も十分承知いたしていただき、できるだけ努力をして教材刷新に努力しているわけでございます。

栄養教室、これはほんとうに基礎的なものでございまして、栄養三食と申しますようなことに、いわゆる栄養料理の、栄養を十分にとるための基礎理念のようなことについての基礎知識であります。さらに栄養家計簿による栄養バランスの点検法、調理のコツ、安価料理のつくり方、あるいは献立原型とその応用等について指導員の方が栄養講習会で勉強した知識をもって家庭の婦人と非常に身近な問題、関心のある問題をとらえてお互いに忌憚なく話し合うということでございます。

その他美容教室、看護教室、こういったものも非常に日常家庭生活の上において必要な医学上の知識、あるいは日常健康上の知識として取り上げようとしておりまして、実際にやった結果が非常に主婦たちの共感を得ているわけでございます。

ごく最近では子供のしつけ問題を取り上げておりまして、しつけの原則あるいは幼児期、あるいは小学校の低学年、中学年、高学年という程度の、小学校までのお父さん方のしつけの問題について今年度は重点的にやっております。これは主婦が最近子供さんたちの教育、あるいはしつけ、あるいは青少年の不良化防止ということについて相当の関心を持っているらしく、非常に盛會をきわめ、かつ熱心に指導を受けている次第でございます。これには子供のおこずかいの与え方、渡し方など細かい問題もとりあげております。

特に16ミリフィルム、スライドフィルム等を十分に活用いたしましてこの指導の補助にいたしている次第でございます。

その他今後家計の勉強教室(家計簿つけ方)、日用品テスト教室(上手な買物の仕方)、すまい教室(土地の選び方、法律知識、家屋の改善法、部屋を美しくするアクセサリなど)、主婦の新国語教室(新かなづかい、標準おくりがな、当用漢字)これを一通りやってしまいたいと準備中でございます。

先ほど日本鋼管さんのお話にもありましたように、この新生活、いわゆる生活の合理化というものの、いわゆる支柱となり基盤となりますのは、やはり家庭における経済生活だという工合に考えておりまして、家計の勉強教室、たとえば家族員数に応じた標準家計、家計簿のつけ方、家計簿による家計の点検方法、ひとつの経済的家計方面に特に力を注いでいかなければならないと思っております。

一番最後にこの運動の成果を申したいと存じますが、なかなか数字でもって、

たとえば出生率がどのように低下したとか、どのような家庭に対する指導の結果家庭が円満になって、ひいては企業における安全率が向上したかということが、現実に克明には数字には表われないものでありますが、やはり抽象的に申しますと非常に喜ばれ、かつ家庭の円満化が促進される、ひいては安全と勤労意欲が向上しつつあるということは漠然とわかるわけでありまして、各従業員の方があるいはそれを直接連絡しております各工場の厚生課、あるいは各工場の安全課というようなところからの報告や統計等によりますと、そういう成果が逐次表われつつあるということがはっきり申すことができるわけでございます。

以上のような概要でございまして非常に細々とやっております。細々とやっておりますが言うなればこの運動は決して線香花火のように爆発的に盛大にやっておと途中でちょっと切れてしまって、あとが続かないというようなことではまずいと思っています。それではまた御指導をいただいている方々にも申しわけないと思っております。われわれはわれわれなりの方式で、細く長くという考え方でこの運動を推進していきたい。またこれでいいのではないが、言うなれば永久に続けていくのだ、会社の栄枯盛衰に関係しないで、企業の採算その他は度外視して、この運動は永久に続けていくべきものである。従ってそういう太く短くという考え方でなく、細く長くやっていきたいというふうに考えているということでございます。

わが社の新生活運動

石川島重工業株式会社 浅川 邦 武
厚生課長

石川島重工は日本鋼管さん、東芝さんに比べますと遅く32年6月からこの運動を開始いたしました。皆さんの前に御披露申し上げるようなところは非常に少ないのですが、簡単に概要を御説明申し上げたいと思います。

会社は創業が非常に古く、嘉永6年からで100年以上たっていますが、工場は深川地区を中心にして運営されてをりまして、現在従業員は8,700人くらいいるわけでありまして。そのうち有世帯者が5,400人という数になってをります。生活の問題に関係ありますので、給与ベースその他申し上げますと、平均年齢が33歳勤続が9年、扶養家族が2人程度で、大体21,000円という給与ベースになってをります。

私のところで生活合理化運動と名付ける運動を始めましたのはやはり人口問題研究会の永井先生のお勧めによりまして始めましたのでありますが、企業といたしましては単に従業員だけを対象にして生活の安定を幾ら唱えても、生活の基盤である家庭を安定させなければ本人の安定はあり得ないということは、生活合理化運動が起るまでもなく必要を痛感していたのでありますが、なかなかそこまで手が回らなかったというのが実状だったのでありますが、新しいこういう動きに応じまして細々ながら発足したわけでありまして。私どもの方では石川島生活合理化運動という名称で発足してをります。初めは大体社宅が700世帯というのでこの社宅を中心にして家族計画から発足しているわけでありまして。34年になってから一般分散家庭を加えるというようにだんだん拡大しております。分散家庭になると、手がかかりますが、会社中心の中央区、江東区に大体1,000世帯くらいありますうち、比較的組織しやすい地区を選び、34年4月から分散地区に手を入れて、現在社宅の700世帯、分散地帯の240世帯くらいで、合計950世帯くらいの世帯を対象にして運動を拡げていっております。

運営機構といたしましては生活合理化運動運営委員会がありまして、勤労部長を運営委員長に、委員には厚生課長、教育課長、給与課長、健康保険組合の病院長、生協組合の理事長が加わり、ここで計画立案し、その計画に基いて担当は勤労部の厚生課が担当する、実際の指導は家族計画指導員という2人の女の方によってもらっているわけでありまして。実際にやりましたことについては、最初の出

発は家族計画を中心にして進んでいきましたが、生活合理化運動と名付けているように家族計画だけでなく、生活設計あるいは家庭衛生を含む非常に広範囲のものであります。家族計画を進めながら併行して生活設計に入っていくという考え方で進めていったわけでありませう。

まず家族計画を700世帯に実施した成果を数字でちよつと説明申し上げます。つい最近とつた統計ですが、出生と人工妊娠中絶についてのべますと、この指導を始める前の出生数は、たとえば5年前には65人、4年前には79人、3年前には69人、2年前は65人、指導前年は73人というふうにだいたい6、70人の数になっています。それが指導を始めてからというものは、第1年目は26人、第2年目には27人、第3年目は34年6月から11月の半年間に11人ですから、トータルの数を推計しますと22人になるわけでありませうから、大体始めるようになってからほぼ2分の1乃至3分の1に減っているという数字が表われてをります。また人工妊娠中絶の数をしらべてみますと、5年前は24人、4年前には39人、3年前には48人、2年前には34人、1年前には57人というむしろ増えつつある数字が、指導を開始した年には21人、2年目には5人、ことしになってからはゼロという数字が生まれて、明らかにこの運動を始めてから中絶が減っている傾向がはっきり出ているということが言えるのじやないかと思ひます。

それからことしの4月から新婚者に対して先ほど東芝の方のお話もあつたのですが、結婚祝いの金を出すとともに、それにつけ加えて森山先生の「新しい家族計画」、それからアジア協会からいただいた「新時代の結婚生活」、それからあつせん器具、薬品の価格表というものを一緒に差し上げて、結婚の初めから新しい家族計画によって生活を出発してもらふということをしております。

次は生活設計の問題ですが、考え方としては家族計画と併行して生活設計をする必要が十分にあるのでありますが、さてこれは何から手をつけていくかということになるとなかなかむずかしい問題で、私のところで初めは一般の家庭というものはどういうことに関心を待っているかということ調査をしまして、目標としてはあまり重要でない問題でも、やはり当面希望する問題から手をつけていくということが非常に指導しやすいのではないかというようなことから、主婦の希望の多いものから実施していくというようなやり方で始めています。

第一に家計簿の記帳、これは32年10月から会社の方から家計簿を無料配付して始めまして、昨年からは日本銀行の貯蓄推進委員会から出している家計簿を会社の方で買入れるということで、去年あたりどのくらいこれを利用しているかということを見ますと、大体60%くらいは利用しているという結果が出ている。

それから料理講習会は32年6月から始めまして、これから申し上げる数字は去

年の33年4月からの数字で、それ以前の数字を加えますとこれ以上の数字になるのでありますが、840人くらい参加している。この料理講習会ですが、一般のテレビとかいろいろのところでやっている講習会はやはり一般労働者から見るとお金がかかる、非常に近寄りたいたいということで、やはり日常の生活の中でいかに工夫して料理をいただくかということに着眼をして、それから一般には栄養問題についても数字で何カロリーというようなことで講習をする場合があるが、そういう指導でなく具体的に油は一日に小さなさじ幾つほしいとかいうことで、手っとり早く料理法の中に入れていただくということを主眼にして、専門の先生に頼みましてやったわけでありませう。

それから第三番目はふとんの綿入れですが、一般の主婦の方の考え方を聞くと生活の余裕のある人がほとんどないにもかかわらず、ふとんなど作る場合、やはり商売人に頼んだ方が非常に上手にできて、それから時間がかからないからといって委せてしまうことが多いのでありまして、その辺にずれがあるのであります。やはり一定の収入から出る金を計画的に使うということからすれば、自分のできることは自分でやっていくという考え方で、生活の仕方をかえていくという意味あいからも必要だと思ひ、ふとんの綿入れの講習をやりました。実際にやった結果を見ますと、やはり業者に頼んだより下手にできて自分の手でできたというようなはげみから、非常に喜ばれています。

それから手芸と諸種のおけいこ、この手芸の方はスエーデン刺しゅうと人形作りというようなもので、スエーデン刺しゅうの方が半分くらい占めているのでありますが、これも高尚の刺しゅうでなく、日常の自分のうちのテーブルにかけるテーブル・クロスを自分の手で作ってやらせるというようなことで、非常に安い材料を使えるものを選ぶ。それからおけいこのお花、お茶、これは全く主婦の方が自主的に会社の方に先生を紹介してくれということで、先生だけを紹介したがあとは自分たちの費用をもってやっております。手芸とおけいこについては会社の方に文化会がありまして、その中にやはり会社の子供従業員がお花のあるいはお茶のおけいこをしているのですが、これと合流しまして、文化祭にも自主的に進んで出品するというようなことで、社会的教養の向上に役立ち、家事の合間のリクリエーションにもなっているようです。

それから最後の貯蓄奨励ですが、生活設計の面からいけば、貯蓄ということは非常に重要視しなければならない問題ですが、指導の仕方は初めから貯蓄というような言葉を正面切って強制的に打ち出すと何かついてくるものもついて来ずらいということで、昨年6月になって遅ればせながら藤本先生の貯蓄ノートを希望者に配付しまして、貯蓄に関心を持たせるというようなことを始めていました。

家庭衛生については、これも先ほどの調査に従いまして子供のしつけ、性教育の方法を知りたいというような希望が多かったためにこの方面から手をつけまして、子供のしつけについては村岡花子先生に来ていただいて、これには一般の分散の世帯からも集まってもらいまして、550人の参加を得、非常に評判がよかったようです。

それから衛生講話、これも会社の健康保険組合の先生に来ていただきまして、伝染病、更年期障害、環境衛生というようなこととお話してもらいました。

また家庭の巡回検診も行っております。会社では1年に2回レントゲン検診をやりまして、最近に従業員側の胸の病気の発生率は少なくなっているようですが、家庭に残る主婦の方の側には保健所の方でそういう機会を作っているようですが、なかなか実際に実現されない。しかも家庭の中心になっておられる主婦の方がこの病気で倒れますと、一家は総倒れというような悲劇の事態を起す結果になりますので、ことしから会社の方でその機会を作って家庭巡回検診をやることに決めました。これは12月希望者をとりまして、最近数カ所にレントゲン・カーをまわして検診をやるというわけであります。

それからちよっと項目が違うのでありますけれども、工場見学というようなものをあげてあるのであります。今までのように会社と従業員だけの直接の結びとというようなことではほんとうの生産態勢はできない。やはり従業員の生活基盤である家庭というものとも会社と結びつけるという意味からも、また生活設計などで日常指導員が直接主婦に接触した際、従業員の家庭の人からも主人の職場を見たことがないからぜひ工場を見せたいいただきたいというような希望がありましたので、工場見学を去年から始めました。やり方としては大体工場といっても造船所、それから造機とか小さな工場をブロックにしまして、その家族の方に日曜に来てもらう。うちの第一、第二、第三という工場を東京湾の遊覧船に乗りながら回っていただくというような方法で実施しております。今まで19回やりまして希望は1,994世帯の申込みがあったのですが、そのうち1,556世帯が参加し、大体80%の参加率という成果を示しております。あと7回くらいで全部予定を終わるわけですが、参加者の感想をきくと、主人の会社に親しみをもつようになったとか、職場に働らく主人の苦勞がよくわかったとか、工場の安全運動を見ながら家庭も整頓したいと思うとか、予想外の好影響を与えている様子なので、この後はそういう休みの日でなく実際に工場の動いている従業員が真剣になって働いている状態を見れる日にもう一度希望者には機会を作って小さなブロック毎に工場見学をやっていただくという計画をしております。

大体実施していることは以上申し上げたことなのですが、今後の問題としては

どういふふうにやるべきかということなのですが、先ほどの永井先生のお話の中にもあった通り、生活の中心つまり人間としての生活のあるべき態度は一体どういうところに中心を置いて刷新していくべきかということをよく検討し、またそういうことを理論的に確立した上で、金の使い方なり、子供のしつけ方なり、住宅の住み方なりというものを考えていかないと、テレビを入れる、あるいは洗濯機を入れるというような物質的なことだけに走り勝ちな進み方が当然出てくる現状でありまして、ことに私の会社でも家庭に行ってみますと、家庭にはいわゆる電気冷蔵庫、テレビ、ラジオというようなものは備わっているが、いざ子供のしつけなどを見ますと全然なっていないというようなことから、本質的問題としては新しい生活のあり方とはどういふものかといった指導にしっかり基盤をつけることが絶対に必要なので、今までの家族計画あるいは生活設計、家庭衛生というようなことと併行して、一番の生活のバックボーンというものをどうやって備えつけていくかということが私たちの今後の課題で、大いに必要なことではないかと思えます。

それからこの運動に対して未組織の散在世帯を持っている方々の反響はどうかというようなことを調査してみたのですが、大体この運動といえども家族計画の運動から発足したためにこの運動というのは家族計画だけをとりあげていると、非常に狭い意味に考えている方の反響も出ているのですが、まだ手をつけていない700世帯について調査しますと全般的にはやはりこういう運動については非常に期待しているようなことで、60%くらいの組織拡大を望む数字が出ています。ただ問題は家族計画だけが生活合理化運動だというふうに誤解して考えている人は、私のところは年齢的に必要ないのだということで、非常に冷淡な態度をとっているような結果が出ているのですが、やはり考え方としては生活合理化運動は家族計画だけでなく、家族計画も含めた生活全般の問題だということで大いにPRする必要があるんじゃないかと痛感致しました。

新生活運動の理念と実際

昭和35年2月20日 印刷 (非売品)

昭和35年2月25日 発行

編集兼 財団 人口問題研究会
発行者 法人

東京都千代田区露ヶ関2の1

印刷者 東洋社印刷株式会社

東京都文京区久堅町85